

茨城県教育財団文化財調査報告第106集

牛久北部特定土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書(IV)

馬 場 遺 跡
行 人 田 遺 跡

平成 8 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財團文化財調査報告第106集

牛久北部特定土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書(IV)

馬 場 遺 跡
行 人 田 遺 跡

平成 8 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財團



遺跡遠景（右から東山・馬場・行人田遺跡）



古墳時代中期末から後期初頭の出土遺物

序

茨城県南部の牛久市周辺地域には、国の首都圏整備計画による「土浦・筑波業務核都市構想」、茨城県による「グレーターツクバ構想」等が計画されております。

住宅・都市整備公団では、県南地域における牛久市のもつ地理的条件を勘案し、JR常磐線新駅の設置や首都圏中央連絡道の建設等の広域交通拠点性を生かした整備を行い、新駅を中心とする広域的重要拠点としての業務機能並びに都市機能を備えた新都心の形成と、良好な居住環境を有する住宅、宅地の供給を行うための土地区画整理事業を進めております。その予定地内には馬場遺跡、行人田遺跡をはじめ多くの遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成2年10月から発掘調査を実施してまいりました。その成果は、既に「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) (ヤツノ上遺跡)」、「同(Ⅱ) (中久喜遺跡)」及び「同(Ⅲ) (東山遺跡)」として刊行いたしました。

本書は、平成5年度から平成6年度に調査を実施した馬場遺跡及び行人田遺跡の調査成果を収録したものであり、本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である住宅・都市整備公団には、多大な御協力をいただきましたことに対し厚くお礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、牛久市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成8年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 橋本 昌

例　　言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成5年4月1日から平成6年12月31日まで実施した牛久市東塙穴町字下山1,165番地の1ほか所在の馬場遺跡及び牛久市東塙穴町字志の立576番地所在の行人田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 馬場遺跡、行人田遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理　事　長	磯　田　勇 橋　本　昌	昭和63年6月～平成7年3月 平成7年4月～
副　理　事　長	角　田　芳　夫 小　林　秀　文 中　島　弘　光	平成3年7月～平成6年3月 平成6年4月～ 平成7年4月～
専　務　理　事	中　島　弘　光	平成5年4月～平成7年3月
常　務　理　事	一　木　邦　彦	平成7年4月～
事　務　局　長	藤　枝　宣　一 斎　藤　紀　彦	平成4年4月～平成7年3月 平成7年4月～
埋　蔵　文　化　財　部　長	安　藏　幸　重	平成5年4月～
埋　蔵　文　化　財　部　長　代理	河　野　佑　司	平成6年4月～
企　画　管　理　課　長	水　飼　敏　夫	平成4年4月～
企　画　管　理　課　長　代　理	根　本　達　夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)
企　画　管　理　課　主　任　調　査　員	川　井　正　一	平成5年4月～平成6年3月
企　画　管　理　課　主　任　調　査　員	海　老　澤　稔	平成6年4月～
企　画　管　理　課　主　任　事　務	杉　山　秀　一	平成4年4月～平成6年3月
経　理　課　長	小　幡　弘　明	平成5年4月～
経　理　課　長　代　理	鉢　木　三　郎	平成7年4月～(平成5年4月～平成7年3月課長代理)
経　理　課　主　任　任　務	大　高　春　夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)
経　理　課　主　任　任　務	飯　島　康　司	平成4年4月～平成6年3月
経　理　課　主　任　事　務	小　池　孝　作	平成7年4月～
経　理　課　主　任　事　務	軍　司　浩　作	平成5年4月～
調　査　課　課　長(部長兼務)	安　藏　幸　重	平成5年4月～
調　査　課　調　査　第　二　班　長	根　本　康　弘	平成5年4月～平成6年3月
調　査　課　調　査　第　一　班　長	川　井　正　一	平成6年4月～平成7年3月
調　査　課　主　任　調　査　員	後　藤　哲　也	平成5年4月～平成6年9月調査
調　査　課　主　任　調　査　員	中　村　敬　治	平成5年4月～平成5年9月調査
調　査　課　主　任　調　査　員	荒　井　保　雄	平成5年10月～平成6年3月調査
調　査　課　主　任　調　査　員	松　浦　敏　敏	平成5年4月～平成6年3月調査
調　査　課　主　任　調　査　員	土　生　朗　治	平成6年10月～平成6年12月調査
調　査　課　主　任　調　査　員	白　田　正　子	平成6年4月～平成6年12月調査
整　理　課　課　長	山　本　静　男	平成7年4月～
整　理　課　副　主　任　調　査　員	白　田　正　子	平成7年4月～平成8年3月整理・執筆・編集

- 3 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、施釉陶器の産地同定については文化庁文化財調査官の斎藤孝正氏、古墳時代の住居の形態については埼玉県上福岡市史編纂室係長の笠森健一氏、古墳時代の集落のあり方については埼玉県寄居町教育委員会の井上尚明氏、古墳時代中期の土器の様相については東京都中野区立歴史民俗資料館学芸員比田井克仁氏、須恵器については愛知県陶磁資料館学芸課長柴垣勇夫氏。石製模造品については栃木県埋蔵文化財センター主任篠原裕一氏に御指導をいただいた。炭化材の同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概略

ふりがな	うしくぼくとくといとちくかくせいりじょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
副書名	馬場遺跡・行人田遺跡							
巻次	(IV)							
シリーズ名	茨城県教育財團文化財調査報告							
シリーズ番号	第106集							
編著者名	白田 正子							
編集機関	財団法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行年月日	1996(平成8)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
ばばいせき 馬場遺跡	いばらきけんうしくし 茨城県牛久市 ひがしあわせしとよあわせ 東竜穴町字下川 1,165番地の1 ほか	03364 -0026	36度 28分 30秒	140度 9分 8秒	1993.04.01～ 1994.12.31	26,212m ²	牛久北部特定土地地区画整理事業に伴う調査	
ぎょうにんだいせき 行人田遺跡	いばらきけんうしくし 茨城県牛久市 ひがしあわせしとよあわせ 東竜穴町字 し立て 志の立576番地	03365 -0027	36度 25分 6秒	140度 9分 10秒		6,270m ²		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
馬場遺跡	集落跡	縄文時代 (前期)	竪穴住居跡 2軒 土坑 1基	縄文土器片				
		古墳時代 (中期～後期)	竪穴住居跡 50軒 竪穴遺構 11基 土坑 95基	土師器、須恵器 石製品、鉄製品	石製模造品の原石である滑石が出土した。			
		奈良・平安時代	竪穴住居跡 3軒	土師器、須恵器				
		近世以降	炭焼窯 1基					
行人田遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 1軒	土師器、土製品				
		平安時代	竪穴住居跡 5軒 土坑 55基	土師器、須恵器	粘土採掘をした土坑が確認された。			
		近世	溝 水田跡 1か所	12条		水田跡が確認された。		

凡 例

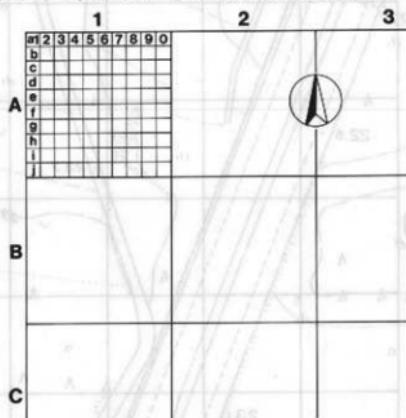
1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系を原点とし、馬場遺跡X = +1,080m, Y = +28,720mの交点を基準点(A3a1)とし、行人田遺跡X = +800m, Y = +28,560mの交点を基準点(B4a1)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西及び南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C……、西から東へ1, 2, 3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。小調査区も同様に北から南へa, b, c……j、西から東へ1, 2, 3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2h2区」のように呼称した。

2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 堅穴遺構-S X



第1図 調査区呼称方法概念図

土坑-S K 堀・溝-S D 炭焼窯跡-S Y 水田跡-S X ピット-P I~

遺物 土器-P 土製品-D P 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本土器-T P

土層 撤乱-K

3 遺構、遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

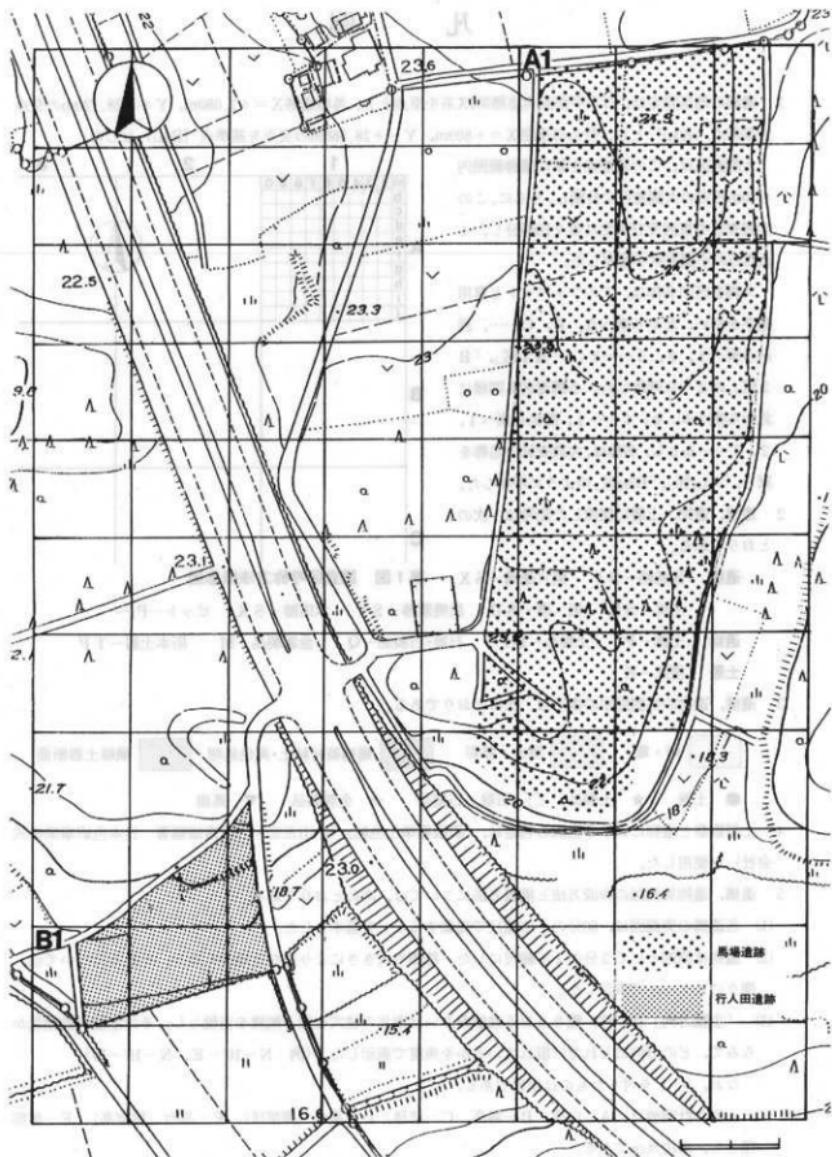


● 土器 ★ 土製品 □ 石器・石製品 ☆ 金属製品 ▽ 馬齒

4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

5 遺構、遺物実測図の作成方法と掲載方法については、次のとおりである。

- 各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にスケールで表示した。
- 「主軸方向」は、炉、竈をとおる軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ輪線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N-10°-E, N-10°-W)
なお、〔 〕を付したものは推定である。
- 土器の計測値は、A-口径、B-器高、C-底径、D-高台(脚部径)、E-高台(脚部高)、F-一体部径とし、単位はcmである。
なお、現存値は()で、推定値は〔 〕を付して示した。



第2図 馬場・行人田遺跡地区設定図

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 馬場遺跡	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 基本層序	8
第3節 遺構と遺物	9
1 壊穴住居跡	9
(1)縄文時代の住居跡	9
(2)古墳時代の住居跡	12
(3)奈良・平安時代の住居跡	153
2 壊穴遺構	165
3 土坑	179
4 炭焼窯跡	200
5 遺構外出土遺物	202
第4節 まとめ	208
第4章 行人田遺跡	215
第1節 遺跡の概要	215
第2節 基本層序	215
第3節 遺構と遺物	217
1 壊穴住居跡	217
(1)古墳時代の住居跡	217
(2)平安時代の住居跡	219
2 土坑	240
3 溝	244
4 水田跡	251
5 遺構外出土遺物	253
第4節 まとめ	260
付章 馬場遺跡・行人田遺跡出土の炭化材・炭化種子同定報告について	261

挿図目次

第 1 図 調査区呼称方法概念図	49
第 2 図 馬場・行人田遺跡地区設定図	50
第 3 図 周辺遺跡分布図	51
第 4 図 馬場遺跡基本土層図	53
第 5 図 第65号住居跡実測図	53
第 6 図 第65号住居跡出土遺物実測図	55
第 7 図 第66号住居跡実測図	56
第 8 図 第66号住居跡出土遺物実測図	58
第 9 図 第 1 号住居跡実測図	60
第10図 第 1 号住居跡出土遺物実測図	61
第11図 第 2 号住居跡実測図	62
第12図 第 2 号住居跡出土遺物実測図	64
第13図 第 3 号住居跡実測図	65
第14図 第 3 号住居跡出土遺物実測図	66
第15図 第 4 号住居跡実測図	67
第16図 第 4 号住居跡出土遺物実測図(1)	68
第17図 第 4 号住居跡出土遺物実測図(2)	69
第18図 第 5 号住居跡実測図	70
第19図 第 5 号住居跡出土遺物実測図	72
第20図 第 6 号住居跡実測図	73
第21図 第 6 号住居跡出土遺物実測図	73
第22図 第 7 号住居跡実測図	75
第23図 第 7 号住居跡出土遺物実測図(1)	76
第24図 第 7 号住居跡出土遺物実測図(2)	77
第25図 第 7 号住居跡出土遺物実測図(3)	78
第26図 第 8 号住居跡実測図	79
第27図 第 8 号住居跡出土遺物実測図(1)	81
第28図 第 8 号住居跡出土遺物実測図(2)	82
第29図 第 9 号住居跡実測図	83
第30図 第 9 号住居跡出土遺物実測図	84
第31図 第10号住居跡実測図	86
第32図 第10号住居跡出土遺物実測図	87
第33図 第11号住居跡実測図	88
第34図 第11号住居跡出土遺物実測図	89
第35図 第12号住居跡実測図	91

第 71 図 第31号住居跡出土遺物実測図	92	第109図 第53号住居跡実測図	137
第 72 図 第32号住居跡実測図	92	第110図 第55号住居跡実測図	139
第 73 図 第32号住居跡出土遺物実測図	92	第111図 第55号住居跡出土遺物実測図	140
第 74 図 第34号住居跡実測図	93	第112図 第56号住居跡実測図	142
第 75 図 第34号住居跡出土遺物実測図	93	第113図 第56号住居跡出土遺物実測図(1)	143
第 76 図 第37号住居跡実測図	95	第114図 第56号住居跡出土遺物実測図(2)	144
第 77 図 第37号住居跡出土遺物実測図	96	第115図 第56号住居跡出土遺物実測図(3)	145
第 78 図 第38号住居跡実測図	98	第116図 第58号住居跡出土遺物実測図	147
第 79 図 第38号住居跡出土遺物実測図	98	第117図 第58号住居跡実測図	148
第 80 図 第39号住居跡実測図	100	第118図 第63号住居跡実測図	149
第 81 図 第39号住居跡出土遺物実測図	101	第119図 第63号住居跡出土遺物実測図	150
第 82 図 第40号住居跡実測図	103	第120図 第64号住居跡実測図	151
第 83 図 第40号住居跡出土遺物実測図	104	第121図 第64号住居跡出土遺物実測図(1)	152
第 84 図 第41号住居跡実測図	105	第122図 第64号住居跡出土遺物実測図(2)	153
第 85 図 第41号住居跡出土遺物実測図	106	第123図 第29号住居跡実測図	155
第 86 図 第42号住居跡実測図	107	第124図 第29号住居跡出土遺物実測図	156
第 87 図 第42号住居跡出土遺物実測図	108	第125図 第52号住居跡実測図	157
第 88 図 第43号住居跡実測図	110	第126図 第52号住居跡出土遺物実測図	159
第 89 図 第43号住居跡遺物出土位置図	111	第127図 第59号住居跡実測図	161
第 90 図 第43号住居跡出土遺物実測図(1)	112	第128図 第59号住居跡出土遺物実測図	162
第 91 図 第43号住居跡出土遺物実測図(2)	113	第129図 第62号住居跡実測図	163
第 92 図 第44号住居跡実測図	114	第130図 第62号住居跡出土遺物実測図	164
第 93 図 第44号住居跡出土遺物実測図	115	第131図 第1号竪穴遺構実測図	165
第 94 図 第46号住居跡実測図	117	第132図 第1号竪穴遺構出土遺物実測図	166
第 95 図 第46号住居跡出土遺物実測図(1)	119	第133図 第2号竪穴遺構出土遺物実測図	167
第 96 図 第46号住居跡出土遺物実測図(2)	120	第134図 第2号竪穴遺構実測図	167
第 97 図 第47号住居跡実測図	122	第135図 第3号竪穴遺構実測図	168
第 98 図 第47号住居跡出土遺物実測図	123	第136図 第4号竪穴遺構実測図	168
第 99 国 第48号住居跡実測図	125	第137図 第5号竪穴遺構実測図	169
第100図 第48号住居跡出土遺物実測図(1)	126	第138図 第5号竪穴遺構出土遺物実測図	169
第101図 第48号住居跡出土遺物実測図(2)	127	第139図 第6号竪穴遺構実測図	170
第102図 第49号住居跡実測図	129	第140図 第6号竪穴遺構出土遺物実測図	171
第103図 第49号住居跡出土遺物実測図	130	第141図 第7号竪穴遺構実測図	171
第104図 第50号住居跡実測図	131	第142図 第7号竪穴遺構出土遺物実測図	172
第105図 第50号住居跡出土遺物実測図(1)	133	第143図 第8号竪穴遺構実測図	173
第106図 第50号住居跡出土遺物実測図(2)	134	第144図 第9号竪穴遺構実測図	174
第107図 第51号住居跡実測図	135	第145図 第9号竪穴遺構出土遺物実測図	175
第108図 第51号住居跡出土遺物実測図	136	第146図 第10号竪穴遺構出土遺物実測図	175

第147図	第10号竪穴遺構実測図	176	第177図	第2号住居跡実測図	218
第148図	第11号竪穴遺構実測図	177	第178図	第2号住居跡出土遺物実測図	219
第149図	第3号土坑・出土遺物実測図	179	第179図	第1号住居跡実測図	220
第150図	第5号土坑・出土遺物実測図	180	第180図	第1号住居跡出土遺物実測図	221
第151図	第6号土坑・出土遺物実測図	181	第181図	第3号住居跡実測図	224
第152図	第20号土坑・出土遺物実測図	181	第182図	第3号住居跡出土遺物実測図	225
第153図	第26号土坑・出土遺物実測図	182	第183図	第4号住居跡実測図	227
第154図	第34号土坑・出土遺物実測図	184	第184図	第4号住居跡竪穴実測図	228
第155図	第39号土坑・出土遺物実測図	184	第185図	第4号住居跡出土遺物実測図	229
第156図	第41号土坑実測図	185	第186図	第5号住居跡実測図	231
第157図	第44号土坑・出土遺物実測図	186	第187図	第5号住居跡竪穴実測図	232
第158図	第50号土坑・出土遺物実測図	187	第188図	第5号住居跡出土遺物実測図(1)	233
第159図	第76号土坑出土遺物実測図(1)	188	第189図	第5号住居跡出土遺物実測図(2)	234
第160図	第76号土坑・出土遺物実測図(2)	189	第190図	第5号住居跡出土遺物実測図(3)	235
第161図	第78号土坑・出土遺物実測図	190	第191図	第5号住居跡出土遺物実測図(4)	236
第162図	第84号土坑実測図	191	第192図	第6号住居跡実測図	239
第163図	第93号土坑実測図	192	第193図	第6号住居跡出土遺物実測図	239
第164図	第95号土坑・出土遺物実測図	193	第194図	粘土採掘土坑群実測図	241
第165図	土坑出土遺物実測図	193	第195図	土坑実測図(1)	242
第166図	土坑実測図(1)	198	第196図	土坑実測図(2)	243
第167図	土坑実測図(2)	199	第197図	第1~11号溝実測図	245
第168図	土坑実測図(3)	200	第198図	溝土層実測図	248
第169図	第1号炭焼窯跡実測図	200	第199図	第1・2・9号溝出土遺物実測図	249
第170図	第1号炭焼窯跡出土遺物実測図	201	第200図	水田跡実測図	252
第171図	遺構外出土遺物拓影図(1)	203	第201図	水田跡土層実測図	253
第172図	遺構外出土遺物拓影図(2)	204	第202図	遺構外出土遺物拓影図(1)	255
第173図	遺構外出土遺物実測図(1)	205	第203図	遺構外出土遺物拓影図(2)	256
第174図	遺構外出土遺物実測図(2)	206	第204図	遺構外出土遺物実測図(1)	257
第175図	行人田遺跡基本土層図	215	第205図	遺構外出土遺物実測図(2)	258
第176図	行人田遺跡全図	216	第206図	遺構外出土遺物実測図(3)	259

表 目 次

表 1 馬場遺跡・行人田遺跡周辺遺跡一覧表	7	表 5 行人田遺跡住居跡一覧表	240
表 2 馬場遺跡住居跡一覧表	177	表 6 行人田遺跡粘土探掘土坑一覧表	240
表 3 馬場遺跡竖穴遺構一覧表	178	表 7 行人田遺跡土坑一覧表	243
表 4 馬場遺跡土坑一覧表	195		

写真図版目次

P L 1	馬場遺跡完掘全景，行人田遺跡完掘全景	37号住居跡遺物出土状況
馬場遺跡		P L 15 第37号住居跡遺物出土状況，第38号住居跡完掘，第38号住居跡遺物出土状況
P L 2	遺跡全景，第1号住居跡完掘，第2号住居跡完掘	P L 16 第39号住居跡完掘，第40号住居跡完掘，第40号住居跡遺物出土状況
P L 3	第3号住居跡完掘，第4号住居跡完掘，第4号住居跡遺物出土状況	P L 17 第41号住居跡完掘，第41号住居跡遺物出土状況，第42号住居跡遺物出土状況
P L 4	第5号住居跡遺物出土状況，第6号住居跡遺物出土状況，第7号住居跡貯藏穴遺物出土状況	P L 18 第43号住居跡完掘，第46号住居跡完掘，第46号住居跡貯藏穴遺物出土状況
P L 5	第8号住居跡完掘，第8号住居跡遺物出土状況，第9号住居跡完掘	P L 19 第48号住居跡完掘，第48号住居跡遺物出土状況，第48号住居跡貯藏穴遺物出土状況
P L 6	第9号住居跡遺物出土状況，第9号住居跡完掘，第10号住居跡完掘	P L 20 第49号住居跡遺物出土状況，第50号住居跡完掘，第50号住居跡遺物出土状況
P L 7	第11号住居跡完掘，第11号住居跡遺物出土状況，第12号住居跡完掘	P L 21 第50号住居跡遺物出土状況，第51号住居跡完掘，第51号住居跡遺物出土状況
P L 8	第13号住居跡完掘，第13号住居跡電袖部遺物出土状況，第13号住居跡遺物出土状況	P L 22 第53号住居跡完掘，第55号住居跡完掘，第56号住居跡完掘
P L 9	第14号住居跡完掘，第15号住居跡完掘，第16号住居跡完掘	P L 23 第56号住居跡遺物出土状況，第58号住居跡完掘，第63号住居跡遺物出土状況
P L 10	第16号住居跡焼土・遺物出土状況，第17号住居跡遺物出土状況 第18号住居跡完掘	P L 24 第64号住居跡完掘，第64号住居跡遺物出土状況，第65号住居跡遺物出土状況
P L 11	第19号住居跡遺物出土状況，第20号住居跡遺物出土状況，第21号住居跡完掘	P L 25 第29号住居跡完掘，第29号住居跡電袖完掘・遺物出土状況，第52号住居跡完掘
P L 12	第22号住居跡完掘，第25号住居跡完掘，第27号住居跡完掘	P L 26 第52号住居跡電袖遺物出土状況，第59号住居跡完掘，第59号住居出入口ピットセクション
P L 13	第27号住居跡遺物出土状況，第28号住居跡完掘，第31号住居跡遺物出土状況	P L 27 第59号住居跡電袖破壊し割り，第62号住居跡完掘，第1号竪穴遺構完掘
P L 14	第32号住居跡完掘，第37号住居跡完掘，第	P L 28 第1号竪穴遺構遺物出土状況，第7号竪穴

- P L29 第9号竖穴遗構完掘，第10号竖穴遗構遗物出土状况，第11号竖穴遗構完掘
- P L30 第5号土坑遗物出土状况，第26号土坑遗物出土状况，第78号土坑遗物出土状况
- P L31 第76号土坑遗物出土状况，第76号土坑遗物出土状况，第95号土坑遗物出土状况
- P L32 第65·1·2号住居跡出土遗物
- P L33 第2·3·4号住居跡出土遗物
- P L34 第4·5·6·7号住居跡出土遗物
- P L35 第7·8·9号住居跡出土遗物
- P L36 第8·9号住居跡出土遗物
- P L37 第10·11·12·13号住居跡出土遗物
- P L38 第11·13·14·15号住居跡出土遗物
- P L39 第15·16号住居跡出土遗物
- P L40 第16·17·18号住居跡出土遗物
- P L41 第19·20·21·22·26号住居跡·第1号竖穴遗構出土遗物
- P L42 第26·27·28号住居跡出土遗物
- P L43 第28·31·37·39号住居跡出土遗物
- P L44 第37·38·39·40·41·42·43号住居跡出土遗物
- P L45 第43·44·46号住居跡出土遗物
- P L46 第46·47号住居跡出土遗物
- P L47 第47·48号住居跡出土遗物
- P L48 第48·50·51号住居跡出土遗物
- P L49 第51·55·56号住居跡出土遗物
- P L50 第58·63·64号住居跡出土遗物
- P L51 第29·50·52·59·62号住居跡出土遗物
- P L52 第64号住居跡，第5·9号竖穴遗構，第3·5·24·26·28号土坑，遗構外出土遗物
- P L53 第26·28·29·34·44·46·71·76·86号土坑，遗構外出土遗物
- P L54 第3·21·59号住居跡，第76·78·95号土坑，炭烧窯跡，遗構外出土遗物
- P L55 第1·10·16·28·43·46·48·56号住居跡，第1号竖穴遗構出土遗物
- P L56 第7·8·15·20·22·25·39·56号住居跡，遗構外出土遗物
- P L57 第7·12·16·41·56·62·65·66号住居跡，第8号竖穴遗構，遗構外出土遗物
- P L58 遗構外出土遗物
- 行人田遺跡
- P L59 第1号住居跡完掘，第1号住居跡竈遗物出土状况，第1号住居跡出入口ビット
- P L60 第1号住居跡竈完掘，第2号住居跡完掘，第3号住居跡完掘
- P L61 第4号住居跡完掘，第4号住居跡竈遗物出土状况，第4号住居跡壁柱穴
- P L62 第5号住居跡完掘，第5号住居跡竈遗物出土状况，第6号住居跡完掘
- P L63 粘土探掘土坑群，粘土探掘土坑遗物出土状况，第1号溝完掘
- P L64 第2号溝完掘，水田跡
- P L65 第1·2·3号住居跡出土遗物
- P L66 第3·4·5号住居跡出土遗物
- P L67 第5号住居跡出土遗物
- P L68 第5·6号住居跡，第1·9号溝出土遗物
- P L69 第1·4·5号住居跡，第1号溝，遗構外出土遗物
- P L70 遗構外出土遗物
- P L71 遗構外出土遗物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県が進めている「グレーターフくば構想」は、牛久市、土浦市、つくば市の三市を業務核都市として100万田園都市圏の一翼を担うことが期待されており、牛久市の北部地区に「竜ヶ崎・牛久都市計画事業牛久北部特定土地区画整理事業」が計画された。この事業は、業務機能と都市的機能を備えた良好な居住環境を有した市街地の形成を目指すものである。

これにより、昭和63年10月13日、住宅・都市整備公団つくば開発局は、茨城県教育委員会に対し、この事業計画地区である牛久市北部地域における埋蔵文化財の有無の照会をした。これを受け、茨城県教育委員会は、同月26日から牛久市教育委員会と埋蔵文化財の有無の確認とその取り扱いについての協議を行い、平成元年2月7日、表面観察及び試掘調査を実施した結果、馬場遺跡ほかヤツノ上遺跡など数遺跡が所在することを確認し、住宅・都市整備公団あてに回答した。平成4年1月29日から、住宅・都市整備公団と茨城県教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を重ねた結果発掘調査による記録保存の措置を講ずることにした。そこで、茨城県教育委員会は、住宅・都市整備公団に、埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団から遺跡発掘調査の依頼を受け、平成2年9月29日、牛久北部特定土地区画整理事業地内の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、同年10月1日からヤツノ上遺跡の発掘調査を開始した。そして、平成5年4月1日、住宅・都市整備公団と馬場遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、同年4月から馬場遺跡1区の発掘調査を、翌年4月1日から馬場遺跡2区、行人田遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

馬場遺跡、行人田遺跡の発掘調査は、東山遺跡1区・3区の調査と併せて、平成5年4月1日から平成6年12月31までの1年9か月にわたって、馬場遺跡1区[19,269m²]、馬場遺跡2区[6,943m²]、行人田遺跡[6,270m²]（第2図）の順に実施した。以下、調査経過の概要について月ごとに記述する。

平成5年度—馬場遺跡1区の調査

- 4月 7日に現地踏査を行い、発掘調査をするための諸準備を行った。9日から作業を開始し、休憩所の設置及び遺跡内の清掃を実施した。12日から畠地部分のグリット試掘調査を開始した。
- 5月 7日に畠地部分の試掘調査が終了した。10日から山林部分の業者委託による立木の伐開、焼却作業を開始し、これと並行して19日からは、山林部分のグリット試掘を行った。
- 6月 グリット試掘によって、竪穴住居跡、土坑を確認した。28日から、重機による表土除去及び遺構確認作業を開始した。
- 7月 引き続き、東山遺跡の遺構調査と並行して、重機による表土除去及び遺構確認作業を行った。
- 8月 遺構確認作業の結果、竪穴住居跡35軒、土坑65基を確認した。18日から、方眼杭打ち測量（茨城県技術公社）を実施した。

- 9～10月 東山遺跡の調査を実施するため、当遺跡の調査を一時中断した。
- 11月 11日に現場倉庫及び休息所を当遺跡に移設し、12日から遺構調査を再開した。
- 12月 東山遺跡包含層の調査と並行して当遺跡の遺構調査を進め、竪穴住居跡13軒及び土坑9基の調査を終了した。
- 1月 引き続き遺構調査を進め、これまでに19軒の竪穴住居跡の調査を終了した。17日～27日までは、馬場遺跡2区の業者委託による立木の伐開、焼却作業を実施した。
- 2月 3日～8日には、馬場遺跡2区の一部分について、遺構確認のためのグリット試掘調査を行い、24日から28日まで重機による表土除去を実施した。1区の遺構調査ではこれまでに竪穴住居跡28軒及び土坑42基の調査を終了した。
- 3月 3日には馬場遺跡1区の調査も概ね終了し、6日に東山遺跡1区と併せて現地説明会を開催した。8日から補足調査を行なながら、15日には航空写真撮影を実施した。竪穴住居跡35軒、土坑65基及び炭焼窯跡1基の調査を終了し、25日に馬場遺跡1区の調査を完了した。

平成6年度－馬場遺跡2区、行人田遺跡の調査

- 4月 7日に現地踏査を行い、発掘調査をするための諸準備を行った。11日から東山遺跡と併せて、遺跡内の清掃を行った。18日からは東山遺跡3区の調査を実施するために、当遺跡の調査は一時中断した。
- 5月 引き続き、東山遺跡3区の調査を実施するため、当遺跡の調査は一時中断した。
- 6月 1日、2日には、昨年2月に表土除去が終了している馬場遺跡2区の一部分について遺構確認調査を行った。6日からは、馬場遺跡2区の残りの部分と行人田遺跡の業者による伐開、焼却作業を開始し、15日に終了した。16日から30日まで馬場遺跡2区の試掘調査を、29日からは行人田遺跡の試掘調査を行った。
- 7月 行人田遺跡の試掘調査は8日に終了した。4日から12日には馬場遺跡2区の重機による表土除去及び遺構確認作業を行い竪穴住居跡31軒、土坑29基を確認した。東山遺跡の調査終了を待って13日に現場倉庫を馬場遺跡に移設し、15日から馬場遺跡の遺構調査を開始した。28日からは行人田遺跡の重機による表土除去を行った。
- 8月 11日に行人田遺跡の表土除去を終了し、22日から30日まで遺構確認作業を行い、竪穴住居跡、土坑及び溝を確認した。馬場遺跡の遺構調査では、竪穴住居跡13軒、土坑17基の調査を終了した。
- 9月 5日に、行人田遺跡の方眼杭打ち測量（茨城県技術公社に委託）を実施した。馬場遺跡は、引き続き遺構調査を実施し、これまでに竪穴住居跡19軒、土坑29基の調査を終了した。
- 10月 馬場遺跡は13日に発掘終了後の航空写真撮影を実施し、19日にはすべての調査を終了した。行人田遺跡は4日に駐車場碎石敷設、12日に馬場遺跡から現場倉庫やトイレの移設を行い、13日から調査を開始した。14日、17日に方眼杭打ち測量（茨城県技術公社に委託）を実施した。
- 11月 行人田遺跡の遺構調査を進めた。
- 12月 行人田遺跡の遺構調査を概ね終了し、8日に発掘終了後の航空写真撮影を実施した。10日に馬場遺跡及び行人田遺跡の現地説明会を開催した。以後、行人田遺跡の補足調査を行なながら撤収準備をし、22日にすべての調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

馬場遺跡は牛久市東獣穴町字下山1,165番地の1ほかに、行人田遺跡は牛久市東獣穴町字志の立576番地に所在し、牛久市役所の北北西約4kmのところに位置している。

遺跡のある牛久市は、茨城県南部の中ほどに位置し、東は江戸崎町、西は基崎町、南は竜ヶ崎市、北は阿見町、土浦市及びつくば市と境を接している。市域は、東西約15km、南北約10km、面積約59.00km²を擁している。市の西側には、国道6号線とJR常磐線が平行してほぼ南北に通じ、中央部には国道408号線が東西に走っている。

牛久市の地形は、標高25~28mの洪積台地である稲敷台地と、小野川や乙戸川、桂川水系の沖積低地とからなっている。稲敷台地には、小野川や乙戸川、桂川とその支流が入り込み、台地は複雑な地形となっている。小野川はつくば市を水源とし、市のほぼ中央部を北西から南東に流れている。市の南東端で小野川に合流する乙戸川は土浦市の乙戸沼を水源とし、阿見町を流れて本市東部に入り桂川を併せている。桂川、乙戸川を併せた小野川は、大きく北東に弯曲し、霞ヶ浦に流入している。市の西端には牛久沼が形成されている。

稲敷台地は、土浦市、竜ヶ崎市、江戸崎町を結ぶ三角地带の中にその大部分が入り、台地の東端は東村阿波崎付近にある。台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤層となり下部から成田層下部、成田層上部、竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層の順で堆積している。堆積状況は、水平で単調であり、褶曲や断層はみられない。

馬場遺跡は、小野川左岸から北東側に入り込む小支谷に挟まれた標高20~24mの舌状台地の東部に立地している。遺跡のある台地と小支谷の比高は2~6mであり、調査前の現況は畠及び山林である。行人田遺跡は、小野川の後背湿地が丘陵の奥深く入り込む入口付近に位置する標高16~20mの台地上にあり、馬場遺跡の200m程南西側に位置している。調査前の現況は山林であり、南側の水田面との比高は1~5mである。

注・参考文献

茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 竜ヶ崎』1987年 12月

茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 佐原』1988年 12月

蜂須紀夫 「茨城県 地学のガイド」 1986年 11月

第2節 歴史的環境

馬場遺跡①及び行人田遺跡②が所在する地域は、大小の河川、低地、台地と変化に富んだ自然環境の中で昔から人々の生活が営まれており、数多くの遺跡が残っている。特に、牛久沼周辺や小野川、乙戸川水系によって形成された台地上には、旧石器時代から中世までの遺跡が多数分布している。ここでは、当地域の主な遺跡について時代を以て述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、中久喜遺跡③、西ノ原遺跡④があり、ナイフ形石器や尖頭器等が出土している。

縄文時代の遺跡は、牛久市の守子橋遺跡⑤、ヤツノ上遺跡⑥、東山遺跡⑦、基崎町の下大井遺跡⑧、大井遺跡⑨、土浦市の沖新田遺跡⑩、塚下遺跡⑪等がある。守子橋遺跡、下大井

遺跡、大井遺跡は、小野川沿いの右岸台地縁辺部に、ヤツノ上遺跡、東山遺跡は、小野川左岸から入り込む小支谷の東側の台地上に位置している。ヤツノ上遺跡では、縄文時代後・晩期の堅穴住居跡5軒が確認され、土器片とともに同時期の土偶が出土している。沖新田道祖神前遺跡は乙戸川右岸台地縁辺部に、塚下遺跡は乙戸川左岸台地縁辺部にあり対峙している。牛久市奥原町の小野川と乙戸川とが合流する左岸台地縁辺部には、中期から後期にかけての集落跡である奥原遺跡(出戸地区)があり、堅穴住居跡18軒、土坑42基が確認されている。牛久市桂町の乙戸川支流の桂川左岸台地縁辺部にある赤塚遺跡は、堅穴住居跡20軒、土坑85基が確認されており、この地域の縄文時代中期の代表的な集落跡である。牛久沼から入り込む小支谷を臨む台地上には、中期から晩期の城中貝塚をはじめとして数多くの遺跡が存在している。

弥生時代の遺跡は、縄文土器片とともに弥生土器片の散布がみられる小野川右岸台地縁辺部に位置する坂本遺跡(12)がある。小野川とその支流乙戸川の合流点左岸に位置する奥原町の天王峯遺跡の一・二次調査では、併せて21軒の弥生時代後期の堅穴住居跡が確認されている。

古墳時代の遺跡は、今回報告する馬場遺跡のほかに、牛久市の中久喜遺跡、ヤツノ上遺跡、東山遺跡、中下根遺跡(13)、梨の木遺跡(14)、琴塚遺跡(15)、宮の台遺跡(16)、奥原遺跡、すかき台遺跡、源臺遺跡、天王峯遺跡、土浦市の向原遺跡、烏山遺跡、竜ヶ崎市の平台遺跡、長峰遺跡、稻敷郡阿見町の中根遺跡(17)、宮脇遺跡、阿見東遺跡等がある。

これらの遺跡を時期別にみると、古墳時代前期の遺跡は、すかき台遺跡、奥原遺跡、向原遺跡、烏山遺跡等がある。小野川と乙戸川の合流する左岸台地縁辺部に位置する奥原町のすかき台遺跡では、堅穴住居跡9軒、同じく奥原遺跡(純神地区)では、堅穴住居跡28軒、方形周溝墓3基が確認されている。乙戸川左岸台地上に位置する久野町の源臺遺跡からは、5基の方形周溝墓、1基の円形周溝墓が確認されている。花室川の南にある北東から南北に延びる台地上に位置する向原遺跡からは、堅穴住居跡61軒が確認されている。烏山遺跡から同時期の堅穴住居跡が16軒確認されており、そのうち11軒の堅穴住居跡内から勾玉、管玉の未製品が大量に出土していることから、玉造工房跡と考えられている。

古墳時代中期の遺跡をみてみると、牛久市中根町付近の小野川、乙戸川水系の小支谷によって開析された台地上には、ヤツノ上遺跡、中久喜遺跡、中下根遺跡、西ノ原遺跡、隼人山遺跡(18)があり、広範囲にわたって古墳時代中期後半の集落跡が形成されている。ヤツノ上遺跡では堅穴住居跡29軒、中久喜遺跡では堅穴住居跡42軒が確認された。当遺跡の谷津を挟んだ東側の台地上にある東山遺跡では、69軒の堅穴住居跡が確認された。西ノ原遺跡では堅穴住居跡15軒、調査中の隼人山遺跡では現在のところ31軒の堅穴住居跡が確認されている。阿見町北西部の清明川によって開析された台地上に位置する宮脇遺跡(第II期)からは、同時期の堅穴住居跡23軒が確認されている。宮脇遺跡の東側に位置する阿見東遺跡からは、石製模造品が多数出土しており、石製品工房跡と考えられている。竜ヶ崎市の長峰遺跡、平台遺跡からは、古墳時代中期前半の集落跡が確認されている。

古墳時代後期の遺跡は、西ノ原遺跡、天王峯遺跡、奥原遺跡等がある。西ノ原遺跡では堅穴住居跡5軒、天王峯遺跡では堅穴住居跡2軒が確認されている。

古墳は、集落に付随するように、茎崎町の下大井古墳群(19)、阿見町の内記古墳群(20)、実穀古墳群、牛久市猪子町の道山古墳群(21)、宮坂古墳(22)、愛宕嶺古墳(23)がある。なかでも9基からなる道山古墳群は小野川に流れれる一支流に面した標高20mの台地上に造営されており、第3・4・5号墳からは、直刀が出土している。これらの古墳は、いずれも6世紀後半から7世紀前半のものである。

奈良・平安時代の遺跡は、今回報告の行人道遺跡のほか、ヤツノ上遺跡、中久喜遺跡、奥原遺跡等がある。こ

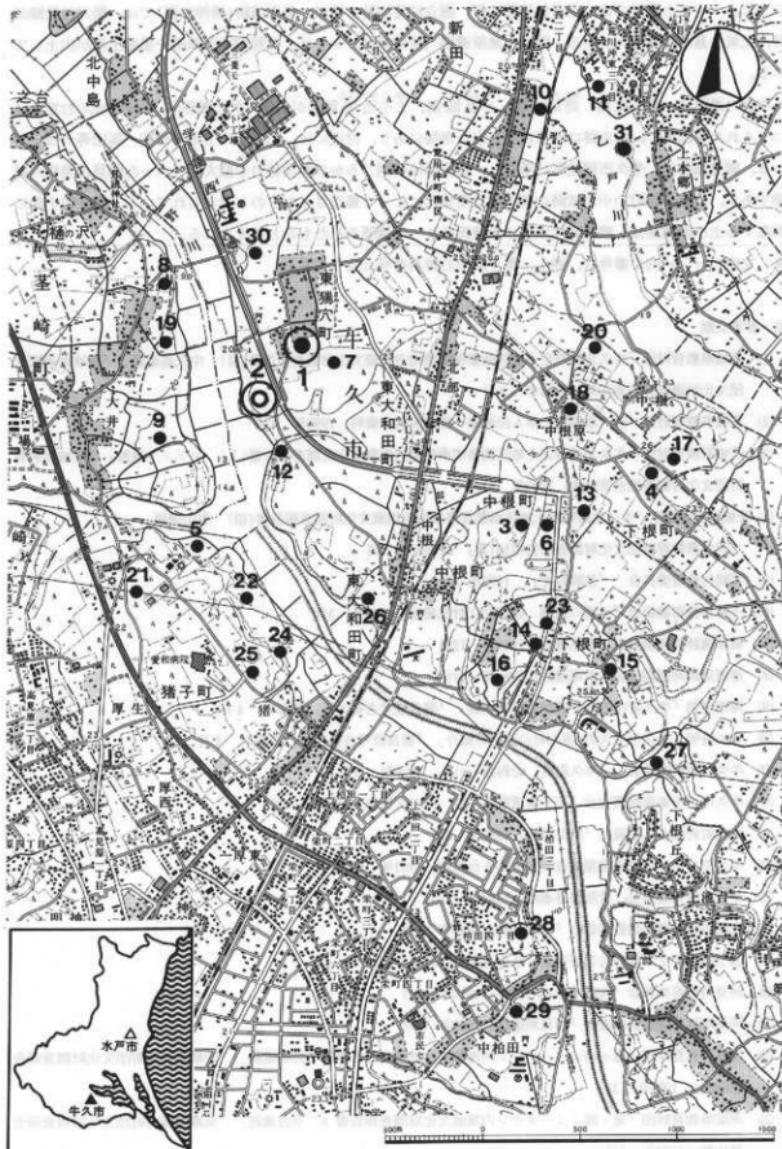
のうち、ヤツノ上遺跡では、竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡2棟が、奥原遺跡(姥神地区)では、竪穴住居跡56軒、土坑2基が確認されている。特に、奥原遺跡(姥神地区)からは、灰釉陶器宝珠鏡や墨書き土器が出土している。

中世の遺跡は、牛久城跡、岡見城跡、小坂城跡、上小池城跡等がある。牛久城跡は、標高20mの台地上につくられた平山城で、本丸跡は舌状に突き出た南端にあり、付近には、二の丸・土塁・拵型・馬出等が残っている。岡見城跡は、牛久市岡見町に所在し、室町時代初期ごろから漸次勢力を拡大していった岡見氏発祥の城跡であり、同市小坂町の小坂城跡は戦国期に岡見氏によって築造されたものと考えられている。阿見町小池に所在する上小池城跡は、戦国時代末期に土岐氏によって構築されたものと考えられる。

* 文中の〈〉内の番号は、表1、第1図中の該当番号と同じである。

注・参考文献

- (1) 茨城県教育財団「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(II) 中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第86集』1994年 9月
- (2) 茨城県教育財団「西ノ原遺跡・隼人山遺跡 現地説明会資料」1995年 1月
- (3) 茨城県教育財団「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(I) ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第81集』1993年 3月
- (4) 茨城県教育財団「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(III) 東山遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告第101集』 1995年 9月
- (5) 墓崎村教育委員会「墓崎村史」 1973年 3月
- (6) 土浦市教育委員会「土浦の遺跡 埋蔵文化財包蔵地」1984年 3月
- (7) 奥原遺跡発掘調査会「奥原遺跡」1989年 12月
- (8) 赤堀遺跡発掘調査会「赤堀遺跡」1984年 4月
- (9) 潤畠俊明「牛久町中の台C遺跡探集の土器」『婆良岐考古第8号』1986年 4月
- (10) 青山俊明「牛久市牛久町・遠山町の遺跡の紹介」『婆良岐考古第10号』1988年 4月
- (11) 牛久市教育委員会「牛久町史 史料編(一)」 1979年 1月
- (12) 牛久市天王峯発掘調査会「天王峯遺跡報告書 第二次調査」1988年 4月
- (13) 阿見町史編さん委員会「阿見町史」1983年 3月
- (14) 牛久市すかき台遺跡発掘調査会「すかき台遺跡」1991年 8月
- (15) 牛久市教育委員会「常陸源臺遺跡」1989年 10月
- (16) 土浦市向原遺跡発掘調査会「向原遺跡」1987年 3月
- (17) 国士館大学文学部考古学研究室「鳥山遺跡」1988年 3月
- (18) 阿見町教育委員会「宮臨遺跡(第II期)」1990年 3月
- (19) 阿見町阿見東遺跡調査会「阿見東遺跡」1992年 5月
- (20) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19 長峰遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第58集』 1990年 3月
- (21) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 8 平台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第19集』1983年 3月
- (22) 小坂城跡発掘調査会「小坂城跡」1979年 12月



第3図 周辺遺跡分布図

表1 馬場遺跡・行人田遺跡周辺遺跡一覧表

図中 番号	遺 跡 名	県道 跡番 号	時 代					図中 番号	遺 跡 名	県道 跡番 号	時 代					
			旧 石 器	繩 文	弥 生	古 墳	奈 良 立 安				旧 石 器	繩 文	弥 生	古 墳	奈 良 平 安	
1	馬場遺跡	(当認)	○		○	○		17	中根遺跡	5703				○		
2	行人田遺跡	(当認)			○	○		18	隼人山遺跡				○	○		
3	中久喜遺跡		○		○	○		19	下大井古墳	5730			○			
4	西ノ原遺跡		○		○			20	内記古墳群	5702			○			
5	守子橋遺跡	2794	○					21	道山古墳群	1706			○			
6	ヤツノ上遺跡			○	○	○		22	宮坂古墳	3368			○			
7	東山遺跡		○		○	○		23	愛宕脇古墳	3372			○			
8	下大井遺跡	2811	○					24	中宿遺跡	3369			○			
9	大井遺跡	2808	○					25	古屋敷遺跡	3375			○			
10	津新田道祖神前遺跡	5241	○	○				26	根柄遺跡	3371			○			
11	塚下遺跡	5240	○	○				27	水落下遺跡	3378			○			
12	坂本遺跡	3366	○	○				28	權現山上池遺跡	3380	○		○			
13	中下根遺跡				○	○		29	出し山遺跡	3381	○		○			
14	梨の木遺跡	3373			○			30	大久保遺跡	3363			○			
15	琴塚遺跡	3377			○			31	於山遺跡	5701	○	○				
16	宮の台遺跡	3376			○											

第3章 馬場遺跡

第1節 遺跡の概要

馬場遺跡は、牛久市北西部、小野川左岸から北東方向に入り込む支谷によって挟まれた標高20~24mの舌状台地上にあり、古墳時代を中心に、縄文時代、奈良・平安時代の複合遺跡である。現状は、畠と山林であり、面積は、26,212m²である。当遺跡の谷津を挟んだ東側には東山遺跡、200m程南西には行人田遺跡がある。

今回の調査によって縄文時代の竪穴住居跡2軒、古墳時代中期の竪穴住居跡49軒、竪穴造構11基、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒が確認された。その他に土坑93基、炭焼窯跡1基が確認されている。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に146箱出土している。縄文時代の出土遺物は、早期から前期の繩文土器片、石器及び土製珠状耳飾りである。古墳時代の出土遺物は、土師器の壺、碗類、高壺、壺、櫃、甕、鉢及び須恵器の壺、壺蓋、高壺、甕並びに石製品の石製模造品、砥石そして鐵製品の鐵鏃、刀子である。奈良・平安時代の出土遺物は、須恵器の壺、壺蓋、甕、櫃及び土師器の甕である。

第2節 基本層序

調査区域北側台地平坦部(Z4a1区)にテスト

ピットを設定した。深さ2.0mまで掘り下げ、第4

23.8m —

図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層 厚さ20cmの暗褐色の耕作土である。

第2層 厚さ15cmの褐色のソフトローム層へ
の漸移層である。

23.0 —

第3層 厚さ35cmの褐色のソフトローム層で
ある。粘性がややある。

第4層 厚さ40cmの褐色のハードローム層で
ある。

第5層 厚さ40cmの明褐色のハードローム層
である。黒色粒子を少量含んでいる。

22.0 —

第6層 厚さ30cmの褐色のハードローム最下

第4図 馬場遺跡基本土層図

層である。第5層よりも硬質であり粘性も強い。赤色バミス、黒色粒子を少量含んでいる。

第7層 厚さ10cmの明褐色土で、粘土層への漸移層である。粘性、締まり共に強い。

第8層 厚さ10cmの黄褐色の粘土層で、極めて粘性、締まりが強い。

遺構は、第1層下面及び第2層上面でプランが確認され、第2層から第3層にかけて掘り込んでいる。

第3節 遺構と遺物

1 穴住居跡

今回の調査では、縄文時代の穴住居跡2軒、古墳時代の穴住居跡49軒、奈良・平安時代の穴住居跡4軒を確認した。以下、確認した55軒の穴住居跡と出土した遺物について記載する。

(1) 縄文時代の住居跡

第65号住居跡（第5図）

位置 調査区の南部、F2₃区。

規模と平面形 長軸3.46m、短軸3.33mの方形である。

主軸方向 N-70°-W

壁 壁高は10~18cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。南西側の一部は木根による搅乱を受けている。

ピット 確認されなかった。

炉 ほぼ中央部に位置し、長径60cm、短径50cmの梢円形で、床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------------|
| 1 | 赤褐色 | 焼土小ブロック少量 |
| 2 | 褐色 | 焼土小ブロック・ローム粒子少量 |

覆土 7層からなる。床面上にはローム中ブ

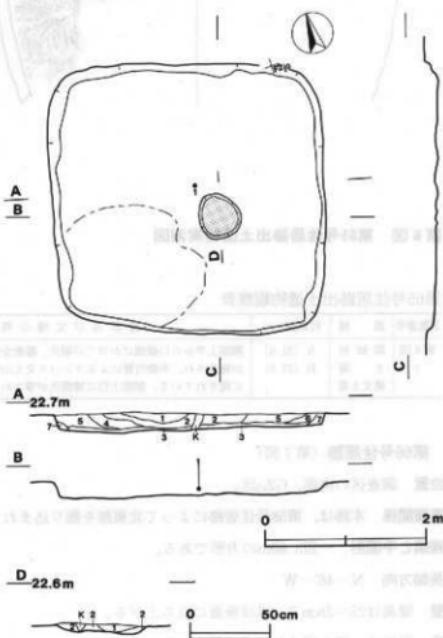
ロックを多量に含む褐色土が覆い、壁際か

ら土層5・4・2の順に堆積している。

土層解説

- | | | |
|---|-------|---------------------------------|
| 1 | 褐色 | ローム小ブロック少量。ローム粒子
微量 |
| 2 | 褐色 | ローム中ブロック中量。ローム小ブ
ロック・ローム粒子少量 |
| 3 | 褐色 | ローム中ブロック多量 |
| 4 | 明褐色 | ローム小ブロック中量。焼土粒子・
ローム粒子少量 |
| 5 | 明褐色 | ローム中ブロック中量。ローム粒子
少量 |
| 6 | 褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 7 | にぼい褐色 | ローム粒子少量 |

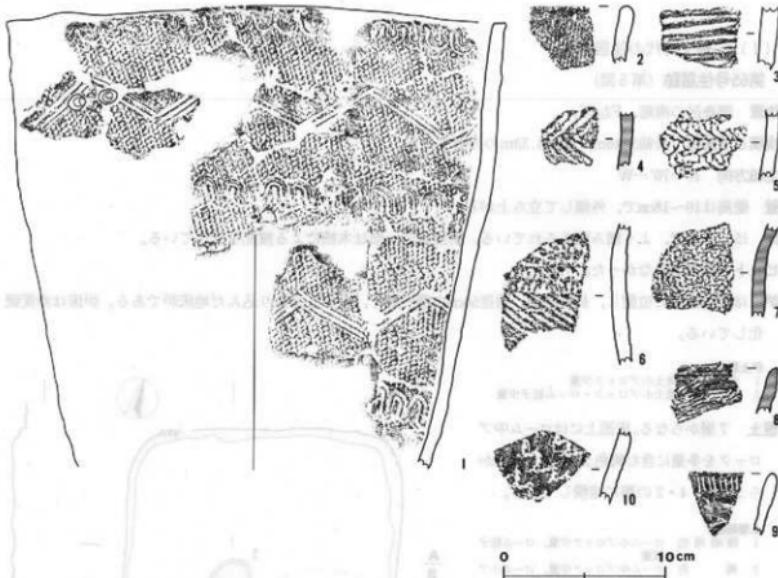
遺物 縄文時代早期中葉から前期後葉の土器片191点が出土しているが、ほとんど覆土上層からの出土である。第6図1の深鉢形土器は中央部の土層2から出土している。第6図拓影図2は口縁部で燃糸文を施しておらず、早期前葉（夏島式）の時期である。3は胴部で沈文線を施しており、早期中葉（田戸下層式）の時期である。4・5は羽状縄文、6はループ文と羽状縄文、7は組紐文、8は口縁部に単節L Rの縄文を施し、前期前半



第5図 第65号住居跡実測図

(関山・黒浜式) の時期である。9は口縁部片で口縁部直下には刻み目、10は貝殻波状紋を施しており、前期後半(浮島式)の時期である。

所見 本跡は、遺物が縄文時代早期から前期に限られており、しかも大部分の土器片が前期前半であることから、縄文時代前期のものと思われる。



第6図 第65号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	深鉢形 土器 縄文土器	A [31.0] B (27.8)	胴部上半から口縁部にかけての破片。器面全体に横回転の多条纏文が施され、半截竹管によるコンパス文と山形文が口縁部から交互に施されている。胴部上位に補修孔が穿たれる。	石英・纖維 に混じる褐色 普通	P425 20% PL32 胎土中層

第66号住居跡(第7図)

位置 調査区の南部, G2as区。

重複関係 本跡は、第58号住居跡によって北東部を掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 一辺3.60mの方形である。

長軸方向 N-46°W

壁 壁高は25~28cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

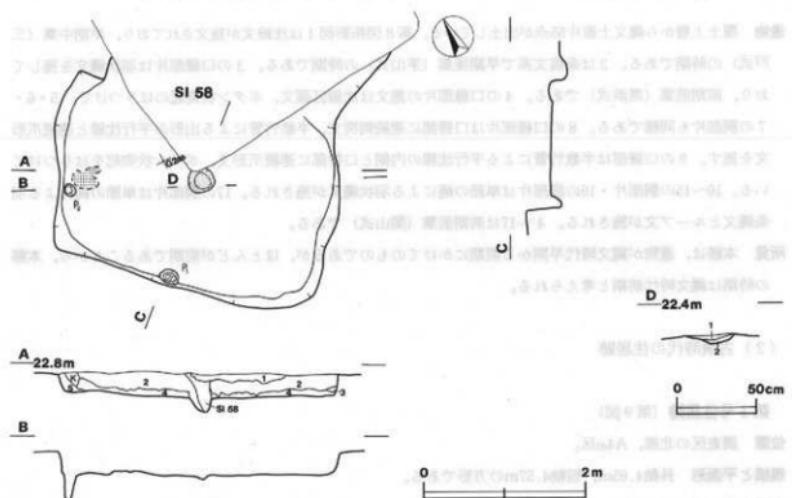
床 平坦で、踏み締めた部分は見られない。

ピット 2か所。P₁は径14cm、深さ10cm、P₂は径20cm、深さ30cmのいずれも円形で、性格は不明である。

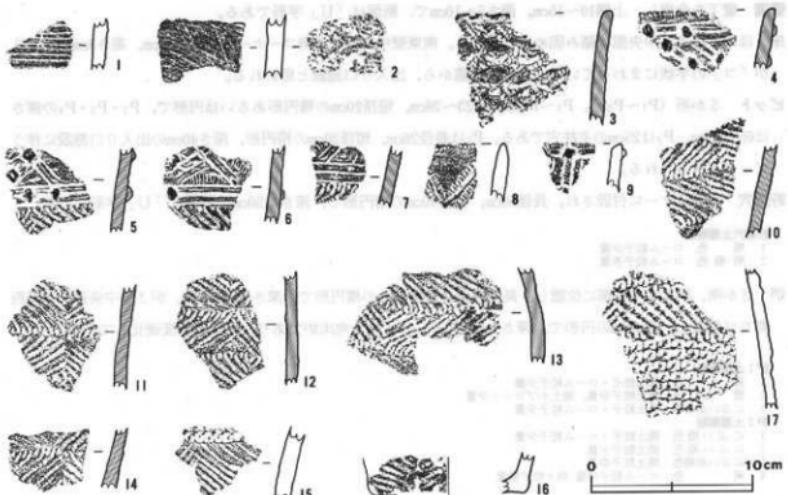
炉 ほぼ中央部に位置し、径30cm程の円形で、床を12cmほど掘り込んだ地床炉である。 ささみ小屋の 土間

炉土層解説

- 1 暗褐色 烧土粒子中量
2 暗褐色 烧土粒子少量



第7図 第66号住居跡実測図



第8図 第66号住居跡出土遺物実測図

覆土 5層からなる。

土層解説		1 極	色	ローム粒子多量	4 暗	褐	色	ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子中量、ローム粒子少量	
2 極		極	色	ローム粒子・ローム小ブロック中量、焼土粒子少量	5 極		褐	色	ローム粒子多量、焼土粒子少量
3 極		極	色	ローム小ブロック少量					

遺物 覆土上層から縄文土器片55点が出土している。第8図拓影図1は沈線文が施文されており、早期中葉（三戸式）の時期である。2は条痕文系で早期後葉（茅山式）の時期である。3の口縁部片は羽状縄文を施しており、前期前葉（黒浜式）である。4の口縁部片の施文は沈線区画文、ボタン状突起のはりつけで、5・6・7の胴部片も同様である。8の口縁部片は口唇部に連続刺突文、半截竹管による山形の平行沈線と連続爪形文を施す。9の口縁部片は半截竹管による平行沈線の内側と口唇部に連続爪形文、ボタン状突起はりつけている。10～15の胴部片・16の底部片は単節の縄による羽状縄文が施される。17の胴部片は単節の縄による羽条縄文とループ文が施される。4～17は前期前葉（関山式）である。

所見 本跡は、遺物が縄文時代早期から前期にかけてのものであるが、ほとんどが前期であることから、本跡の時期は縄文時代前期と考えられる。

（2）古墳時代の住居跡

第1号住居跡（第9図）

位置 調査区の北部、A4a1区。

規模と平面形 長軸4.65m、短軸4.57mの方形である。

主軸方向 N-31°-W

壁 壁高45～57cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を全周し、上幅10～15cm、深さ5～10cmで、断面は「U」字形である。

床 ほぼ平坦で、中央部は踏み固められている。南東壁中央部から南コーナー寄りに幅10cm、高さ5cmの高まりが「コ」の字状にまわっている。位置や形態から、出入り口施設と思われる。

ピット 5か所（P₁～P₅）。P₁～P₄は長径23～28cm、短径20cmの楕円形あるいは円形で、P₁・P₃・P₄の深さは65～75cm、P₂は25cmの主柱穴である。P₅は長径26cm、短径20cmの楕円形、深さ40cmの出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南コーナーに付設され、長径60cm、短径40cmの楕円形で、深さは50cm、断面は「U」字形である。

貯蔵穴土層解説

1	褐	色	ローム粒子少量
2	明	褐	ローム粒子多量

炉 2か所。炉1は中央部に位置し、長径74cm、短径45cmの楕円形で、深さ3cmである。炉2は中央部から南西寄りに位置し、径45cmの円形で、深さ5cmである。いずれも地床炉であり、炉床は赤変硬化している。

炉1土層解説

1	褐	色	焼土粒子・ローム粒子少量
2	褐	色	焼土粒子中量、焼土小ブロック少量
3	にじい赤褐色	色	焼土粒子・ローム粒子少量

炉2土層解説

1	にじい褐色	色	焼土粒子・ローム粒子少量
2	にじい褐色	色	焼土粒子少量
3	にじい赤褐色	色	焼土粒子中量

4	褐	色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
---	---	---	----------------

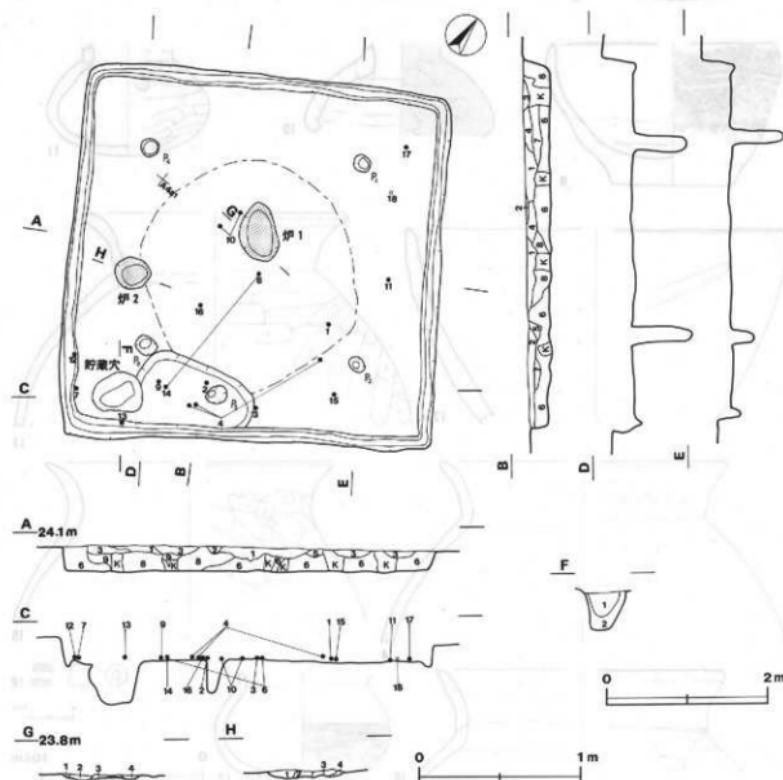
覆土 9層からなる。耕作によるトレンチャーの搅乱をうけている。各層にロームブロック・ローム粒子を含

んでおり、人為堆積と思われる。

覆土土層解説	
1	船 梅 色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
2	海 梅 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
3	海 梅 色 ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量
4	海 梅 色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
5	海 梅 色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
6	海 梅 色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
7	海 梅 色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
8	海 梅 色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量
9	海 梅 色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量

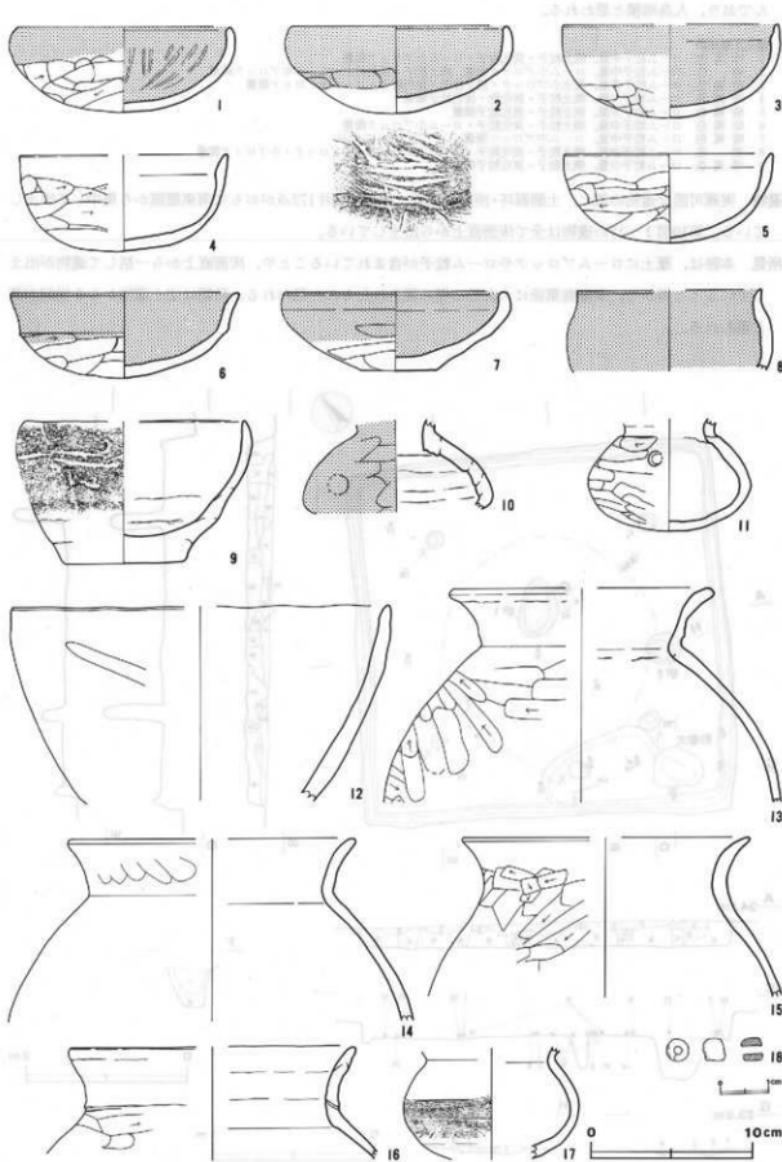
遺物 実測可能な遺物の他に、土器器坏・焼痕片54点、土器器壺片172点がおもに南東壁際から集中して出土している。第10図1～17の遺物は全て床面直上から出土している。

所見 本跡は、覆土にロームブロックやローム粒子が含まれていることや、床面直上から一括して遺物が出土していること等から、家屋廃棄後に人为的に埋め戻されたものと思われる。時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第9図 第1号住居跡実測図

国師窯跡出土器物目録(第1章) 第10図



第10図 第1号住居跡出土遺物実測図

図版実測図分量：図一覧

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
10図1	环 土器	A 13.2 B 5.3	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部へラ削り後ナデ。体部内面へラ削き。内面及び口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・石英 露母 赤色 普通	P3 P L32 床面
		A 13.5 B 5.5	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後ナデ。口縁部外面から内面全体赤彩。	砂粒・スコリア 石英・露母 橙色 普通	P2 P L32 床面 体部外面部石転用
3	环 土器	A 13.4 B 5.0	丸底。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部下端、底部外面へラ削り。体部内面横いハケ状工具による削ナデ。内面及び口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P6 P L32 床面
		A 12.8 B 5.8	丸底。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部下端、底部外面へラ削り。底部外表面不規方向のへラ削り。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P7 P L32 床面
5	环 土器	A 13.0 B 5.8	丸底。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。	砂粒・露母・長石 洗黄褐色 普通	P8 P L32 床面
		A 14.3 B 5.4	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面及び口縁部外面赤彩。	長石 橙色 普通	P4 P L32 床面
7	环 土器	A 14.0 B 4.9 C 4.5	平らな底部から外傾して立ち上がり、口縁部で直立する。口唇部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外表面へラ削り。体部外面上半から内面赤彩。	石英・露母 にぶい橙色 普通	P1 P L32 床面
		A [11.6] B (5.0)	口縁部破片。体部は内側して立ち上がり。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 橙色 普通	P9 覆土 外面煤付着
		A 13.5 B 8.9 C 8.0	口縁部一部欠損。突出した平底から内側して立ち上がり。口縁部は内傾し、堆疊は尖る。	口縁部外面横ナデ。体部外表面へラ削り。輪模痕を残す。堆疊が激しい。	砂粒・小砾多量 浅黄褐色 不良	P10 P L32 床面
10	埴 土器	B 5.4	体部上半の破片。体部上半に径1.2cmの円孔を穿つ。	体部外表面へラ削り後ナデ。内面輪模痕を明瞭に残し、粗い作り。内面赤彩。	長石・石英 赤色・橙色 普通	P11 P L32 床面
11	埴 土器	B 6.7	底部から頸部にかけての硬片。丸底。体部は球形狀で、最大径を中位にもつ。体部上半に径1.0cmの円孔を穿つ。	体部外面横方向のへラ削り。	砂粒・長石 明黄褐色 普通	P12 P L32 床面
12	鉢 土器	A [24.4] B (10.5)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P13 床面 外面煤付着
13	棗 土器	A [15.8] B (13.3)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外表面へラ削り後ナデ。体部内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P14 10% 床面
14	棗 土器	A [17.6] B (11.4)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外傾し、口唇部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部には指觸痕が残る。	長石 にぶい橙色 普通	P15 20% 床面
15	棗 土器	A [17.8] B (10.0)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部から体部外表面へラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P16 5% 床面 外面煤付着
16	棗 土器	A [17.4] B (7.1)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外傾し、口唇部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外表面へラ削り。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P17 5% 床面
17	棗 土器	B (6.9)	体部下端から頸部の破片。体部は球形狀で、最大径を中位にもつ。	体部内面横ナデ。体部外面上位に1条の細い凹線。その下に6本1束の輪模痕工具による波状文。	砂粒・小砾 灰色 良好	P18 P L32 床面 自然施付着

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)				
10図18	白玉	0.5	0.5	0.5	0.2	0.1	滑石	南東側床面	Q1 P L55

第2号住居跡（第11図）

位置 調査区の北部、A4a区。

規模と平面形 長軸3.49m、短軸2.77mの長方形である。

主軸方向 N-21°-W

壁 壁高22~40cmで、外傾して立ち上がる。

整溝 北・東・南壁下を巡っており、幅7~15cm、深さ4~8cmで、断面は「U」字形である。西壁下は搅乱のため確認できない。

床 ほぼ平坦である。南壁寄りの中央部には、出入り口施設と思われる幅13~20cm、高さ6cmの半円状の高まりがみられたが、耕作による搅乱のため遺存状況は良くない。

ピット 4か所（P1~P4）。P1:P2は径約45cmの円形で、深さ48及び58cmの支柱穴と思われる。半円状の高まりの中央にあるP3は径35cmの円形で、深さ16cmであり、位置から出入り口施設に伴うピットと思われる。P4は長径70cm、短径60cm、深さ33cmの不定形で、性格は不明である。

貯藏穴 南西コーナーに付設され、長径70cm、短径55cmの楕円形で、深さ38cm、断面は筒形である。

貯藏穴覆土

1	褐色	ローム粒子少量
2	明褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量

炉 2か所。炉1は中央部に位置し、長径100cm、短径53cmの楕円形である。炉2は中央部の北東寄りに位置し、径43cmの円形である。いずれも地床炉である。炉1の炉床は火熱を良く受け赤変硬化している。炉2の炉床は火熱を受け赤変はしているが柔らかい。

炉1 土用解説
1 褐色 無土粒子・ローム粒子少量
2 暗褐色 無土粒子少量、ローム粒子微量
3 暗褐色 無土粒子少量、無土小ブロック微量
4 暗赤褐色 無土粒子多量、無土小ブロック微量
5 暗褐色 無土粒子少量、ローム粒子微量
6 褐色 無土粒子・ローム粒子少量

覆土 4層からなる。耕作によるトレンチャーの搅乱を受けているが、自然堆積と思われる。

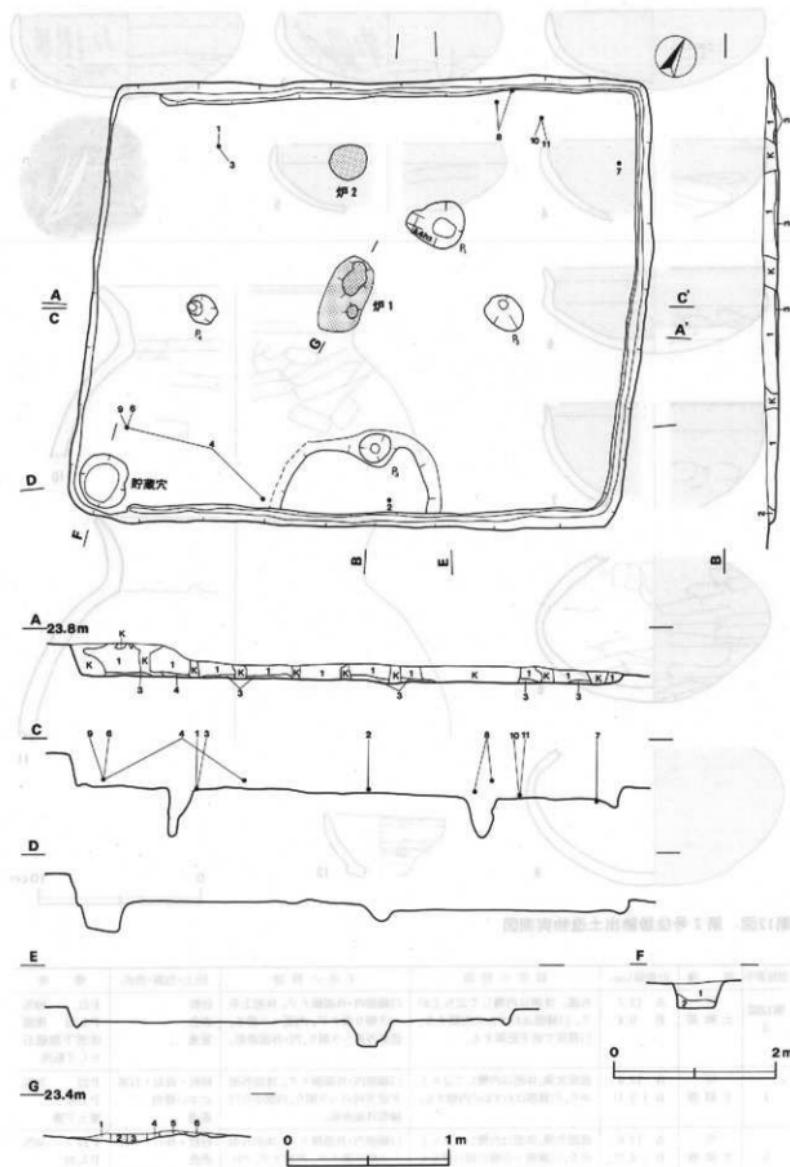
土層解説
1 暗褐色 ローム粒子少量、無土粒子・炭化粒子極少量
2 暗褐色 ローム粒子多量
3 褐色 ローム粒子多量
4 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量

遺物 本跡からは図示したものの他に、土器器の壺・碗類片83点、壺片3点、甕片84点が出土している。第12図3・7の壺は床面から出土している。1は北西コーナーの覆土から、8・9の甕はそれぞれ北壁際、西壁際の覆土上層から出土している。

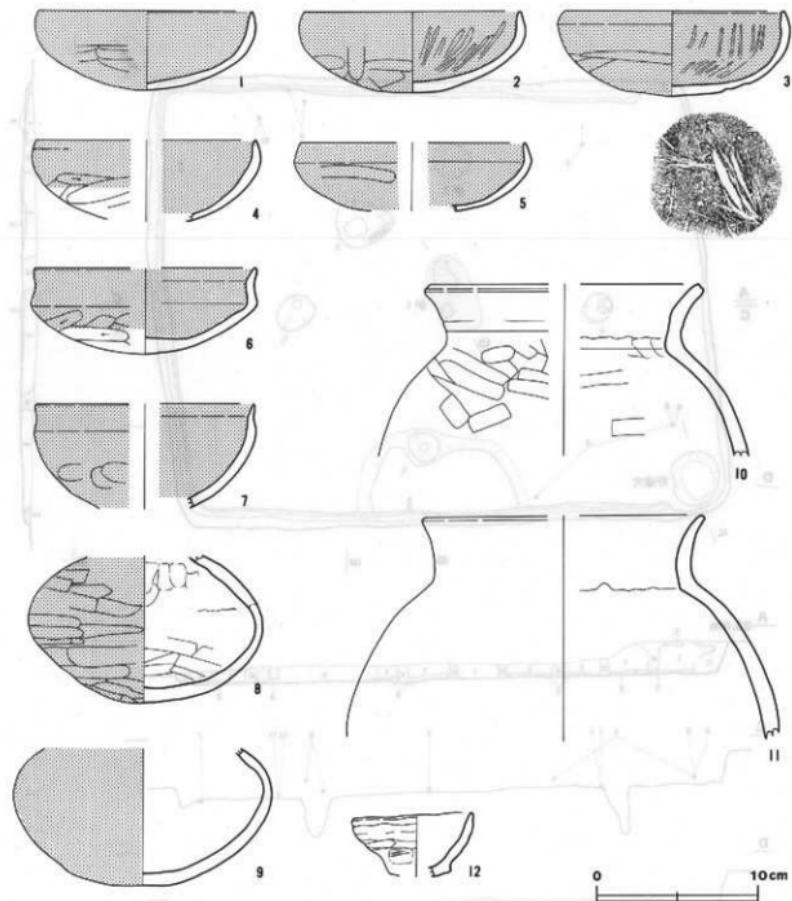
所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。住居跡形態は2本柱の長方形で、遺物もミニチュア土器が出土しており、他の住居跡とは異なった様相を呈している。

第2号住居跡出土遺物概観表

記載番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	壺 土器器	A 13.1 B 5.0	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。内・外面の剥離が著しい。	砂粒・長石・小礫 赤色 普通	P19 100% P132 北西コーナー覆土
		A 13.6 B 5.0	丸底。体部は内凹気味に立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラ磨き後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母 赤色 普通	P20 90% P132 覆土下層



第11図 第2号住居跡実測図



第12図 第2号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 3	环 土師器	A 13.7 B 5.4	丸底。体部は内脅して立ち上がり。口縁部はわずかに内傾する。口唇部で若干肥厚する。	口縁部内・外縫横ナデ。体部上半ヘラ削り後ナデ。内面ヘラ磨き。底部外縫ヘラ削り。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P21 80% P L32 底面 体部下端砥石として転用
4	环 土師器	A 13.6 B (5.1)	底部欠損。体部は内脅して立ち上がり。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外縫横ナデ。体部外縫不定方向のヘラ削り。内面から口縫部外縫赤彩。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P22 70% P L32 覆土下層
5	环 土師器	A 14.0 B (4.2)	底部欠損。体部は内脅して立ち上がり。口縁部との境に斜い梗をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外縫横ナデ。体部外縫ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・小球 赤色 普通	P24 30% P L32 覆土上層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
12図 6	壺 土師器	A [13.6] B 5.4	丸底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部との境に模をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底外面へラ削り。内面から体部外面上半彫。	砂粒・長石 發色 普通	P23 50% P132 覆土上層
		A [13.8] B (6.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彫して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部はうちさぎ状である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	石英・雲母 赤色 普通	P25 5% 床面
8	壺 土師器	B (9.9)	口縁部欠損。丸底の底部から内彫して立ち上がり、体部中央に最大径をもつつられた球形状である。	体部外側上半ナデ。体部上面指彫痕。体部外側下半から底部へラ削り。体部内面ナデ。外側赤彩。	砂粒・長石・石英 赤色 普通	P27 70% P133 覆土上層
		B (8.5)	底部から体部の破片。丸底の底部から内彫して立ち上がり、体部中央に最大径をもつつられた球形状である。	体部外側ナデ。外側赤彩。	砂粒・石英 外側赤色 内面黒色 普通	P26 65% P132 覆土上層
10	壺 土師器	A [17.4] B (10.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彫して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り。体部内面へナデ。	砂粒・長石 にじむ黄褐色 普通	P28 10% 覆土下層 外側焼付着
		A [17.6] B (13.6)	体部から口縁部の破片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 明黄褐色 普通	P29 5% 覆土下層 外側焼付着
12	手造土器 土師器	A 7.5	底部から口縁部の破片。突出した底部から内彫気味に立ち上がる。	外側ナデ。内面不定方向の粗いハケナデ。	砂粒 にじむ橙色 普通	P30 5% P132 覆土上層
		B (4.1)				
		C [3.4]				

第3号住居跡（第13図）

位置 調査区の北部、B368区。

規模と平面形 一辺が8.00mの方形である。

主軸方向 N-22°-W

壁 壁高16~49cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南東壁下の一部を除き壁下を巡っている。上幅10~20cm、深さ4~10cmで、断面は「U」字形である。

床 ほぼ平坦である。南東壁寄り中央部には、長径2.45m、短径1.40mの馬の背状の僅かな高まりがみられ、出入り口施設に伴うものと思われる。踏み締めた部分は見られない。

間仕切溝 4条(a~d)。P₂・P₃・P₄に向かって北東壁から1条(a)、西壁から2条(b・c)及び北西壁から1条(d)、それぞれ中央に向かって延びている。上幅16~30cm、深さ10~30cmで、断面は「U」字形である。

ピット 6か所(P₁~P₆)。P₁~P₄は径31~46cm、深さ81~87cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は深さ20cmと浅く、補助柱穴と思われる。P₆は性格不明である。

貯蔵穴 南東壁寄り中央部の馬の背状の高まりの内側に位置する。一辺65cmの方形で、深さ45cm、断面は「U」字形である。

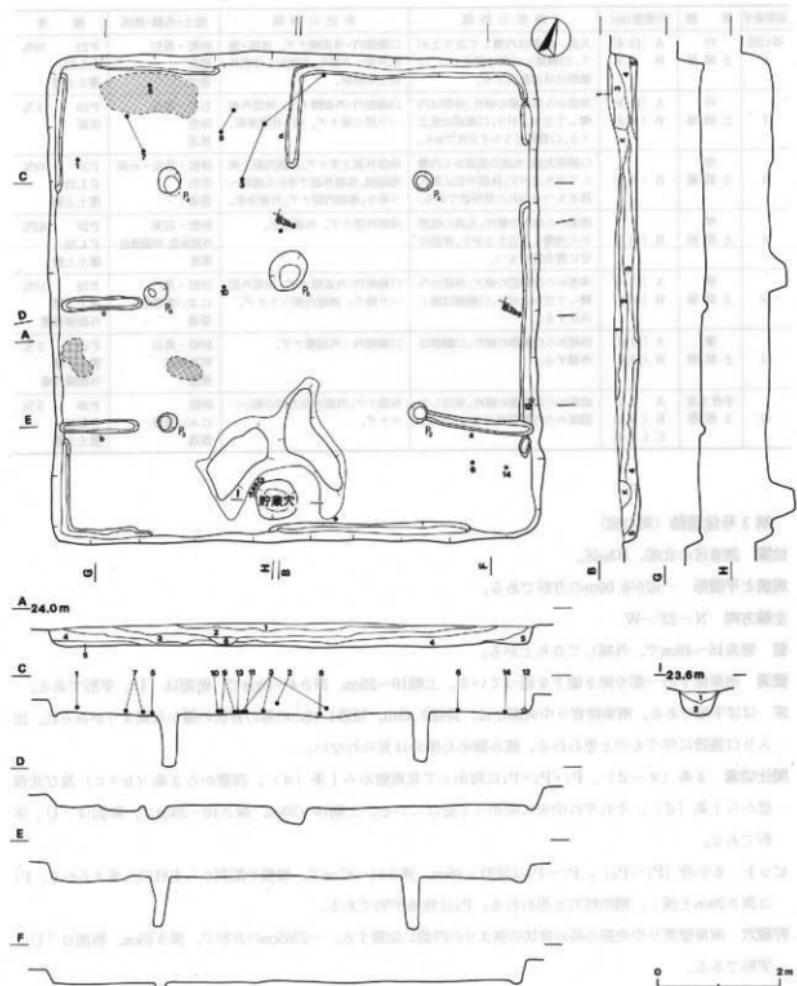
貯蔵穴土層解説

- 1 海色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 2 海色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量

覆土 6層からなる。自然堆積土層で、壁際の床面上には燒土塊が見られる。

土層解説

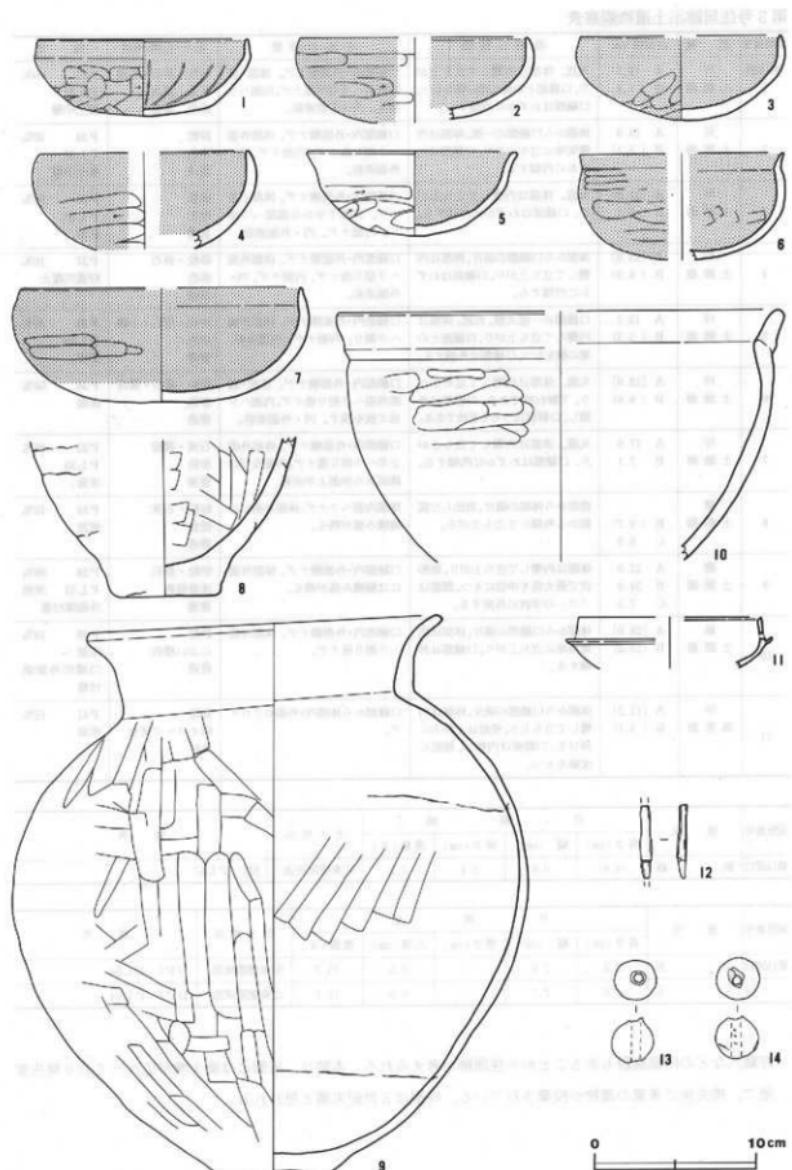
- 1 黒暗褐色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量



第13図 第3号住居跡実測図

遺物 遺物は全体的に北西コーナーの周辺から多く出土している。第14図3・5~7の土師器壺、8~10の土師器壺・鉢、11の須恵器壺は床面からの出土である。11の須恵器壺のすぐ隣からは13の土玉が、北東壁際からは12の鐵鏃、14の土玉が出土している。図示したものの他に土師器壺片56点、土師器壺片407点、須恵器壺片6点が出土している。

所見 炉は確認することはできなかったが、通常の住居跡と同様に一定の掘り込みがあり、間仕切溝、柱穴、



第14図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

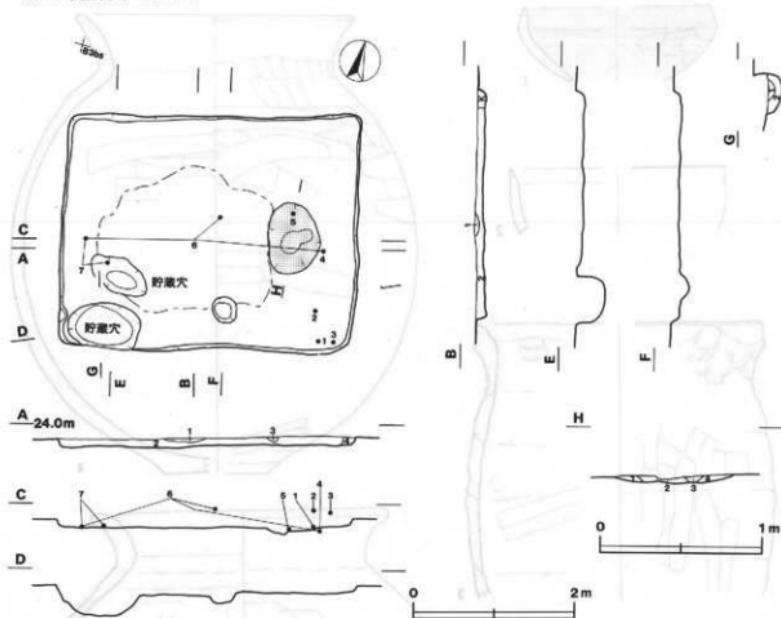
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	坏土師器	A 13.1 B 4.8	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部はわざかに内傾する。	口縁部内・外表面ナデ。体部・底部外側へラ削り後ナデ。内面へラ削き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・小礫 石英・雲母 赤色 普通	P31 70% P L33 覆土中層
2	坏土師器	A 14.0 B (5.1)	体部から口縁部の一帯。体部は内側に立ち上がり、口縁部はわざかに内傾する。	口縁部内・外表面ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P34 30% P L33 覆土中層
3	坏土師器	A [12.6] B 5.5	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわざかに内傾する。	口縁部内・外表面ナデ。体部上半ナデ。体部下半から底部へラ削り。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P35 30% P L33 床面
4	坏土師器	A [13.0] B (6.0)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわざかに内傾する。	口縁部内・外表面ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 赤色 普通	P37 10% 貯藏穴覆土
5	坏土師器	A 13.2 B (5.3)	口縁部の一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外表面ナデ。体部外側へラ削り。内面ナデ。内面赤彩。	砂粒・長石・小礫 赤色 普通	P32 30% P L33 床面
6	坏土師器	A [12.6] B (6.6)	丸底。体部は内側して立ち上がり、下部が削りである。口縁部は外傾し、口縁部はうろこ状である。	口縁部内・外表面ナデ。体部・底部外側へラ削り後ナデ。内面へラ削て底を残す。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤色 普通	P36 50% 床面
7	坏土師器	A 17.6 B 7.1	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわざかに内傾する。	口縁部内・外表面ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。内面及び口縁部から体部上半赤彩。	石英・雲母 赤色 普通	P33 50% P L33 床面
8	壞土師器	B (9.7) C 6.9	底部から体部の破片。突出した底部から外傾して立ち上がる。	底部内面へナデ。体部外側には輪郭み痕が残る。	砂粒・石英 橙色 普通	P40 10% 床面
9	壞土師器	A 22.0 B 34.9 C 7.3	体部は内側して立ち上がり、球形状で最大径を中位にもつ。頸部は「コ」の字形に外反する。	口縁部内・外表面ナデ。体部外側には輪郭み痕が残る。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P38 90% P L33 床面 外面保付着
10	鉢土師器	A [28.0] B (15.5)	体部から口縁部の破片。体部は内側に立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外表面ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P39 10% 床面 口縁部外面焼付着
11	坏頭器	A [11.2] B (3.1)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上り、受部は上方方に伸びる。口縁部は内傾し、端部に沈線をもつ。	口縁部から体部内・外側ロクロナデ。	砂粒 暗オリーブ灰色 良好	P41 15% 床面

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第14図12	鉄鑿	(4.6)	0.8	0.4	2.2	北東壁際床面	M1 P L57

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第14図13	土玉	2.8	2.6	—	0.5	15.3	南東壁際床面	DPI PL54
14	土玉	2.6	2.7	—	0.6	15.7	北東壁際床面	DP2 PL54

貯藏穴などの内部施設もあることから住居跡と考えられる。本跡は、床面には焼土塊が広がっており焼失家屋で、焼失後に多量の遺物が投棄されている。時期は5世紀末葉と思われる。

第4号住居跡（第15図）



第15図 第4号住居跡実測図

位置 調査区の北部、B3ss区。

規模と平面形 長軸3.67m、短軸2.88mの長方形である。

主軸方向 N-77°-E

壁 壁高11~22cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。南西部には長径80cm、短径43cm、高さ5cmの楕円形の高まりがみられる。かなり硬化しているが、性格は不明である。

ピット 1か所。径30cmの円形、深さ10cmで、位置と形状から出入り口施設のピットと思われる。

貯蔵穴 北西コーナーに付設され、長径90cm、短径60cmの楕円形で、深さ35cm、断面は擂鉢形である。

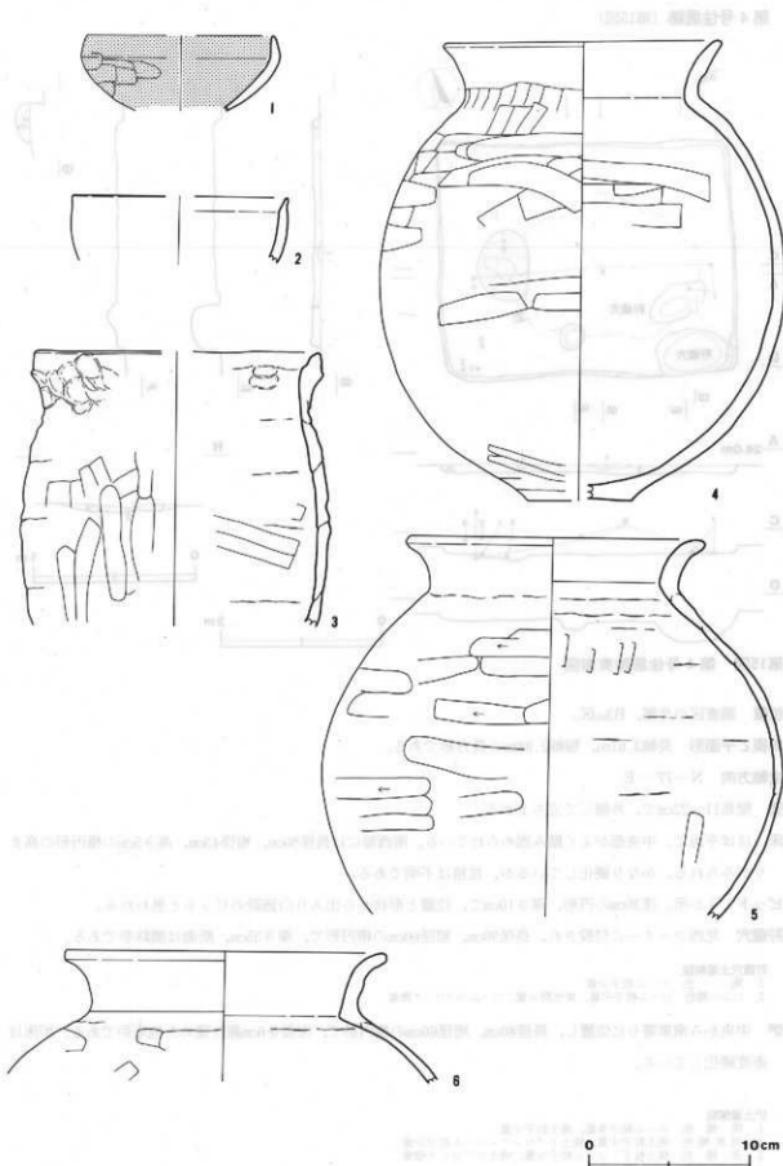
貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|---|-------|---|--------------------------|
| 1 | 褐 | 色 | ローム粒子少量 |
| 2 | にぶい褐色 | | ローム粒子中量、炭化物少量、ローム小ブロック微量 |

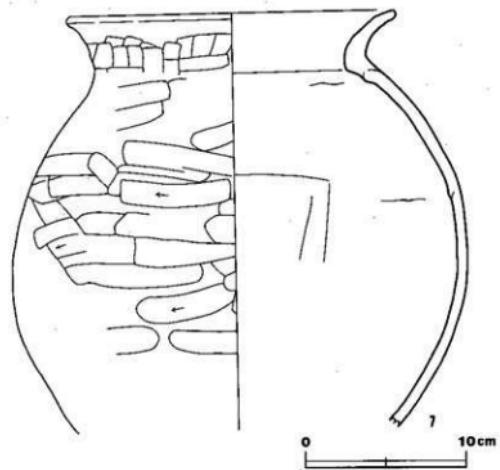
炉 中央から南東寄りに位置し、長径80cm、短径60cmの楕円形で、床面を6cm掘り窪めた地床炉である。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | | |
|---|-----|----|----|------------------------|
| 1 | 明 | 褐 | 色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量 |
| 2 | 明 | 赤 | 褐色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 | 赤 | 褐 | 色 | 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量 |
| 4 | にぶい | 褐色 | | ローム粒子多量 |



第16図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第17図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表

部品番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	壺 土師器	A [13.1] B (4.8)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内側する。	口縁部内・外側横ナギ。体部外面ヘラ削り後ナギ。内面ナギ。内・外側赤色。	砂粒・石英・雲母 赤色 普通	P42 5% 床面
2	壺 土師器	A [13.4] B (4.1)	口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立し、うちそが状である。口縁部内面に焼をもつ。	口縁部内・外側横ナギ。体部外面ヘラ削り後ナギ。内面ナギ。	砂粒 赤色 普通	P43 10% 覆土中層
3	甕 土師器	A [17.8] B (17.1)	体部から口縁部の一部。体部はほぼ直立し、口縁部でわずかに外傾する。	口縁部内・外側横押圧。体部外ヘラ削り。体部内面ヘラナギ。	砂粒 橙色 普通	P44 30% 床面
4	甕 土師器	A 17.5 B 28.7 C [6.6]	平底。体部は球形状で、最大径を中位にもつ。頭部は外反する。	口縁部内・外側横ナギ。頭部外面ヘラ削り。体部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナギ。	砂粒・英石 明褐色 普通	P45 60% P L33 床面
5	甕 土師器	A 18.8 B (23.5)	底部欠損。体部は球形状で、最大径を中位にもつ。頭部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外側横ナギ。体部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナギ。	砂粒・長石 橙色 普通	P46 60% P L33 床面
6	甕 土師器	A 19.9 B (8.1)	体部から口縁部の破片。頭部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外側横ナギ。体部外面ヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P48 10% P L33 床面
第17図 7	甕 土師器	A 20.6 B (26.0)	底部欠損。体部は球形状で、最大径を中位にもつ。頭部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外側横ナギ。頭部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナギ。	砂粒・英石・石英 橙色 普通	P47 40% P L34 床面

覆土 4層からなり、土層2の褐色土が主体となる。

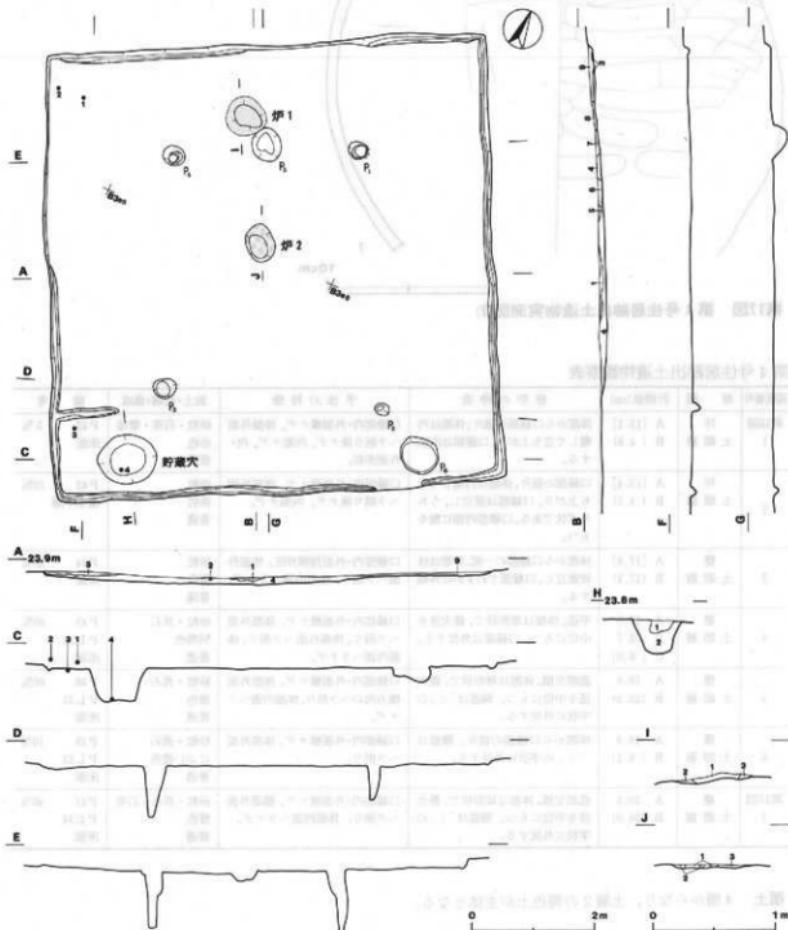
土層解説

- 1 希 色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 希 色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 3 希 色 ローム粒子微量
- 4 にぶい褐色 ローム粒子中量、燒土粒子微量

遺物 本跡からは、図示した遺物の他に土師器壺の口縁部片8点、体部片3点、土師器鉢の口縁部片8点、体部片5点、土師器甕の口縁部片7点、体部片616点、底部片5点が出土しており、特に甕の割合が多い。第16・17図の土師器壺、4・5・6・7の土師器甕は床面直上からの出土である。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後葉と考えられる。

第5号住居跡（第18図）



第18図 第5号住居跡実測図

位置 調査区の北部、B3e5区。

規模と平面形 長軸7.38m、短軸7.24mの方形である。

主軸方向 N-28°-W

壁 壁高4~15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北西壁下の一部を除いてほぼ全周している。上幅7~10cm、深さ3~5cmで、断面は「U」字形である。

床 平坦である。北東壁・南西壁際の床面はよく残っているが、中心部の遺存状況は悪い。

間仕切溝 P₃に向かって南西壁から1条(a)延びている。上幅17cm、深さ12cm、断面は「U」字形である。

ピット 6か所。(P₁~P₆)。P₁~P₄は径22~32cm、深さ55~105cmで、規模や配列からみて主柱穴と考えられる。P₅・P₆は性格不明である。

貯蔵穴 南西コーナー寄りに位置し、長径96cm、短径82cmの梢円形で、深さ54cmである。平坦な底面から外傾して立ち上がり、断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1 明褐色 | 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |

炉 2か所。炉1は中央部北西寄りに位置し、径約65cmの円形である。炉2は中央部に位置し、長径65cm、短径47cmの梢円形である。いずれも地床炉で、炉床は赤変している程度である。

炉1土層解説

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 |

炉2土層解説

- | | |
|--------|-------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土小ブロック多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土小ブロック微量 |

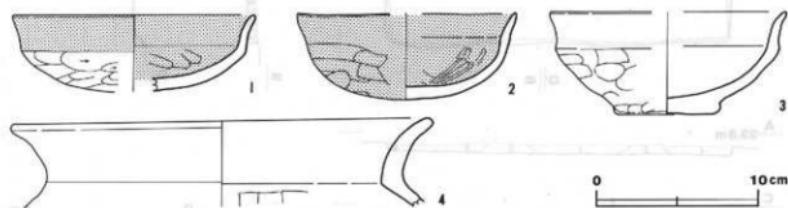
覆土 9層からなる。土層4が覆土の主体となっており、ローム粒子を多量に含む人為堆積土層である。

土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------------|---------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化粒子多量、ローム粒子中量、焼土粒子少量 | 5 明褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量 | 6 にぼい褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 にぼい褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 4 明褐色 | ローム粒子多量 | 8 明褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| | | 9 にぼい褐色 | 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |

遺物 本跡からの出土遺物は少なく、土師器壺・碗類の口縁部19点、体部片41点、壺の体部18点、底部片1点である。第19図1・2の土師器壺は西コーナーの覆土から、3の土師器壺は南コーナー南西壁際の床面から、4の土師器壺は貯蔵穴の覆土上層と底面近くからそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀末葉と考えられる。



第19図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
19回 1	壺 土師器	A 15.1 B 4.9	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外側ヘラ削り。内面ヘラ磨き。内面から口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤色 普通	P 49 P L 34 床面
2	壺 土師器	A [13.6] B 5.5	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部で外傾する。口唇部はうしそぎ状で、内面に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナギ。体部外側ヘラ削り。内面ヘラ磨き。内面から口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤色、底部橙色 普通	P 50 覆土中層
3	壺 土師器	A [14.8] B 6.4 C 6.6	平底で突出した底部。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外側指壓押。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 51 P L 34 床面
4	壺 土師器	A 26.4 B (5.5)	口縁部のみの残存。頸部は外傾し、口縁部で外反する。	口縁部内・外面横ナギ。体部内面ヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P 52 10% 床面

第6号住居跡（第20図）

位置 調査区の北部、B3oz区。

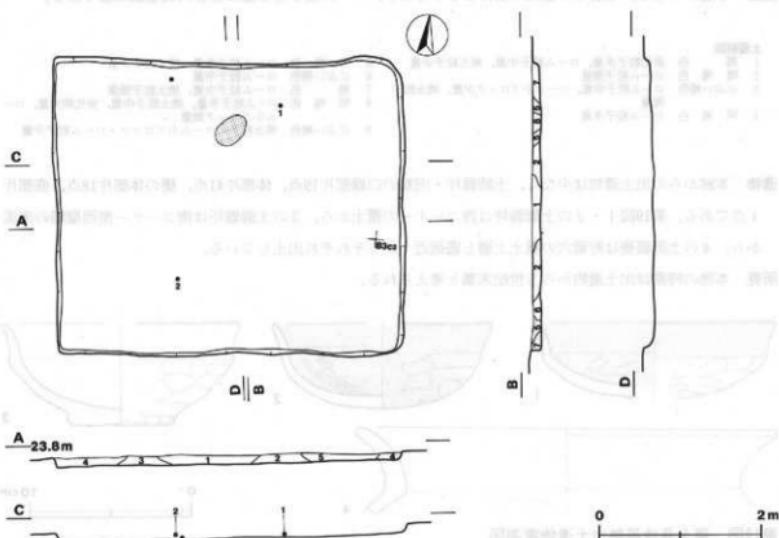
規模と平面形 長軸4.30m、短軸3.55mの長方形である。

主軸方向 N-8°-W

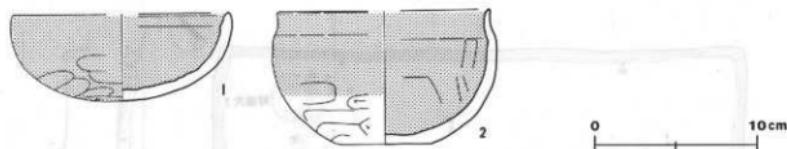
壁 壁高6~10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 木根による攪乱のため遺存状態が悪い。

炉 中央部の北壁寄りに見られる。長径45cm、短径25cmの楕円形の地床炉であるが、攪乱のため一部分を掘り込まれている。



第20図 第6号住居跡実測図



第21図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 横	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・色調・焼成	備 考
第21図 1	坏 土 器	A [13.4] B 5.5	丸底。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部はほぼ直立し、口縁部内面に棱をもつ。	口縁部内・外側横ナギ。体部外側 砂粒・長石 赤色 普通	P53 85% P L34 覆土	
	坏 土 器	A [13.1] B 8.3 C 5.8	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外側横ナギ。体部外側 上半へナギ削り後ナギ、下半へナギ削り。 内面へラナギ、底部外側へナギ削り。 内面から体部外側中位赤色。	砂粒・石英 赤色 普通	P54 70% P L34 覆土

覆土 8層からなる。暗褐色土と褐色土を主体とする人為堆積土層である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
3 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム中ブロック微量	7 暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
4 暗褐色	ローム粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・ローム大ブロック微量	8 暗褐色	ローム粒子多量、燒土粒子中量、燒土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物 本跡からの出土遺物は少なく、土師器坏・焼類の口縁部片4点、体部片26点、甕の口縁部片1点である。

すべて覆土中からの出土で、図示できたのは第21図1・2の土師器坏・甕である。1は北壁寄り、2は中央部から出土している。

所見 床の遺存状態が悪かったこともあり、柱穴は確認されなかったが、通常の住居跡と同様に一定の掘り込みのある方形の竪穴であり、住居跡と考えられる。時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。

第7号住居跡（第22図）

位置 調査区中央部、C3a5区。

規模と平面形 一辺が8.75mの方形である。

主軸方向 N-52°-E

壁 壁高12~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

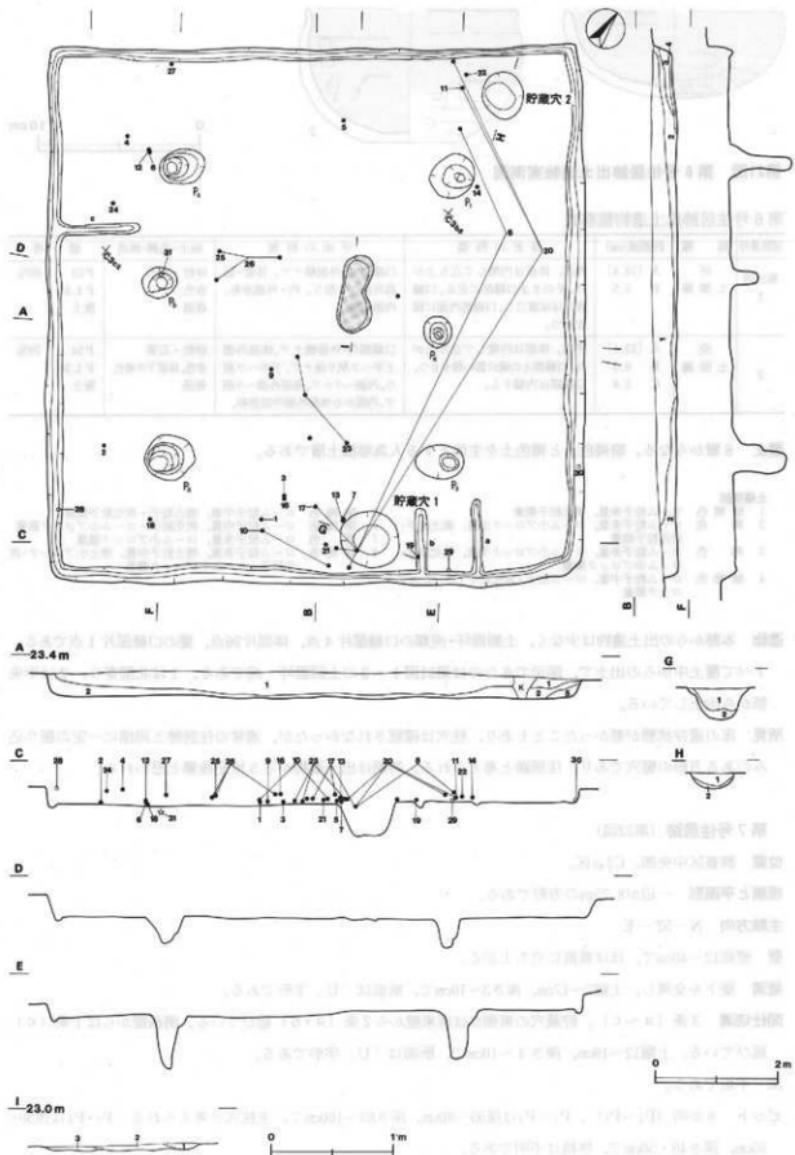
壁溝 壁下を周全し、上幅7~17cm、深さ3~10cmで、断面は「U」字形である。

間仕切溝 3条(a-c)。貯蔵穴の東側には南東壁から2条(a-b)延びている。南西壁からは1条(c)延びている。上幅12~19cm、深さ4~10cmで、断面は「U」字形である。

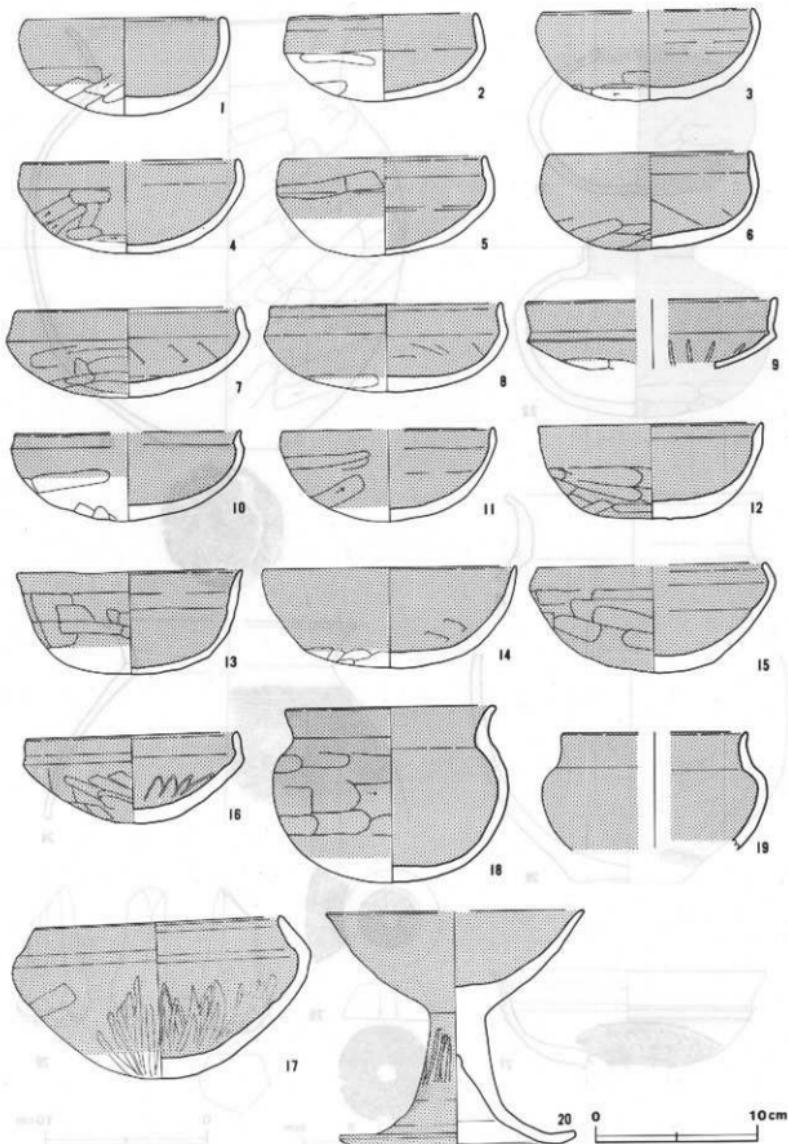
床 平坦である。

ピット 6か所(P1~P6)。P1~P4は径55~80cm、深さ85~100cmで、主柱穴と考えられる。P5~P6は径50~

55cm、深さ40~50cmで、性格は不明である。

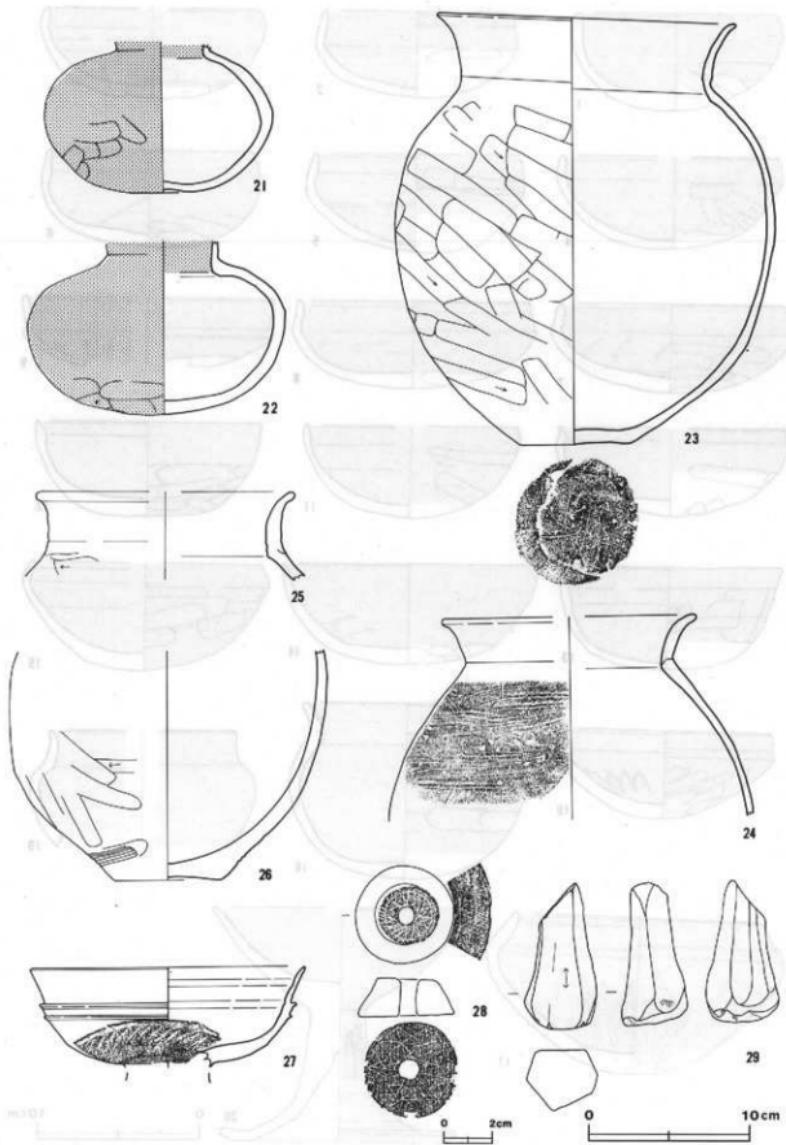


第22図 第7号住居跡実測図



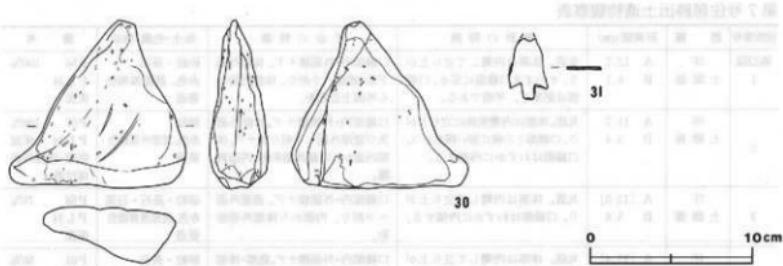
第23図 第7号住居跡出土遺物実測図(1)

1:30縮尺実測図(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20)



第24図 第7号住居跡出土遺物実測図(2)

（昭和25年秋土山城遺跡調査報告書）第24図



第25図 第7号住跡出土遺物実測図(3)

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南東壁の中央部から東寄りに間仕切溝と並ぶように位置し、径94cmの円形で、深さ53cmである。断面は逆台形で、平坦な底面から外傾して立ち上がる。貯蔵穴2は北西壁の北コーナー寄りに位置し、径70cmの円形で、壠鉢形に掘り込まれている。

貯蔵穴1 土層解説

1 桜色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒 子微量

2 桜色 炭化粒子・ローム粒子微量

貯蔵穴2 土層解説

1 桜色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

2 桜色 ローム粒子多量

炉 中央から東寄りにあり、貯蔵穴1と同一線上にある。長径145cm、短径45cmの長楕円形で、床面を10cm掘り窪めた地床炉である。形状は瓢箪形をしており、2か所であった可能性もある。炉床は火熱を良く受けており、赤変硬化している。

炉土層解説

1 桜色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

2 桜色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量

3 桜色 焼土粒子・ローム粒子微量

覆土 5層からなる。レンズ状に堆積する暗褐色土の下に多量の土器を含む褐色土が広く覆う。

土層解説

1 暗桜色 ローム粒子少量

2 桜色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

3 桜色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック微量

4 桜色 ローム粒子多量

5 桜色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 出土状況を見ると、南東壁際の床面から覆土上層にかけて多く出土している。第23図8・20、7・13のように重なって出土している状況から投棄された遺物がほとんどである。床面直上の遺物は、第23図1・2・3・5・6・7の土師器壺、18の碗である。第23・24図8の土師器壺、20の土師器高壺、22の土師器壺は貯蔵穴から斜位の状態で出土している。27の須恵器無蓋高壺は西コーナー付近の南西壁際から、28の紡錘車は南コーナー付近の南西壁際から、29・30の砾石は南東壁際からそれぞれ出土している。P₃からは鐵鎌が出土している。図示したものの他に、土師器壺・碗類の口縁部片92点、体部片316点、底部片5点、土師器壺の口縁部片9点、体部片330点、底部片9点、土師器鉢の口縁部片2点が出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀末葉と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏土師器	A 12.7 B 6.1	丸底。体部は内側して立ち上がり。そのまま口縁部に至る。口唇部は肥厚し、平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位・底部へラ削り。体部内面から外面上位赤彩。	砂粒・長石 赤色、底部黄褐色 普通	P56 100% P L34 床面
		A 11.7 B 5.4	丸底。体部は内側氣味に立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位及び底部外面へラ削り後ナデ。体部内面から口縁部外面赤彩。内面削離。	砂粒 赤色、底部外面橙色 普通	P57 100% P L34 床面 底部・体部外面 焼付着
3	坏土師器	A [13.0] B 5.6	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面へラ削り。内面から体部外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤色、底部黄褐色 普通	P58 70% P L34 床面
		A [13.4] B 5.7	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部・体部外面へラ削り。体部上半はへラ削り後ナデ。内面から体部外面赤彩。	砂粒・長石 赤色、底部明褐色 普通	P61 50% P L34 覆土上層
5	坏土師器	A 12.6 B 6.1	丸底。体部は内側して立ち上がり。口縁部はわずかに内傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部上位へラ削り後ナデ。内面から口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤色、外面黄褐色 普通	P65 80% P L34 床面
		A 12.8 B 6.0	丸底。体部は内側して立ち上がり。口縁部はわずかに内傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面へラ削り。内面から体部外面赤彩。	砂粒・長石 赤色、底部橙色 普通	P66 80% P L34 床面
7	坏土師器	A 14.2 B 5.5	丸底。体部は内側して立ち上がり。口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位へラ削り後ナデ。底部外面へラ削り。内面へラあて底を残す。内面から体部外面赤彩。	長石・石英・雲母 赤色、底部褐色 普通	P69 95% P L34 床面
		A 14.4 B 5.4	丸底。体部は内側して立ち上がり。口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面上位へラ削り。内面へラあて底を残す。内面から体部外面赤彩。	長石・石英・雲母 赤色、にぶい褐色 普通	P62 70% P L34 烧付着 灰塵穴埋土
9	坏土師器	A [15.6] B (4.3)	口縁部から体部上半の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部で直立し、稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位へラ削り、内面へラ磨き。内面から体部外面赤彩。	長石 赤色 良好	P64 20% 覆土下層 焼付着
		A [14.1] B 5.5	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。口唇部はうちそぎ状で、内面に稜をもつ。	底部から体部外面へラ削り後ナデ。内面及び口縁部外面赤彩。赤彩の剥離痕。	長石・スコリア 内面赤色、外面褐色 普通	P63 50% P L34 覆土下層
11	坏土師器	A 13.0 B 5.7	丸底。体部は内側して立ち上がり、丸みをもっている。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・長石 赤色 普通	P59 80% P L34 覆土下層 外因焼付着
		A 14.1 B 5.8	平底氣味の底部から内側して立ち上がり。体部は丸みをもっている。口唇部はうちそぎ状で、内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部下半・底面外面へラ削り。内面から口縁部外面赤彩。	砂粒・長石 赤色、底部橙色 普通	P67 100% P L34 柱穴覆土
13	坏土師器	A 14.0 B 6.5	平底氣味の底部から外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。器壁は薄い。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位へラ削り後ナデ。内面から体部外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤色、底部外面橙色 普通	P68 60% P L34 覆土下層
		A 15.8 B 6.3	平底氣味の底部から内側して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。底部は肥厚している。	口縁部内・外面横ナデ。底部へラ削り。内面へラあて底を残す。内面から体部外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤色、底部外面褐色 普通	P71 95% P L35 覆土下層
15	坏土師器	A [14.2] B 6.7	丸底。底部はやや厚く、体部は内傾して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位へラ削り後ナデ。体部内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P69 70% P L34 覆土下層
		A 13.2 B 5.5	尖り氣味の底部から体部は外傾して立ち上がる。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位へラ削り後ナデ。内面へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石 明褐色 良好	P70 100% P L34 覆土上層 外因焼付着
17	坏土師器	A 15.4 B 9.7	尖り氣味の底部から体部は外傾して立ち上がり、口縁部で内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面・外面上位へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石 にぶい褐色 良好	P72 80% P L35 烧付着 覆土中・上層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 18	焼 土 師 器	A 13.1 B 10.9	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外側横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 赤色 良好	P73 95% P L35 床面 外面保付着
19	焼 土 師 器	A 11.3 B (7.3)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外側横ナデ。内・外面赤彩	砂粒 赤色 普通	P74 10% 覆土下層
20	高 坏 土 師 器	A [15.9] B 14.5 C 14.8 E 8.1	坏部の一部欠損。脚部は下位で「ハ」の字状に大きく開き、端部は反る。脚部は内側して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部内・外側横ナデ。坏部内・外側ナデ。脚部上位外側ヘラ磨き、下位ヘラナデ。端部及び内面横ナデ。脚部内面を除き赤彩。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P75 70% P L35 貯藏穴覆土
第24図 21	壇 土 師 器	B (9.4)	口縁部欠損。丸底の底部から内側して立ち上がり、体部中位に最大径をもつつぶれ球形である。	体部外面上半ナデ。体部外下面下半ヘラ削り。口縁部内・体部外側赤彩。	砂粒 赤色 普通	P76 85% P L35 覆土中層
22	壇 土 師 器	B (10.8)	口縁部欠損。丸底の底部から内側して立ち上がり。体部上位に最大径をもつ。	体部下端外側ヘラ削り。口縁部内・体部外側赤彩。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P77 85% P L35 覆土中層
23	壇 土 師 器	A 18.7 B 27.0 C 7.0	平底。体部は卵形で、口縁部はほぼ直立し、口唇部で外反する。	口縁部内・外側横ナデ。体部外側斜位方向のヘラ削り。	砂粒・長石 において褐色 普通	P78 70% P L35 覆土上層
24	壇 土 師 器	A [15.8] B (12.6)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり。口縁部は外反し、「L」の字状をしている。	口縁部内・外側横ナデ。体部外側強いナデ。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P79 20% 覆土上層 外面保付着
25	壇 土 師 器	A [16.0] B (5.5)	口縁部の破片。口縁部はほぼ直立し口唇部で外反する。	口縁部内・外側横ナデ。	砂粒・石英 において褐色 普通	P80 10% 覆土中層 外面保付着
26	壇 土 師 器	B (14.2) C 6.6	底部から体部の破片。平底。体部は内側して立ち上がる。	体部外側ヘラ削り後ナデ。体部下端及び底部外側ヘラ磨き。	砂粒・石英 において褐色 普通	P81 25% 覆土中層
27	無蓋高坏 土 師 器	A 17.0 B (6.2)	脚部欠損。脚部三方透かし。坏部は内側して立ち上がり、口縁部との境に2本の凹線をもつ。口縁部は外反する。	2本の凹線の真下に6本1条の櫛指波状文を施す。	砂粒・長石 暗灰色 良好	P82 35% P L35 覆土中層 内面自然釉

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第24図28	筋 鉢 車	4.1	4.1	1.6	0.8	35.0	滑石	南コーナー覆土	Q3 P L56
29	磁 石	9.1	4.5	4.1	—	162.8	滑灰岩	東コーナー床面	Q4 P L56
第25図30	磁 石	10.4	11.1	3.6	—	309.2	滑母片岩	南東壁際床面	Q5 P L56

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第25図31	鐵 鉢	3.1	2.3	0.2	3.0	P.覆土	M2 P L57

第8号住居跡(第26図)

位置 調査区中央部, C3a1区。

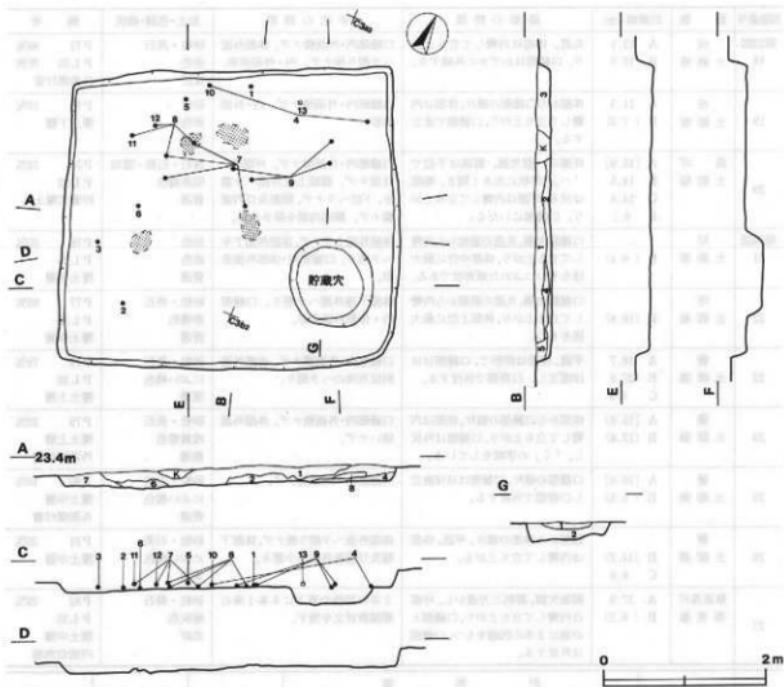
規模と平面形 長軸2.09m, 短軸1.85mのほぼ方形である。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高13~22cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦ではあるが、踏み締めた部分は見られない。

貯蔵穴 南東部に位置する。長軸112cm, 短軸103cmのほぼ方形で、深さ20cmである。平坦な底面から僅かに外傾して立ち上がる。床面積の割合からするとかなり大型の貯蔵穴である。



第26図 第8号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|---------------------|
| 1 淡褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 2 明褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |
|-------|------------------|-------|---------------------|

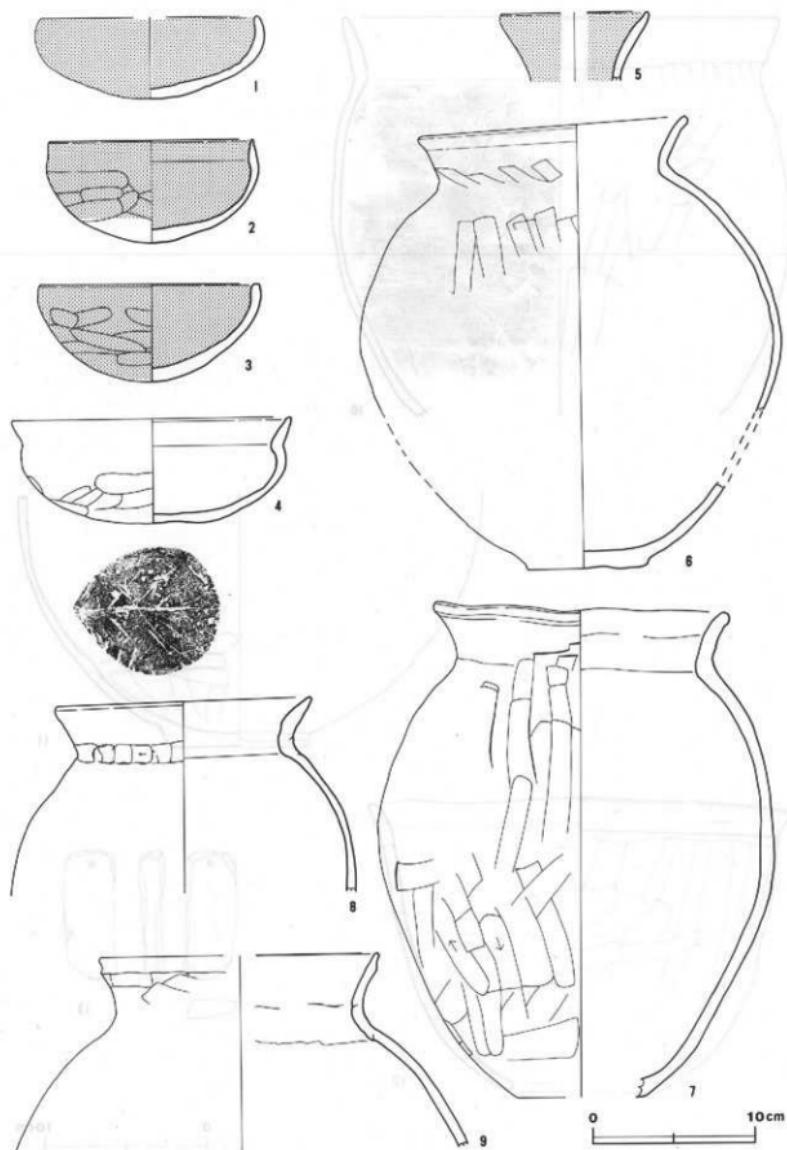
覆土 8層からなる。ロームブロック、焼土、炭化物を含む褐色土を主体とする人為堆積土層である。

土層解説

1 淡	褐色	焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 烧土粒子微量	5 淡	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 深	褐色	焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量	6 深	褐色	ローム粒子中量, 烧土粒子・炭化物微量
3 深	褐色	ローム粒子少量, 炭化物微量	7 深	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, 烧土粒子・炭化物微量
4 深	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量	8 暗	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

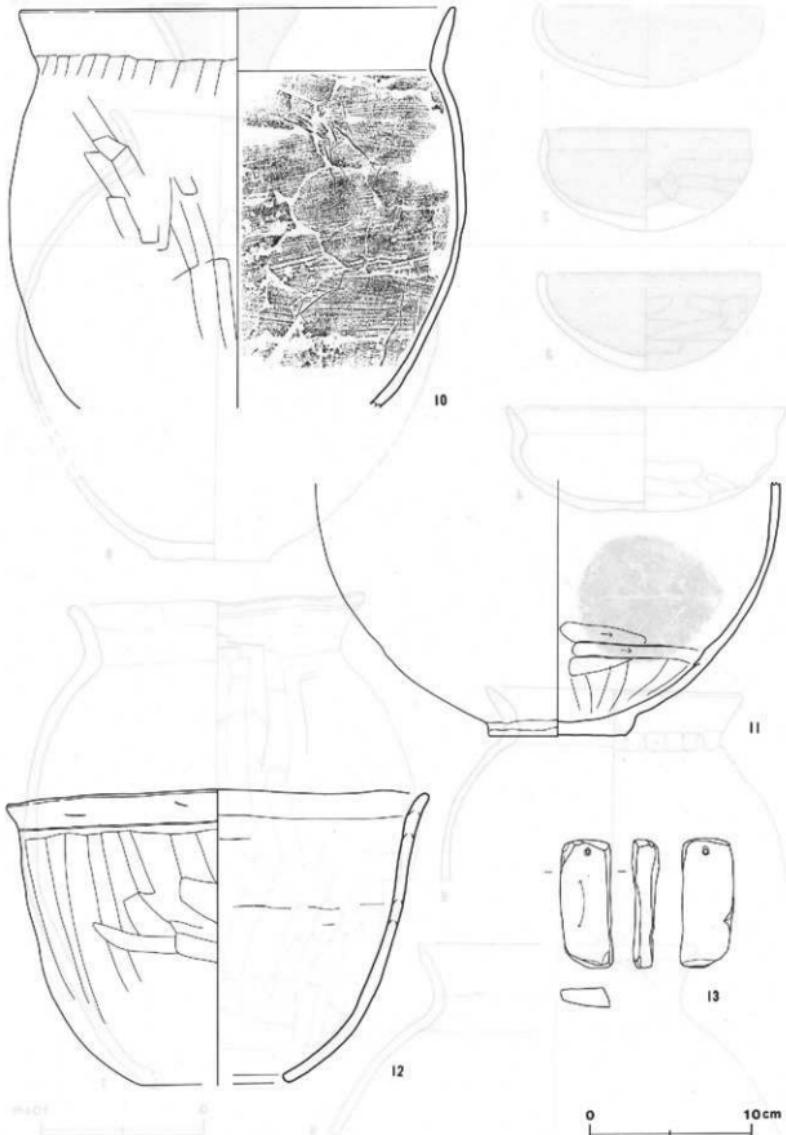
遺物 南西部及び北西部の床面に近い覆土最下層から遺物が出土しており、図示した遺物の他に、土師器壺の口縁部片25点、体部片128点、甕の口縁部片20点、体部片470点、底部片5点と甕が特に多い。ほとんどが埋没過程で投棄された遺物であると思われる。

所見 本跡は、床面積が狭いのに對し貯蔵穴が大型であり、床面が踏み締められた様子もなく、炉も持たない造構であることから住居というよりは、倉庫的役割の建物であった可能性も考えられる。覆土の堆積状態を見ると、ローム小ブロック・ローム粒子を含む層が堆積しており、床面直上には焼土塊が見られることから、焼失後人為的に埋め戻されたものと思われる。時期は出土遺物などから6世紀初頭から前葉と思われる。



第27図 第8号住居跡出土遺物実測図(1)

本図は第8号住居跡出土遺物実測図(1)である。



第28図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

（国崎家地蔵塚古墳群）

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴		胎土・色調・焼成	備考
				口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤影。	砂粒・長石・赤褐色 普通		
第27回 1	壺 土師器	A [13.4] B 5.0	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤影。	長石 赤褐色 普通	P85 P L35 覆土下層	40%
2	壺 土師器	A 12.8 B 6.4	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内側に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面から体部外面赤影。内・外面削離。	砂粒・長石 暗赤褐色 普通	P84 P L35 覆土下層	90%
3	壺 土師器	A 13.8 B 6.0	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部で直立する。口縁部は肥厚し、端部は平坦である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内・外面赤影。	砂粒・長石・石英 赤色、淡黃褐色 普通	P83 P L35 覆土下層	95%
4	壺 土師器	A 17.4 B 6.5	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部に棱をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。底部外面に木葉痕。	砂粒・石英 橙色 普通	P86 P L35 覆土下層	80%
5	壺 土師器	A 9.0 B (4.3)	口縁部のみの残存。口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面ナデ。内・外面赤影。	砂粒 明赤褐色 普通	P88 P L35 覆土上層	30%
6	甕 土師器	A 16.8 B [28.0] C 7.5	平底。体部は球形で、体部中位に最大径がある。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部から体部外面ヘラ削り。	砂粒 褐色 普通	P90 P L36 覆土上層	50%
7	甕 土師器	A 18.4 B 30.8 C [7.9]	底部欠損。体部は卵形で、体部中位に最大径がある。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部から体部外面ヘラ削り。	砂粒 にぼい橙色 普通	P89 P L35 床面	80%
8	甕 土師器	A 16.0 B (12.1)	体部上半から口縁部の破片、内側して立ち上がり、頸部は「く」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部に粘土を貼り付けた後ヘラ削り。	砂粒 にぼい橙色 良好	P83 P L36 床面	10%
9	甕 土師器	A [17.4] B (12.1)	体部上半から口縁部の破片、内側して立ち上がり、頸部は「く」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部ヘラ削離。	砂粒・長石 橙色、普通	P94 P L36 覆土下層	15%
第28回 10	甕 土師器	A 27.2 B (24.8)	底部から体部下端欠損。体部は卵形で、体部中位に最大径がある。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部から体部外面ヘラ削り。体部内面強いナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P91 P L36 覆土下層	15%
11	甕 土師器	B (15.9) C 8.4	平底で、底部は突出する。体部は内側して立ち上がる。	体部内面下端ヘラ削離。	長石・石英 赤褐色 普通	P95 P L36 覆土上層	40%
12	瓶 土師器	A 26.3 B 17.9 C 9.2	単孔式。体部は外傾して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P96 P L36 覆土中層 口縁部側付着	30%

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第28回13	砥 石	8.0	3.3	1.4	—	44.4	礫灰岩	北東コーナー床面	Q6 P L56

第9号住居跡(第29回)

位置 調査区中央部、C2a5区。

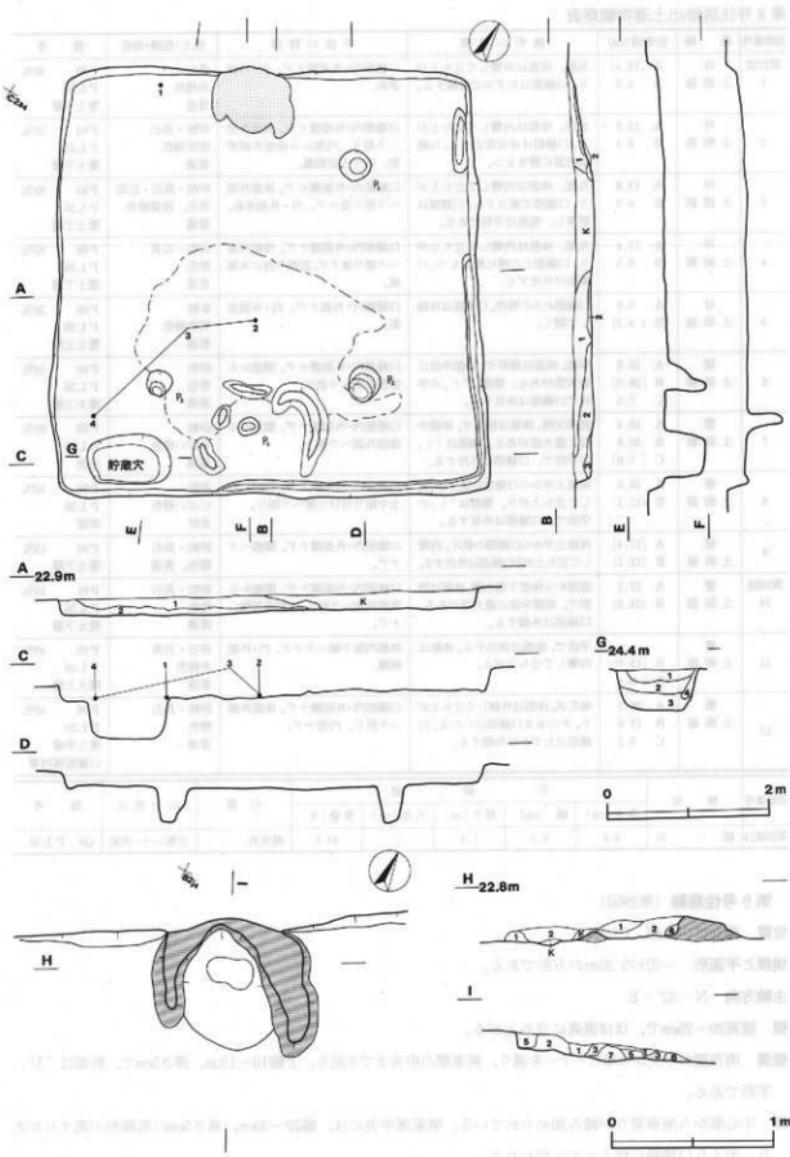
規模と平面形 一辺が5.25mの方形である。

主軸方向 N-32°-E

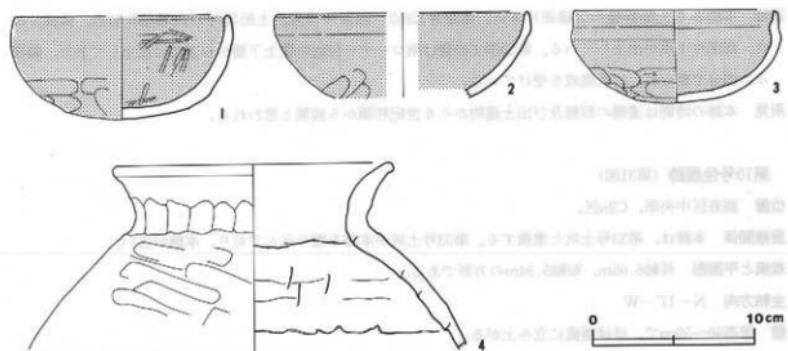
壁 壁高20~25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南西壁の中央から東コーナーを通り、南東壁の中央までを巡る。上幅10~12cm、深さ5cmで、断面は「U」字形である。

床 中心部から南東寄りが踏み固められている。南東部中央には、幅20~30cm、高さ5cmの馬蹄形の高まりがあり、出入り口施設に伴うものと思われる。



第29図 第9号住居跡実測図



第30図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	壺 土器	A [13.3] B 6.4	丸底。部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。器壁は厚い。	口縁部内・外側横ナデ。部体外側へラ削り後ナデ。部体内側へラ削り。内・外側赤彩。	長石 赤褐色 普通	P97 80% P L35 床面
	壺 土器	A [15.9] B (5.2)	体部から口縁部の破片。部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外側横ナデ。部体外側へラ削り後ナデ。内・外側赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P99 20% P L36 床面
2	壺 土器	A 12.5 B 5.5	丸底。部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内側に瘤をもつ。	口縁部内・外側横ナデ。部体外側へラ削り後ナデ。内・外側赤彩。	砂粒 赤色 普通	P98 60% P L36 覆土下層
	壺 土器	A 17.4 B (11.7)	体部上位から口縁部破片。頭部は「く」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内・外側横ナデ。頭部から体部外側へラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	P100 40% P L36 覆土下層

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₃は径32~40cm、深さ40~50cmで、主柱穴と考えられる。P₄は径25cm、深さ42cmで、馬蹄形の高まりの内側に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南コーナーに位置する。長軸104cm、短軸60cmの長方形で、深さ45cmである。断面は箱形である。

貯蔵穴土層解説

1 黄褐色	燒土粒子・ローム粒子微量	3 楊色	ローム粒子中量
2 咖褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量	4 暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

竈 北東壁中央部に砂粒まじりの白色粘土で構築している。幅98cm、奥行き93cmで、左袖部は耕作の搅乱により一部壊されている。両袖最大幅50cmで、壁外への掘り込みではなく、直線的に立ち上がり煙道部にいたる。

燃焼部は平坦で、床面とは、ほぼ同一レベルを示す。火床部及び内壁は赤変硬化している。

竈土層解説

1 明褐色	燒土粒子・白色粘土少量、燒土小ブロック微量
2 暗褐色	燒土粒子中量、炭化粒子・白色粘土微量
3 にせい赤褐色	白色粘土中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	白色粘土中量、燒土粒子少量
5 暗褐色	ローム粒子少量
6 暗褐色	燒土粒子・ローム粒子・白色粘土少量
7 咖褐色	燒土粒子多量、白色粘土中量、燒土小ブロック少量

覆土 3層からなる。褐色土を主体とし、南西壁際には竈を構築していたと思われる白色粘土が堆積している。

土層解説

1 明褐色	ローム小ブロック、ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子多量

3 反黄色

遺物 本跡から土師器壺の口縁部片4点、体部片120点、底部片2点、土師器壺の口縁部片17点、体部片18点、底部片1点が出土している。第30図4の壺は南コーナー付近の覆土下層から逆位に出土しており、輪横みの部分で割られ、二次焼成を受けている。

所見 本跡の時期は遺構の形態及び出土遺物から6世紀初頭から前葉と思われる。

第10号住居跡（第31図）

位置 調査区中央部、C2a区。

重複関係 本跡は、第33号土坑と重複する。第33号土坑が本跡を掘り込んでおり、本跡が古い。

規模と平面形 長軸6.05m、短軸5.94mの方形である。

主軸方向 N-17-W

壁 壁高50~59cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南壁中央の高まりの部分を除いて、全壁下を巡っている。上幅10~15cm、深さ3~7cmで、断面は「U」字形である。

間仕切溝 2条（a、b）。南壁寄り中央部の馬蹄形の高まりの西側から1条（a）、西壁から1条（b）が中央に向かって延びている。上幅15~20cm、深さ5~20cmで、断面は「U」字形である。

床 平坦で、中心部が踏み固められている。南壁寄り中央部には幅25~50cm、高さ10cmの馬蹄形の高まりがあり、出入り口施設と思われる。

ピット 5か所（P₁~P₅）。P₁~P₄は径30~50cm、深さ50~70cmで、主柱穴と考えられる。P₅は径25cm、深さ15cmで、出入り口施設と思われる馬蹄形の高まりの内側にあり、出入り口に伴うピットと考えられる。

炉 中央から北東寄りにある。長径65cm、短径55cmの楕円形の地床炉であり、遺存状況は良くない。

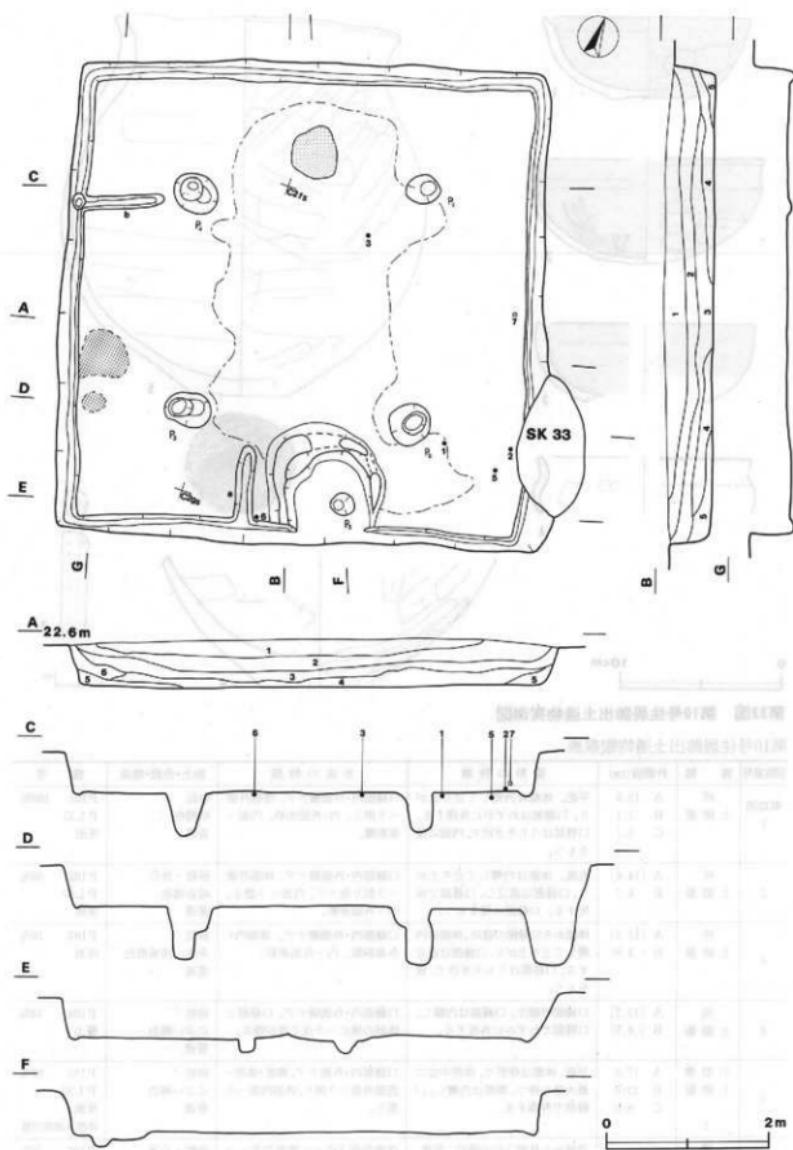
覆土 6層からなる自然堆積土層である。盤際と床面上に焼土塊と炭化材がみられる。

土層解説

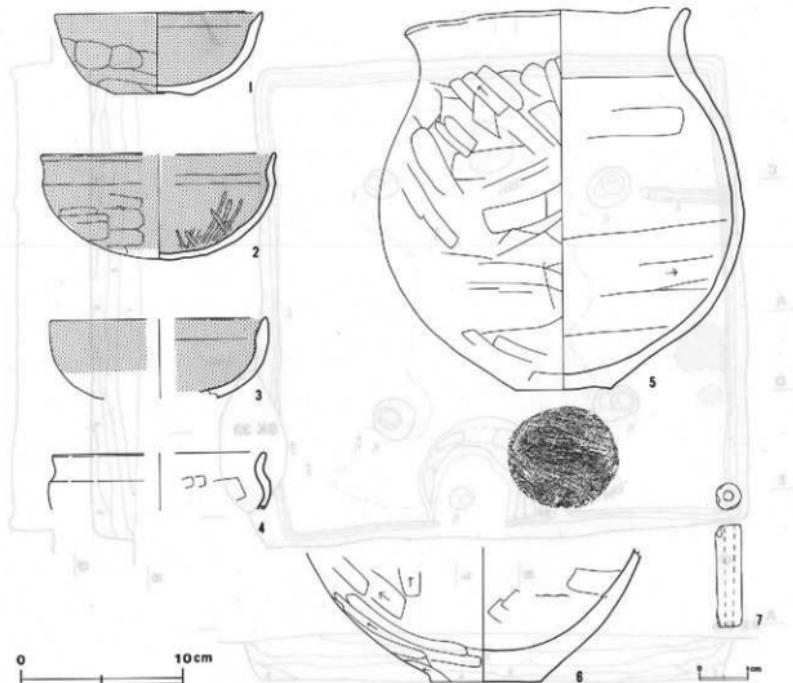
1	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量	5	褐色	ローム粒子多量、炭化物・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・炭化粒子微量	6	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物 本跡からは図示した遺物の他に、土師器壺の口縁部片10点、体部片82点、底部片1点、土師器壺の口縁部片13点、体部片143点、底部片2点が出土している。第32図1・2の壺、5の小型壺は南東コーナー部の床面、7の管玉は東盤際の覆土下層から出土している。

所見 覆土の堆積状態をみると、床面上には焼土塊や炭化材がみられ、床面上から遺物の出土が少ないとから、住居が廃棄された後に焼失し、その後自然堆積したものと思われる。時期は出土遺物等から5世紀後葉と思われる。



第31図 第10号住居跡実測図



第32図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	坏 土 器	A 13.0 B 5.1 C 5.1	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。口唇部はうちそぎ状で、内面に棱をもつ。	口縁部内・外面削ナデ。体部外面ヘラ削り。内・外面赤茶。内面一部剝離。	砂粒 明褐色 普通	P101 100% P L37 床面
2	坏 土 器	A [14.6] B 6.7	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立し、口唇部で外反する。口縁部に棱をもつ。	口縁部内・外面削ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラ磨き。内・外面赤茶。	砂粒・長石 暗赤褐色 普通	P102 50% P L37 床面
3	坏 土 器	A [13.5] B (4.9)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。口唇部はうちそぎ状で、棱をもつ。	口縁部内・外面削ナデ。体部内・外側削離。内・外側赤茶。	砂粒 赤色、浅黄褐色 普通	P103 10% 床面
4	坏 土 器	A [13.2] B (6.5)	口縁部の破片。口縁部は内傾し、口唇部でわずかに外反する。	口縁部内・外面削ナデ。口縁部と体部の境にヘラ当て痕がある。	砂粒 より褐色 普通	P104 10% 覆土
5	小型 坏 土 器	A 17.8 B 23.6 C 6.0	平底。体部は球形で、体部中位に最大径を持つ。頭部は内側し、口縁部で外傾する。	口縁部内・外面ナデ。頭部・体部・底部外面へラ削り。体部内面へラ削り。	砂粒 により褐色 普通	P105 95% P L37 床面 体部外面煤付着
6	坏 土 器	B (8.3) C 6.9	底部から体部下位の破片。平底。体部は内側して立ち上がる。	体部外面下位から底部外面へラ削り。体部内面へラナデ。	砂粒・石英 赤褐色 普通	P106 30% 床面 体部煤付着

記号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)			
第32回7	管 玉	2.1	0.5	—	0.2	1.2	グリーンタフ	東壁際覆土下層 Q7 PL55

第11号住居跡（第33図）

位置 調査区西端中央部、C2a2区。

規模と平面形 長軸5.45m、短軸4.98mの長方形である。

長軸方向 N-54°-E

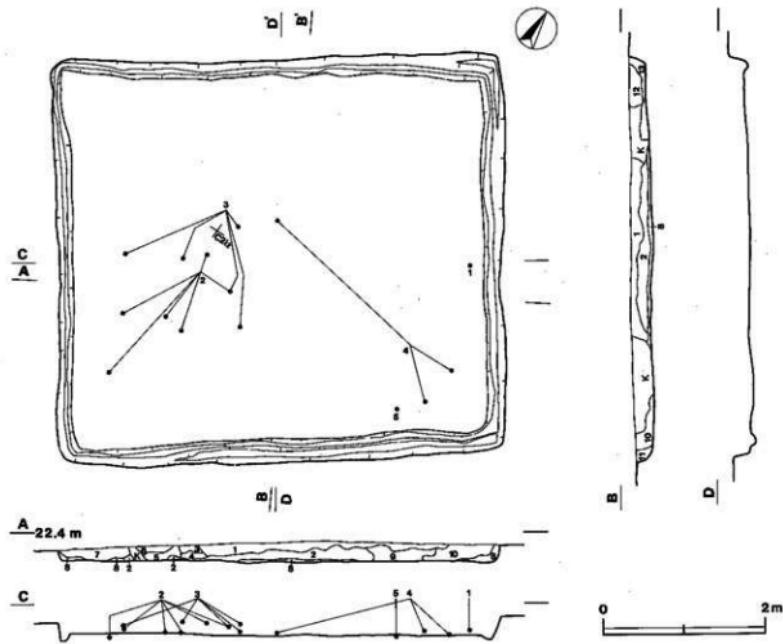
壁 壁高10~22cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を全周し、上幅9~13cm、深さ5~10cmで、断面は「U」字形や逆台形である。

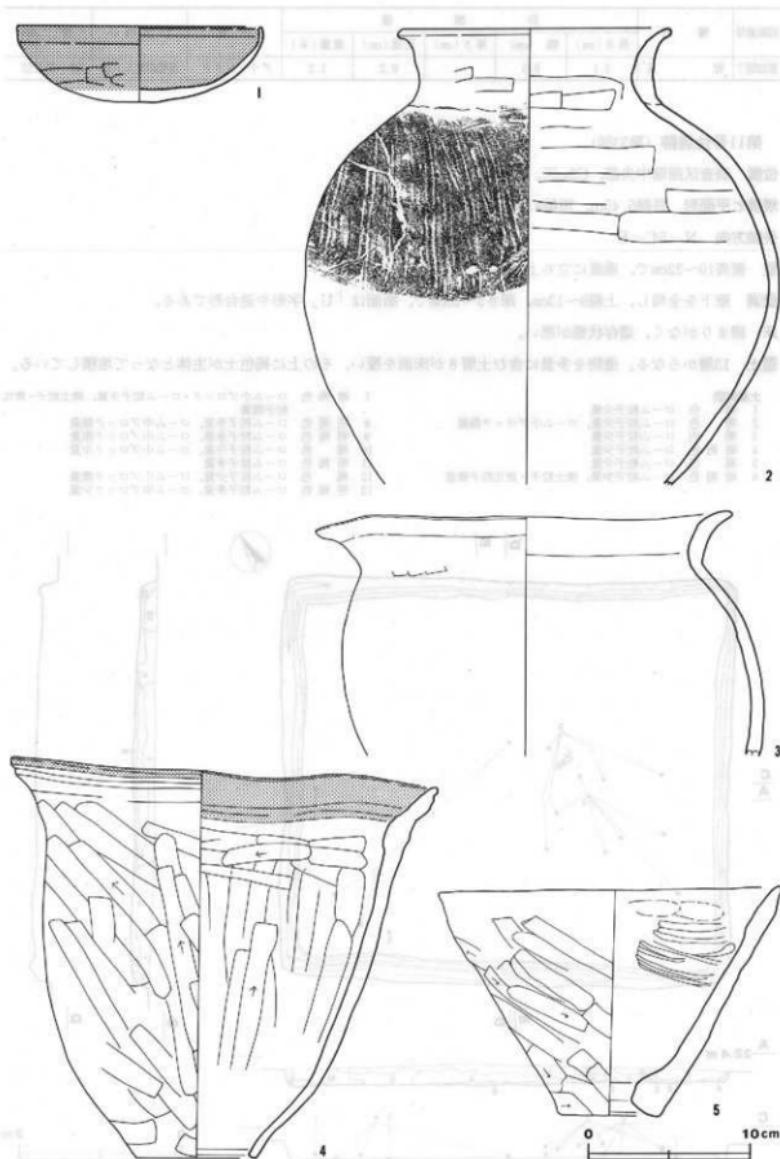
床 締まりがなく、遺存状態が悪い。

覆土 13層からなる。遺物を多量に含む土層8が床面を覆い、その上に褐色土が主体となって堆積している。

1 2 3 4 5 6	等 等 等 等 等 等	色 色 色 色 色 色	ローム粒子少量 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 ローム粒子少量 ローム粒子少量 ローム粒子少量 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	7 8 9 10 11 12 13	暗 明 暗 明 明 暗 明	褐色 褐色 褐色 褐色 褐色 褐色 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量 ローム粒子少量、ローム中ブロック微量 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 ローム粒子多量 ローム粒子少量、ローム中ブロック微量 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
----------------------------	----------------------------	----------------------------	---	-------------------------------------	---------------------------------	--	---



第33図 第11号住居跡実測図



第34図 第11号住居跡出土遺物実測図

国家重要文化財 伊豆ノ島 開拓記

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	環 土器	A [15.3] B 4.8	丸底。体部は内寄して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部と底に墻をもつ。	口縁部内・外表面横ナギ。体部外面ヘラ削り後ナギ。内・外表面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P107 95% P.L37 床面
		A [17.3] B (28.4)	底部欠損。体部は球形で、最大径を中央にもつ。頭部は直立し、口縁部は短く外傾する。	口縁部内・外表面横ナギ。頭部板状工具によるナギ。体部上位ハケ状工具によるナギ後ヘラ削り。体部下位ヘラ削り。体部内面板状工具によるナギ。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P108 60% P.L37 床面
3	壺 土器	A [25.8] B (15.3)	体部から口縁部の被片。体部は内寄して立ち上がる。口縁部は「く」の字形に外反する。	口縁部内・外表面横ナギ。頭部にヘラ削りで痕を残す。内・外表面赤彩。	砂粒 浅黄褐色 普通	P109 20% P.L37 覆土
		A 26.7 B 24.9 C 7.9	単孔式。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外表面横ナギ。体部外面ヘラ削り、内面半ヘラ削り、下半ヘラナギ。口縁部内・外表面赤彩。	砂粒・長石 褐色 普通	P110 95% P.L37 床面、覆土下層 体部外縁焼付着
5	瓶 土器	A 21.4 B 14.5 C 6.1	単孔式。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部内・外表面横ナギ。体部外面ヘラナギ。内面ハケナギ後指ナギ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P111 95% P.L38 床面

遺物 本跡からは図示した遺物の他に、土器部環の口縁部片2点、体部片2点、底部1点、土器壺の口縁部片4点、体部片155点、底部片3点が出土しており、圧倒的に壺が多い。第34図1の環は北東壁際中央部の床面から、5の壺は東コーナーの床面から、それぞれ伏せた状態で出土している。2の壺は南西壁際床面のものと中央寄りの覆土上層のものが接合している。4の壺は中央部と東コーナー近くの床面から出土している。

所見 本跡は、床面の遺存状態が悪かったため、炉、貯蔵穴及び柱穴等の内部施設が確認できなかったが、規模は他の住居跡と同程度の大きさで、壁溝も全周していることから住居跡とした。時期は砲弾型の壺が出土していることから6世紀初頭から前葉と考えられる。

第12号住居跡（第35図）

位置 調査区中央部、C3a区。

規模と平面形 長軸6.74m、短軸6.61mの長方形である。

主軸方向 N-7-E

壁 壁高30~45cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁下の一部と南壁下の一部に見られる。上幅13cmで、深さ4cm程掘り窪めている。

間仕切溝 3条(a~c)。東壁から1条(a)、西壁から2条(b+c)、中央に向かって延びている。

上幅15~20cm、深さ6~10cmで、断面は「U」字形である。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は径30~35cmの円形で、深さ55~75cmであり、主柱穴と思われる。P5は径25~30cmの楕円形で、深さ7cmである。位置と形状から出入り口施設に伴うピットと思われる。

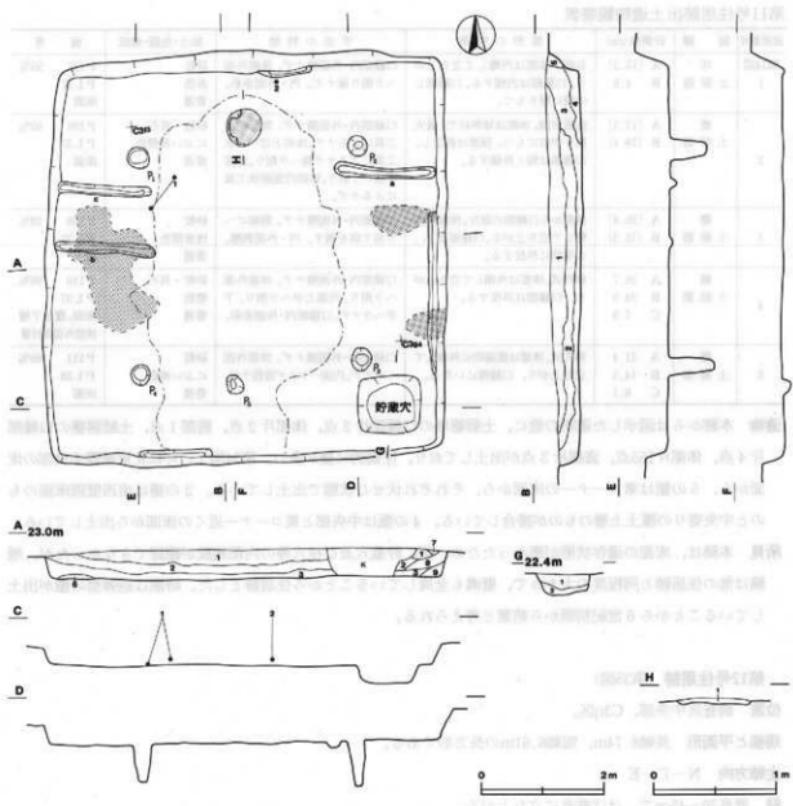
貯蔵穴 南東コーナーに位置し、1辺が100cmの方形で、深さ30cmあり、平坦な底面から外傾して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、燒土粒子、炭化物、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子、ローム小ブロック
微量

炉 北壁寄り中央部に位置し、径60cmの円形の地床炉である。

覆土 9層からなる。燒土粒子、炭化物、ローム小ブロックを含む褐色土、暗褐色土が主体となっている。

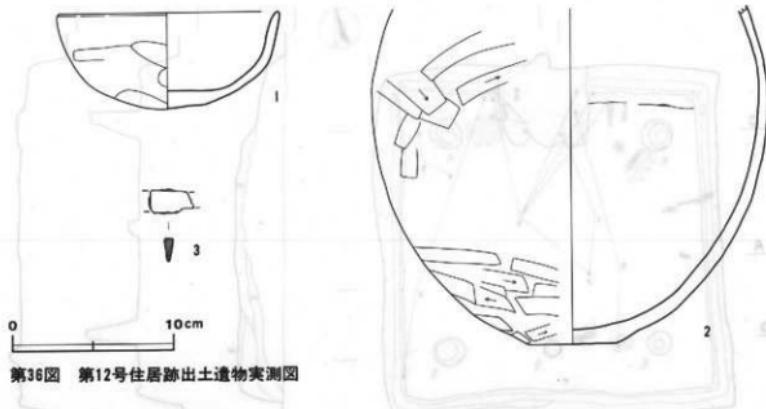


第35図 第12号住居跡実測図

土層解説	
1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2 桃色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物微量
3 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・炭化物・ローム小ブロック微量
4 にぼい褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
5 青色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
6 赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量、炭化物微量
7 暗褐色	ローム粒子微量
8 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
9 明褐色	ローム粒子多量

遺物 覆土下層の暗褐色土中からの出土がほとんどで、土師器環の口縁部13点、体部片30点、土師器壺の体部片162点、底部片7点、土師器鉢の口縁部1点が出土している。第36図1の壺は床面と覆土下層のものが接合している。2の壺は北壁際の覆土下層から出土している。

所見 床面直上には炭化材や焼土、壁際には焼土塊が見られ、床面直上からの遺物の出土が少ないとと思われる。住居が廃棄された後に焼失し、その後自然堆積したものと思われる。時期は出土遺物等から5世紀後葉と思われる。



第36図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 第36図	壺 土師器	A 13.9 B 3.0	丸底。体部は内凹して立ち上がり。そのまま口縁部にいたる。底部は肥厚している。	口縁部内・外面櫛ナデ。体部外側から底部外側へラ削り。	砂粒 黄褐色 普通	P112 50% 床面、覆土下層
	甕 土師器	B (20.9) C 5.9	底部から体部下位の破片。平底。体部は内凹して立ち上がる。	体部外側から底部外側へラ削り。	砂粒 明黄色 普通	P113 30% 覆土下層 保付着
図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
第36図3	刀 子	長さ(cm) (2.9)	幅(cm) 1.6	厚さ(cm) 0.5	重量(g) 3.4	覆土 M3 PL57

第13号住居跡（第37図）

位置 中央部東寄り、C349区。

規模と平面形 一辺4.32mの方形である。

主軸方向 N-12°-W

壁 壁高48~63cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

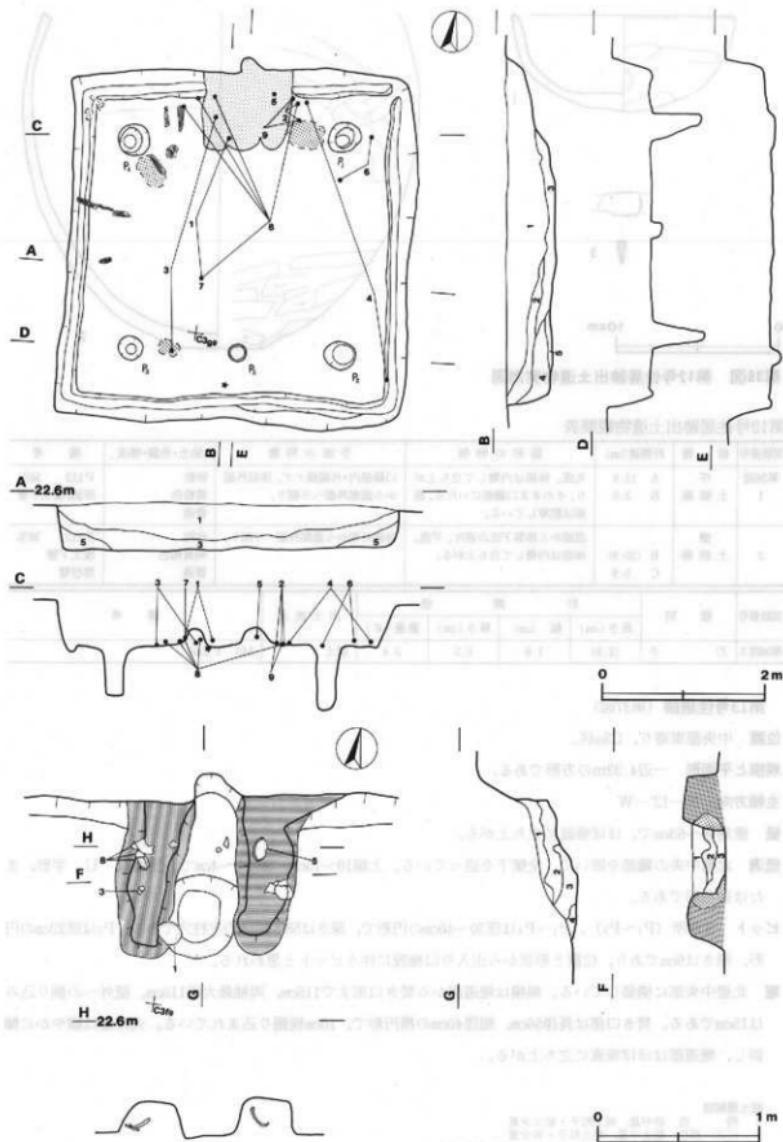
壁溝 北壁中央の竈部を除いて、全壁下を巡っている。上幅10~15cm、深さ2~4cmで、断面は「U」字形、または逆台形である。

ピット 5か所（P₁～P₅）。P₁～P₄は径30~40cmの円形で、深さは58~80cmの主柱穴である。P₅は径22cmの円形、深さは9cmであり、位置と形状から出入り口施設に伴うピットと思われる。

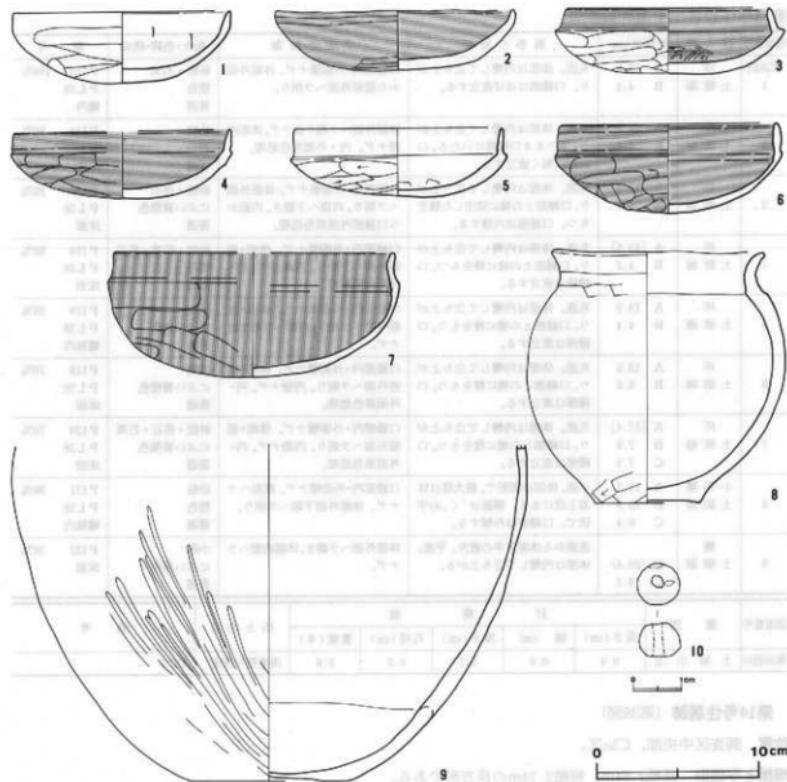
竈 北壁中央部に構築している。規模は煙道部から焚き口部まで115cm、両袖最大幅110cm、壁外への掘り込みは15cmである。焚き口部は長径50cm、短径40cmの楕円形で、10cm程掘り込まれている。火床部は緩やかに傾斜し、煙道部はほぼ垂直に立ち上がる。

遺土層解説

- 1 砂 色 砂中量。燒土粒子・粘土少量
- 2 にぶい褐色 砂土中量。燒土粒子・砂少量
- 3 明赤褐色 烧土小ブロック・燒土粒子中量。砂微量
- 4 焼 色 烧土粒子少量。砂微量



第37図 第13号住居跡実測図



第38図 第13号住居跡出土遺物実測図

覆土 5層からなる。焼土粒子、炭化粒子及びローム粒子を含む褐色土、暗褐色土を主体とする自然堆積土層である。

土層解説

- 1 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物 本跡からは図示した他に、土師器壺の口縁部片11点、体部片31点、土師器壺の口縁部片1点、体部片29点、支脚片1点が出土している。第38図1の壺は竈内から正位の状態で、2の壺、9の甕は竈の東側から押し潰された状態で出土している。3の壺は南壁寄り出土のものと竈袖部出土の離れた位置のものが接合している。5の壺、8の小型甕はそれぞれ竈袖内から出土している。4・6・7の壺も床面から出土している。大部分の遺物は住居廃絶時のものと思われる。

所見 床面上直には炭化材、焼土塊が多量に出土しており、住居が焼失した後に自然堆積したと思われる。時期は遺構の形態や出土遺物から6世紀後葉と思われる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種 別	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考			
第38図 1	坏 土 師 器	A 13.6 B 4.4	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面から底部外面へ削り。	砂粒・石英 褐色 普通	P115 100% P L38 窓内			
		A 14.7 B 4.1	丸底。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部は短く直立する。	体部外面へ削り後ナデ。体部内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 黒色 普通	P114 90% P L37 床面			
3	坏 土 師 器	A 12.8 B 4.1	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に突出した棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ削り。内面から口縁部外側黒色処理。	砂粒・長石 において黄褐色 普通	P117 95% P L38 床面			
		A [13.5] B 4.2	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へ削り。内面ナデ。内・外側黒色処理。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P116 90% P L38 床面			
5	坏 土 師 器	A 13.9 B 4.4	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へ削り。内面へ削り後ナデ。	砂粒 において褐色 普通	P119 95% P L38 窓内			
		A 13.5 B 5.6	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へ削り。内面ナデ。内・外側黒色処理。	砂粒 において黄褐色 普通	P118 70% P L38 床面			
7	坏 土 師 器	A [17.4] B 7.8 C 7.5	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へ削り。内面ナデ。内・外側黒色処理。	砂粒・長石・石英 において黄褐色 普通	P120 70% P L38 床面			
		A 13.2 B 15.8 C 6.4	平底。体部は卵形で、最大径は体部上面にある。窓部は「く」の字状で、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。窓部へ削り。体部外面下端へ削り。	砂粒 褐色 普通	P121 90% P L38 窓内			
		B (20.8) C 9.7	底部から体部下半分の破片。平底。体部は内側して立ち上がる。	体部外面へ削き。体部内面へ削り。	小塊 において褐色 普通	P122 30% 床面			
図版番号		計 測 値				備 考			
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第38図10		土 簿 小 玉	0.9	0.9	0.7	0.2	0.6	南壁寄り床面	DP3

第14号住居跡(第39図)

位置 調査区中央部, C3s区。

規模と平面形 長軸2.64m, 短軸2.24mの長方形である。

主軸方向 N-53°-E

壁 壁高7~13cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 踏み締められて硬化した面は認められない。

炉 中央部から北東寄りに位置し、長径73cm、短径55cmの楕円形で、3cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。

炉床は火熱を受けている程度である。

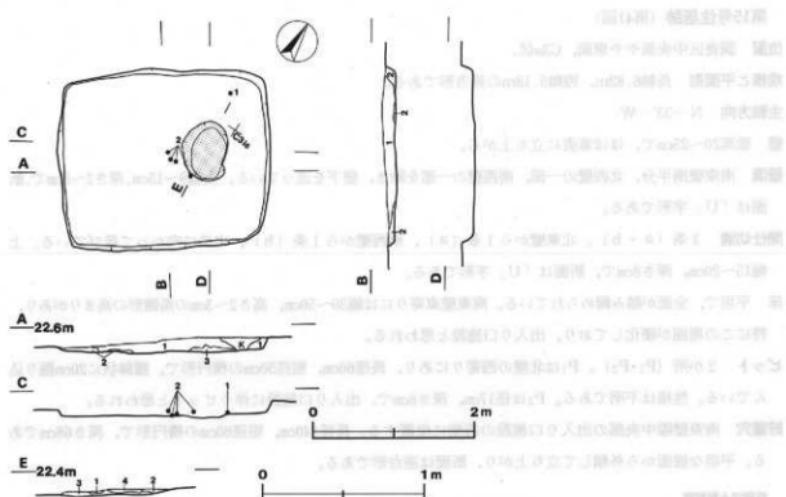
炉土層解説

- 1 にいよ赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 2 赤褐色 焼土粒子中量
- 3 赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量
- 4 明赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子、炭化粒子微量

覆土 3層からなる。土層1の暗褐色土が覆土の主体となる。

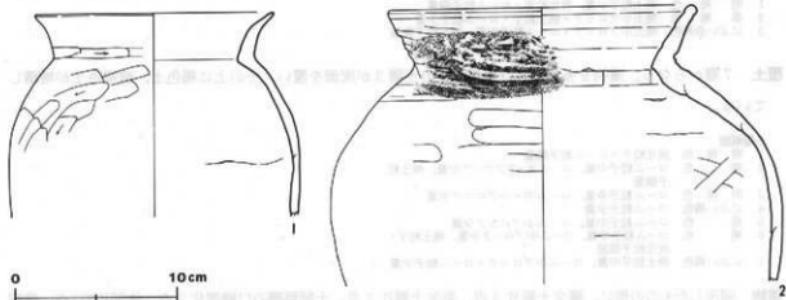
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量



第39図 第14号住居跡実測図

遺物 土師器裏の口縁部片1点、体部片52点、底部片2点、土師器壺の口縁部片2点と遺物の量は少なく、図に示されたのは2点である。第40図1の小型壺は床面から、2の壺は覆土からの出土である。西田地区中央所見 本跡は、炉は付設されてはいるが床の硬化面はみられず、かなり小規模な住居跡である。時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第40図 第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40区 1	小底壺 土師器	A [14.9] B (12.6)	体部から口縁部の破片。体部は卵形で、頭部は「く」の字状である。口縁部は外反する。	口縁部内・外側横ナギ。頭部から体部外側へ削り。体部内側へ削り。	砂粒 によい褐色	P123 30%
					PL38 普通	床面
2	壺 土師器	A 19.1 B (17.2)	体部から口縁部の破片。体部は球形で、最大径は体部上位にもつ。口縁部は「く」の字状に外傾する。	口縁部内・外側横ナギ。頭部外側へ爪状工具による強いナギ。体部外側へ削り。体部内側へ削り。	砂粒 明黄褐色	P124 20%
					普通	覆土 口縁部煤付着

第15号住居跡（第41図）

位置 調査区中央部や東側、C3a区。

規模と平面形 長軸6.82m、短軸5.18mの長方形である。

主軸方向 N-33°-W

壁 壁高20~25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南東壁南半分、北西壁の一部、南西壁の一部を除き、壁下を巡っている。上幅9~15cm、深さ2~5cmで、断面は「U」字形である。

間仕切溝 2条(a・b)。北東壁から1条(a)、南西壁から1条(b)、中央に向かって延びている。上幅15~20cm、深さ8cmで、断面は「U」字形である。

床 平坦で、全面が踏み締められている。南東壁東寄りには幅30~50cm、高さ2~3cmの馬蹄形の高まりがあり、特にこの周囲が硬化しており、出入り口施設と思われる。

ピット 2か所($P_1 \cdot P_2$)。 P_1 は北壁の西寄りにあり、長径60cm、短径50cmの楕円形で、掘鉢状に20cm掘り込んでいる。性格は不明である。 P_2 は径17cm、深さ8cmで、出入り口施設に伴うピットと思われる。

貯藏穴 南東壁際中央部の出入り口施設の西側に位置する。長径140cm、短径60cmの楕円形で、深さ68cmである。平坦な底面から外傾して立ち上がり、断面は逆台形である。

貯藏穴土層解説

1	赤	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
2	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
3	にじい褐色	色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
4	明	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量

炉 中央部北西寄りにあり、長径70cm、短径50cmの楕円形で、5cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説

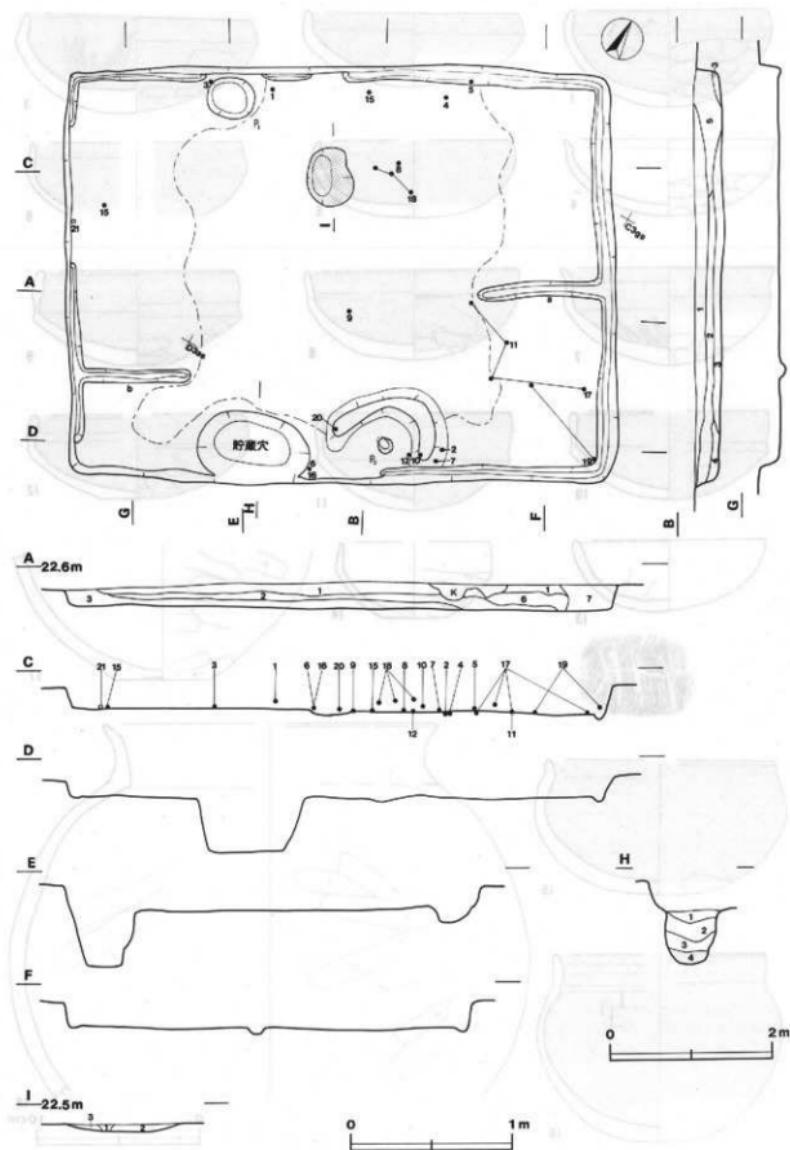
1	明	褐色	色	燒土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量
2	赤	褐色	色	燒土小ブロック・燒土粒子・ローム粒子少量
3	にじい赤褐色	色	色	燒土小ブロック・ローム粒子少量、燒土粒子微量

覆土 7層からなる。遺物を多量に含む明褐色土の土層3が床面を覆い、その上に褐色土、暗褐色土が堆積している。

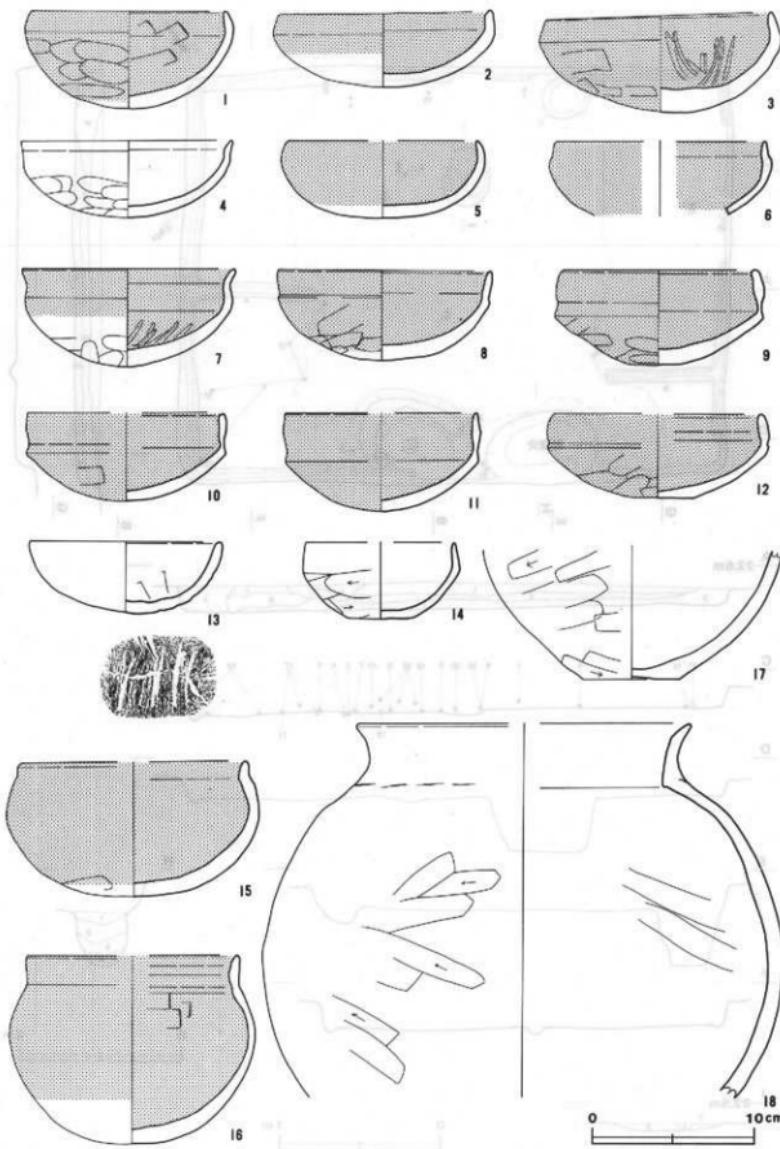
土層解説

1	暗	褐色	色	炭化粒子・ローム粒子微量
2	褐	色	色	ローム粒子中量、ローム大・中ブロック少量、燒土粒子微量
3	明	褐色	色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量
4	にじい褐色	色	色	ローム粒子少量
5	褐	色	色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
6	褐	色	色	ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
7	にじい褐色	色	色	燒土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 図示したものの他に、繩文土器片3点、弥生土器片2点、土師器壺の口縁部片7点、体部片212点、底部片12点、土師器壺の口縁部片39点、体部片198点、底部片2点、土師器甌の底部片1点が出土している。出土状況は、覆土最下層の土層3からの出土が最も多い。第42・43図2・6・10・12・14・16の壺・甌は南東壁際の出入り口施設と思われる馬蹄形の高まり周辺の床面から、1・3・4・5の壺は北西壁際床面から逆位・斜位の状態で出土しており、投棄されたものと思われる。11の壺、17・19の甌は東コーナー付近から出土し、南西壁際からは15の甌と21の砥石が隣接して出土している。



第41図 第15号住居跡実測図

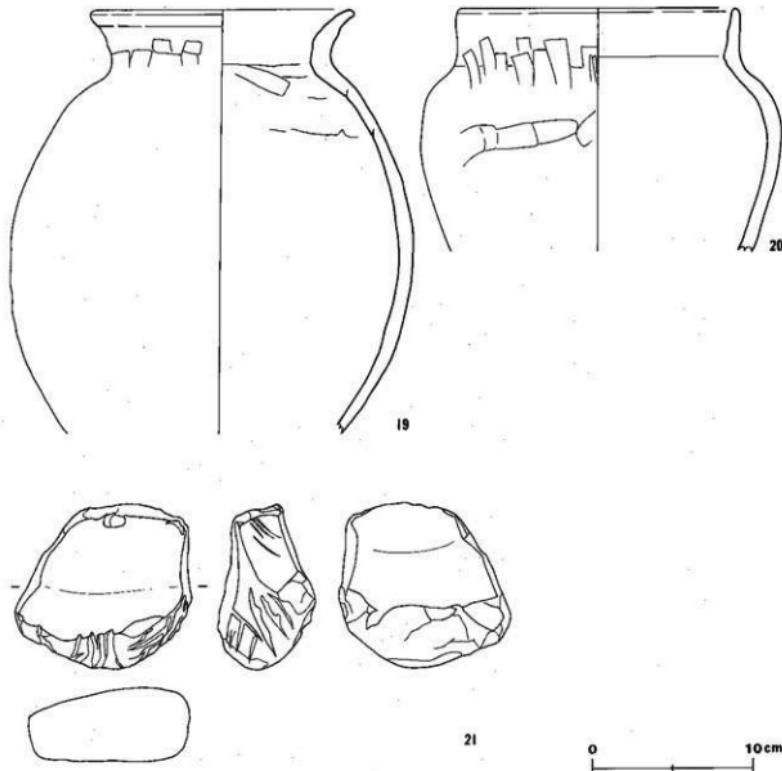


第42図 第15号住居跡出土遺物実測図(1)

図版実測図(1)引葉 図14

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	壺 土師器	A 12.2 B 6.0	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。器高は深い。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後ナデ。体部内面ナデ。内面から体部外面赤彩。	砂粒・赤色、底部褐色 普通	P131 85% P L38 床面
2	壺 土師器	A 13.2 B 4.9	丸底。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面摩減。体部内面削離、内面から口縁部外側赤彩。	砂粒・石英 赤褐色、底部褐色 普通	P125 100% P L38 床面
3	壺 土師器	A 13.8 B 6.1	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後ナデ。体部内面ヘラ磨き。内・外側赤彩。	砂粒・石英 赤褐色 普通	P127 100% P L38 床面
4	壺 土師器	A 13.2 B 4.8	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面削離。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P126 100% P L38 床面
5	壺 土師器	A [11.8] B 4.9	丸底。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外側摩減。内・外側赤彩。	砂粒・雲母・長石 赤褐色 普通	P128 70% P L38 覆土下層
6	壺 土師器	A [13.1] B (4.7)	体部から口縁部の張片、体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部内面はうすぼぎ状である。	口縁部内・外面横ナデ。内・外側赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P132 10% P L38 床面
7	壺 土師器	A 13.4 B 6.2	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外側ヘラ削り、内面ヘラ磨き。内面から口縁部外側赤彩。	砂粒・長石 褐色 普通	P129 80% P L38 床面
8	壺 土師器	A 13.3 B 6.5	丸底。体部は外側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面から体部外面上半赤彩。	砂粒・石英 明赤褐色、褐色 普通	P130 90% P L38 床面
9	壺 土師器	A 12.3 B 5.9 C 3.0	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部外面横ナデ。体部外側ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。内面から体部外側赤彩。	砂粒 暗赤色、褐色 不規	P133 75% P L39 床面
10	壺 土師器	A 12.2 B 5.5 C 2.0	口縁部一部欠損。平底気株の底部から外傾して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立し、口部は平底である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側ヘラ削り後ナデ。内面から体部削離が顯著。内・外側赤彩。	砂粒 赤色、底部褐色 普通	P134 70% P L38 覆土下層
11	壺 土師器	A [11.8] B 6.3	口縁部一部欠損。丸底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部との境に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外側ナデ。内・外側赤彩。内面削離。	砂粒 赤色 普通	P135 40% P L38 床面
12	壺 土師器	A [13.2] B 5.2 C 3.6	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外側へラ削り後ナデ。内・外側赤彩。内面削離。	砂粒 暗赤色 普通	P136 60% 床面
13	壺 土師器	A [11.8] B (4.6)	丸底。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外側ナデ。体部内面にヘラ削離。	砂粒 にぶい褐色 普通	P139 35% P L39 床面 磨石転用
14	壺 土師器	A [9.4] B 4.8 C 4.0	体部一部欠損。平底気株の底部から内側して立ち上がり、口縁部ははわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外側へラ削り。内面ナデ。外側摩減。	長石・小穂 褐色 普通	P140 60% P L38 覆土
15	甕 土師器	A [13.9] B 8.4	体部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内面から体部外側赤彩。内・外側摩減。	砂粒 にぶい赤色 普通	P137 70% P L39 床面 外面錆付量
16	甕 土師器	A 13.0 B 11.6	体部から口縁部一部欠損。丸底。体部は球形で、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外側赤彩。内・外側摩減。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P138 70% P L39 覆土下層
17	甕 土師器	B (7.8) C 6.0	底面から体部下半の破片。体部は球形狀で、中位に最大径をもつ。	体部・底部外側へラ削り。内面摩減。	砂粒 褐色 普通	P144 40% 覆土下層
18	甕 土師器	A [21.0] B (22.3)	体部から口縁部の張片。体部は球形狀で、中位に最大径をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒 褐色 普通	P143 20% P L39 床面



第43図 第15号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	種類	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 19	埋 土 器	A 16.5 B (26.4)	体部から口縁部の破片。体部中位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部・体部外面へラ削り後ナデ。体部内面へラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P142 50% P L39 覆土中層 外面塗付着
20	陶 土 器	A 17.4 B (15.1)	体部から口縁部の破片。体部は内寄して立ち上がり、最大径を上位にもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部・体部外面へラ削り。	砂粒・長石 灰色 良好	P141 30% P L39 底面 体部上位自然熱
第43図21	種別	計 測 値	石質	出土地点	備考	
		長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 孔径(cm) 重量(g)				
	砥 石	11.0 10.2 4.6 — 607.8	砂岩	南西壁底床面	Q 8 P L56	

所見 覆土の堆積状態を見ると、ローム小・中ブロック、ローム粒子を含む層が堆積し、壁際の堆積土層、覆土中・下層には遺物が多く含まれていることから、本跡は廃棄された後、人為的に埋め戻される過程で、遺物の投棄が行われたと思われる。繩文土器、弥生土器は流れ込みである。出土遺物が横断壊壁が主流となる

ことから、時期は5世紀末葉と思われる。住居跡形態は、長方形で出入り口に高まりをもつタイプで、当遺跡では本跡の他に第2・20~22・50号がこれにあたる。

第16号住居跡（第44図）

位置 調査区中央部東側、C411区。

規模と平面形 長軸6.05m、短軸5.63mの方形である。

主軸方向 N-57°-W

壁 壁高25~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を全周し、上幅8~15cm、深さ5cmで、断面は「U」字形または逆台形である。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。南東壁際中央部には幅20~50cm、高さ7cmの馬蹄形の高まりがあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。

ピット 4か所（P1~P4）。P1~P4は径20~28cm、深さ55~60cmで、主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南東壁際中央部の出入り口施設内側に位置し、径70cmの円形で、深さは40cmである。貯蔵穴2は東コーナーに位置し、径65cmの円形で、深さは37cmである。両者とも断面は逆台形で、平坦な底面から外傾して立ち上がる。

貯蔵穴1土層解説

貯蔵穴2 土層解説	
1 暗褐色	燒土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
2 暗褐色	燒土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量
3 暗褐色	燒土粒子微量、燒土中・小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子少量

炉 中央部に位置し、貯蔵穴1と同一線上にある。長径105cm、短径50cmの楕円形で、7cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。

炉土層解説

1 暗褐色	燒土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	燒土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量
3 焼褐色	燒土粒子多量、燒土小ブロック・炭化粒子微量
4 褐色	燒土粒子・炭化粒子微量

覆土 11層からなる。土層6~11はローム粒子・ロームブロックを含み、上層の焼失にかかる堆積土層である。床面中央部を除く全体には焼土塊が堆積している。

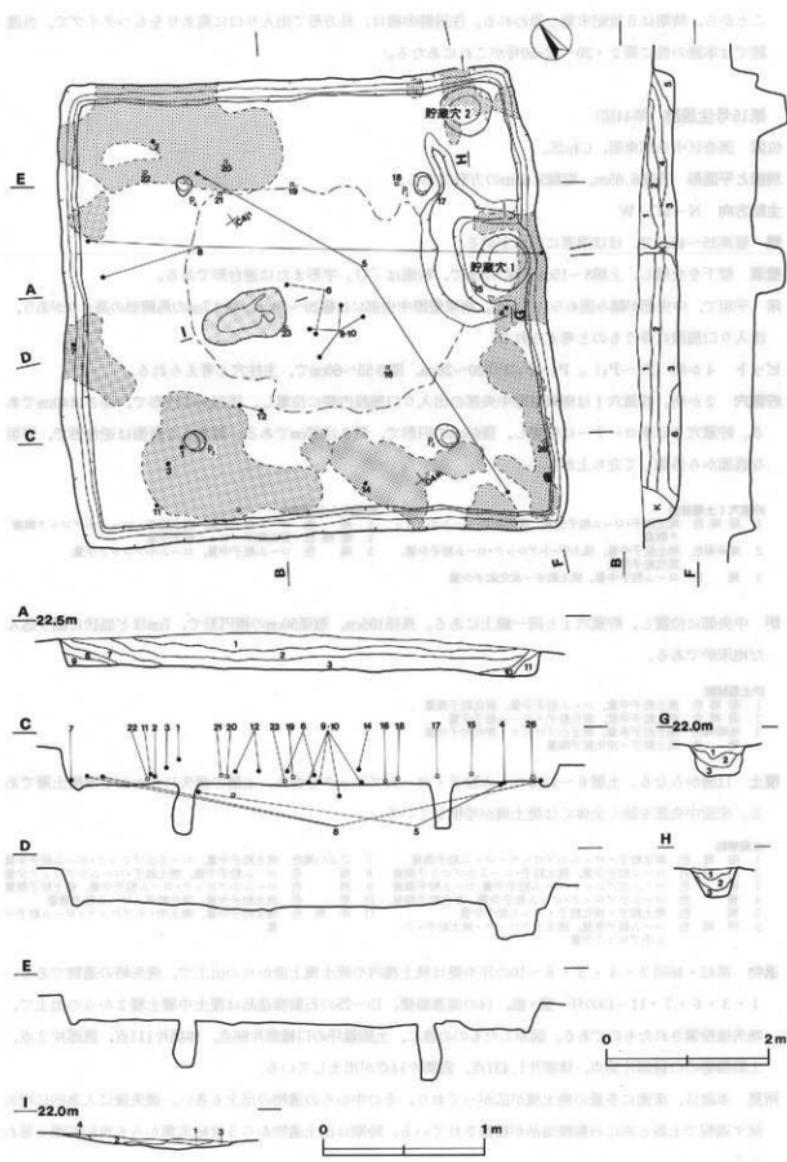
土層解説

1 暗褐色	炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量	7 に述べる褐色	燒土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・ローム小ブロック微量	8 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・ローム小ブロック微量
3 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム粒子微量	9 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、燒土粒子微量
4 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	10 暗褐色	燒土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子中量
5 暗褐色	燒土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量	11 明褐色	燒土粒子中量、燒土中・小ブロック・ローム粒子少量
6 明褐色	ローム粒子多量、燒土小ブロック・燒土粒子・ローム小ブロック少量		

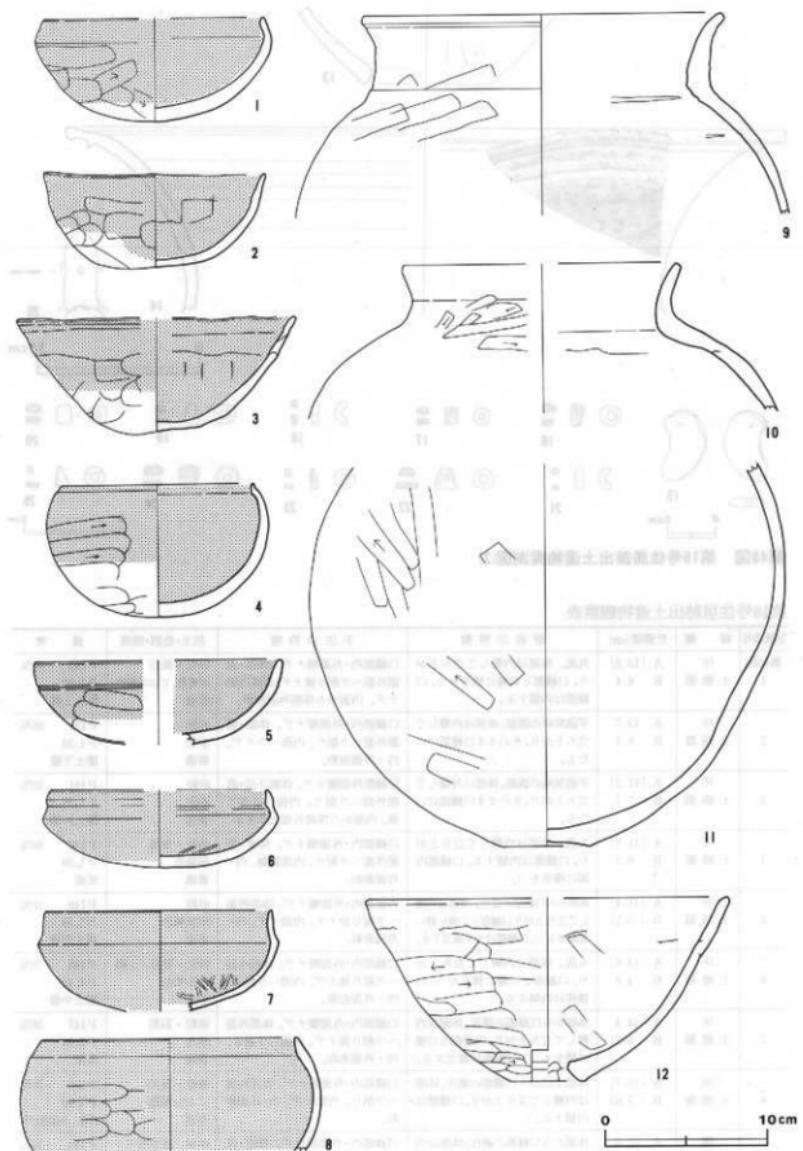
遺物 第45・46図2・4・5・8~10の壺や甕は焼土塊内や焼土塊上面からの出土で、焼失時の遺物である。

1・3・6・7・11~13の壺・甕・瓶、14の須恵器甕、15~25の石製模造品は覆土中層土層2からの出土で、焼失後投棄されたものである。図示したものの他に、土師器壺の口縁部片86点、体部片111点、底部片2点、土師器甕の口縁部片38点、体部片1,431点、底部片14点が出土している。

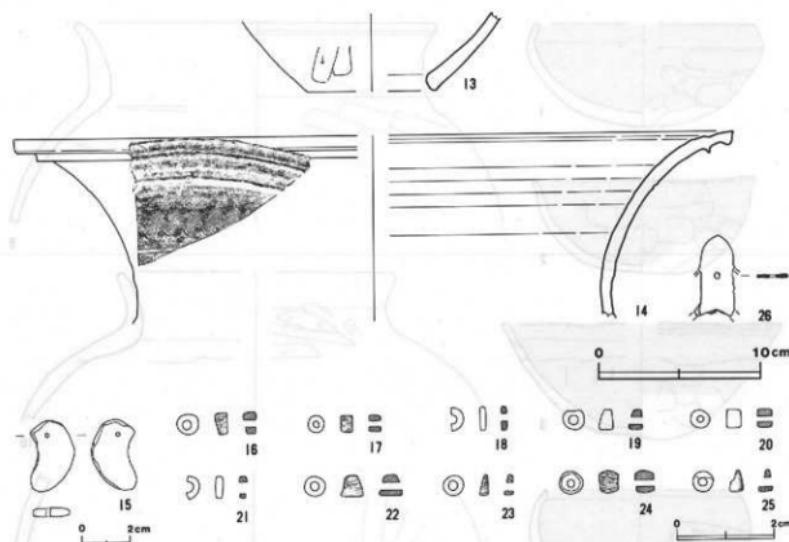
所見 本跡は、床面に多量の焼土塊が広がっており、その中からの遺物の出土も多い。焼失後に人為的に埋め戻す過程で土器と共に石製模造品が投棄されている。時期は出土遺物から5世紀末葉から6世紀初頭と思われる。



第44図 第16号住居跡実測図



第45図 第16号住居跡出土遺物実測図(1)



第46図 第16号住居跡出土遺物実測図(2)

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	坏 土師器	A [13.8]	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部・底部外面へラ削り後ナギ。体部内面ナギ。内面から体部外面赤色。	砂粒・良石 赤褐色。にぼい褐色 普通	P146 85% P L39 覆土上層
		B 6.4				
2	坏 土師器	A 13.7	平底気味の底部。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナギ。体部・底部外面へラ削り。内面へラナギ。内・外面赤色。	砂粒 赤色 普通	P152 95% P L39 覆土下層
3	坏 土師器	A [17.2]	平底気味の底部。体部は外傾して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナギ。体部下位・底部外面へラ削り。内面へラ当て紙。内面から体部外面上半赤色。	砂粒 赤色 普通	P151 50% P L39 覆土中層
4	坏 土師器	A [11.9]	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナギ。体部・底部外面へラ削り。内面へラ削り。内・外面赤色。	砂粒・雲母 明褐色 普通	P149 80% P L39 床面
5	坏 土師器	A [15.4] B (5.2)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり口縁部との境に深い稜をもつ。口縁部はやや直立する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へラ削り後ナギ。内面ナギ。内・外面赤色。	砂粒 明赤褐色 普通	P148 20% P L39 覆土中層
6	坏 土師器	A [13.6]	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へラ削り後ナギ。内面へラ磨き。内・外面赤色。	砂粒・雲母・小砂 明赤褐色 普通	P145 70% P L40 覆土中層
7	坏 土師器	A 14.4 B (6.2)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へラ削り後ナギ。内面へラ磨き。内・外面赤色。	砂粒・石英 橙色 普通	P147 50% P L39 床面
8	坏 土師器	A [15.7]	体部上位から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へラ削り。内面ナギ。内・外面赤色。	砂粒・良石 赤褐色 普通	P150 30% P L40 床面・外側埋付着
9	壺 土師器	A 22.4	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり。頸部は直立し、口縁部で外反する。	口縁部内・外面横ナギ。頸部・体部外面へラ削り。内面ナギ。	砂粒・赤色粒子 にぼい黄褐色 普通	P153 10% P L40 床面・外側埋付着
		B (12.5)				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 10	甕 土瓶器	A [17.0] B (9.3)	体部上位から口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外表面横ナデ。頸部・体部外表面ヘラ削り後ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒 にぼい褐色 普通	P154 10% P140 床面 外面側付着
		B (23.6) C 5.6	底部から体部の破片。体部は内彌して立ち上がり、中位に最大径をもつ。	体部外表面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒 にぼい黄褐色 普通	P155 40% 覆土中層
第46図 12	瓶 土瓶器	A [22.6] B 11.4 C 4.6	無底式。体部は外傾して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。	口縁部内・外表面横ナデ。体部外表面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・小砾 にぼい褐色 普通	P156 30% P140 覆土中層
		B (4.8) C [8.0]	無底式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外表面ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	長石・石英多量 にぼい褐色 普通	P157 5% 覆土
		A [44.9] B (11.5)	口縁部の破片。口縁部は外反する。口縁端部は断面三角形である。口縁底面に断面三角形の凸唇が1条ある。	口縁部横ナデ。頸部には1条の回線を抉んで9本1条の櫛齒状工具による波状文。	砂粒・小砾 灰色 良好	P158 5% P140 覆土中層 内面自然釉

図版番号	種別	計測 値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第46図15	勾玉	2.9	1.9	0.4	0.15	3.0	滑石	東寄り覆土	Q9 PL55
16	臼玉	0.3	0.5	0.3	0.15	0.1	滑石	中央部覆土	Q10 PL55
17	臼玉	0.35	0.4	0.25	0.1	0.1	滑石	東コーナー覆土	Q11 PL55
18	臼玉	(0.5)	0.5	0.1	0.15	0.05	滑石	東コーナー覆土	Q12 PL55
19	臼玉	0.5	0.45	0.3	0.2	0.1	滑石	東寄り覆土	Q13 PL55
20	臼玉	0.4	0.4	0.3	0.1	0.1	滑石	北コーナー覆土	Q14 PL55
21	臼玉	(0.45)	0.45	0.15	0.2	0.05	滑石	北コーナー覆土	Q15 PL55
22	臼玉	0.5	0.45	0.5	0.15	0.1	滑石	北コーナー覆土	Q16 PL55
23	臼玉	0.45	0.45	0.2	0.2	0.1	滑石	中央部覆土	Q17 PL55
24	臼玉	0.5	0.5	0.4	0.15	0.2	滑石	中央部床面	Q18 PL55
25	臼玉	0.4	0.45	0.3	0.2	0.1	滑石	中央部床面	Q19 PL55

図版番号	種別	計測 値				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第46図26	鉢	5.1	2.6	0.2	4.7	北東壁際床面	M4	PL57

第17号住居跡(第47図)

位置 調査区中央部東端, D4a3区。

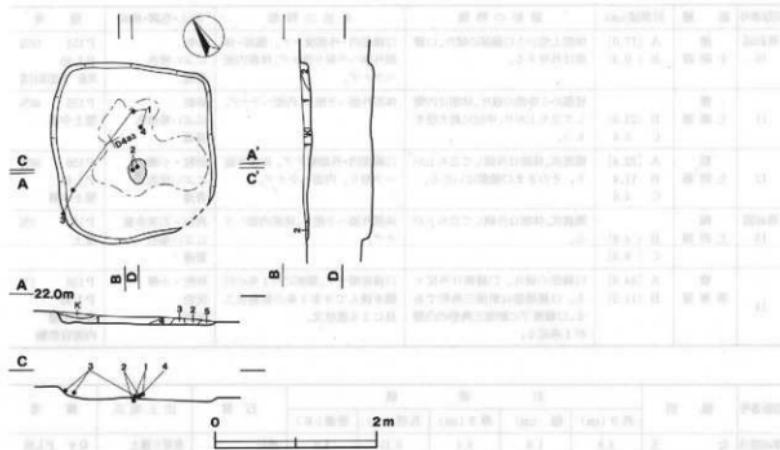
規模と平面形 長軸2.18m, 短軸1.97mのほぼ方形である。

主軸方向 N-27°-W

壁 壁高3~10cmで、ほぼ垂直に立ち上げる。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部南西寄りに位置し、長径33cm、短径22cmの橢円形の地床炉で、火熱を受けた程度である。炉床は掘り廻められていない。



第47図 第17号住居跡実測図

覆土 5層からなる。第1層の暗褐色土層が主体となっている。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量	3 暗褐色	焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量	4 極暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量

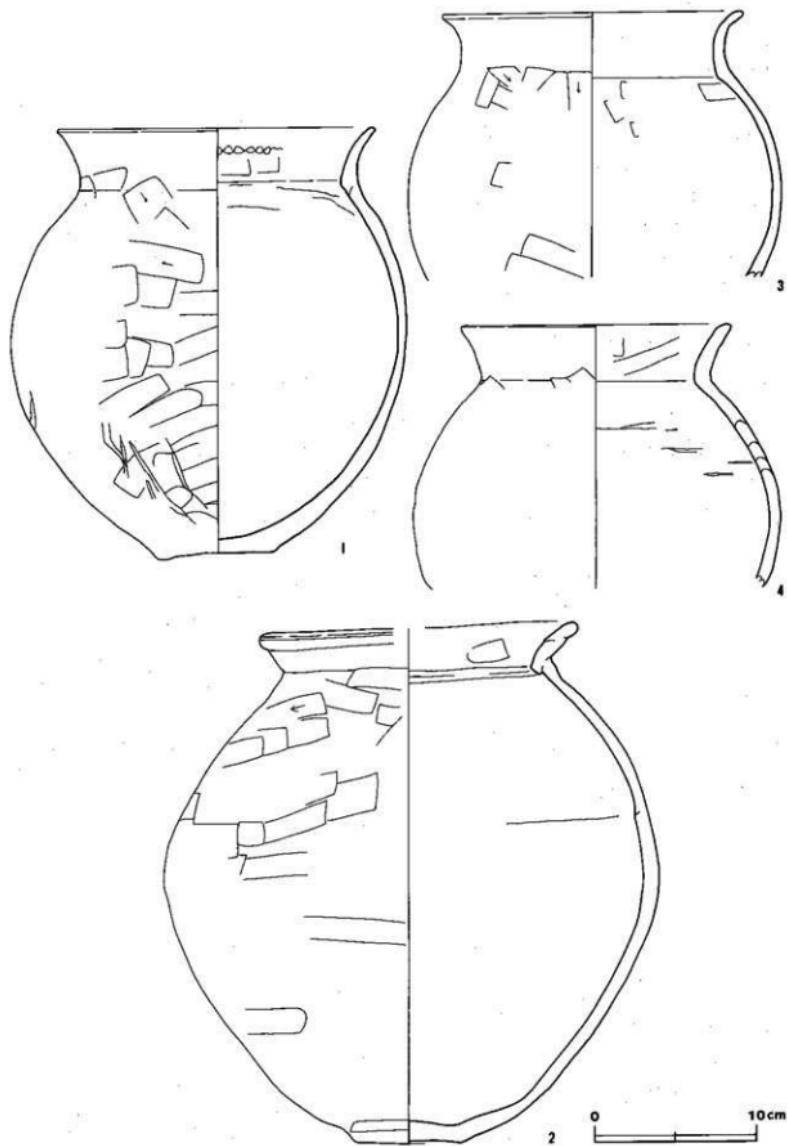
遺物 第48図1~4の甕は床面上直上から碎いた状態でまとめて出土している。この他の土師器壺の口縁部片9点、体部片29点、土師器甕の口縁部片8点、体部片288点、底部片4点は、床面から覆土下層にかけて出土している。

所見 本跡は、かなり小規模な住居跡であるが、遺物の出土量は比較的多く、特に土師器甕の出土が目立っている。炉は使用頻度は低いようであるが、甕はどれも煤が付着しており、煮沸に使用した痕跡がある。時期は出土遺物から5世紀末葉から6世紀初頭と思われる。

(時代) 暗褐色土層

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	地質・色調・焼成		備考
					地質	色調	
第48図 1 土師器	甕	A 19.6 B 26.5 C 7.1	平底。体部は内窪して立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頭部・体部外面へラ削り。内面剝離。	砂粒・長石 褐色	P159 95% P L40 煙付着	
	土師器	A 19.9 B 32.4 C 6.6	平底。体部は球形状で、最大径を中位にもつ。頭部は「く」の字状で、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。頭部内面へナナデ。	砂粒・長石 にぶい黄褐色	P160 70% P L40 床面 煙付着	
	甕	A 18.8 B (16.6)	体部上位から口縁部の破片。体部は内窪して立ち上がる。頭部は直立し、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。体部内面へラナナデ。	砂粒 にぶい黄褐色	P161 25% 普通	床面
4 土師器	甕	A 16.8 B (16.4)	体部上位から口縁部の破片。体部は内窪して立ち上がり、最大径を中位にもつ。頭部は「く」の字状で、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頭部へラ削り。	砂粒・長石 にぶい褐色	P162 30% 覆土下層	



第48図 第17号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡（第49図）

位置 調査区中央部東側, D3_{se}区。

規模と平面形 長軸2.16m, 短軸2.02mの方形である。

主軸方向 N-53°-E

壁 壁高2~6cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、踏み締めた部分は見られない。

炉 中央部南西寄りに位置し、長径55cm、短径30cmの不定形の地床炉であるが、火熱を受けた程度で、使用頻度は低い。炉床は掘り窪められてはいない。

覆土 薄く4層が堆積している。

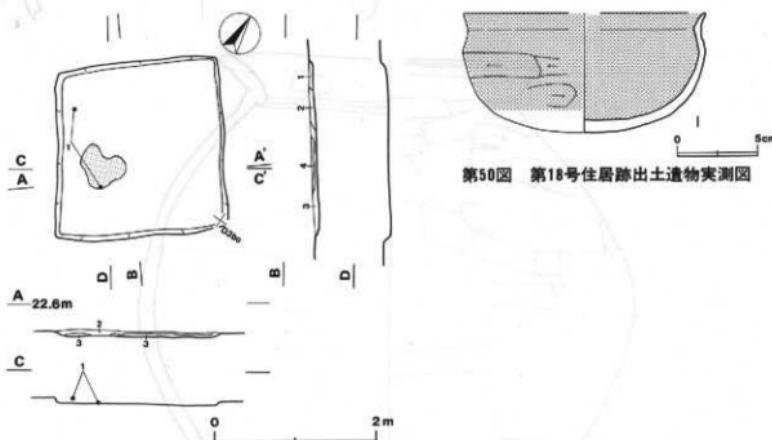
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 帯褐色 ローム粒子中量

遺物 遺物は少なく、実測できたのは第50図1の碗1点のみで、南西壁寄りの床面から出土している。この他に、

土師器壺の体部片37点、土師器壺の口縁部片2点が出土している。

所見 本跡は、かなり小規模であり、柱穴・貯蔵穴等がなく、炉は付設されているが、火熱を受けた程度で使用頻度は低く、床の硬化面もみられない。しかし、土師器壺の破片をみると煤が付着しており、煮沸に使用したことは明らかである。時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。



第49図 第18号住居跡実測図

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	碗 土師器	A [15.0] B 7.5	丸底。体部は内凹して立ち上がり。口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り後ナデ。内面削輪。内・ 外面赤茶。	砂粒・小礫・骨粉 に黒い褐色 普通	P163 60% P140 床面 四隅削

第19号住居跡（第51図）

位置 調査区中央部東側、D3a区。

規模と平面形 長軸4.13m、短軸3.41mの長方形である。

長軸方向 N-44°-E

壁 壁高2~12cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、全体的に踏み固められて硬化している。

炉 中央部南西寄りに位置し、長径60cm、短径55cmの不定形の地床炉である。炉床は掘り窪められてはいない。

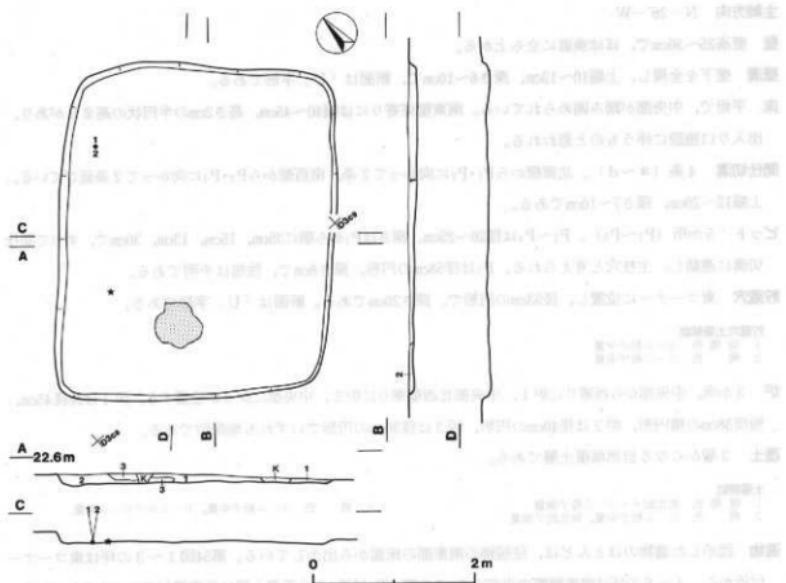
覆土 3層からなる。土層1の褐色土が主体となる。

土層解説

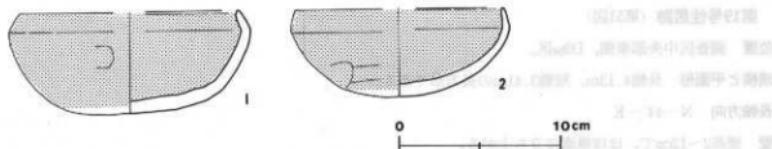
1	褐	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック ク数個	2	褐	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
3	褐	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物 第52図1・2の壺は北コーナー近くの床面から山桃の種8点と共に出土している。南コーナーからも壺の破片と共に6点の山桃の種が出土している。図示した遺物の他に、土師器甕の口縁部片8点、体部片81点、底部片2点、土師器壺の口縁部片7点、体部片49点が出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。



第51図 第19号住居跡実測図



第52図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第52図 1	壺 土師器	A [13.6]	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部・底外面部へラ削り後ナギ。内・外面赤色。	砂粒・長石 赤褐色	P164 40% P141
		B 6.3			普通	床面
2	壺 土師器	A [13.0]	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外側へラ削り後ナギ。内面ナギ。底部へラ削り。内・外面赤色。	砂粒・長石 赤色、底部橙色	P165 30% P141
		B 5.5			普通	床面

第20号住居跡（第53図）

位置 調査区中央部, D2c7区。

規模と平面形 長軸5.96m, 短軸4.47mの長方形である。

主軸方向 N-26°-W

壁 壁高25~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を全周し、上幅10~13cm, 深さ6~10cmで、断面は「U」字形である。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。南東壁東寄りには幅40~45cm, 高さ2cmの半円状の高まりがあり、出入り口施設に伴うものと思われる。

間仕切溝 4条(a~d)。北東壁からP1~P2に向かって2条、南西壁からP3~P4に向かって2条延びている。上幅12~20cm, 深さ7~10cmである。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は径20~25cm, 深さはP1から順に35cm, 15cm, 13cm, 30cmで、すべて間仕切溝に連結し、主柱穴と考えられる。P5は径58cmの円形、深さ8cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 東コーナーに位置し、径53cmの円形で、深さ20cmである。断面は「U」字形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 塗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

炉 3か所。中央部から西寄りに炉1, 中央部北西壁寄りに炉2, 中央部に炉3が位置する。炉1は長径45cm,

短径38cmの楕円形、炉2は径40cmの円形、炉3は径30cmの円形でいずれも地床炉である。

覆土 3層からなる自然堆積土層である。

土層解説

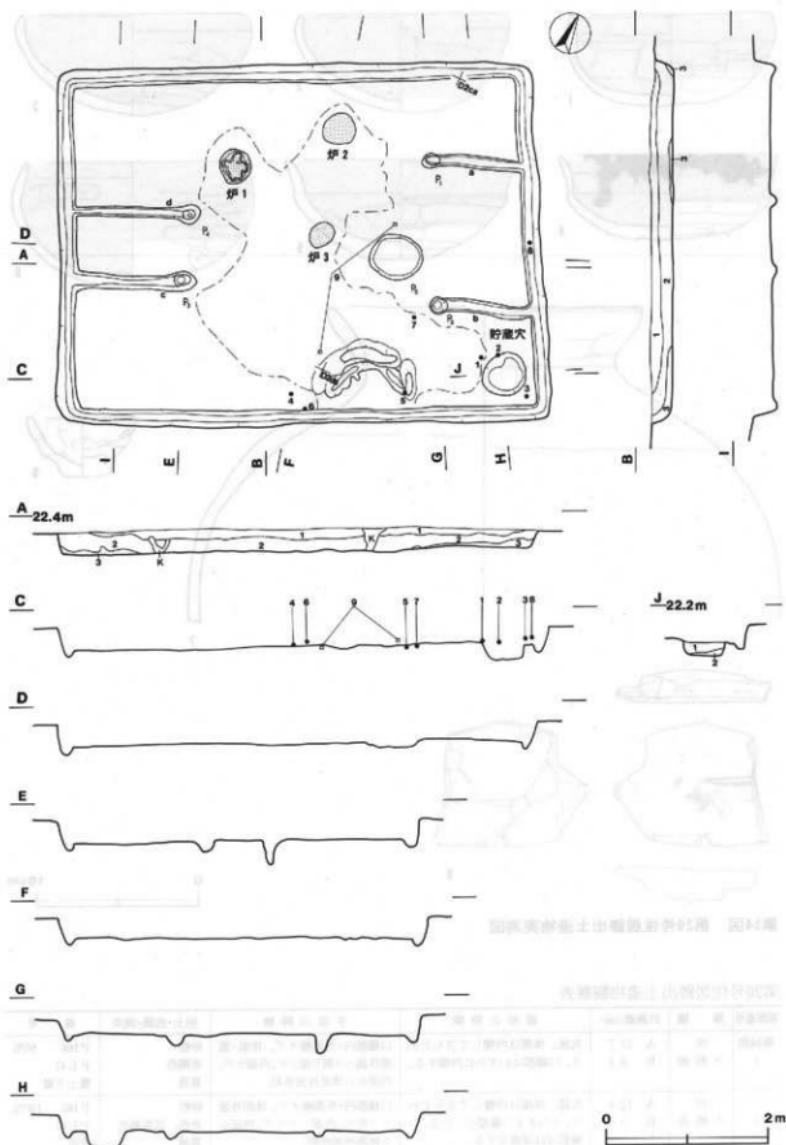
- 1 塗褐色 炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量

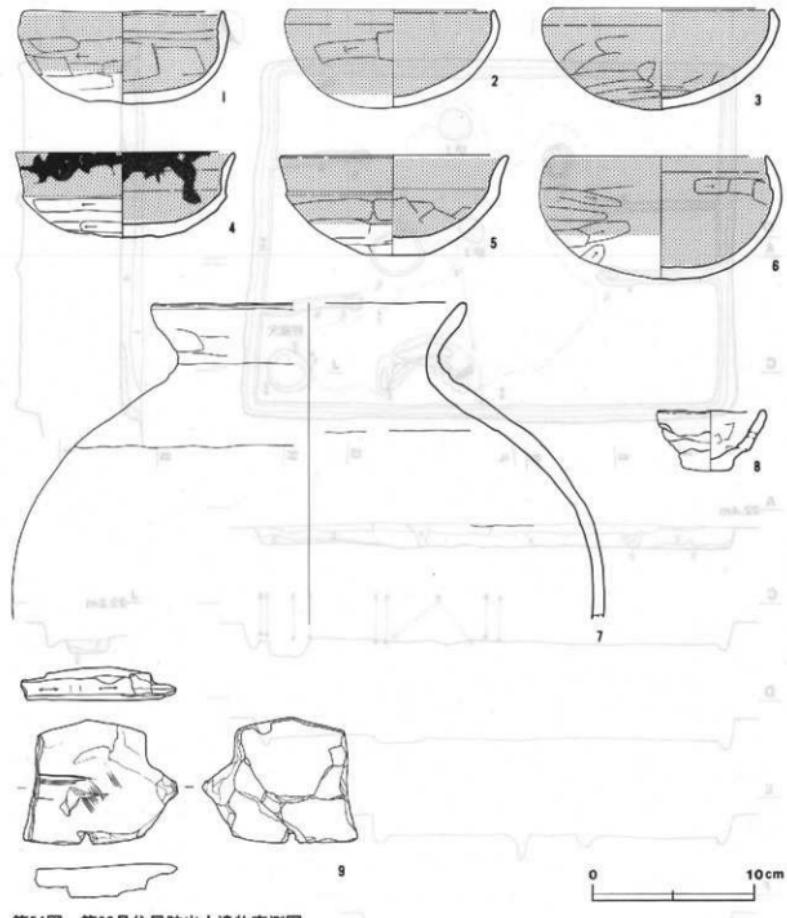
遺物 図示した遺物のはほとんどは、住居跡の南東部の床面から出土している。第54図1~3の壺は東コーナー付近から、4~6の壺は南東壁際中央部から、7の甕はP2付近、8の手捏土器は北東壁付近から出土している。

壺類は完存率が高い。9の砥石はP5付近床面から出土している。図示した遺物の他に、縄文土器片2点、土師器甕の口縁部片10点、体部片80点、壺の口縁部片6点、体部片7点、雲母片岩1点が出土している。

所見 本跡の間仕切溝はすべて主柱穴に連結するという新しい様相をもっている。遺物も模倣壺蓋が見られるようになることから、時期は5世紀末葉と考えられる。



第53図 第20号住居跡実測図



第54図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	环 土師器	A 12.7	丸底。体部は内窵して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部・底 部外面へラ削り後ナギ。内面ナギ。 内面から体部外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P166 90% P L41 覆土下層
		B 6.1				
2	环 土師器	A 12.4	丸底。体部は内窓して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口 縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外側 へラ削り。内面へラナギ。内面か ら体部外面赤彩。	砂粒 赤色、底部褐色 普通	P167 100% P L41 床面
		B 5.8				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴		手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 3	壺 土師器	A 13.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側 ヘラ削り。内面ヘラナデ。内・外 面赤彩。	砂粒 にぼい赤褐色 普通	P168 P L41 覆土下層	90%
		B 6.3					
4	壺 土師器	A 13.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり。口縁部との境に棱をもつ。口 縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底 部外側ヘラ削り。内面ナデ。内面 から口縁部外側赤彩。	砂粒・石英 褐色 普通	P169 P L41 床面 口縁油墨付着	100%
		B 5.3					
5	壺 土師器	A 14.2	平底。体部は内彎して立ち上がり。口縁部との境に棱をもつ。口 縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底 部外側ヘラ削り。内面ヘラ削り後 ナデ。内面から口縁部外側赤彩。	砂粒・石英 にぼい褐色 普通	P170 P L41 床面	80%
		B 6.3					
6	壺 土師器	C 4.1					
		A 13.3					
7	甕 土師器	B 7.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり。口縁部は内傾する。口縁部内 面に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底 部外側ヘラ削り。内面ナデ。内・ 外面赤彩。	砂粒・石英・黄石 にぼい黄褐色 普通	P171 P L41 床面 体部外面塗付着	100%
		A [19.6]					
8	手握土器 土師器	B (19.9)					
		A 6.8	平底。体部は外傾して立ち上 がる。	輪積み底を残す。内・外側ヘラ ナデ。	砂粒 褐色 普通	P172 P L41 床面	30%
		B 3.7					
		C 3.0					

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第54図 9	甕	石	7.7	9.8	2.0	—	165.6	凝灰岩	P ₄ 付近床面 Q22 PL56

第21号住居跡（第55図）

位置 調査区中央部, D3e1区。

規模と平面形 長軸5.99m, 短軸4.31mの長方形である。

主軸方向 N-72°-W

壁 壁高35~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北東コーナーから北西コーナーを通り南西コーナーまでと、東壁の南半分の壁下を巡る。上幅10~18cm, 深さ3~7cmで、断面は「U」字形である。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。東壁中央には幅30~45cm, 高さ10cmの馬の背状の高まりがあり硬化している。この高まりはP₄で一時途切れ、さらに貯藏穴を区切るようにして長方形状に巡り、出入り口施設に伴うものと思われる。

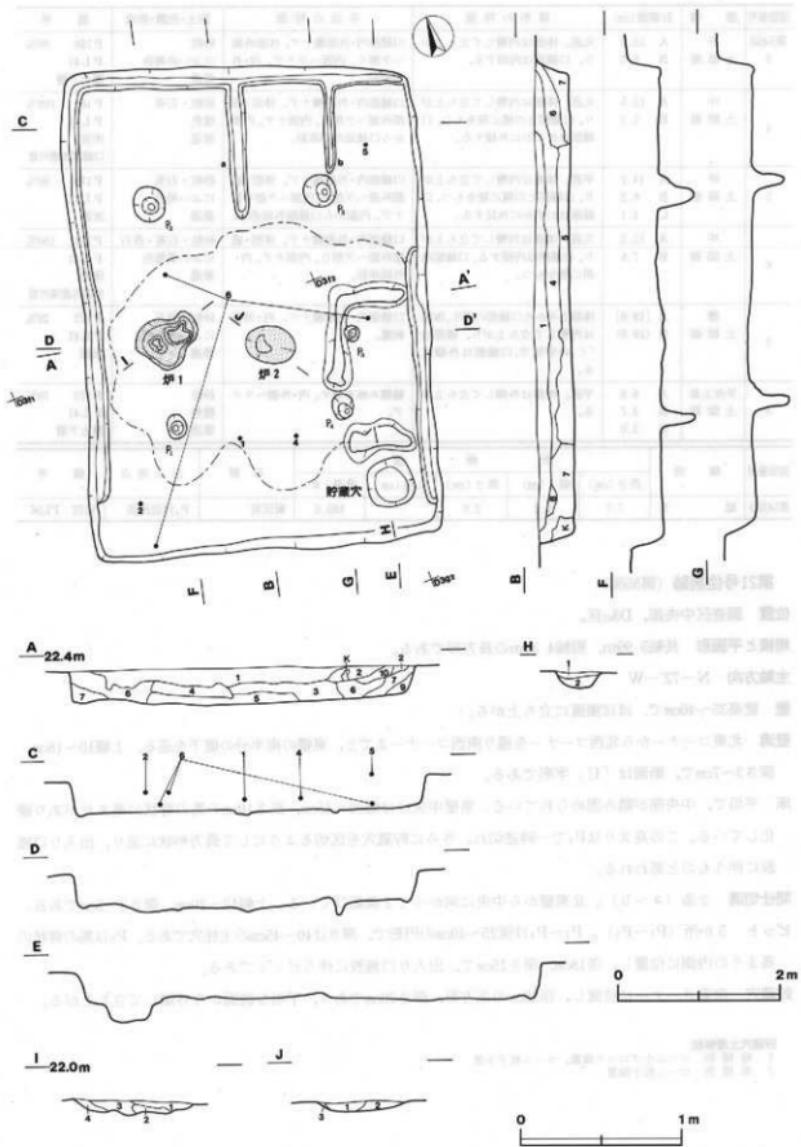
間仕切溝 2条(a~b)。北東壁から中央に向かって2条延びている。上幅12~20cm, 深さ3~5cmである。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は径25~40cmの円形で、深さは40~45cmの主柱穴である。P₅は馬の背状の高まりの内側に位置し、径18cm、深さ15cmで、出入り口施設に伴うピットである。

貯藏穴 南東コーナーに位置し、径58cmの正方形、深さ20cmであり、平坦な底面から外傾して立ち上がる。

貯藏穴土層解説

- 1 砂褐色 ローム小ブロック微量、ローム粒子少量
- 2 砂褐色 ローム粒子微量



第55図 第21号住居跡実測図

炉 2か所。炉 1は中央部から北寄りに位置し、長径70cm、短径40cmの不整形で、深さ5cmである。炉 2は中央部に位置し、長径60cm、短径45cmの楕円形で、深さ8cmである。いずれも地床炉である。

炉 1 土層解説

- 1 带赤褐色 桃土粒子少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 2 赤褐色 烧土粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化物微量
- 3 带赤褐色 ローム粒子・ローム中ブロック微量
- 4 带赤褐色 烧土小ブロック・焼土粒子少量

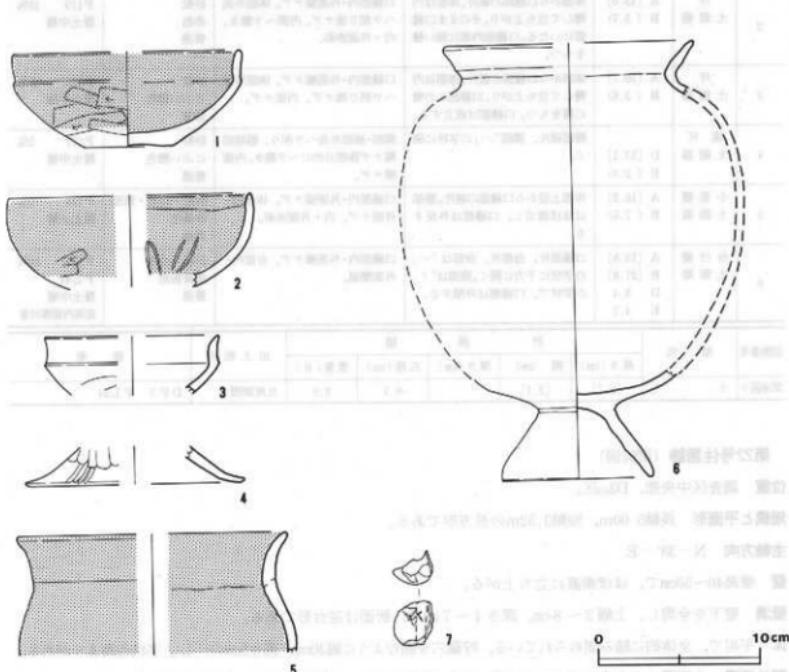
炉 2 土層解説

- 1 带赤褐色 烧土粒子少量、焼土小ブロック微量
- 2 带赤褐色 烧土粒子少量、焼土小ブロック微量
- 3 带褐色 烧土粒子少量、ローム粒子微量

覆土 10層からなる。ロームブロック、黒色土ブロックを含む人為堆積土層である。

土層解説

- 1 帯褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 2 帯褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 帯褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 帯褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・小ブロック微量
- 6 帯褐色 黒色土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 7 帯褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 8 褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 9 褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・小ブロック微量
- 10 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量



第56図 第21号住居跡出土遺物実測図

遺物 図示した遺物は、すべて覆土上・中層から出土したものである。第56図4の高基脚部、6の台付堀は古墳時代中期の遺物であり、住居跡南半分の覆土中から出土している。1・2・3の壺、5の小型壺が住居跡

絶時期の前後を示す遺物である。図示した遺物の他に、土師器壺の口縁部片5点、体部片193点、底部片6点、土師器壺の口縁部片43点、体部片106点、底部片1点、土師器壺の底部片1点が出土している。

所見 本跡は、床面には少量ではあるが焼土塊が見られることから焼失家屋と思われる。覆土にはロームブロックが含まれており、焼失後人為的に埋め戻され、その際遺物投棄が行われたと思われる。遺物のなかには第132図6の第1号竪穴遺構出土の須恵器壺蓋と接合するものがある。本跡も第1号竪穴遺構と同時期の5世紀末葉と思われる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 56図7	壺 土師器	A [14.0]	平底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面削離。内面から体部外面上位赤彩。	砂粒 赤褐色、底部褐色 普通	P174 40% PL41 覆土中層
		B 5.9				
		C 5.4				
2	壺 土師器	A [15.0]	体部から口縁部の破片。体部は内凹して立ち上がり、そのまま口縁部に接する。口縁部内面に側い棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。内面へラ磨き。内・外側赤彩。	砂粒 赤色 普通	P175 10% 覆土中層
		B (5.7)				
3	壺 土師器	A [10.7]	体部から口縁部の破片。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	P176 5% 覆土中層
		B (3.6)				
4	高壺 土師器	D [13.1]	脚部破片。脚部「ハ」の字状に開く。	脚部・底部外側へラ削り。底部横ナデ後部分的にへラ磨き。内面横ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	P177 5% 覆土中層
		E (2.4)				
5	小型壺 土師器	A [16.2]	体部上位から口縁部の破片。頭部はほぼ直立し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外側ナデ。内・外側赤彩。	砂粒・石英・雲母 赤褐色 普通	P178 5% 覆土上層
		B (7.5)				
6	台付壺 土師器	A [15.6]	口縁部片、台部片。台部は「ハ」の字状下方に開く。頭部は「く」の字状で、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。台部内・外側摩滅。	砂粒・小砾 浅褐色 普通	P179 10% PL41 覆土中層 底部内面焼付着
		B [27.0]				
		D 9.4				
		E 4.2				

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
56図7	土玉	[2.7]	[2.1]	—	0.5	8.9	北東側覆土	DP5 PL54

第22号住居跡(第57図)

位置 調査区中央部、D3es区。

規模と平面形 長軸5.00m、短軸3.52mの長方形である。

主軸方向 N-38°-E

壁 壁高40~50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を全周し、上幅3~8cm、深さ4~7cmで、断面は逆台形である。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。貯蔵穴を囲むように幅30cm、高さ5cmの「L」字状の高まりがある。

間仕切溝 北東壁から中央に向かって1条(a)延びている。上幅10~20cm、深さ9cmである。

ピット 南東壁中央部の壁際から43cm北西寄りに位置し、径23cmの円形、深さ13cmであり、出入り口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナーに位置し、長径65cm、短径60cmの長方形、深さは25cmである。平坦な底面から外傾して立ち上がり、断面は逆台形である。

貯藏穴土層解説

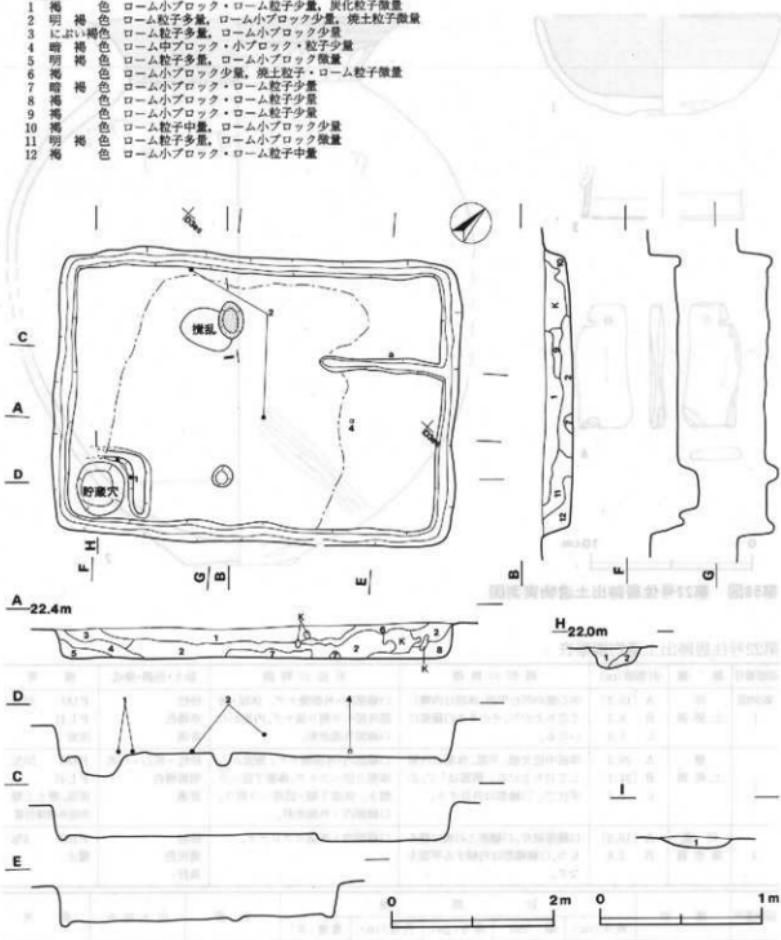
1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
 2 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量

炉 中央部から北西寄りに位置し、出入り口ピットと同一線上にある。長径45cm、短径30cmの橢円形、深さ8cmの地床炉である。覆土は、焼土小ブロック、炭化物及びローム粒子を含む褐色土である。

覆土 12層からなる。ローム小ブロック、ローム粒子を含む人為堆積土層である。

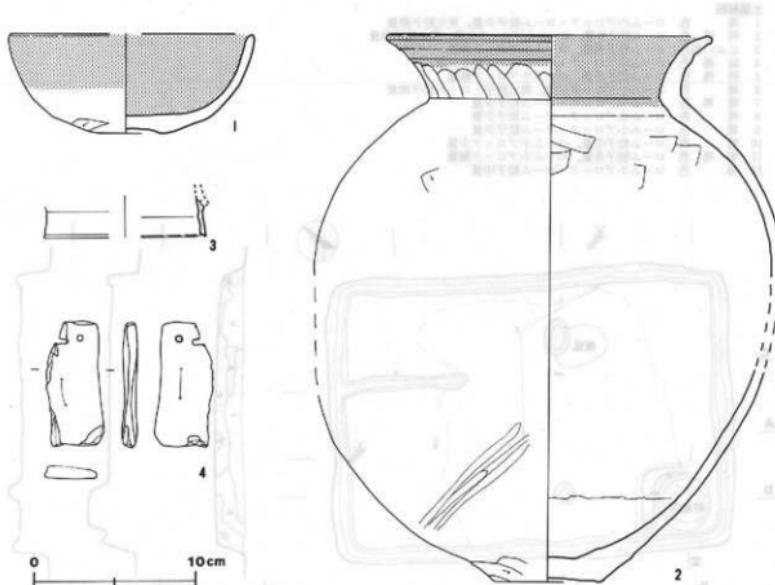
土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黄褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 にじみ 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子少量
- 5 明褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
- 6 混褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・ローム粒子微量
- 7 混褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 8 混褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 9 混褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 10 混褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 11 混褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
- 12 黄褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量



遺物 遺物量は少なく、図示できたのは、第58図1～4の土師器壺、甕、須恵器壺蓋、砥石の4点である。1は南コーナー、2は炉周辺北西壁際、4の砥石は住居跡東側から出土している。この他に土師器壺の口縁部片2点、体部片48点、土師器壺の口縁部片9点、体部片9点の細片が出土している。

所見 本跡は第20・21号住居跡と同様に長方形で、コーナーに貯蔵穴、出入口に高まりをもっており、共通性が窺える。時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第58図 第22号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第58図 1	土師器	A [15.2] B 6.3 C 4.0	中心部が凹む平底。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外側へラ削り後ナデ。内面から口縁部外側赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P181 30% P L41 床面	
2	土師器	A 20.3 B [34.1] C 6.4	体部中位欠損。平底。体部は内側して立ち上がる。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部から体部上位へラナダ。体部下位へラ磨き。体部下端・底部へラ削り。口縁部内・外側赤彩。	砂粒・長石・石英 明黄褐色 普通	P182 50% P L41 床面、覆土上層 体部外側赤彩付着	
3	壺蓋 須恵器	A [10.0] B 2.6	口縁部破片。口縁部との境に後をもつて口縁部は内側する平面をなす。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒 黄灰色 良好	P183 5% 覆土	
図版番号	種別	計測値			石質	出土地点	備考
第58図4	砥石	長さ(cm) 7.7	幅(cm) 3.6	厚さ(cm) 0.9	孔径(cm) 0.4	重量(g) 37.0	凝灰岩 南東部覆土 Q25 P L36

第25号住居跡（第59図）

位置 調査区中央部、D3m区。

規模と平面形 長軸3.33m、短軸3.12mの方形である。

長軸方向 N-28°-W

壁 耕作による攪乱を受けていたため、壁はほとんど残存していない。

床 中央部のわずかな部分が踏み固められている。

ピット 2か所（P₁～P₂）。P₁は径65cmの円形で、深さ33cm、断面は「U」字形である。P₂は径60cmの円形で、深さ18cm、断面は平底で階段状の掘り込みをしている。

貯蔵穴 2か所。北西部に貯蔵穴1が、北東部に貯蔵穴2が位置し、いずれも径90cmの円形で、深さ50・60cmである。両者とも平坦な底面から大きく外傾して立ち上がり、断面は逆台形である。覆土は人為堆積土層である。

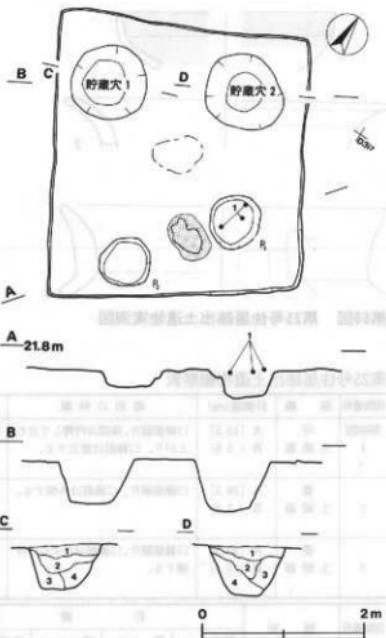
貯蔵穴1 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、燒土粒子・ローム小ブロック微量
- 3 明褐色 ローム粒子多量、燒土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土粒子微量

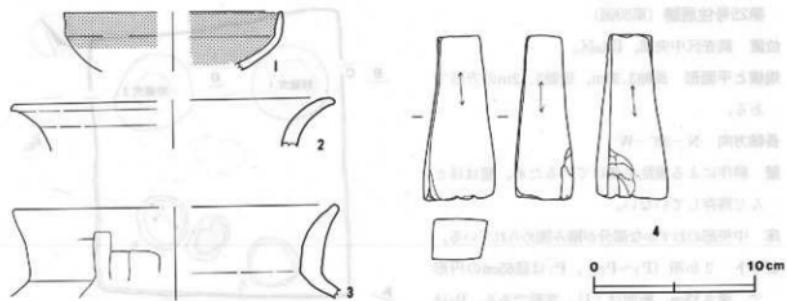
貯蔵穴2 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量

炉 中央部から南東寄りに位置し、長径60cm、短径40cmの楕円形の地床炉である。
覆土 残っていた覆土が薄く確認できなかった。
遺物 土師器壺の口縁部片9点、体部片120点、底部片1点、土師器壺の口縁部片3点、体部片2点が出土しており、土師器壺の割合が高い。第60図1の土師器壺は住居跡東側の覆土、2・3の土師器壺、4の磁石は住居跡南東部の覆土から出土している。
所見 本跡は、狭い床面積の割合に対して、複数の面積の広い貯蔵穴をもつ構造である。炉は付設しているものの、居住を目的としたとは考えにくく、倉庫的な用途の建物跡の可能性も考えられる。時期は出土遺物から5世紀末葉から6世紀初頭と思われる。



第59図 第25号住居跡実測図



第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考								
第60図 1	坏 土 烧 器	A [13.5] B (3.6)	口縁部破片。体部は内側して立ち上がり。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内部から 口縁部外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P191 5% 覆土								
2	壞 土 烧 器	A [19.5] B (3.0)	口縁部破片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぼい黄橙色 普通	P481 5% 覆土下層								
3	壞 土 烧 器	A [20.3] B (5.4)	口縁部破片。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面 へラ削り。	砂粒 にぼい黄橙色 普通	P482 5% 覆土下層								
図版番号		長さ(cm)		幅(cm)		厚さ(cm)		孔径(cm)		重量(g)		石質	出土地点	備考
第60図4	紙	10.2		4.5		3.5		—		179.7		凝灰岩	南東部覆土	Q27 PL56

第26号住居跡 (第61図)

位置 調査区中央部, D3js区。

重複関係 本跡が第30号住居跡の南西部を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 耕作による搅乱を受けているため明確な壁はとらえられなかつたが、長軸3.98m、短軸3.64mの

方形と推定される。

長軸方向 N-20°-W

壁 南西壁の一部が残っており、壁高は13cmで、外傾して立ち上がる。

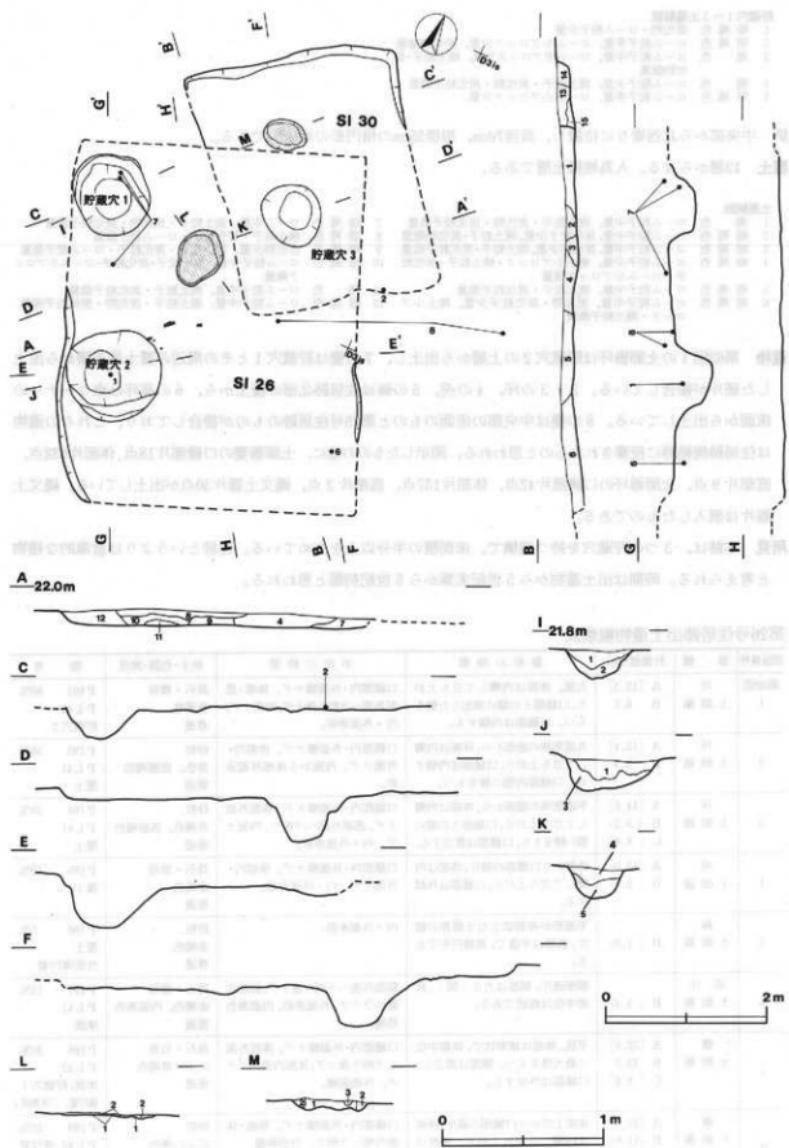
床 踏み締められている面は見られない。

貯蔵穴 3か所。西コーナーに貯蔵穴1が、南西壁南寄りに貯蔵穴2が、北コーナーに貯蔵穴3が位置する。

貯蔵穴1は長径101cm、短径95cmの円形で、深さ35cm、断面は擂鉢状である。貯蔵穴2は径113cmの円形で、

深さ45cm、断面は擂鉢状である。貯蔵穴3は長径80cm、短径70cmの橢円形で、深さ30cm、断面は「U」字形

である。



第61図 第26・30号住居跡実測図

貯蔵穴1~3 土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量
 2 明褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化物微量
 3 海褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
 4 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
 5 明褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

炉 中央部から北西寄りに位置し、長径70cm、短径55cmの橢円形の地床炉である。

覆土 12層からなる。人為堆積土層である。

土層解説

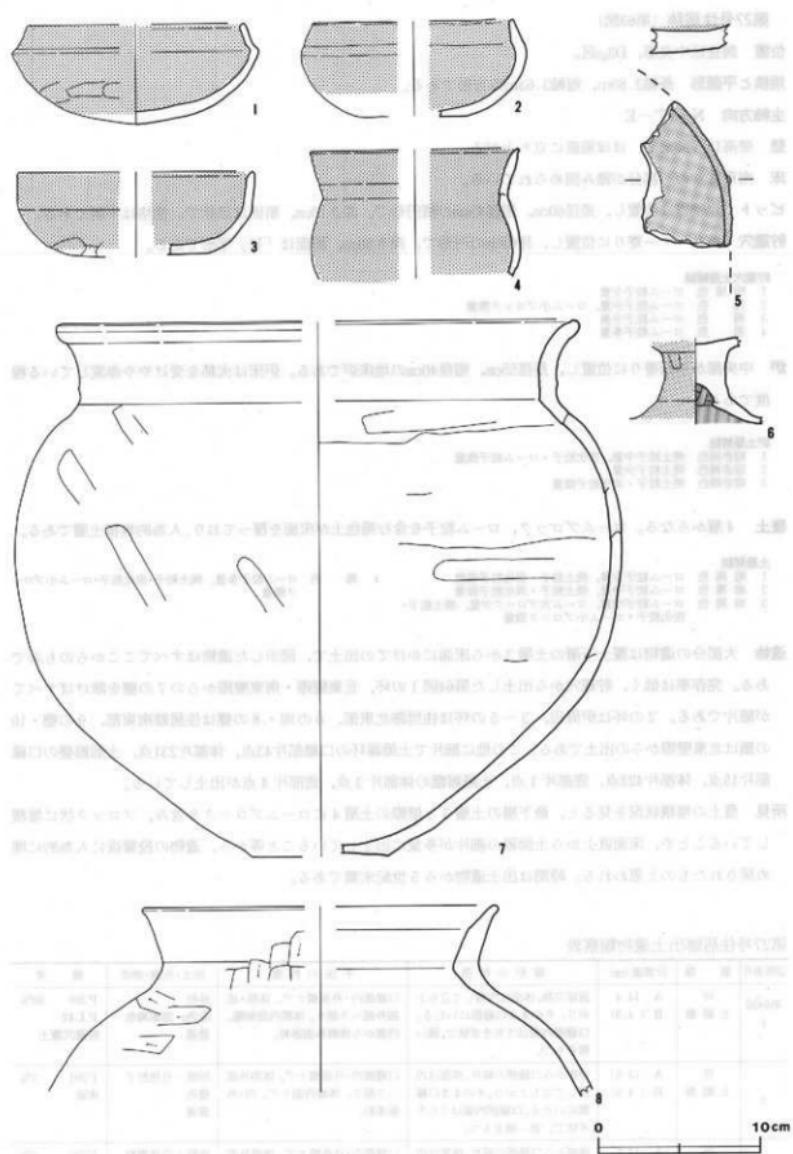
- | | | | |
|-------|---------------------------------------|--------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム中量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子・炭化物微量 | 8 暗褐色 | 炭化粒子・炭化粒子・ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化物少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | 炭化物少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子 | 10 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロッ
ク微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化物・炭化粒子少量、焼土小ブ
ロック・焼土粒子微量 | 12 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |

遺物 第62図1の土師器坏は貯蔵穴2の上層から出土し、7の甕は貯蔵穴1とその周辺の覆土最下層から出土した破片が接合している。2・3の坏、4の甕、5の鉢は住居跡北部の覆土から、6の高坏は東コーナーの床面から出土している。8の甕は中央部の床面のものと第25号住居跡のものが接合しており、これらの遺物は住居跡廃絶時に投棄されたものと思われる。図示したものの他に、土師器甕の口縁部片18点、体部片632点、底部片9点、土師器坏の口縁部片42点、体部片137点、底部片2点、繩文土器片30点が出土している。繩文土器片は混入したものである。

所見 本跡は、3つの貯蔵穴を持つ遺構で、床面積の半分以上を占めている。住居というよりは倉庫的な建物と考えられる。時期は出土遺物から5世紀末葉から6世紀初頭と思われる。

第26号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	型 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第62図 1	坏 土 师 器	A [13.3] B 6.2	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に突出した棱をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面部赤影。	長石・雲母 赤褐色 普通	P192 60% P L41 貯蔵穴2
	坏 土 师 器	A [12.4] B 5.9	丸底軽快の底部から、体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部内面に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内面から体部外面赤影。	砂粒 赤褐色 普通	P193 50% P L41 覆土
3	坏 土 师 器	A [14.6] B (5.2) C [8.4]	平底軽快の底部から、体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に鋸・彫をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側ナデ。底部外へラ削り。内面ナデ。内・外面部赤影。	砂粒 赤褐色 普通	P194 20% P L41 覆土
4	甕 土 师 器	A [13.0] B (8.0)	体部から口縁部の被片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外ナデ。内・外面部赤影。	長石・雲母 赤褐色 普通	P195 10% 覆土
5	鉢 土 师 器	B (1.8)	平面形が角形状となる底部の被片。底部は平底で、長楕円形である。	内・外面部赤影。	砂粒 赤褐色 普通	P196 5% 覆土 外側付着
6	高 坏 土 师 器	B (5.4)	脚部破片。底部は大きく開く。脚部中位は柱状である。	脚部外側へラ削り後ナデ。脚部内面へラナデ。外側赤影、内面黒色処理。	長石・雲母 赤褐色 普通	P197 15% P L41 床面
7	甕 土 师 器	A [32.6] B 33.2 C [8.6]	平底。体部は球形で、体部中位に最大溝をもつ。頸部は直立し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。体部内面へラナデ。外側削離。	長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P198 30% P L42 床面、貯蔵穴1 床面、2次焼成
8	甕 土 师 器	A [21.7] B (11.8)	体部上位から口縁部の被片。体部は内側して立ち上がり、頸部は「く」字形状である。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部・体部外側へラ削り。内面削離。	砂粒 にぶい褐色 普通	P199 10% P L42 煤付着 床面、25住覆土



第62図 第26号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡（第63図）

位置 調査区中央部, D3g3区。

規模と平面形 長軸3.80m, 短軸3.63mの方形である。

主軸方向 N-67°-E

壁 壁高15~20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 南東寄りの一部分が踏み固められている。

ピット 北壁際に位置し、長径60cm、短径45cmの梢円形で、深さ10cm、断面は皿状で、性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー寄りに位置し、径63cmの円形で、深さ30cm、断面は「U」字形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量

炉 中央部から西寄りに位置し、長径55cm、短径40cmの地床炉である。炉床は火熱を受けやや赤変している程度である。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 燃土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 燃土粒子少々、炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 燃土粒子・炭化粒子微量

覆土 4層からなる。ロームブロック、ローム粒子を含む褐色土が床面を覆っており、人為的堆積土層である。

土層解説

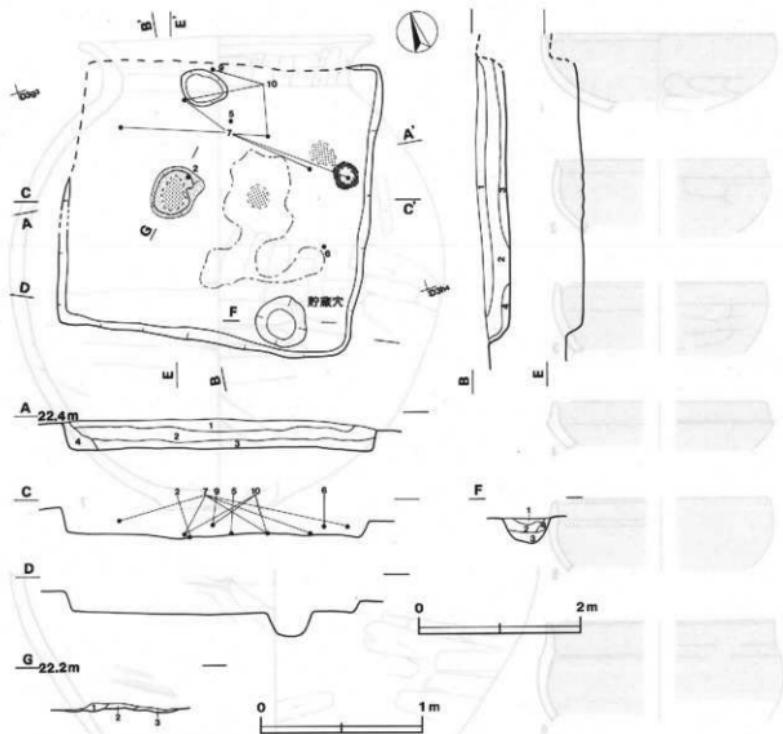
- 1 暗褐色 ローム粒子少量、燃土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、燃土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック少々、燃土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物 大部分の遺物は覆土下層の土層3から床面にかけての出土で、図示した遺物はすべてここからのものである。完存率は低く、貯蔵穴から出土した第64図1の壺、北東壁際・南東壁際からの7の甕を除けばすべてが細片である。2の壺は炉周辺、3~5の甕は住居跡北東部、6の甕・8の甕は住居跡南東部、9の甕・10の甕は北東壁際からの出土である。この他に細片で土師器壺の口縁部片43点、体部片231点、土師器甕の口縁部片15点、体部片422点、底部片1点、土師器甕の体部片3点、底部片4点が出土している。

所見 覆土の堆積状況を見ると、最下層の土層3と壁際の土層4にロームブロックを含み、ブロック状に堆積していることや、床面上から土師器の細片が多量に出土していること等から、遺物の投棄後に人為的に埋め戻されたものと思われる。時期は出土遺物から5世紀末葉である。

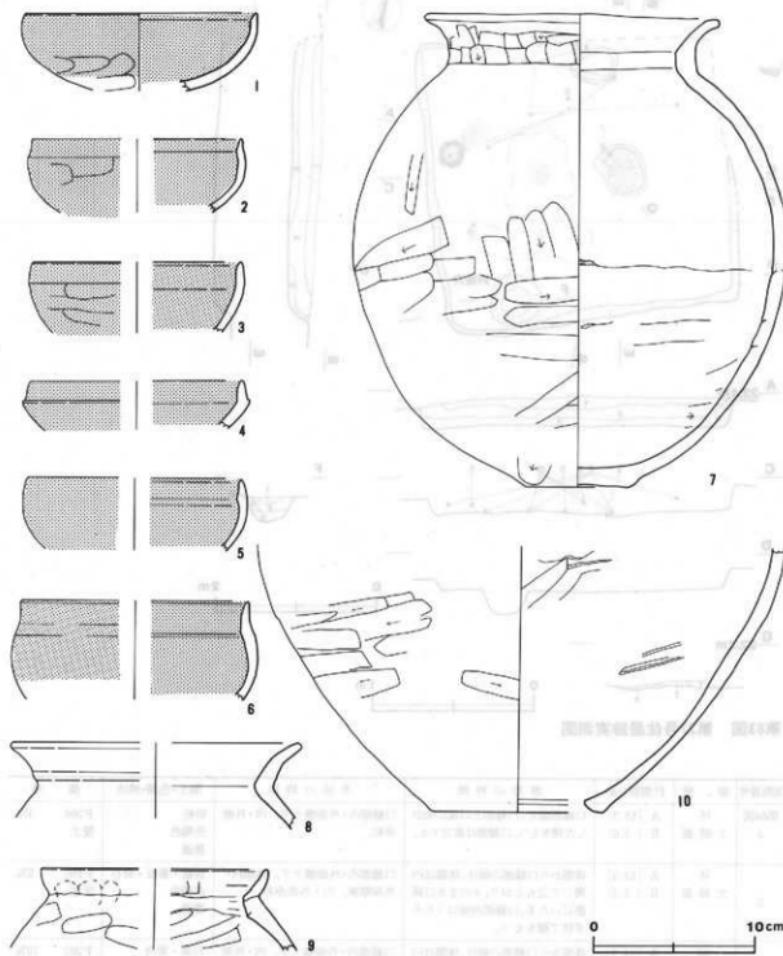
第27号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	壺 土師器	A 14.4 B (4.9)	底部欠損。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部内面はうつそぎ状で、弱い腹をもつ。	口縁部内・外縁削り。体部・底面外へラ削り。体部内面剥離。内面から体部外側赤影。	砂粒 赤色。底部褐色 普通	P 200 80% P L42 貯蔵穴覆土
2	壺 土師器	A [13.0] B (4.6)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部内面はうつそぎ状で、弱い腹をもつ。	口縁部内・外縁削りナダ。体部外側へラ削り。体部内面ナダ。内・外表面赤影。	砂粒・白色粒子 褐色 普通	P 201 5% 床面
3	壺 土師器	A [13.0] B (4.4)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外縁削りナダ。体部外側へラ削り後ナダ。体部内面ナダ。内・外表面赤影。	砂粒・白色微粒 褐色 普通	P 203 5% 覆土



第63図 第27号住居跡実測図

図版番号	器種類	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第64図 4	环 土器	A [13.2] B (3.0)	口縁部破片。口縁部との境に突出した棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P204 5% 覆土
5	环 土器	A [13.5] B (3.3)	体部から口縁部の稜片。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部内面はうらそぎ状で棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面厚塗。内・外面赤彩。	砂粒・豐母・長石 赤褐色 普通	P205 5% 床面
6	虎 土器	A [14.2] B (6.2)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	石英・豐母 赤褐色 普通	P202 10% 床面
7	甕 土器	A 18.3 B 29.3 C 6.3	平底。体部は球形状で、最大径を中位にもち。頸部は短く直立し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒 中粒 橙色 普通	P206 60% P L42 燻付着 覆土下層
8	甕 土器	A [18.0] B (5.4)	口縁部破片。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石 にぼい黄橙色 普通	P207 5% 覆土



第64図 第27号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第64図 9	小型 土 節 器	A [14.0] B [5.0]	口縁部破片。頸部は「く」の字状で、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ヘナダ。頸部・体部外面ヘラ削り。内面ヘナダ。	砂粒 橙色 普通	P208 5% 覆土中層
10	瓶 土 節 器	B [16.5] C [10.6]	体部から体部下半分の破片。無底式。体部は内凹して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。内面ヘナダ。 内面剥離が著しい。	砂粒 にぼい橙色 普通	P209 20% 覆土下層

第28号住居跡（第65・66図）

位置 調査区中央部, D31区。

規模と平面形 一辺が9.25mの方形である。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高45~80cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を全周し、上幅14~24cm、深さ5~7cmで、断面は「U」字形である。

間仕切溝 13条（a~m）。北東壁から4条（a~d）、南西壁から4条（e~h）、北西壁から5条（i~m），それぞれ中央にむかって延びている。a~g, i, j, l, mは上幅20~40cm、深さ6~12cm、断面は「U」字形である。h・kは他の間仕切溝よりも幅広く、上幅48~55cm、深さ10~18cm、断面は逆台形である。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。南東壁中央部には、幅10~20cm、高さ8cmの半円状の高まりがある。

位置や形態から、出入り口施設と思われる。

ピット 8か所（P₁~P₈）。P₁~P₇は径40~80cmの円形、深さ30~65cmで、いずれも主柱穴と考えられる。P₈は長径63cm、短径55cmの楕円形、深さ35cmで、出入り口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は東コーナーに位置し、径80cmの円形で、深さ60cmである。貯蔵穴2は出入り口施設の内側に位置し、長径97cm、短径85cmの楕円形で、深さ35cmである。いずれも平坦な底面から外傾して立ち上がり、断面は逆台形である。

貯蔵穴1・2 土層解説

1	褐 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	暗 暗 色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子量
2	褐 色	ローム粒子中量、ローム大ブロック・中ブロック・小ブロック少量	5	暗 暗 色	ローム粒子少量、焼土粒子中量、炭化粒子少量、炭化物微量
3	暗 暗 色	ローム粒子少中量、炭化粒子少量	6	褐 色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

炉 2か所。炉1は中央部北東寄りに位置し、長径156cm、短径80cmの不整梢円形で、7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉2は炉1の南部に接し、長径100cm、短径80cmの不整梢円形で、4cmほど掘りくぼめた地床炉である。

炉1・2 土層解説

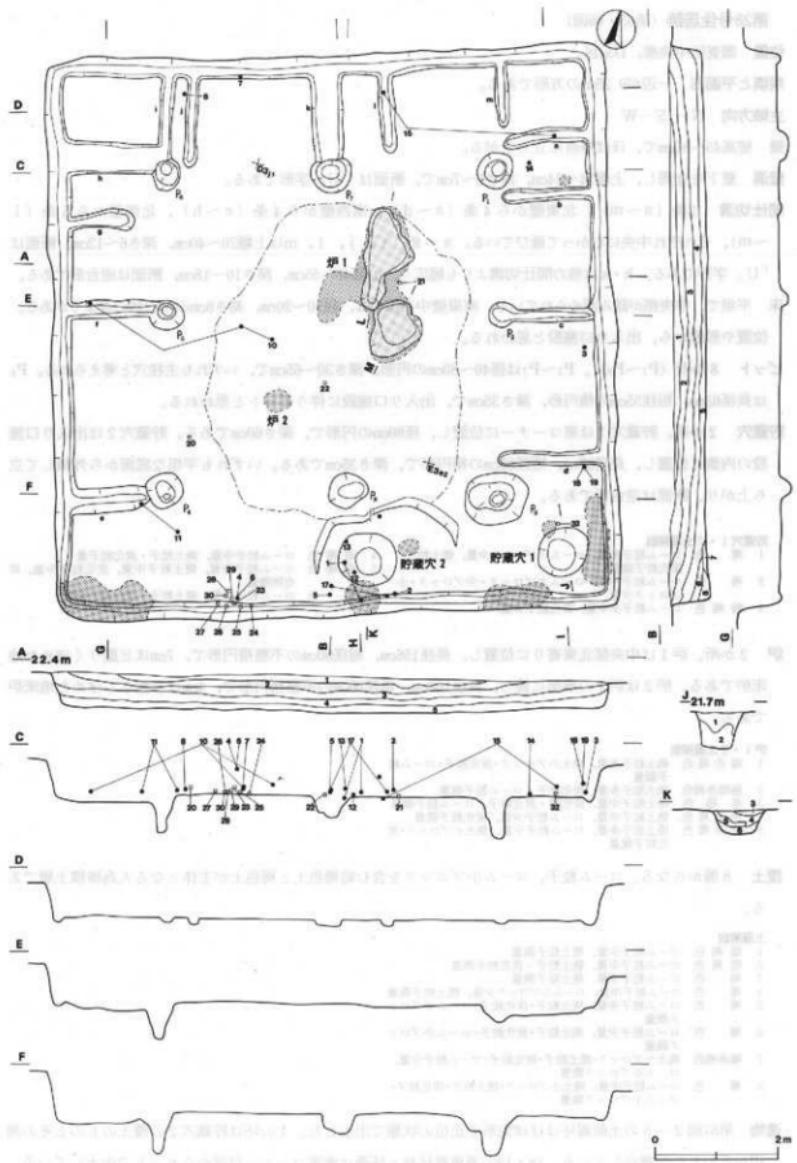
1	暗 赤 暗 色	焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
2	暗暗赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子・ローム粒子微量
3	赤 褐 色	焼土粒子中量、炭化物・炭化粒子・ローム粒子微量
4	暗 赤 暗 色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
5	暗 赤 暗 色	焼土粒子多量、ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量

覆土 8層からなる。ローム粒子、ローム小ブロックを含む暗褐色土と褐色土が主体となる人為堆積土層である。

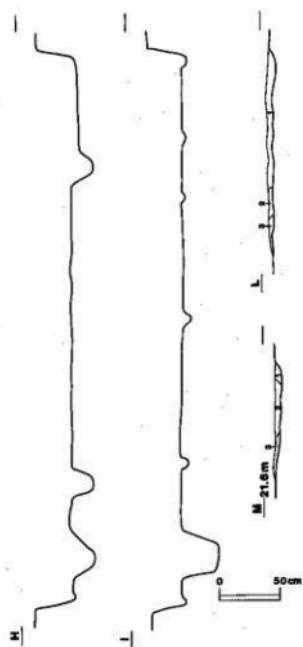
土層解説

1	暗 暗 色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2	暗 暗 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗 暗 色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
4	暗 暗 色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
5	暗 暗 色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
6	褐 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
7	暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
8	褐 色	ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物 第67図2~5の土師器壺はほぼ完形で正位の状態で出土した。1の壺は貯蔵穴2の覆土のものとその周辺からのものが接合している。18・19の須恵器壺身と壺蓋は南東コーナー付近からセッテで出土している。33の滑石原石は南東コーナー付近の床面から、21の偏平石製品は中央部の覆土下層から、22~32の白玉のう



第65図 第28号住居跡実測図(1) (出土中古器物は不記載) (A-Eは平面図、F-Mは断面図)



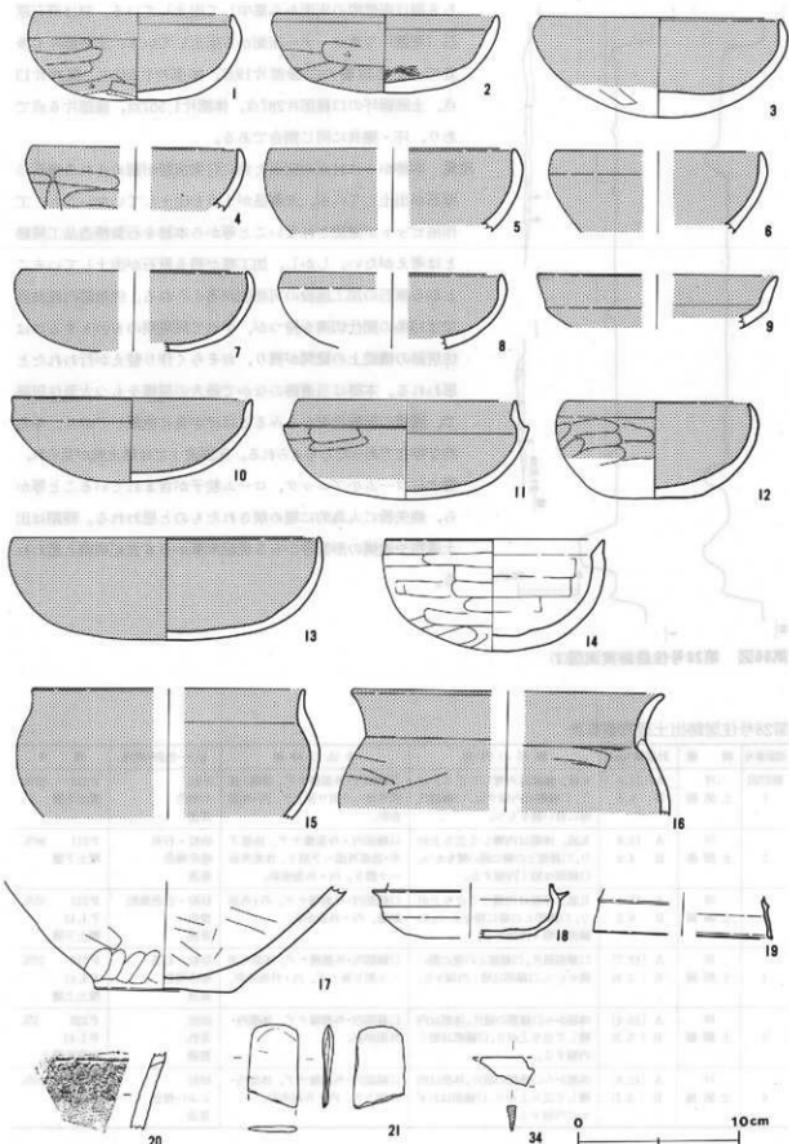
第28号住居跡実測図(2)

ち8個は南壁際の床面から集中して出土している。33は滑石原石（荒削）で東コーナー床面から出土している。土器細片も多量で、土師器壺の口縁部片19点、体部片1,031点、底部片13点、土師器壺の口縁部片287点、体部片1,557点、底部片6点であり、壺・壺共に同じ割合である。

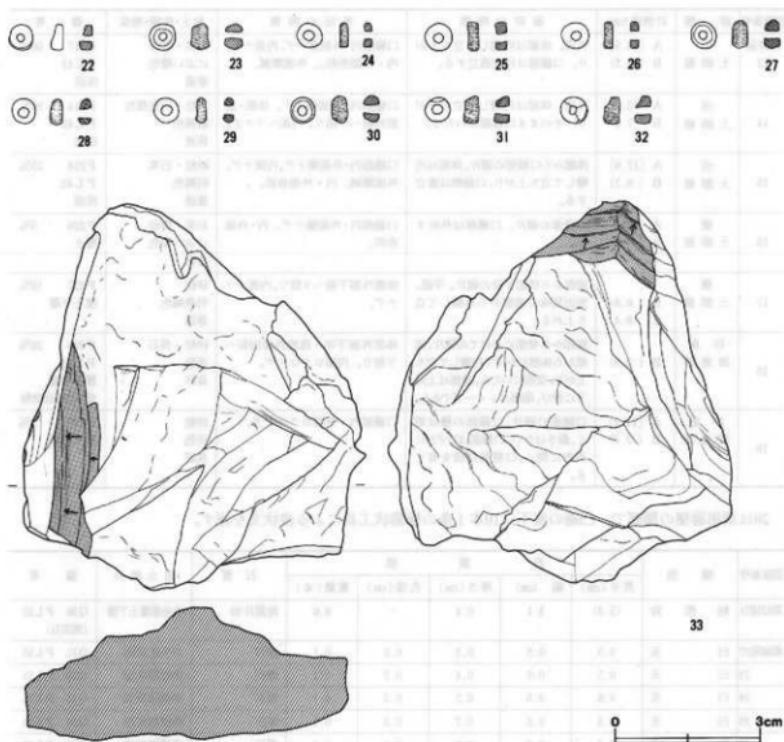
所見 本跡からは11点の白玉と共に打突痕跡が認められる滑石の原石が出土している。未製品が1点も出土していないこと、工作用ピットが確認されないこと等から本跡を石製模造品工房跡とは考えがたい。しかし、加工痕が残る原石が出土していることから原石の加工施設の可能性が考えられる。住居跡内部施設では13条の間仕切溝を持つが、すべて同時期のものとするには住居跡の機能上の疑問が残り、おそらく作り替えが行われたと思われる。本跡は当遺跡のなかで最大の規模をもつ大型住居跡で、遺構の配置状況からみるとほぼ中央に位置しており、中心的な存在であったと考えられる。床面直上には焼土塊が見られ、覆土にローム小ブロック、ローム粒子が含まれていること等から、焼失後に人為的に埋め戻されたものと思われる。時期は出土遺物や遺構の形態等から5世紀末葉から6世紀初頭と思われる。

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種類	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第67図 1	土師器	A 12.4 B 5.4	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部内面に弱い棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底 部外面ヘラ削り後ナデ。内・外面 赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P210 95% 覆土下層
		A 13.8 B 4.8	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部は短く内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部下 半・底部外面ヘラ削り。体部外面 ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・石英 暗赤褐色 普通	P211 90% 覆土下層
2	土師器	A 15.1 B 6.2	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部は短く内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面 削離。内・外面赤彩。	砂粒・白色微粒 橙色 普通	P212 95% P L42 覆土下層
		A [12.7] B [3.9]	口縁部破片、口縁部との境に弱い 棱をもつ。口縁部は短く内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英 暗赤褐色 普通	P219 10% P L42 覆土上層
3	土師器	A [15.4] B [5.3]	体部から口縁部の破片。体部は内 側して立ち上がり、口縁部は短く 内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P220 5% P L43 肝臓穴覆土
		A [12.8] B [5.1]	体部から口縁部の破片。体部は内 側して立ち上がり、口縁部はわず かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 におい褐色 普通	P222 10% 覆土上層



第67図 第28号住居跡出土遺物実測図(1)



第68図 第28号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器 標	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第67図 7	坏 土 勺 器	A [14.0] B (5.1)	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。外面部磨滅。	砂粒・石英・霞母 赤褐色 普通	P223 10% 覆土下層
8	坏 土 勺 器	A [13.6] B (4.7)	口縁部破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。内面部磨滅。	砂粒 明褐色 普通	P224 15% 覆土下層
9	坏 土 勺 器	A [15.0] B (3.3)	口縁部破片。口縁部との境に棱を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 橙色 普通	P225 5% 覆土
10	坏 土 勺 器	A 14.9 B 5.3	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内面上位・外面部赤彩。	石英・霞母 赤色 普通	P215 60% P L42 覆土下層
11	坏 土 勺 器	A 12.4 B 6.2	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な後縁をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。内面から体部外面上位赤彩。内面部剥離。	砂粒 赤褐色 普通	P213 100% P L42 覆土下層
12	坏 土 勺 器	A 13.6 B 6.2	平底灰系。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側上位へラ削り後ナデ。内面ナデ。内面から体部外面上位赤彩。	石英・長石・霞母 赤褐色 普通	P216 60% P L42 床面

記版番号	種類	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第67図 13	坏 土 鈕 器	A [18.9] B (6.5)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。外面摩滅。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P217 50% PL42 床面
14	坏 土 鈕 器	A 13.8 B 7.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外表面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・白色微粒 暗褐色 普通	P214 95% PL42 床面
15	坏 土 鈕 器	A [17.0] B (8.1)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内面ナデ。外面摩滅。内・外面赤彩。	砂粒・石英 明黄色 普通	P218 25% PL42 床面
16	壞 土 鈕 器	A [19.5] B (7.4)	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P226 5% 覆土
17	壞 土 鈕 器	B (6.8) C 8.4	底部から体部下位の破片。平底。突出気味の底部から外傾して立ち上がる。	体部下面下端ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・明黄色 普通	P227 10% 覆土下層
18	坏 身 須 恵 器	B (3.5)	底部から受部にかけての破片。底部から体部にかけて内彎して立ち上がり、受部にいたる。受部は外方に伸び、縦部はシャープである。	体部下面下半・底部外表面回転ヘラ削り。内面ロクロナデ。	砂粒・長石 灰色 良好	P228 20% PL43 覆土中層 受部底部自然地
19	坏 蓋 須 恵 器	A [11.2] B (2.7)	口縁部の破片。口縁部は短く、起きはない。口縁部はわずかに外方に開く。口唇部に段を有する。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒 灰色 良好	P229 5% 覆土中層

20は須恵器裏の頸部で、凸線の直下に10本1条の櫛齒状工具による波状文を施す。

記版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第67図21	粘板岩	(5.2)	3.1	0.4	—	9.6	泥質片岩	中央部覆土下層 (黒田石)	Q30 PL55
第68図22	臼 玉	0.5	0.5	0.3	0.2	0.1	滑石	中央部床面	Q31 PL55
23	臼 玉	0.5	0.6	0.4	0.2	0.1	滑石	南壁床面	Q32 PL55
24	臼 玉	0.6	0.5	0.2	0.3	0.1	滑石	南壁床面	Q33 PL55
25	臼 玉	0.6	0.6	0.2	0.3	0.1	滑石	南壁床面	Q34 PL55
26	臼 玉	0.6	0.6	0.2	0.3	0.1	滑石	南壁床面	Q35 PL55
27	臼 玉	0.5	0.6	0.3	0.2	0.1	滑石	南壁床面	Q36 PL55
28	臼 玉	0.5	0.5	0.3	0.3	0.1	滑石	南壁床面	Q37 PL55
29	臼 玉	0.5	0.5	0.2	0.3	0.1	滑石	南壁床面	Q38 PL55
30	臼 玉	0.5	0.6	0.3	0.3	0.1	滑石	南壁床面	Q39 PL55
31	臼 玉	0.5	0.6	0.3	0.1	滑石	南東壁床面	Q40 PL55	
32	臼 玉	0.6	0.6	0.3	0.2	0.1	滑石	南東部覆土	Q41 PL55
33	原 石	8.0	7.2	3.1	—	179.0	滑石	東コーナー床面	Q29 PL55
記版番号	種別	計測値					出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第67図34	不明 鉄製品	(3.9)	(1.9)	0.6	3.7		北東側覆土	M5	

35は須恵器裏の頸部で、凸線の直下に櫛状工具による波状文を施す。

第30号住居跡（第61図）

位置 調査区中央部, D3s区。

重複関係 本跡が第26号住居跡に南西部を掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.10m, 短軸2.95mの長方形と推測される。

主軸方向 N-36°-W

壁 耕作による攪乱や第26号住居跡の掘り込みのために北西壁のみが残存する。壁高12cmで、外傾して立ち上がる。

床 踏み締められている面は見られない。

炉 中央部から北西寄りに位置し、長径55cm、短径40cmの楕円形の地床炉である。

覆土 3層からなる。土層断面図中、土層13~15が本跡の覆土で、人為堆積土層である。

土層解説

13 暗褐色 土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム中ブロッ

ク微量

14 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロッ

ク微量

15 黄褐色 ローム粒子少量

遺物 遺物のはほとんどは覆土中からの細片

で、図示できる遺物は第70図1の土師器

甕のみである。1は西コーナーの覆土か

らの出土である。

所見 本跡は、かなり小規模な住居跡である。時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 I	甕 土師器	A [19.4] B [4.5]	口縁部の破片。器部は「く」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内・外縁横ナデ。摩擦が著しい。	砂粒 褐色 不良	P483 5% 底面



第69図 第30号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡（第70図）

位置 調査区北部, B3s区。

規模と平面形 長軸2.38m, 短軸1.71mの長方形

である。

主軸方向 N-6°-W

壁 掘り込みが浅いため、壁はほとんど残存していない。

床 踏み締められている面は見られない。

炉 中央部に位置し、径40cmの円形の地床炉である。熱を受けた痕跡がある程度で硬化していない。

覆土 4層からなり、土層1・2を主体とする。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量

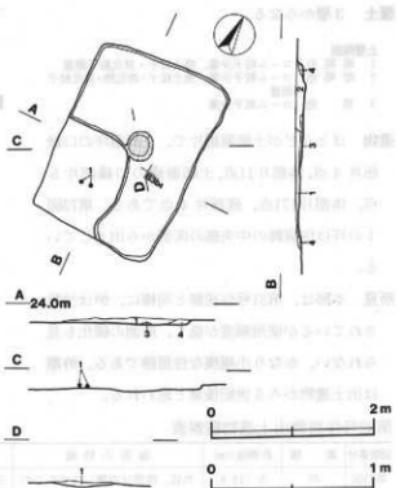
2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム

小ブロック微量

3 黄褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・小ブロッ

ク微量

4 黄褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量



第70図 第31号住居跡実測図

遺物 ほとんどが細片で、土師器甕の体部片115点、底部片3点、土師器坏の口縁部片5点、体部片13点が出土している。図示できたものは第71図1の坏のみである。

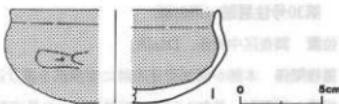
所見 本跡は、炉は付設されてはいるが使用頻度が低く、

床面の硬化も見られないかなり小規模な住居跡である。

時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	坏 土師器	A [13.0] B 5.8	丸底。体部は内縫して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部はうちそぎ状で、内面に縫をもつ。	口縁部内・外縫横ナデ。体部・底部外縫ヘラ削り。内・外縫赤彩。	砂粒 赤色 普通	P238 40% PL43 床面



第71図 第31号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡（第72図）

位置 調査区中央部、D2s区。

規模と平面形 一辺が2.50mの隅丸方形である。

主軸方向 N-33°W

壁 挖り込みが浅いため、壁はほとんど残存していない。

床 踏み締められている面は見られない。

炉 中央部から北西寄りに位置し、径28cmの円形の地床炉である。熱を受けた痕跡がある程度で硬化していない。

覆土 3層からなる。

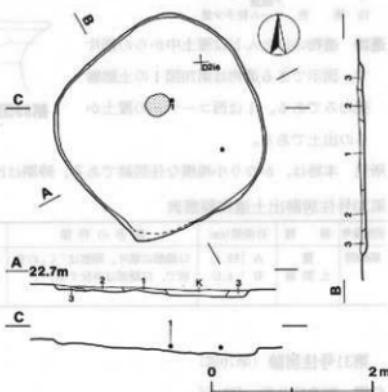
土層解説
1 線褐色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 線褐色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
3 線褐色 ローム粒子少量

遺物 ほとんどが土師器細片で、土師器坏の口縁部片4点、体部片11点、土師器甕の口縁部片5点、体部片171点、底部片4点である。第73図1の坏は住居跡の中央部の床面から出土している。

所見 本跡は、第31号住居跡と同様に、炉は付設されているが使用頻度が低く、床面の硬化も見られない、かなり小規模な住居跡である。時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 1	坏 土師器	A [13.8] B (5.0)	丸底。体部は内縫して立ち上がり、口縁部との境に弱い縫をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外縫横ナデ。体部・底部外縫ヘラ削り。	砂粒 赤褐色 普通	P239 10% 床面



第72図 第32号住居跡実測図



第73図 第32号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡（第74図）

位置 調査区中央部東側、E36区。

規模と平面形 長軸2.32m、短軸2.08mの不整形である。

長軸方向 N-83°-E

壁 壁高40~45cmで、垂直に立ち上がる。

床 踏み締められている面は見られない。

ピット 3か所 ($P_1 \sim P_3$)。径19cmの円形、深さ10~15cmで、いずれも主柱穴と思われる。

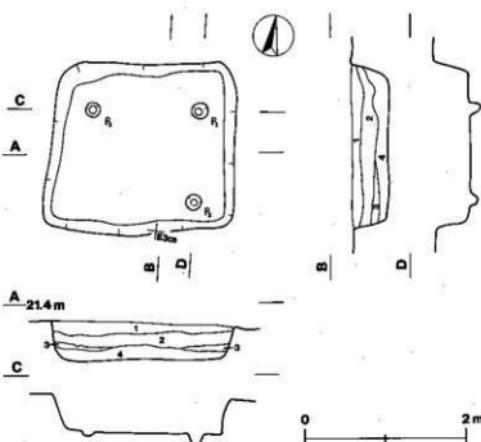
覆土 4層からなる。自然堆積土層である。

土層解説

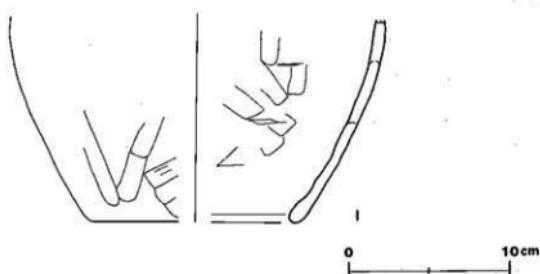
1	褐	色	ローム粒子少量
2	暗	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3	褐	色	ローム粒子少量
4	褐	色	ローム粒子中量

遺物 第75図1の土師器壺は覆土からの出土である。この他に出土したのは土師器壺の体部片1点、壺の体部片7点である。

所見 本跡は、炉は確認できなかったが、通常の住居跡と同様に一定の掘り込みのある方形の整穴であり、柱穴も確認できていることから、小規模の住居跡とした。時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。



第74図 第34号住居跡実測図



第75図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	壺 土師器	B [12.7] C [12.8]	無底式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外側へラ削り後ナデ。体部内面へナデ。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P241 5% 覆土

第37号住居跡（第76図）

位置 調査区中央部, E2e区。

規模と平面形 長軸3.42m, 短軸2.51mの長方形である。

主軸方向 N-37°W

壁 壁高15~28cmで、垂直に立ち上がる。

床 炉と貯蔵穴の間から中央部にかけて踏み固められている。

ピット 北西部に位置し、長径30cm、短径22cmの楕円形で、深さ9cmである。性格は不明である。

貯蔵穴 北コーナーに位置し、長径74cm、短径60cmの長方形、深さ44cmで、断面は「U」字形である。

貯蔵穴土層解説

1 梅	色	ローム粒子微量
2 梅	色	炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量
3 梅	色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
4 にい・褐色	色	ローム粒子中量・ローム中ブロック少量、ローム小ブロック微量
5 茶	褐	ローム小ブロック・ローム粒子微量
6 梅	色	ローム粒子微量、ローム小ブロック微量
7 明	褐	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量

炉 中央部から北西寄りに位置し、長径63cm、短径37cmの不定形で、炉床は掘り込まれていない。

覆土 13層からなる。ロームブロックを多量に含む人為堆積土層である。

土層解説

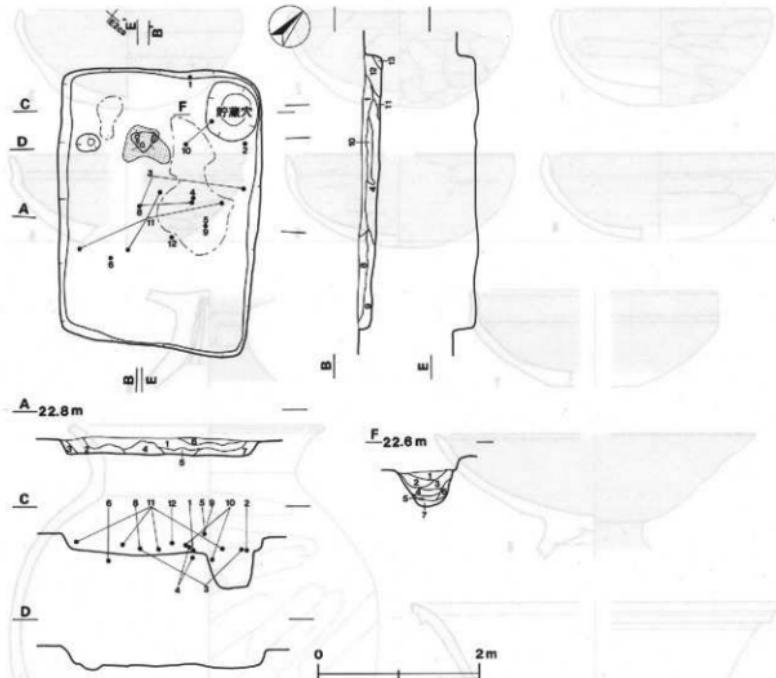
1 黄	梅	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	7 梅	梅	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
2 梅	梅	色	ローム粒子中量、ローム大・小ブロック少量	8 黄	梅	色	ローム小ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
3 梅	梅	色	ローム中ブロック中量・ローム粒子少量	9 梅	梅	色	ローム中ブロック中量
4 明	褐	色	ローム粒子微量、炭化粒子少量	10 梅	梅	色	炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
5 梅	梅	色	ローム小ブロック中量、炭化物少量	11 黄	梅	色	炭化粒子・ローム小ブロック少量
6 梅	梅	色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量	12 墓	梅	色	ローム粒子中量、燒土粒子・ローム中ブロック中量、炭化粒子少量
				13 梅	梅	色	ローム小ブロック中量、炭化粒子少量

遺物 第77図1の壺は北西壁際床面から、2・3の壺は北東壁際床面から、4の壺、9の高壺及び12の須恵器壺は中央部の覆土から出土している。10の甕は貯蔵穴付近からまとめて出土している。11の甕は離れた場所からのものが接合している。これらの他には、土師器甕の口縁部片6点、体部片13点、底部片2点、土師器壺の口縁部片10点、体部片45点が出土している。

所見 本跡は、覆土にロームブロックが含まれていることから、住居廃絶後人為的に埋め戻され、その際に土器を投棄したものと思われる。時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。

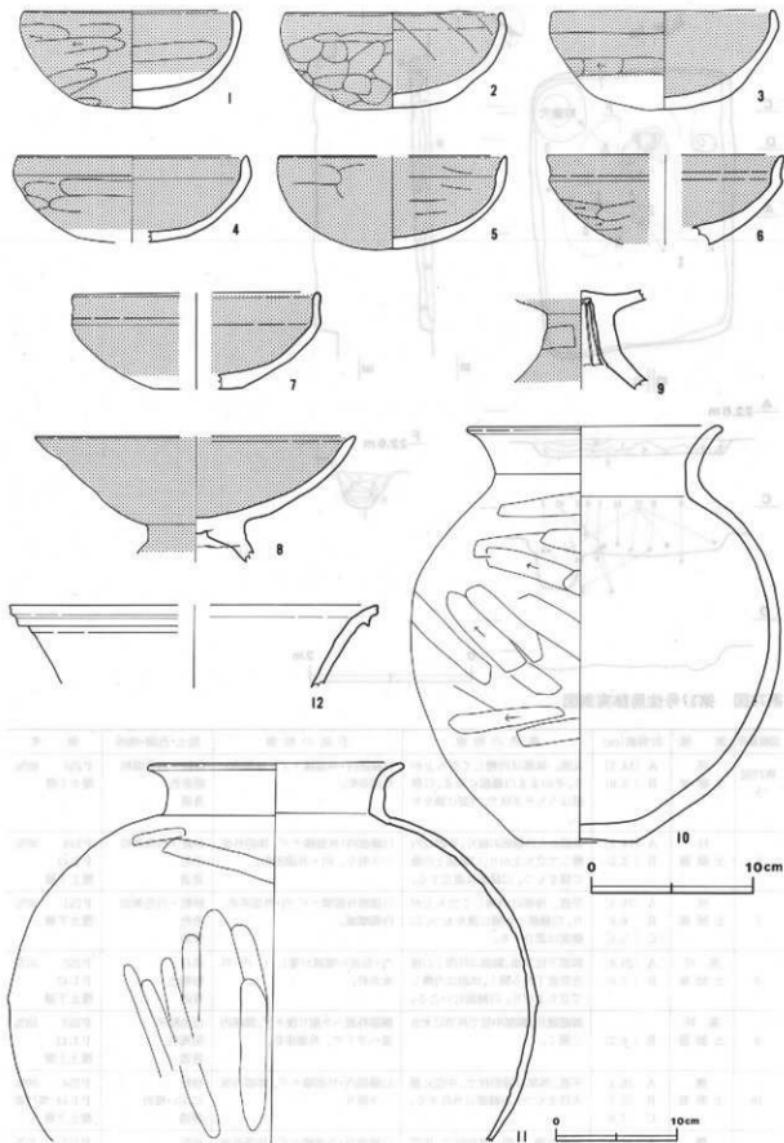
第37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 機	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第77図 1	壺 土 師 器	A 13.2 B 6.0	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い接をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外削痕ナデ。体部下半・底部外側へラ削り後ナデ。内面へラ当て底。内・外赤茶彩。	砂粒・白色微粒 橙色 普通	P245 95% P L43 床面 煤付着
		A 13.5 B 6.1	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い接をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外削痕ナデ。体部下半・底部外側へラ削り後ナデ。内面へラ当て底。内・外赤茶彩。	砂粒・白色微粒 暗赤褐色 普通	P246 95% P L43 床面 煤付着
2	壺 土 師 器	A [13.8] B 6.4	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い接をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外削痕ナデ。外側へラ削り。内・外赤茶彩。	砂粒・白色微粒 赤茶色 普通	P247 90% P L43 床面
		A 14.3 B (5.4)	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に接をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外削痕ナデ。体部外側へラ削り。内・外赤茶彩。	砂粒 暗赤褐色 普通	P248 70% P L43 覆土下層



第76図 第37号住居跡実測図

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粒土・色調・焼成	備考
第77区 5	坏 土器	A [14.2] B (5.8)	丸底。体部は内凹して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口唇部はうちそぎ状で、内面に棱をもつ。	口縁部内・外表面横ナデ。体部内、外表面赤彩。	砂粒・白色微粒 暗赤色 普通	P250 40% 覆土上層
6	坏 土器	A [14.5] B (5.5)	体部から口縁部の被片。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外表面横ナデ。体部外表面ヘラ削り。内・外表面赤彩。	砂粒・白色微粒 赤色 普通	P249 20% P L43 覆土下層
7	坏 土器	A [15.5] B 6.0 C [5.6]	平底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部外表面横ナデ。内・外表面赤彩。 内面摩滅。	砂粒・白色微粒 赤色 普通	P251 30% 覆土下層
8	高坏 土器	A [20.0] B (7.8)	脚部下位欠損。脚部は坏部との接合部直下から開く。体部は内凹して立ち上がり、口縁部にいたる。	内・外表面の摩滅が著しい。内・外表面赤彩。	長石 暗褐色 普通	P252 30% P L43 覆土下層
9	高坏 土器	B (6.2)	脚部破片。脚部中位で外方に大きく開く。	脚部外表面ヘラ削り後ナデ。脚部内面ヘラナデ。外表面赤彩。	白色粒子 暗褐色 普通	P253 10% P L43 覆土上層
10	壺 土器	A 16.1 B 25.7 C 7.0	平底。体部は球形状で、中位に最大径をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外表面横ナデ。体部外表面ヘラ削り。	砂粒 にぼい橙色 普通	P254 90% P L44 燐付着 覆土下層
11	壺 土器	A 21.5 B (31.4)	底部欠損。体部は球形状で、中位に最大径をもつ。口縁部は直立し、口唇部で外反する。	口縁部内・外表面横ナデ。体部外表面ヘラ削り。体部内面刺離。	砂粒 にぼい黄橙色 普通	P255 35% P L43 覆土下層



第77図 第37号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 12	甕 深底甕	A [22.8] B (5.2)	口縁部破片。口縁部は外傾し、口唇部裏下に枕線。凸帯がある。	口縁部内・外面ロクロナデ。	白色粒子 灰色 良好	P256 5% PL43 覆土下層 内面自然釉

第38号住居跡（第78図）

位置 調査区中央部, E2ds区。

規模と平面形 長軸3.65m, 短軸3.23mの長方形である。

主軸方向 N-57°-W

壁 壁高20~30cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 間仕切溝部と北東壁の一部を除いた壁下を巡る。上幅8~10cm, 深さ3~5cmで、断面は「U」字形である。

間仕切溝 南東壁から中央に向かって1条（a）。上幅20~25cm, 深さ20cm, 断面は「U」字形である。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。

ピット 6か所（P₁～P₆）。P₁～P₄は径18~30cmの円形、深さ20~30cmで、主柱穴である。P₆は長径25cm、短径15cmの楕円形、深さ18cmで出入り口施設に伴うピットである。P₅は径26cmの円形、深さ32cmで性格は不明である。

貯藏穴 北西壁際の北コーナー寄りに位置し、長軸55cm、短軸43cmの長方形、深さ37cmで、断面は「U」字形である。

貯藏穴土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 2 黄褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 3 黑 色 ローム中ブロック多量、焼土粒子・ローム粒子少量
- 4 黄褐色 ローム中ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子少量
- 5 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 6 黑褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 黑 色 ローム中ブロック多量、焼土粒子微量

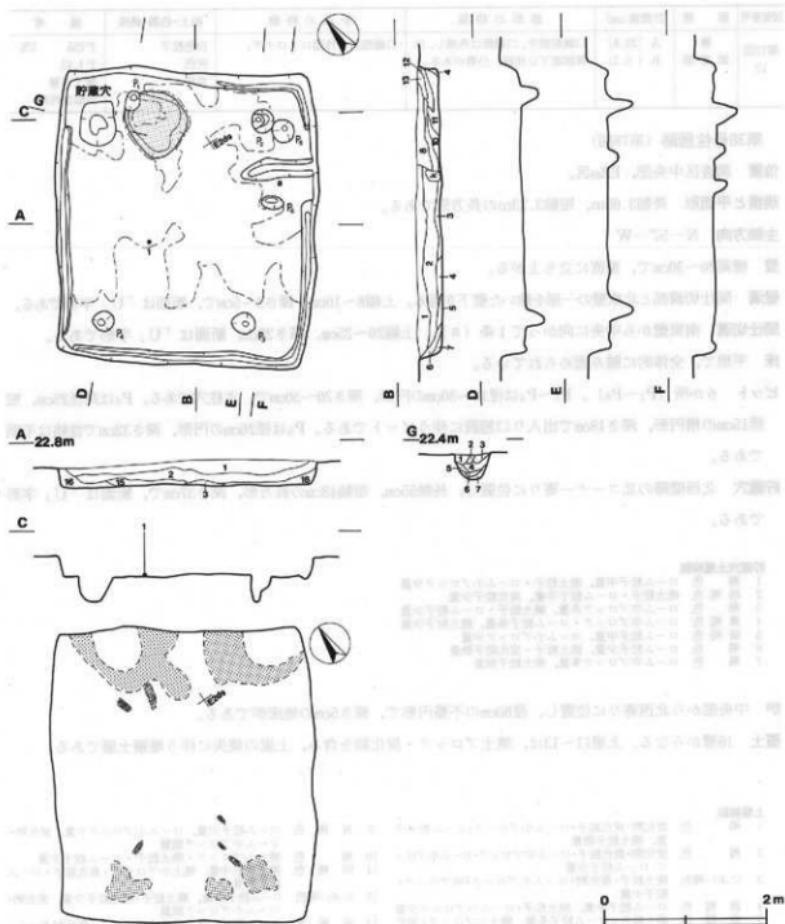
炉 中央部から北西寄りに位置し、径80cmの不整円形で、深さ5cmの地床炉である。

覆土 16層からなる。土層11~13は、焼土ブロック・炭化物を含み、上層の焼失に伴う堆積土層である。

土層解説

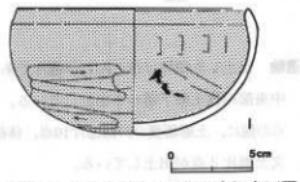
- 1 黒 色 炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少
量、焼土粒子微量
- 2 黒 色 炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロ
ック
- 3 にぶい褐色 烧土粒子・炭化物・ローム小ブロック・中ブロ
ック・粒子少量
- 4 黄褐色 烧土粒子・ローム小ブロック少
量、ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロ
ック少
量
- 5 赤褐色 烧土粒子・ローム粒子多量、焼土小ブロ
ック・炭化
粒子・ローム小ブロ
ック少
量
- 6 黑褐色 ローム中ブロック・小ブロ
ック・粒子少
量、ローム
粒子多量、炭化物・ローム小ブロ
ック少
量
- 7 黄褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少
量、ローム小
ブロ
ック少
量
- 8 黑褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少
量、ローム小
ブロ
ック少
量
- 9 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少
量、炭化物・
ローム中ブロ
ック少
量
- 10 黑褐色 烧土小ブロ
ック・ローム粒子少
量
- 11 明褐色 烧土粒子中量、烧土小ブロ
ック・炭化粒子・ローム
粒子少
量
- 12 にぶい褐色 ローム粒子中量、烧土粒子・炭化粒子少
量、炭化物・
ローム小ブロ
ック少
量
- 13 赤褐色 烧土小ブロ
ック・炭化粒子・ローム
粒子少
量
- 14 黄褐色 ローム小ブロ
ック・ローム粒子多量
- 15 にぶい褐色 烧土小ブロ
ック・炭化物・ローム中ブロ
ック少
量、ローム粒子中量、ローム小
ブロ
ック少
量
- 16 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小
ブロ
ック少
量

遺物 出土した遺物はほとんどが細片であり、図示できたのは第79図1の土師器碗の1点である。1は住居跡中央部の覆土最下層から出土している。東コーナーの焼土塊の中からは、山桃の種子が出土している。これらの他に、土師器壺の口縁部片10点、体部片320点、底部片2点、土師器壺の口縁部片9点、体部片82点、繩文土器片2点が出土している。



第78図 第38号住居跡実測図

所見 床面上には炭化材、焼土塊が多量にみられ、特に北東壁際には焼土ブロックや炭化材を含んだ層が厚く堆積していた。覆土にはロームブロック、ローム粒子が含まれており、本跡は住居焼失後埋め戻されたと思われる。時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。



第79図 第38号住居跡出土遺物実測図

第38号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 1	甕 土筋甕	A 14.3 B 7.8	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部外面に後をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面へフ当て痕。内・外側赤色。	砂粒・露母 赤色 普通	P257 70% PL44 床面 外面焼、 内面タル付着

第39号住居跡(第80図)

位置 調査区南部, E27区。

規模と平面形 長軸6.90m, 短軸5.90mの長方形である。

主軸方向 N-21°-W

壁 壁高35~40cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を周囲する。上幅9~20cm, 深さ5cmで、断面は「U」字形である。

間仕切溝 4条(a~d)。北東壁から2条(a・b), 南西壁から2条(c・d), それぞれ中央に向かって延びている。bはP2に連絡する。上幅15~25cm, 深さ7~15cmで、断面は「U」字形である。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。南東壁際には焼土塊が堆積している。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は径45~50cmの円形、深さ46~54cmで、主柱穴である。P5は長径43cm、短径33cmの梢円形、深さ43cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東壁際中央部に位置し、長径83cm、短径65cmの梢円形、深さ50cmで、平坦な底面からわずかに外傾して立ち上がる。

炉 中央部から北西寄りに位置し、長径150cm、短径70cmの梢円形で、深さ9cmの地床炉である。炉床は火熱を受け赤変し、ブロック状に硬化している。

伊土層解説

1	褐褐色	炭化物中量
2	褐褐色	焼土粒子・炭化粒子中量
3	明赤褐色	焼土小ブロック少量
4	暗赤褐色	焼土小ブロック多量、焼土中ブロック少量
5	暗赤褐色	焼土粒子少量
6	暗赤褐色	焼土小ブロック中量
7	赤褐色	焼土小ブロック多量

覆土 35層からなる。ロームブロックを含む人為堆積土層である。

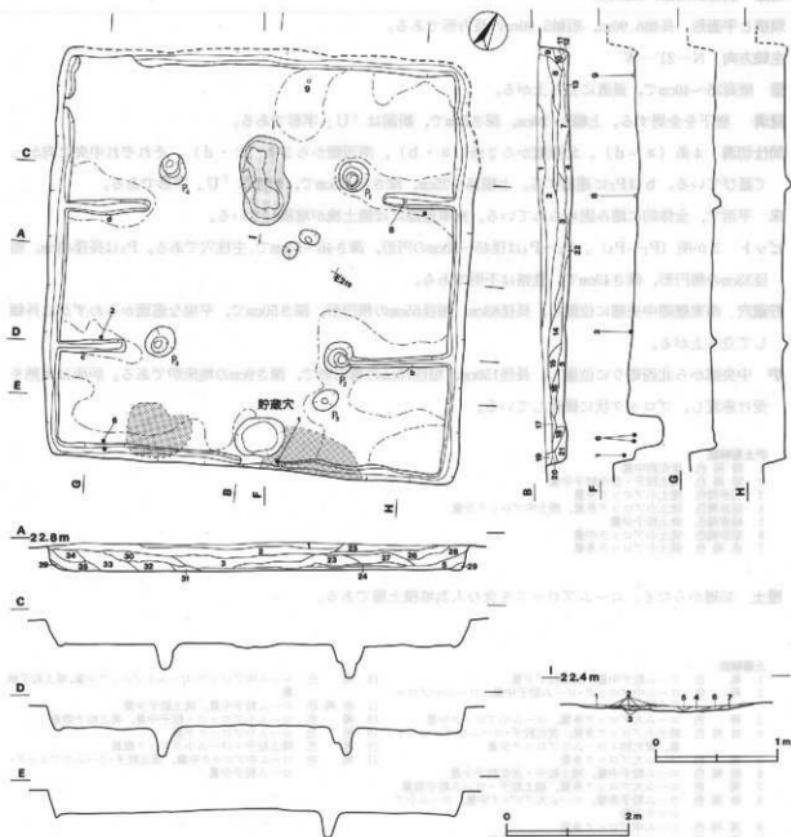
土層解説

1	褐褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量	16	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
2	褐褐色	ローム中ブロック・ローム粒子中量、ローム小ブロック ク少量	17	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量
3	褐色	ローム大ブロック多量、ローム小ブロック少量	18	褐色	ローム小ブロック・粒子中量、焼土粒子微量
4	暗褐色	ローム小ブロック多量、炭化粒子・ローム中ブロック中量、炭化物、ローム小ブロック少量	19	褐色	ローム小ブロック少量
5	褐色	ローム中量、焼土粒子・炭化粒子少量	20	褐色	焼土粒子・ローム小ブロック微量、ローム中ブロック中量、焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
6	暗褐色	ローム大ブロック多量、焼土粒子・ローム粒子微量	21	褐色	ローム大ブロック多量、焼土粒子・ローム粒子微量
7	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子、ローム大ブロック中量、ローム小ブロック少量			
8	暗褐色	ローム中ブロック多量			
9	黄褐色	ローム中ブロック多量			
10	褐色	ローム大ブロック・ローム粒子中量			
11	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量			
12	黄褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量			
13	褐色	ローム大ブロック中量、ローム粒子少量			
14	黄褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・小ブロック中量			
15	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量			

22	褐	褐色	ローム中ブロック・粒子中量
23	褐	褐色	ローム中ブロック多量、ローム粒子中量、焼土粒子少量
24	褐	褐色	ローム中ブロック少量
25	褐	褐色	ローム中ブロック少量
26	褐	褐色	ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量
27	褐	褐色	ローム中ブロック多量
28	褐	褐色	ローム小ブロック多量、ローム中ブロック中量
29	白	白色	ローム小ブロック少量
30	褐	褐色	ローム小ブロック・粒子中量、焼土粒子少量
31	褐	褐色	ローム中ブロック中量
32	褐	褐色	ローム小ブロック多量
33	褐	褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・小ブロック中量
34	褐	褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量
35	黄	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量



(断面図) 居室の壁面

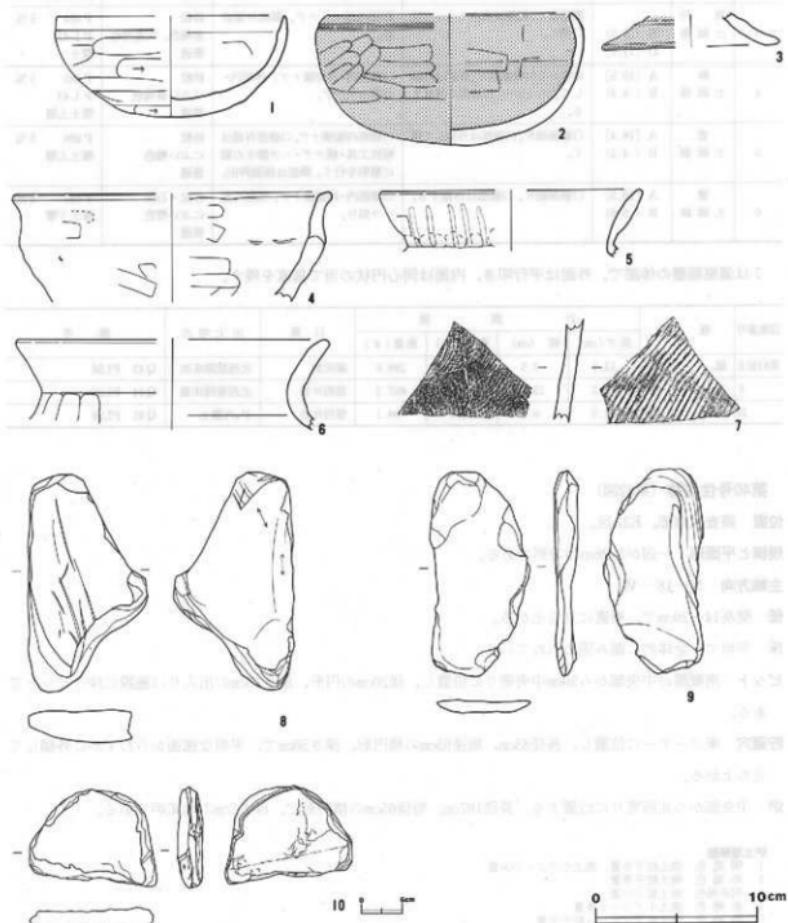


第80図 第39号住居跡実測図

遺物 本跡からは、多量の細片が出土しており、土器器底の口縁部片32点、体部片532点、底部片18点、土器器底の口縁部片50点、体部片100点、底部片1点、土器器高部の脚部片2点、須恵器長頸壺の肩部片1点であ

る。第81図1の壺は南東壁際の焼土塊の上から、2の碗は南東壁際から、6の甕は南コーナーからそれぞれ出土している。7の須恵器裏体部片は、第96図13の第46・51号住居跡出土須恵器裏体部片と同一個体と思われる。8の砥石は、間仕切溝a付近から、9・10の雲母片岩は北西壁際から出土している。

所見 本跡は、焼土塊の中から遺物出土していることから、焼失後、遺構の人为的な埋め戻しの際に遺物投棄が行われたと思われる。時期は須恵器甕が接合関係にある第46・51号住居跡と同時期で、5世紀末葉と思われる。



第81図 第39号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
図81図 1	坪 土 節 器	A [14.2] B 6.3	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い穂をもつ。口唇部はうちそぎ状で、内面に筋をもつ。	口縁部内・外側横ナデ。体部・底部外側へラ削り。内面へラナデ。	長石・石英 橙色 普通	P258 70% PL43 覆土中層
2	坪 土 節 器	A [15.2] B 8.2	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外側横ナデ。体部・底部外側へラ削り。内面へラナデ。内・外側赤影。	長石 橙色 普通	P259 50% PL43 覆土下層
3	高 坪 土 節 器	B (2.0) D [11.0]	肩部破片。底部は大きくラッパ状に開く。	脚部内面へラナデ。脚部外側赤影。	砂粒 赤褐色。内面褐色 普通	P454 5% PL43 覆土
4	鉢 土 節 器	A [19.5] B (6.8)	体部から口縁部破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外側横ナデ。体部内・外側へラナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P455 5% PL43 覆土上層
5	壺 土 節 器	A [16.4] B (4.2)	口縁部破片。口縁部は外傾して開く。	口縁部内面横ナデ。口縁部外側は板状工具・横ナデ・ヘラ削きの痕に整形を行う。頭部は指壓押圧。	砂粒 にぶい褐色 普通	P456 5% 覆土上層
6	甕 土 節 器	A [19.5] B (5.0)	口縁部破片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外側横ナデ。頭部外側へラ削り。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P457 5% 覆土下層

7は須恵器甕の体部で、外面は平行叩き、内面は同心円状の当て具痕を残す。

図版番号	種別	計測値			石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
図81図8	砥	石	13.5	7.5	2.7	289.6	凝灰岩 北西壁床面	Q43 PL56
9	不 明	12.3	15.7	2.8	697.2	雲母片岩 北西壁床面	Q44 PL56	
10	不 明	12.3	6.3	1.6	98.1	雲母片岩 P ₃ 内覆土	Q45 PL56	

第40号住居跡（第82図）

位置 調査区南部、E2c7区。

規模と平面形 一辺が3.26mの方形である。

主軸方向 N-18°-W

壁 壁高14~20cmで、垂直に立ち上がる。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。

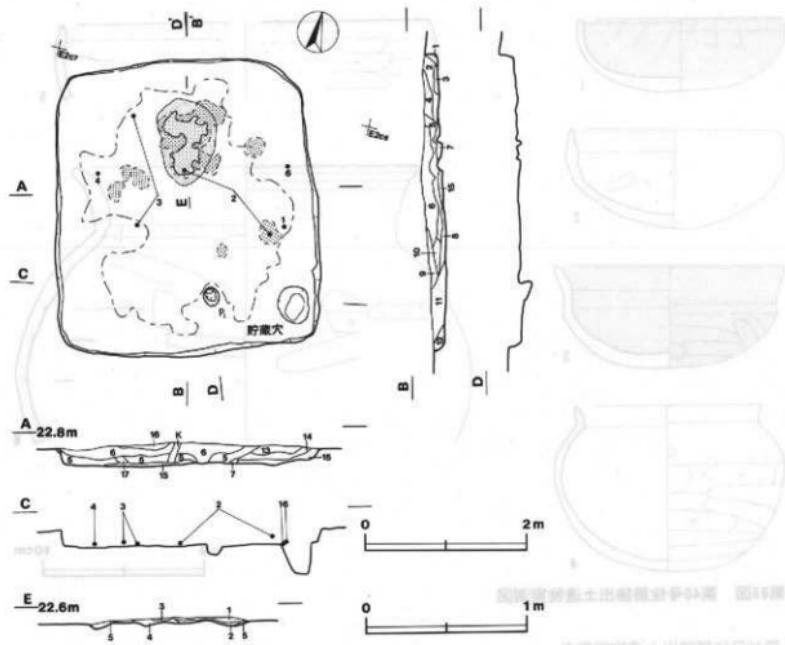
ピット 南壁際の中央部から50cm中央寄りに位置し、径20cmの円形、深さ15cmの出入り口施設に伴うピットである。

貯藏穴 東コーナーに位置し、長径83cm、短径65cmの梢円形、深さ50cmで、平坦な底面からわずかに外傾して立ち上がる。

炉 中央部から北西寄りに位置する。長径107cm、短径65cmの梢円形で、深さ7cmの地床炉である。

炉土層解説

- 1 明褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量
- 2 深褐色 焼土粒子多量
- 3 朝紫褐色 焼土粒子中量
- 4 赤褐色 焼土小ブロック多量
- 5 明褐色 焼土粒子・ローム粒子少量



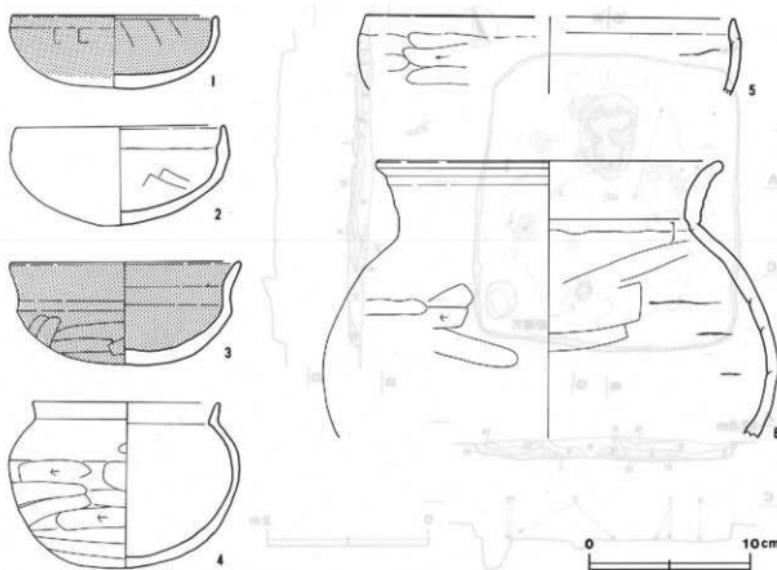
第82図 第40号住居跡実測図

覆土 17層からなる。ロームブロックを含む人為堆積土層である。

土層解説			
1	明褐色	ローム粒子多量、焼土粒子微量	10 海色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
2	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック微量	11 海色 ローム中ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量
3	褐色	ローム小ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子少量	12 海色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量
4	褐色	焼土粒子・ローム大ブロック・ローム粒子少量	13 海色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物少量
5	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	14 海色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量
6	褐色	焼土粒子・ローム大ブロック・ローム粒子中量	15 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック中量
7	赤褐色	焼土大ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子少量	16 海色 炭化粒子中量、焼土粒子・ローム粒子少量
8	褐色	炭化物少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量	17 海色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
9	明褐色	炭化粒子・ローム小ブロック少量	

遺物 第83図1~3の土師器は中央部床面から、4の碗は西壁際床面から、6の甕は東壁際に逆位の状態で出土している。そのうち3の甕は焼土塊の中から出土していることから、床面出土の遺物は住居廃棄時のもとのと思われる。この他に、覆土下層から土師器壺の口縁部片10点、体部片542点、底部片3点、土師器壺の口縁部片20点、体部片96点が出土している。

所見 床面には、炭化材・焼土塊がみられることから焼失家屋と思われる。覆土下層には、焼土ブロック・ロームブロックを多く含んでいることから、焼失後人為的に埋め戻され、その際に遺物の投棄が行われたものと思われる。時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第83図 第40号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡出土遺物観察表

国際番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	鉱土・色調・焼成	備考
第83図 1	壺 土師器	A 12.8 B 6.3	丸底。体部は内窵して立ち上がり。口縁部はほぼ直立する。	口縁部・外表面横ナダ。体部外表面ヘラナダ。内面にへら当て痕が残る。内・外表面赤。	長石・石英・雲母 赤色 普通	P261 100% P L44 床面
2	壺 土師器	A 13.1 B 6.2	丸底。体部は内窵して立ち上がり。口縁部はほぼ直立する。口縁部はうろこ状で、内面に棱をもつ。	口縁部・外表面横ナダ。底部内面ヘラナダ。外表面摩滅。	長石 にぶい橙色 普通	P262 100% P L44 床面
3	壺 土師器	A 14.4 B 6.4	丸底。体部は内窵して立ち上がり。口縁部との境に段をもつ。口縁部は外傾する。口縁部内面に棱をもつ。	口縁部・外表面横ナダ。体部・底部外表面ヘラ削り。内面剥離。内面から体部外表面赤。	長石・白色粒子 赤色、底部外表面 普通	P260 100% P L44 床面
4	壺 土師器	A 11.7 B 10.3	丸底。体部は内窵して立ち上がり。球形状を呈する。口縁部は直立する。	口縁部・外表面横ナダ。体部外表面ヘラ削り。	砂粒・石英 にぶい黄褐色 普通	P264 100% P L44 床面
5	壺 土師器	A [22.0] B (4.8)	口縁部破片。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外表面横ナダ。体部外表面ヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P263 5% 覆土 床面
6	壺 土師器	A 21.7 B (17.2)	体部から口縁部破片。体部上位に最大径をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外表面横ナダ。体部外表面ヘラ削り。体部内面ヘラナダ。	砂粒 淡黄色 普通	P265 30% P L44 床面 外表面付着

第41号住居跡（第84図）

位置 調査区南部、E2a6区。

規模と平面形 一辺が3.25mの方形である。

主軸方向 N-8°-E 烟草屋のより「U」字形壁。各ピットは出入口を中心とした複数の壁面。中央火穴前面。断面
壁・壁高10~25cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁から南東コーナーを通り、南壁中央の壁下を巡る。上幅6~10cm、深さ3cmで、断面は「U」字形である。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 5か所 ($P_1 \sim P_5$)。 $P_1 \sim P_4$ は径20~25cmの円形、深さ25~27cmの主柱穴である。 P_5 は径27cmの円形、深さ15cmの出入り口に伴うピットである。

炉 中央部から北寄りに位置し、出入り口施設に伴うピットと同一線上に並ぶ。長径70cm、短径50cmの橢円形で、深さ4cmの地床炉である。

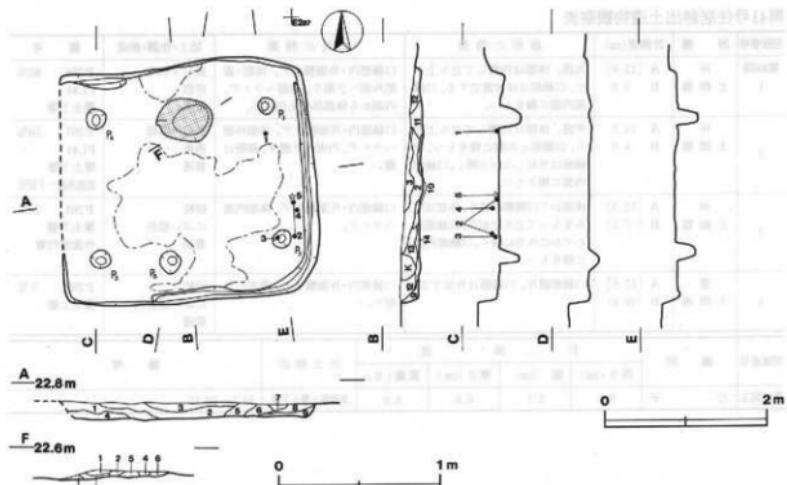
炉土層解説

1	赤褐色	ローム粒子中量、燒土粒子少量
2	明褐色	燒土粒子中量、ローム粒子少量
3	明赤褐色	燒土粒子中量、ローム粒子少量、燒土小ブロック・炭化物微量
4	橙褐色	燒土粒子多量、燒土小ブロック・ローム粒子少量
5	明褐色	燒土粒子多量、燒土小ブロック少量、ローム粒子微量
6	橙色	ローム粒子多量、燒土粒子微量

覆土 14層からなる。ロームブロックを含む人為堆積土層である。

土層解説

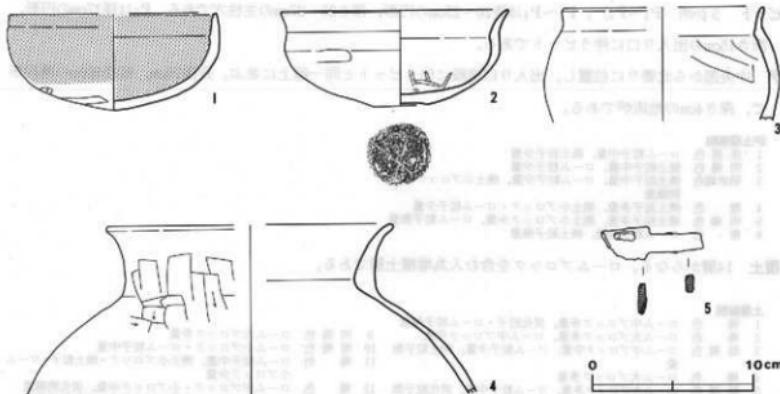
1	褐色	ローム中ブロック多量、炭化粒子・ローム粒子微量	9	明褐色	ローム大ブロック多量
2	褐色	ローム大ブロック多量、ローム中ブロック中量	10	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
3	暗褐色	ローム中ブロック中量、ローム粒子少量、燒土粒子微量	11	褐色	ローム粒子中量、燒土小ブロック・燒土粒子・ローム小ブロック微量
4	褐色	ローム大ブロック多量	12	褐色	ローム中ブロック・小ブロック中量、炭化物微量
5	暗褐色	ローム大ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子微量	13	褐色	ローム大ブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量
6	褐色	ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量	14	褐色	ローム中ブロック多量
7	暗褐色	ローム大ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子少量			
8	褐色	ローム大ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子少量			



第84図 第41号住居跡実測図

遺物 遺物の大半は、住居跡の東側覆土中から出土している。第85図1～3の土師器壺・碗、4の土師器壺は東壁際付近から、5の刀子は東壁寄り覆土から出土している。この他に土師器壺の口縁部片12点、体部片65点、底部片3点、土師器壺の口縁部片19点、体部片65点が出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。



第85図 第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 1 土師器	壺	A [12.8] B 5.9	丸底。体部は内側で立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に縫をもつ。	口縁部内・外表面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ヘラナダ。内面から体部外面上位赤彩。	長石・石英 赤色 普通	P266 60% PL44 覆土下層
	土師器	A 14.2 B 6.0	平底。体部は内側で立ち上がり、口縁部との境に縫をもつ。口縁部は外反しながら開く。口縁部内面に縫をもつ。	口縁部内・外表面横ナデ。体部外表面ヘラナダ。内面ヘラ磨き。縫壁は薄い。	長石・雲母 赤色 普通	P267 50% PL44 覆土下層 底部外表面へ記号
3	碗 土師器	A [12.3] B (7.1)	体部から口縁部の破片。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部はわざと向外方に開く。口縁部内面に縫をもつ。	口縁部内・外表面横ナデ。体部内面ヘラナダ。	砂粒 にぼい橙色 普通	P268 20% 覆土下層 外面焼付着
4	壺 土師器	A [17.6] B (10.6)	口縁部破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外表面横ナデ。縫部へラ削り。	砂粒 にぼい黄橙色 普通	P269 5% 覆土上層
調査番号	種別	計測値	出土地点	備考		
第85図5	刀 子	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g)				
		6.2 2.1 0.6 8.9	東壁寄り覆土下層	M7 PL57		

第42号住居跡（第86図）

位置 調査区南部西側, E254区。

重複関係 本跡は第6号竪穴遺構に北半分を掘り込まれ、本跡の南半分が第41号土坑を掘り込んでいる。本跡は第6号竪穴遺構より古く、第41号土坑より新しい。

規模と平面形 長軸4.30m, 短軸3.40mの長方形である。

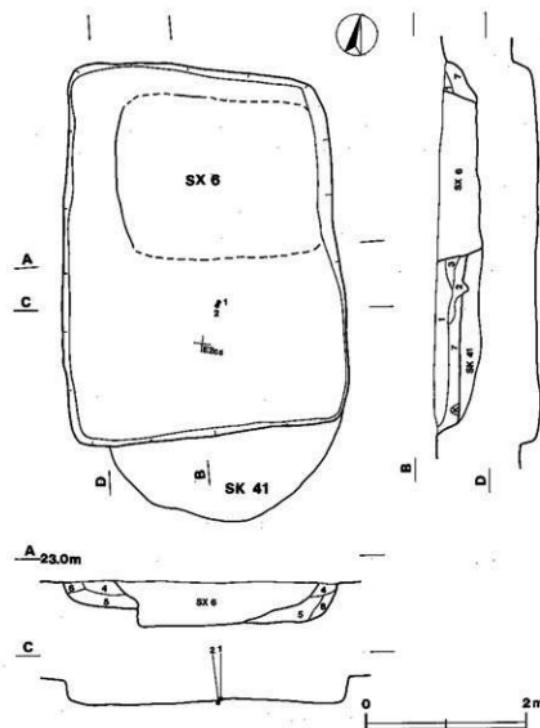
主軸方向 N-7-W

壁 壁高13~25cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、踏み締められている面は見られない。

覆土 8層からなる。人為堆積土層である。

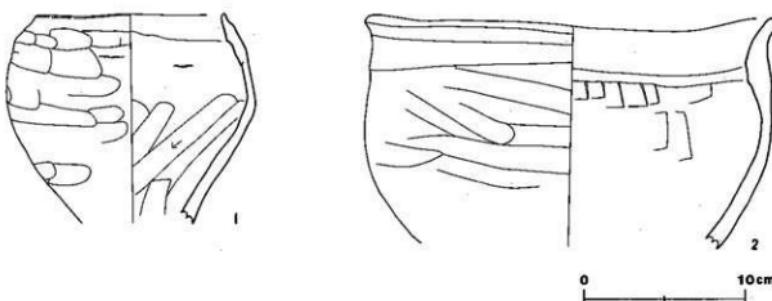
土層解説							
1	褐	色	ローム粒子中量、炭化物少量、ローム小ブロック微量	5	胡	色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
2	にぼい褐色		ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	6	褐	色	ローム粒子少量
3	明	褐色	ローム小ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量	7	明	褐色	ローム粒子多量
4	褐	色	ローム粒子中量	8	褐	色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量



第86図 第42号住居跡実測図

遺物 第87図1の土師器鉢、2の土師器瓶は住居跡中央部の床面から逆位の状態で出土している。

所見 本跡を人為的に埋め戻した後に6号竪穴遺構を構築したと考えられる。本跡の時期は出土遺物からみても6号竪穴遺構とあまり時間差がない、5世紀末葉から6世紀初頭と思われる。



第87図 第42号住居跡出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	要形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第87図 1	鉢 土師器	A 11.8 B (13.1)	底部欠損。体部は内側で立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部内面に縦をもつ。	口縁部内・外面削ナダ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラ削り後ヘラナダ。	長石・石英 淡黄色 普通	P 271 70% PL44 床面
	瓶 土師器	A 25.3 B (14.5)	底部欠損。体部上位に最大径をもつ。口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面削ナダ。体部内・外面ヘラナダ。	白色粒子 にぶい橙色 普通	P 272 70% PL44 床面 内面深付着 外面二次焼成

第43号住居跡（第88・89図）

位置 調査区南部西側、E2e4区。

規模と平面形 一辺が6.12mの方形で、南西壁中央部には、長軸2.70m、短軸0.70mの長方形の張り出しを持つ。

主軸方向 N-25°-W

壁 壁高40~50cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 張り出し部を除き、壁下を全周する。上幅10~15cm、深さ5cmで、断面は「U」字形である。

間仕切溝 8条(a~h)。北東壁から3条(a~c)、南東壁から3条(d~f)、南西壁から2条(g~h)。

がそれぞれ中央に向かって延びている。上幅15~27cm、深さ3~5cmで、断面は「U」字形である。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は径25~32cm、深さ56~68cmで主柱穴である。P₅は径30cm、深さ40cmの出入り口施設に伴うピットである。

炉 2か所。炉1はP₂の北側に位置し、長径90cm、短径53cmの楕円形の地床炉である。炉2は中央部から北西寄りに位置し、長径58cm、短径40cmの楕円形の地床炉である。いずれも掘り込みはない。

貯蔵穴 東コーナー近くの南東壁際に位置し、径70cmの円形、深さ30cmで、断面は「U」字形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 緑 色 ローム粒子中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 緑 色 ローム中ブロック中量、炭化材少量、燒土粒子・ローム
小ブロック微量
- 3 緑 色 ローム中ブロック中量、燒土粒子・ローム粒子少量
- 4 緑 色 ローム中ブロック中量
- 5 黄 緑 色 ローム中ブロック多量

覆土 19層からなる。土層5が薄く床面を覆い、ローム中ブロックを含む土層3・4が堆積する人為堆積土層である。

土層解説

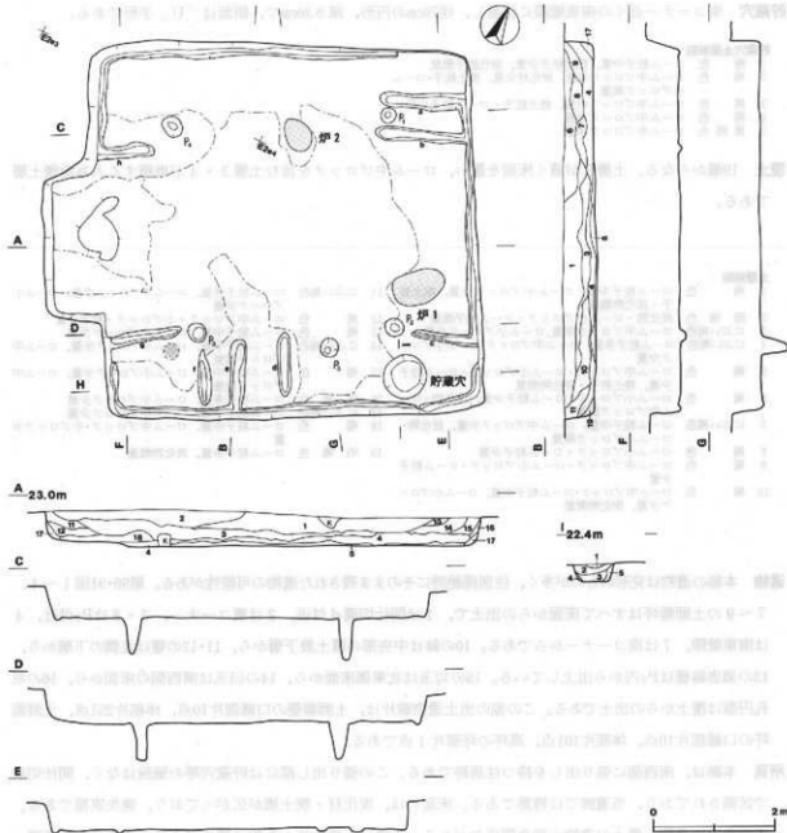
- 1 緑 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土粒子少量、炭化物微量
- 2 單 暗 色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 に bei 暗 色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
- 4 に bei 暗 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 5 暗 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
- 6 暗 色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化物・ローム中ブロック微量
- 7 に bei 暗 色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、炭化物・ローム小ブロック微量
- 8 暗 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 9 暗 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 10 暗 色 ローム中ブロック・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物微量
- 11 に bei 暗 色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
- 12 暗 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 13 暗 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 14 に bei 暗 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 15 暗 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 16 明 暗 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 17 に bei 暗 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 18 暗 色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・小ブロック少量
- 19 明 暗 色 ローム粒子多量、炭化物微量

遺物 本跡の遺物は完形のものが多く、住居廃絶時にそのまま残された遺物の可能性がある。第90・91図1~4、7~9の土師器壺はすべて床面からの出土で、1は間仕切溝d付近、2は東コーナー、3・8はPs付近、4は南東壁際、7は南コーナーからである。10の鉢は中央部の覆土最下層から、11-12の甕は北側の下層から、13の須恵器甕はPs内から出土している。15の勾玉は北東側床面から、14の白玉は南西側の床面から、16の双孔円版は覆土からの出土である。この他の出土遺物破片は、土師器甕の口縁部10点、体部251点、土師器壺の口縁部10点、体部101点、高壺の壺部1点である。

所見 本跡は、南西部に張り出しを持つ住居跡である。この張り出し部には貯蔵穴等の施設ではなく、間仕切溝で区画されており、当遺跡では特異である。床面には、炭化材・焼土塊が広がっており、焼失家屋である。床面上の遺物と覆土の遺物の接合関係などから、本跡は、焼失後人為的に埋め戻される過程で、南東壁、北東壁際の一括した遺物の投棄が行われたものと思われる。時期は愛知東山系の須恵器が出土していることや模倣壺がみられることなどから5世紀末葉と思われる。

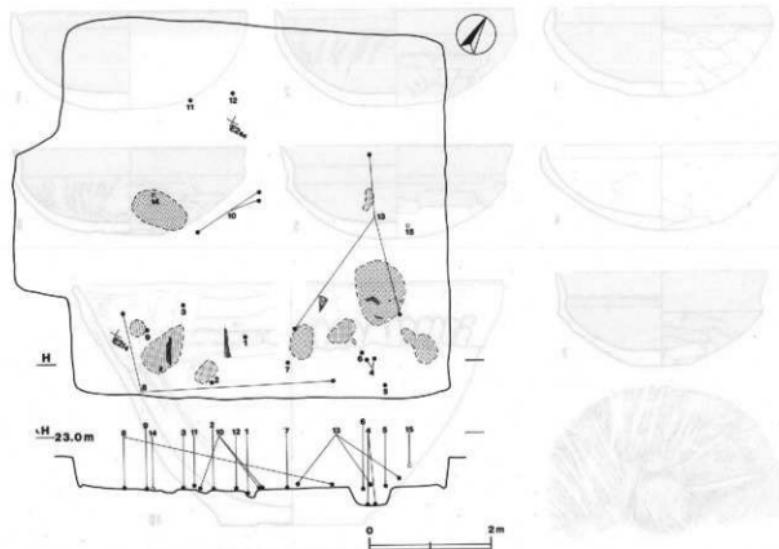
第43号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90回 1	土師器 壺	A 13.5 B 5.5	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部・底部外表面へラ削りナギ。体部内面から口縁部外面赤彩。	白色微粒 赤色。外表面普通 普通	P275 100% PL44 床面
2	土師器 壺	A 14.8 B 6.0	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナギ。体部・底部外表面へラ削りナギ。体部内面へラ削き。内・外表面赤彩。	長石・雲母 赤色 普通	P276 100% PL44 床面
3	土師器 壺	A 14.6 B 6.2	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナギ。内面から口縁部外面赤彩。内・外表面赤彩。	砂粒・白色微粒 に bei 暗 色 普通	P280 85% PL45 床面



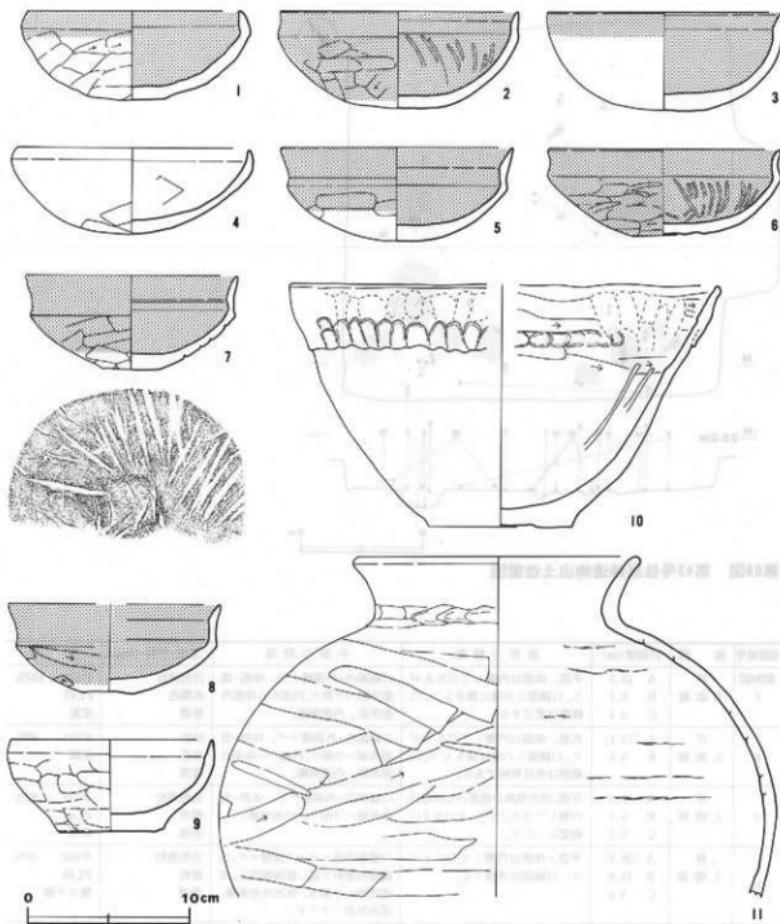
第88図 第43号住居跡実測図

回収番号	種 権	計測値(cm)	器 形 の 特 故	手 法 の 特 故	胚土・色調・焼成	備 考
第90回 4	坏 土 節 器	A 14.5 B 5.3	丸底。体部は内彌して立ち上がり、口縁部は短く内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底面外へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・白色微粒 橙色 普通	P277 95% PL45 貯蔵穴下面
	坏 土 節 器	A 14.5 B 5.9	丸底。体部は内彌して立ち上がり、口縁部との間に稜をもつ。口縁部は外反しながら開く。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り、内面剝離。内面から体部外赤色。	砂粒 赤色、底部黄褐色 普通	P274 80% PL45 床面
6	坏 土 節 器	A 14.4 B 5.4	平底。体部は内彌して立ち上がり、口縁部との間に稜をもつ。口縁部外反気泡である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。底部へラ削り。内面へラ磨き。内・外面赤色。	長石・雲母 赤色 普通	P278 80% PL45 貯蔵穴覆土



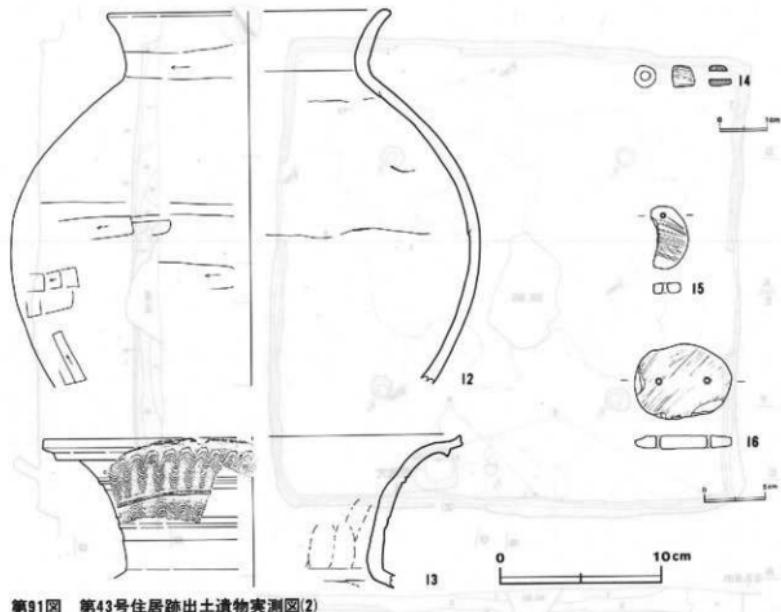
第89図 第43号住居跡遺物出土位置図

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 7	环 土器	A 13.2	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底面外側へラ削り。内面から体部外側赤彩。内面剥離。	白色微粒 赤褐色 普通	P273 100% PL45 床面
		B 5.3				
		C 3.4				
8	环 土器	A [13.1]	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底面外側へラ削り。内面から体部外側赤彩。内面剥離。	砂粒 赤色 普通	P281 60% 床面
		B 5.8				
9	环 土器	A 12.5	平底。突出気味の底部から体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底面外側へラ削り。内面剥離。	白色微粒 褐色 普通	P279 60% PL45 床面
		B 5.7				
		C 6.5				
10	鉢 土器	A [26.6]	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内面へラナダ後横ナデ。口縁部外側折り返し後指壓押圧。体部内面へラ磨き。体部外側剥離。底部外側へラナダ。	白色微粒 橙色 普通	P282 60% PL45 覆土下層
		B 15.0				
		C 9.0				
11	壺 土器	A [17.9]	体部から口縁部の破片。体部は球形状で、最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部上半へラナダ、下半へラ削り。内面剥離。	白色微粒 黄褐色 普通	P283 20% PL45 覆土下層
		B (21.2)				
第91図 12	壺 土器	A [17.5]	体部から口縁部の破片。体部は球形状で、最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り。内面剥離。	砂粒・白色微粒 橙色 普通	P284 40% PL45 覆土下層
		B (23.2)				
13	壺 須恵器	A [26.0]	頸部から口縁部の破片。口縁部は外反し、口唇部直下に凸縁、凸帶がある。	口縁部内・外面クロナデ。凸帶直下5本1条の櫛齒状工具による波状文が2施設される。	砂粒・長石 灰色 良好	P285 20% PL45 覆土中層
		B (9.3)				



第90図 第43号住居跡出土遺物実測図(1)

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第91図14	白玉	0.4	0.4	0.4	0.2	0.1	滑石	南西側床面	Q46 PL55
15	勾玉	2.6	1.3	0.4	—	2.9	滑石	北東側床面	Q47 PL55
16	双孔円板	3.9	3.1	0.6	0.2	10.0	滑石	覆土	Q48 PL55



第91図 第43号住居跡出土遺物実測図(2)

第44号住居跡 (第92図)

位置 調査区南部西端, E1_g区。

重複関係 本跡の中央部を第95号土坑が掘り込んでおり, 本跡の方が古い。

規模と平面形 一辺が7.82mの方形である。

主軸方向 N-29°-W

壁 壁高27~38cmで, 垂直に立ち上がる。

壁溝 東北, 南西壁の一部を除いて, 壁下を周回する。上幅10~20cm, 深さ3~5cmで, 断面は「U」字形である。

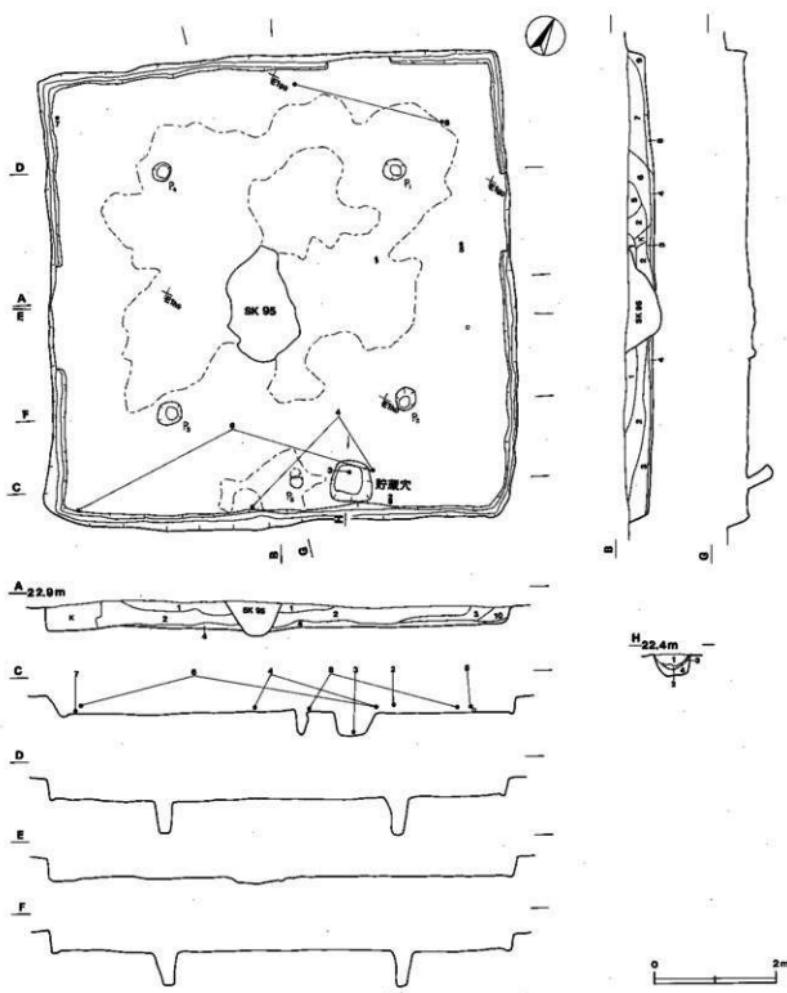
床 平坦で, 中央部と出入り口に伴うピットの周囲が踏み固められている。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は径31~38cmの円形, 深さ50~55cmで, 主柱穴である。P₅は径20cmの円形, 深さ40cmで, 出入り口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 南東壁際中央部の出入り口に伴うピットの東側に位置し, 一辺が68cmの方形で, 深さ35cm, 断面は「U」字形である。

貯蔵穴土層解説

- | | | |
|---|-------|--------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 | 褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量, 燃土小ブロック・ローム小ブロック微量 |
| 3 | にぶい褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 | 明褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック少量 |



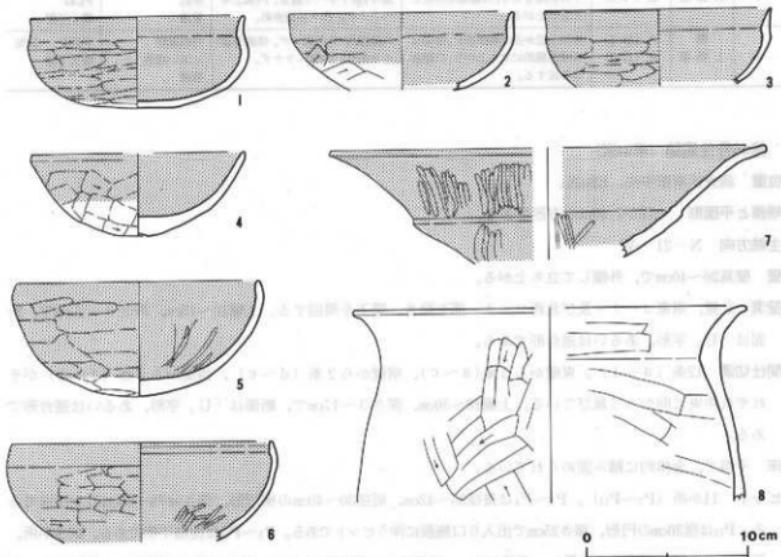
覆土 10層からなる。ロームブロック、粒子を含む土層4が床面を覆う人為堆積土層である。南コーナー付近の下層には焼土塊がみられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量	7 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
2 純褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	8 赤褐色	焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・ローム中ブロック微量
3 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 明褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・小ブロック少量
4 褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・小ブロック少量	10 明褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
5 梅色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量		
6 にじむ褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量		

遺物 第93図の壺は南東部の覆土上層から、2の壺は貯蔵穴の東側から、3の壺は貯蔵穴の底面から、5のは北東部から、4の壺は出入口付近から、7の高壺は西コーナーから出土している。5の壺は南コーナーのものと貯蔵穴の北側からのものが、8の壺は北コーナー出土のものと北東壁際出土のものがそれぞれ接合している。2～8はすべて覆土最下層からの出土である。この他に、土師器壺の口縁部片11点、体部片142点、底部片3点、土師器壺の体部片15点、底部片1点、土師器高壺の脚部片1点が出土している。

所見 覆土の堆積状態を見ると、上層から下層までロームブロック及びローム粒子を含む層が堆積し、下層から床面上に土師器片が多いことから、人為的に埋め戻される過程で遺物投棄が行われたと考えられる。時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。



第93図 第44号住居跡出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	坏 土 筋 器	A 13.4 B 5.6	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い縫をもつ。 口縁部は直立し、口縁部内面に縫をもつ。	口縁部内・外側横ナデ。体部・底 部外側へラ削り。内面ナデ。内・ 外側赤彩。	白色微粒 赤色 普通	P286 60% PL45 覆土
		A [14.0] B (4.9)	底部欠損。体部は内側して立ち上 がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外側横ナデ。体部外側 へラ削り。体部内面へラナデ。内・ 外側赤彩。	白色微粒・砂粒 赤色 普通	P287 40% PL45 覆土下層
3	坏 土 筋 器	A [14.0] B (4.8)	底部欠損。体部は内側して立ち上 がり、口縁部との境に弱い縫をもつ。 口縁部は直立する。口唇部はうち そぎ状で、内面に縫をもつ。	口縁部内・外側横ナデ。体部外側 へラ削り。内面ナデ。内・外側赤 彩。	砂粒・白色微粒 赤色 普通	P288 30% PL45 貯藏穴底面
		A 13.2 B 5.2	丸底。体部は内側して立ち上 がり、そのまま口縁部にいたる。	口縁部内・外側横ナデ。体部外側 へラ削り。内面ハク状工具による ナデ。内・外面上半赤彩。	長石・石英 褐色 普通	P291 60% PL45 覆土下層
5	坏 土 筋 器	A 15.8 B 7.2	丸底。体部は内側して立ち上 がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外側横ナデ。体部外側 へラ削り後ナデ。底部へラ削り。 内面へラ磨き。内・外側赤彩。	砂粒 赤色 普通	P289 85% PL45 覆土下層
		A 16.2 B (6.1)	丸底。体部は内側して立ち上 がり、口縁部は短く内傾する。口縁 部内面に弱い縫をもつ。縫壁は全 体に薄い。	口縁部内・外側横ナデ。体部・底 部外側へラ削り後へラナデ。内面 へラ磨き。内・外側赤彩。	砂粒 赤色、底部褐色 普通	P290 70% PL45 覆土下層 外面焼付着
7	高 坏 土 筋 器	A 27.0 B (6.9)	大型高坏の坏部破片。坏部は外側 下方に段をもち、口縁部は外反し て立ち上がる。	口縁部内・外側横ナデ。体部外 側・内面下半へラ削り。内面上半 へラナデ。内・外側赤彩。	白色微粒・蜜母 赤色 普通	P292 30% PL45 覆土下層
		A [24.2] B (12.1)	体部上位から口縁部破片。体部は ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部 は外反する。	口縁部内・外側横ナデ。体部外側 へラ削り。内面へラナデ。	白色微粒 に赤色 普通	P293 10% 覆土下層

第46号住居跡（第94図）

位置 調査区南部中央、E29区。

規模と平面形 一辺が7.40mの方形である。

主軸方向 N-21°-W

壁 壁高20~40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁、南東コーナー及び北西コーナー部を除き、壁下を周回する。上幅10~15cm、深さ3~5cmで、断面は「U」字形、あるいは逆台形である。

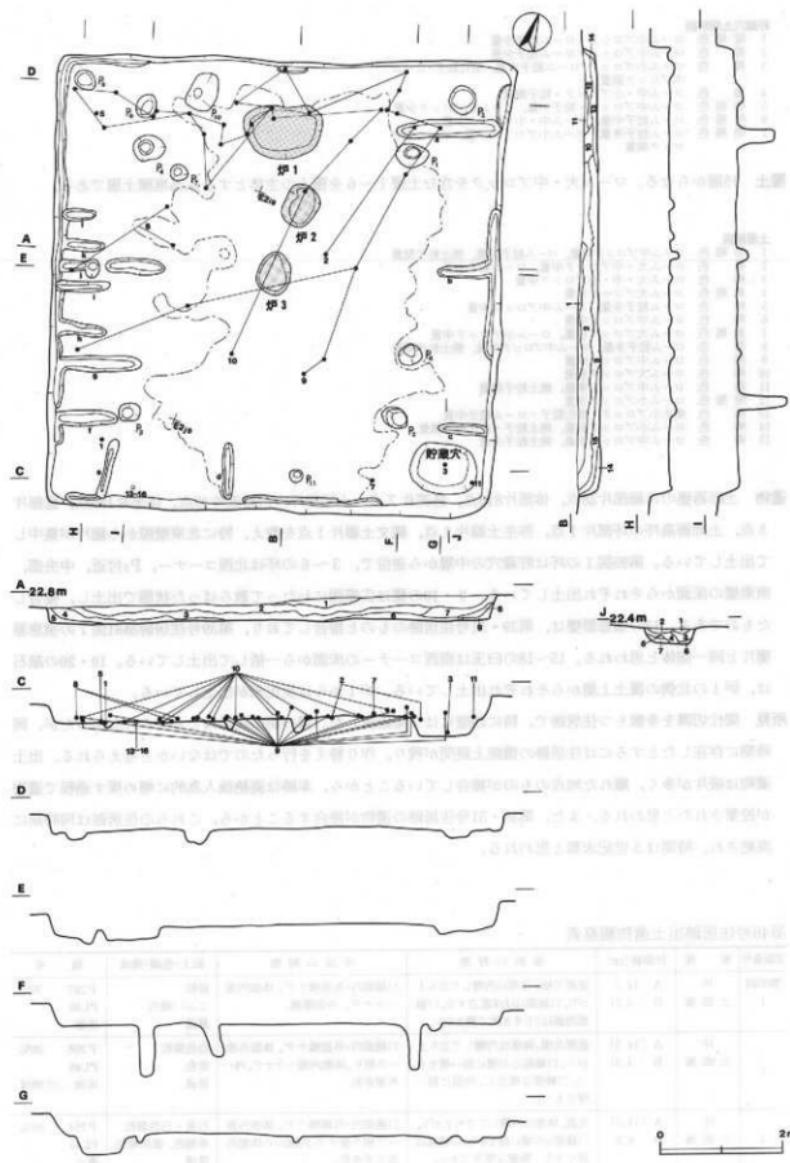
間仕切溝 12条(a~l)。東壁から3条(a~c)、南壁から2条(d~e)、西壁から7条(f~l)がそれぞれ中央に向かって延びている。上幅18~30cm、深さ3~17cmで、断面は「U」字形、あるいは逆台形である。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。

ピット 11か所(P₁~P₁₁)。P₁~P₄は長径35~42cm、短径30~40cmの楕円形、深さは75~80cmの主柱穴である。P₁₁は径20cmの円形、深さ25cmで出入り口施設に伴うピットである。P₅~P₁₀は性格不明である。炉3か所。

炉1は中央部北西寄りに位置し、長径130cm、短径85cmの楕円形である。炉2は炉1に隣接し、長径70cm、短径55cmの楕円形である。炉3は中央部に位置し、長径70cm、短径55cmの楕円形である。いずれも地床炉であり、掘り込みは浅く3cm程度である。炉1の炉床は赤変してブロック状に硬化しているが、炉2・3は火熱を受けや赤変している程度である。

貯藏穴 南東コーナーに位置し、長軸107cm、短軸85cmの長方形、深さは30cm、断面は逆台形である。



第94図 第46号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック・粒子微量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック・粒子中量、ローム小ブロック少量
- 6 明褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 7 明褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量

覆土 15層からなる。ローム大・中ブロックを含む土層1~6を覆土の主体とする人為堆積土層である。

土層解説

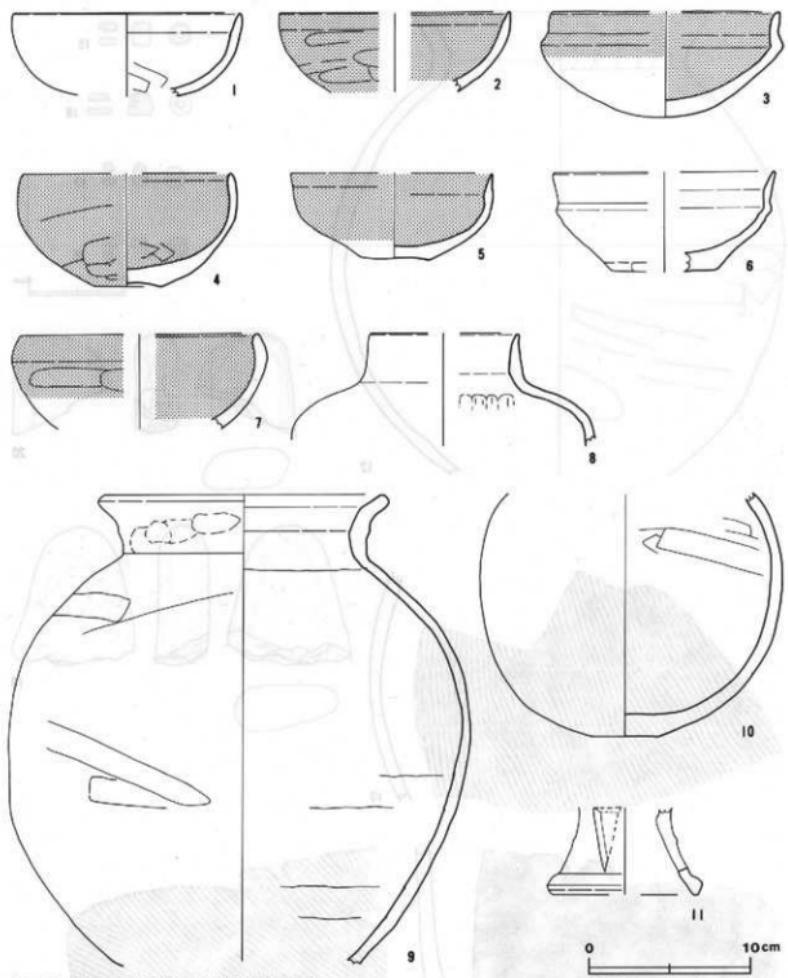
- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム大・中ブロック中量、ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム大・中・小ブロック中量
- 4 黄褐色 ローム大ブロック多量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 7 黄褐色 ローム大ブロック多量、ローム中ブロック中量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒子微量
- 9 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 10 暗褐色 ローム大ブロック多量
- 11 暗褐色 ローム中ブロック多量、焼土粒子微量
- 12 明褐色 ローム小ブロック少量
- 13 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子中量
- 14 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 15 暗褐色 ローム中ブロック中量、焼土粒子少量

遺物 土師器裏の口縁部片28点、体部片816点、底部片7点、土師器裏の口縁部片49点、体部片185点、底部片3点、土師器高环の环部片1点、弥生土器片1点、繩文土器片1点を数え、特に北東壁際から細片が集中して出土している。第95図1の环は貯蔵穴の中層から逆位で、3~6の环は北西コーナー、P3付近、中央部、南東壁の床面からそれぞれ出土している。9~10の甕は広範囲にわたって散らばった状態で出土し、接合したものである。13の須恵器甕は、第39・51号住居跡のものと接合しており、第39号住居跡第81図7の須恵器甕片と同一個体と思われる。15~18の白玉は南西コーナーの床面から一括して出土している。19~20の敲石は、炉1の北側の覆土上層からそれぞれ出土している。炉1からは炭化米が出土している。

所見 間仕切溝を多数もつ住居跡で、特に西壁には7条確認した。溝の新旧関係はとらえられなかったが、同時期に存在したとするには住居跡の機能上疑問が残り、作り替えを行ったのではないかと考えられる。出土遺物は破片が多く、離れた地点のものが接合していることから、本跡は廃絶後人為的に埋め戻す過程で遺物が投棄されたと思われる。また、第39・51号住居跡の遺物が接合することから、これらの住居跡は同時期に廃絶され、時期は5世紀末葉と思われる。

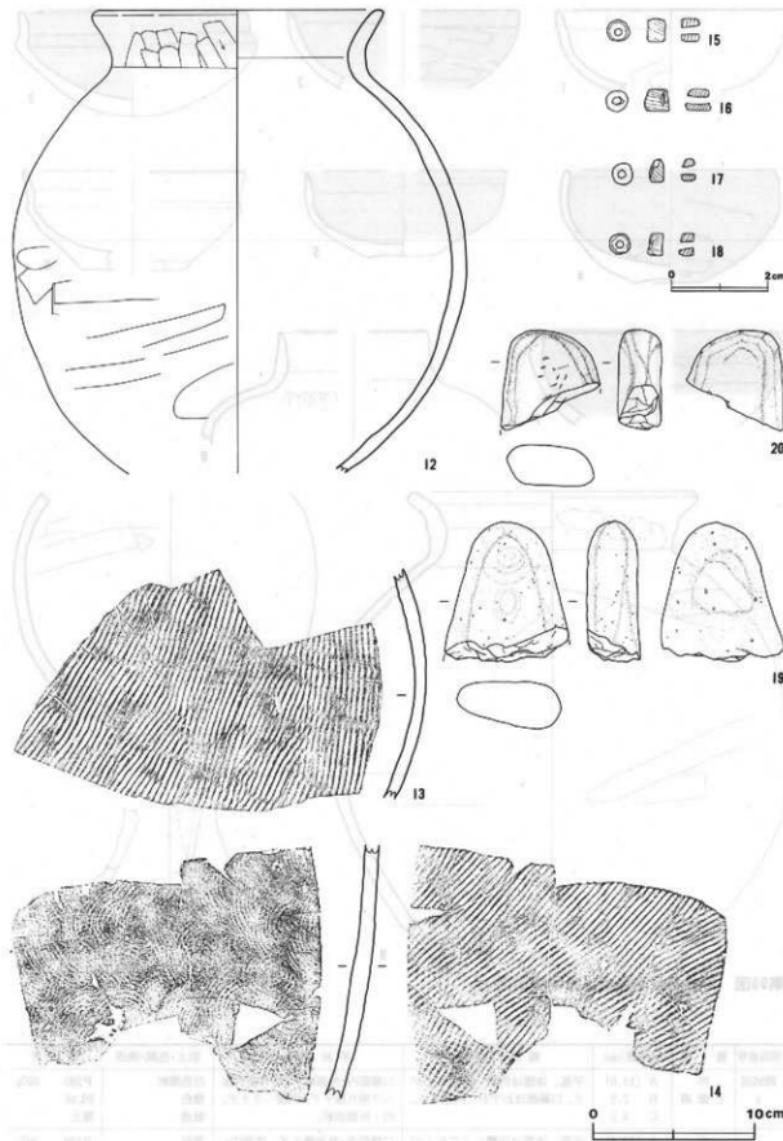
第46号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 1	坏 土 節 瓷	A 14.2 B (5.2)	底部欠損。体部は内側で立ち上がり、口縁部との境に弱い縫をもち、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面はうろこ状で縫をもつ。	口縁部内・外表面ナデ。体部内面ヘラ削り。外表面削減。	砂粒 による褐色 普通	P297 30% PL46 床面
		A [14.5] B (4.9)	底部欠損。体部は内側で立ち上がり、口縁部との境に弱い縫をもち、口縁部は直立し、内面に弱い縫をもつ。	口縁部内・外表面ナデ。体部外側ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。内・外表面削影。	白色微粒 赤色 普通	P298 20% PL46 床面 二次焼成
3	坏 土 師 器	A [14.2] B 6.6	丸底。体部は内側で立ち上がり、口縁部との境に縫をもち、口縁部は直立する。器壁は厚手である。	口縁部内・外表面ナデ。体部外側ヘラ削り後ナデ。内面から体部外面上半赤彩。	石英・白色微粒 赤褐色 普通	P294 60% PL45 覆土



第95図 第46号住居跡出土遺物実測図(1)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 4	环 土器	A [13.0] B 7.2 C 4.2	平底。体部は内彌して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り後ナギ。内面ヘラナギ。 内・外面赤彩。	白色微粒 燈色 普通	P295 60% PL46 覆土
5	环 土器	A [12.6] B 5.4 C' 4.3	平底。体部は内彌して立ち上がり、口縁部は直立する。口唇部は うちそぎ状で、内面に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面摩減。内面から口縁部外面赤 彩。	寶母 赤褐色 普通	P296 50% PL45 床面



第96図 第46号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	種類	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95回 6	环 土器	A [13.8] B 6.1 C [6.6]	平底。体部は内側に立ち上がり、口縁部との境に段をもつ。口縁部は直立する。底部は厚手である。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面削離。	砂粒 赤褐色 普通	P300 30% PL46 覆土
	环 土器	A [14.8] B (5.9)	体部から口縁部の破片。体部は内側に立ち上がり、口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	白色微粒 赤色 普通	P299 20% PL46 床面 二次焼成
	小型 短縄直 土器	A [9.3] B (7.1)	体部から口縁部の破片。体部は内側に立ち上がり、肩が張る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内と口縁部の兼には指頭押圧痕を残す。	石英 黄褐色 普通	P301 15% 覆土下層
9 10	裏 土器	A 17.4 B (29.2)	底盤欠損。体部は球形状で、最大径を中心にもつ。口縁部は「コ」の字形に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頭部指頭押圧痕。体部外面ヘラ削り。内面削離。	白色微粒 赤褐色 普通	P302 70% PL46 覆土 外面傷付着
	小亞裏 土器	B (15.1) C 4.3	口縁部欠損。平底。体部は球形状である。	体部外面摩滅。内面ヘラナデ。	長石 浅黄褐色 普通	P304 60% 床面 二次焼成
11	高环 須恵器	B (5.4) D [9.3]	脚部破片。脚部は外下方にのび、端部わずかに屈曲する。逆三角形の三方連かしをもつ。	脚部クロナデ。	砂粒 灰色 普通	P305 5% 覆土
第96回 12	裏 土器	A 17.4 B (28.9)	底盤欠損。体部は球形状で、最大径を中心にもつ。口縁部は「コ」の字形に外反する。	口縁部内・外面直下横ナデ。頭部で体部外面ヘラ削り。内面削離。	白色微粒 赤褐色 普通	P303 60% PL46 覆土

13・14は須恵器裏の体部片で、13は外面に平行叩き、14は外面に平行叩き・内面に同心円状の当て具痕を残す。

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第96回15 16 17 18 19 20	臼 臼 臼 臼 敲 敲	玉 玉 玉 玉 石 石	0.5 0.5 0.4 0.4 (8.7) (6.2)	0.5 0.4 0.5 0.4 7.7 6.1	0.4 0.5 0.3 0.3 3.3 2.5	0.2 0.2 0.2 0.2 — —	0.1 0.1 0.1 0.1 285.8 131.3	滑石 滑石 滑石 滑石 安山岩 凝灰岩	南西コーナー床面 南西コーナー床面 南西コーナー床面 南西コーナー床面 炉I北側覆土 炉I北側覆土	Q50 PLS5 Q51 PLS5 Q52 PLS5 Q53 PLS5 Q54 PLS5 Q55 PLS5

第47号住居跡（第97回）

位置 調査区南部, F2b6区。

規模と平面形 一辺が3.30mの方形と推測される。

主軸方向 N-22°-W

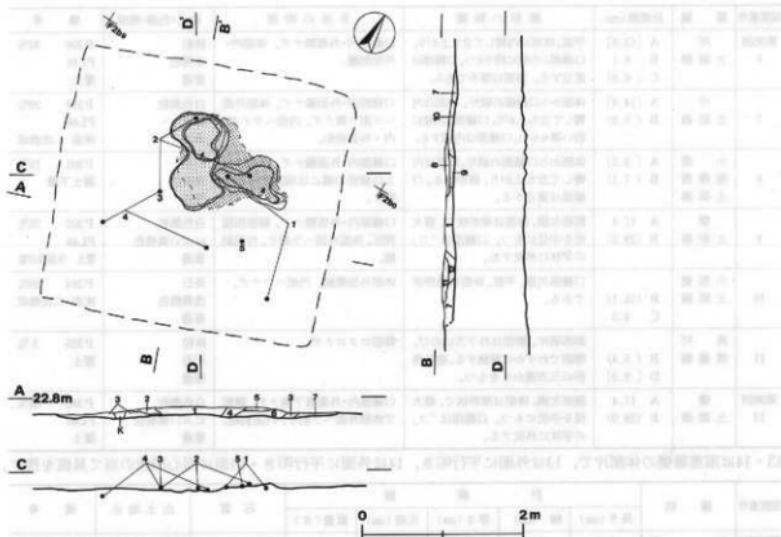
壁 上面は削平され、壁はほとんど残存していない。

床 中央部が踏み固められている。中央部北東寄りの床面には炭化材、焼土ブロックが見られた。

炉 中央部に位置し、長径121cm、短径37cmの圓錐型で、深さ5cmの地床炉である。炉床は厚さ10cm程焼けて赤変し、ブロック状に硬化している。

覆土 上面は削平され、覆土はわずかに残るだけである。

土層解説	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ローム中ブロック中量、焼土小ブロック微量	褐色											
ローム粒子中量、炭化物少量、焼土粒子微量	褐色											
ローム中ブロック多量	褐色											
ローム小ブロック中量、炭化粒子微量	褐色											
焼土粒子少量	褐色											
ローム中ブロック中量、焼土小ブロック・炭化粒子少 量	褐色											
ローム小ブロック少量	褐色											



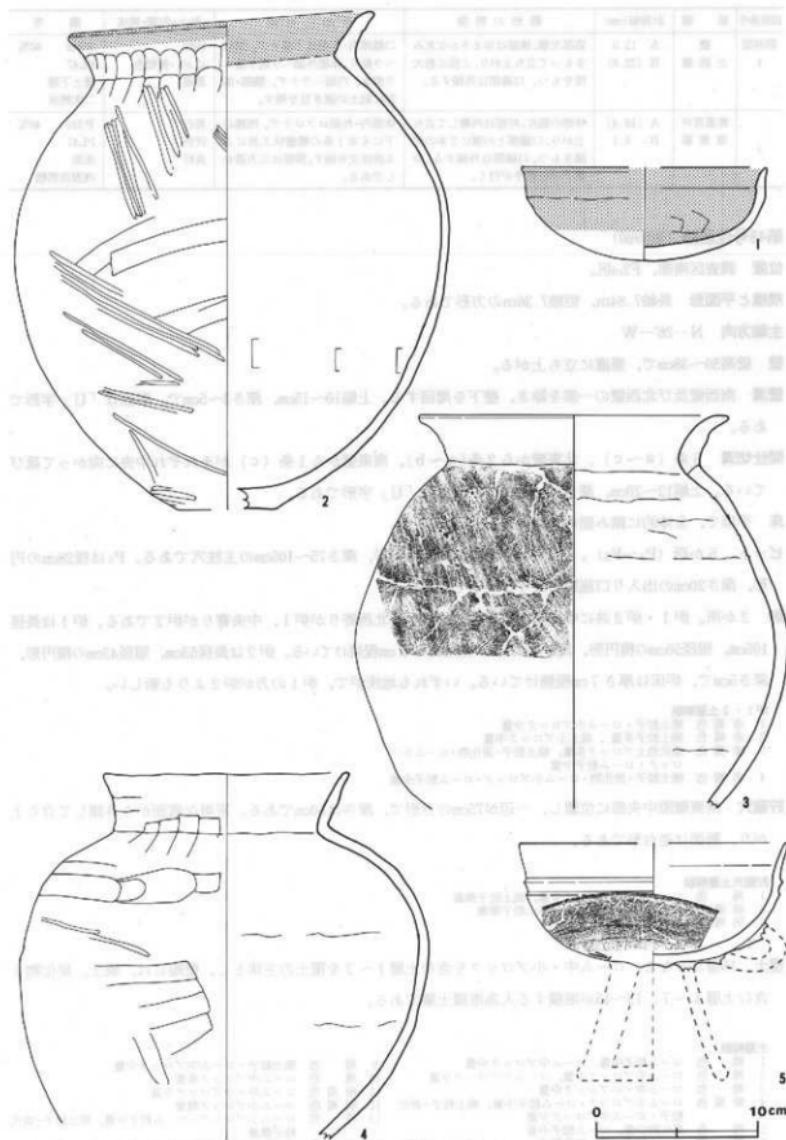
第97図 第47号住居跡実測図

遺物 第98図1の土師器壺は中央部出土のものと南東コーナー出土のものが接合している。2~4の土師器壺は中央部からほぼまとまった状態で出土し、5の須恵器高壺は中央部床面から出土している。3・4の壺は二次焼成を受けており、特に3は底部を意識的に割ったようで、底部が割られた後で火を受けている。この他に出土した細片は、土師器壺の口縁部片13点、体部片191点、底部片5点、土師器壺の口縁部片8点、体部片55点、小型壺口縁部片1点、土師器壺の体部片54点、底部片1点、繩文土器片3点である。繩文土器片は混入である。

所見 本跡は、床面に炭化材や焼土塊が見られる焼失家屋である。時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。

第47号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	环 土師器	A [15.2] B 5.8	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に縦をもつ。	口縁部内・外縁削りナダ。体部外面ナダ。内面へラナダ。内面から体部外縁削り。	砂粒 明褐色 普通	P306 70% PL47 床面
2	壺 土師器	A 18.4 B 30.9 C [6.0]	平底。体部はゆるやかな丸みをもって立ち上がり、上位に最大径をもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外縁直下横ナダ。頂部へラ削り。体部内面へラ削り後削りへラ磨き。底部外縁へラ削り。内面削り。口縁部内・外縁赤茶。	黄石・白色微粒 明褐色 普通	P307 80% PL46 覆土下層 体部深付着
3	壺 土師器	A 19.3 B (24.5)	底部欠損。体部は球形状で、最大径を中位にもつ。口縁部は「コ」の字状に外反する。	口縁部内・外縁直下横ナダ。頂部へラ削り。体部外縁へラ削り後削りへラ状工具によるナダ。内面へラナダ。内面に粘土の崩ぎ目を残す。	黄石・白色微粒 橙色 普通	P308 70% PL45 覆土下層 二次焼成



第98図 第47号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 4	裏土師器	A 15.0 B (22.8)	底部欠損。体部はゆるやかな丸みをもって立ち上がり、上位に最大径をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面直下継ナデ。腹部ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後へラ磨き。下面ヘラナデ。底部・体部に胎土の繼ぎ目を残す。	砂粒 にぼい黄褐色 普通	P309 60% PL47 覆土下層 二次焼成
		A [16.4] B 8.1	坏部の破片。坏部は内側して立ち上がり、口縁部との間に2つの凹線をもつ。口縁部は外傾する。坏部下半に把手が付く。	体部内・外面クロナデ。凹線の下に1本1条の櫛状工具による波状文を施す。脚部は三方造かしてある。	長石 灰色 良好	P310 40% PL47 床面 内面自然釉

第48号住居跡(第99図)

位置 調査区南部, F2c9区。

規模と平面形 長軸7.84m, 短軸7.36mの方形である。

主軸方向 N-26°-W

壁 壁高30~38cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 南西壁及び北西壁の一部を除き、壁下を周回する。上幅10~15cm、深さ3~5cmで、断面は「U」字形である。

間仕切溝 3条(a~c)。北東壁から2条(a~b), 南東壁から1条(c)がそれぞれ中央に向かって延びている。上幅12~20cm、深さ11~18cmで、断面は「U」字形である。

床 平坦で、全般的に踏み固められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は径63~65cmの円形、深さ75~105cmの主柱穴である。P5は径28cmの円形、深さ20cmの出入り口施設に伴うピットである。

炉 2か所。炉1・炉2共に中央部北西寄りに位置し、北西寄りが炉1、中央寄りが炉2である。炉1は長径105cm、短径50cmの楕円形、深さ6cmで、炉床は厚さ5cm程焼けている。炉2は長径53cm、短径43cmの楕円形、深さ5cmで、炉床は厚さ7cm程焼けている。いずれも地床炉で、炉1の方が炉2よりも新しい。

炉1・2土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 2 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量
- 3 赤褐色 焰灰色土・ローム小ブロック多量、焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 赤褐色 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯藏穴 南東壁際中央部に位置し、一边が75cmの方形で、深さは50cmである。平坦な底面から外傾して立ち上がり、断面は逆台形である。

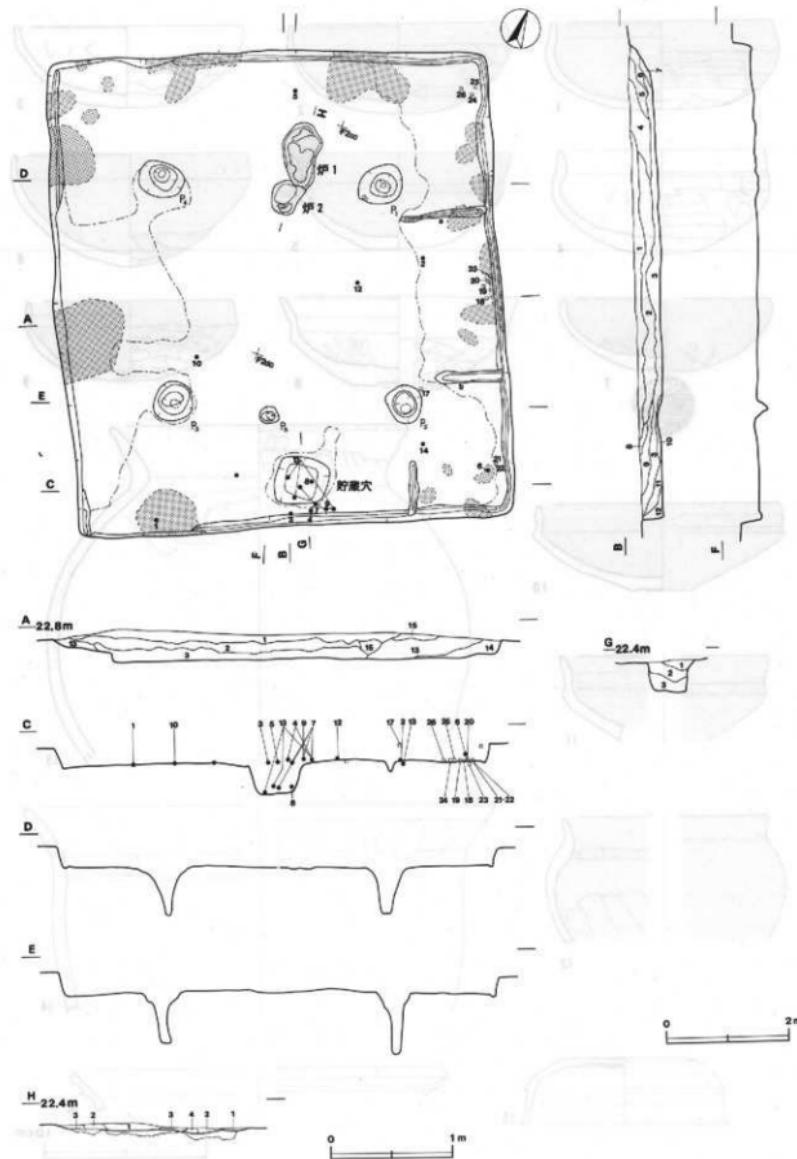
貯藏穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム大・小ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小・中ブロック中量、焼土粒子微量
- 3 明褐色 ローム粒子少量

覆土 15層からなる。ローム中・小ブロックを含む土層1~3を覆土の主体とし、壁際には、焼土、炭化物を含む土層4~7、13~15が堆積する人為堆積土層である。

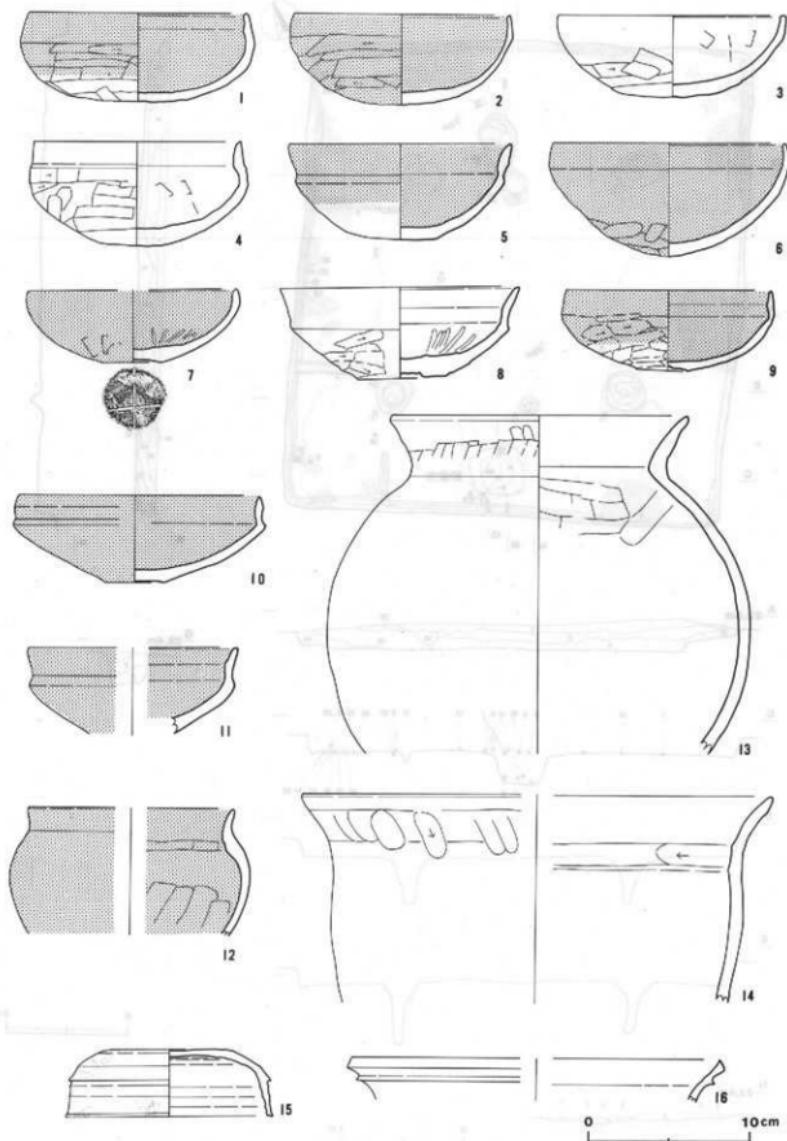
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 2 黑褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
- 3 黑褐色 ローム中・小ブロック中量
- 4 黑褐色 ローム小・中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・ローム粒子・ローム中ブロック少量
- 5 黑褐色 炭化物少量、ローム粒子中量
- 6 黑褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小・中ブロック少量
- 7 黑褐色 燃土小・中ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 8 黑褐色 炭化粒子・ローム小・中ブロック少量
- 9 暗褐色 焼土粒子・ローム中ブロック少量
- 10 暗褐色 ローム中・小ブロック多量
- 11 暗褐色 ローム中・小・中ブロック少量
- 12 明褐色 ローム小・中ブロック微量
- 13 暗褐色 ローム小・中ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 14 黑褐色 燃土粒子・炭化粒子・ローム小・中ブロック・ローム粒子少量、焼土小・中ブロック・炭化物微量
- 15 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小・中ブロック微量



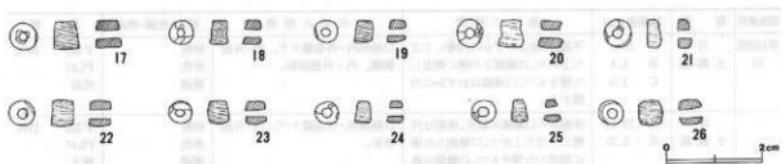
第99図 第48号住居跡実測図

（昭和25年秋土古墳群跡跡）



第100図 第48号住居跡出土遺物実測図(1)

四條畷市立考古博物館蔵



第101図 第48号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物 第100・101図の坏は南西コーナーの床面から、2の坏はP₁の北側の床面からそれぞれ完形で出土している。6の坏と14の甌は南東コーナーから、3・4・7・9の坏、15の須恵器坏蓋は南壁中央部の床面から、10の坏はP₃の北側の床面から、8の坏、13の甌は貯藏穴覆土下層から出土している。17~26の臼玉はすべて北東側の床面から出土している。15の須恵器坏蓋は第51号住居跡のものと接合している。この他の遺物細片は、土師器甌の口縁部片45点、体部片865点、底部片26点、土師器坏の口縁部片132点、体部片425点、底部片7点、須恵器坏の口縁部片6点、体部片3点、底部片1点、蓋片3点である。

所見 壁際床面に多量の炭化材・焼土塊がみられることや、覆土中にロームブロック、ローム粒子及び焼土ブロックが含まれることから、本跡は焼失後埋め戻されたものと思われる。時期は第51・56号住居跡と同時期で5世紀末葉と思われる。

第48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・施成	備考
第100図 1	坏 土師器	A 13.6	丸底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外縁横ナデ。体部・底部外面へク割り。内面ナデ。内面から口縁部外面赤色。	砂粒 赤色、底部外画褐色 普通	P311 PL47 床面
		B 5.5				
2	坏 土師器	A 13.4	丸底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部との境に長い稜をもつ。口縁部は短く内傾する。	口縁部内・外縁横ナデ。体部・底部外面へク割り。内面剥離。口縁部内面から外表面赤色。	白色微粒 赤色 普通	P312 PL47 床面外側付着
		B 6.6				
3	坏 土師器	A 14.1	丸底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はわずかに内傾し、内面に稜をもつ。	口縁部内・外縁横ナデ。体部・底部外面へク割りへラナデ。内面へアヘード。	砂粒・白色微粒 灰黄褐色 普通	P317 PL47 床面
		B 5.0				
4	坏 土師器	A 12.8	丸底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾し、内面に稜をもつ。	口縁部内・外縁横ナデ。体部外面へク割り後ナデ。内面へラナデ。	白色微粒 淡褐色 普通	P318 PL47 床面
		B 6.5				
5	坏 土師器	A [13.8]	丸底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部との境に明顯な稜をもつ。口縁部は外反する。器壁は厚い。	口縁部内・外縁横ナデ。内・外面摩減。内面から体部外面赤色。	砂粒 赤褐色 普通	P316 PL47 床面
		B 6.0				
6	坏 土師器	A 14.4	丸底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部は内傾する。器壁は薄い。	口縁部外縁横ナデ。底部外面へラナデ。体部内面剥離。内・外表面赤彩。	長石 赤褐色 普通	P313 PL47 覆土・中層
		B 5.6				
7	坏 土師器	A [13.0]	平底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部は短く内傾する。	口縁部内・外縁横ナデ。体部外縁へラナデ。内面へク磨き。底部は上底で、内面も凹む。内・外表面赤彩。	雲母 赤色 普通	P319 PL47 床面 底部へク記号
		B 4.5				
8	坏 土師器	A 14.8	平底。体部は外彫して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外縁横ナデ。体部・底部外面へク割り。内面へク磨き。	砂粒 淡褐色 普通	P314 PL47 土器 貯藏穴
		B 5.7				
		C 5.6				
9	坏 土師器	A 12.8	平底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面はうしそぎ状で、稜をもつ。	口縁部内・外縁横ナデ。体部外縁へラナデ。内面ナデ。底部上底。内面から口縁部外面赤色。	白色微粒・雲母 暗赤褐色 普通	P315 PL47 床面 外表面剥離
		B 5.1				
		C 4.2				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 10	环 土師器	A 15.0 B 5.4 C 3.5	平底。体部はわずかに内凹して立ち上がり、口縁部との境に突出した棱をもつ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外側横ナデ。内・外側削離。内・外側赤彩。	砂粒 赤色 普通	P321 20% PL47 床面
11	坏 土師器	A [13.2] B (5.3)	体部から口縁部の破片。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に突出した棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外側横ナデ。内・外側赤彩。	砂粒 赤色 普通	P322 15% PL47 覆土
12	坏 須恵器	A [12.8] B (7.8)	体部から口縁部の破片。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外側横ナデ。内面へラ削り後ヘラナデ。内・外側赤彩。	白色微粒 暗赤色 普通	P320 30% PL48 床面
13	要 土師器	A 18.4 B (21.0)	底面欠損。体部は球形状で、最大径を中位にもつ。口縁部は「コ」の字状に外反する。	口縁部内・外側直下削ナデ。頸部へラ削り。内面へラナデ。外側摩滅。	長石・石英 よい橙色 普通	P323 50% PL47 炉窓穴
14	坏 土師器	A [29.0] B (12.8)	体部上位から口縁部。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外側横ナデ。頸部内面へラナデ。内・外側摩滅。	砂粒・長石・石英 淡橙色 普通	P324 10% 床面
15	坏 須恵器	A 12.8 B 4.2	天井部は平坦で、内凹しながら口縁部に至り、口縁部との境に突出した棱をもつ。口縁部はわずかに開き、端部に段をもつ。	天井部左ロクロ回転ヘラ削り。口縁部・内面ロクロナデ。酸化焰焼成。	長石 赤灰色 良好	P326 60% PL47 焼成跡 覆土 SI号後 外側自然粘
16	要 須恵器	A [22.8] B (2.6)	口縁部破片。口縁部は外反し、口縁部下に1本の凸縁をもつ。	口縁部内・外側ロクロナデ。	白色微粒 灰オリーブ 良好	P328 5% PL48 覆土

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第101図 17	臼	玉	0.6	0.6	0.6	0.2	0.2	滑石	北東側床面 Q57 PL55
18	臼	玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	滑石	北東側床面 Q58 PL55
19	臼	玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	滑石	北東側床面 Q59 PL55
20	臼	玉	0.6	0.6	0.5	0.2	0.2	滑石	北東側床面 Q60 PL55
21	臼	玉	0.6	0.6	0.3	0.2	0.1	滑石	北東側床面 Q61 PL55
22	臼	玉	0.6	0.5	0.5	0.2	0.2	滑石	北東側床面 Q62 PL55
23	臼	玉	0.5	0.5	0.5	0.2	0.1	滑石	北東側床面 Q63 PL55
24	臼	玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	滑石	北東側床面 Q64 PL55
25	臼	玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	滑石	北東側床面 Q65 PL55
26	臼	玉	0.5	0.5	0.6	0.3	0.1	滑石	北東側床面 Q66 PL55

第49号住居跡(第102図)

位置 調査区南部, F3e2区。

重複関係 本跡は、第60号住居跡に北東壁の東コーナー寄りが掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸3.40m, 短軸2.40mの長方形である。

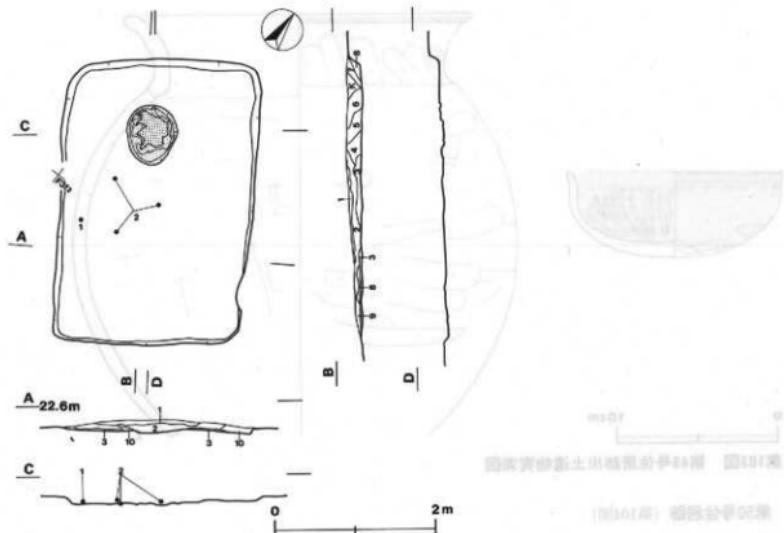
主軸方向 N-34°-W

壁 壁高6~12cmで、外傾して立ち上がる。

床 踏み締められた面は見られない。

炉 中央部北西寄りに位置し、長径75cm, 短径60cmの椭円形の地床炉である。炉床は赤変している程度である。

覆土 10層からなる。人為堆積土層である。



第102図 第49号住居跡実測図

土層解説

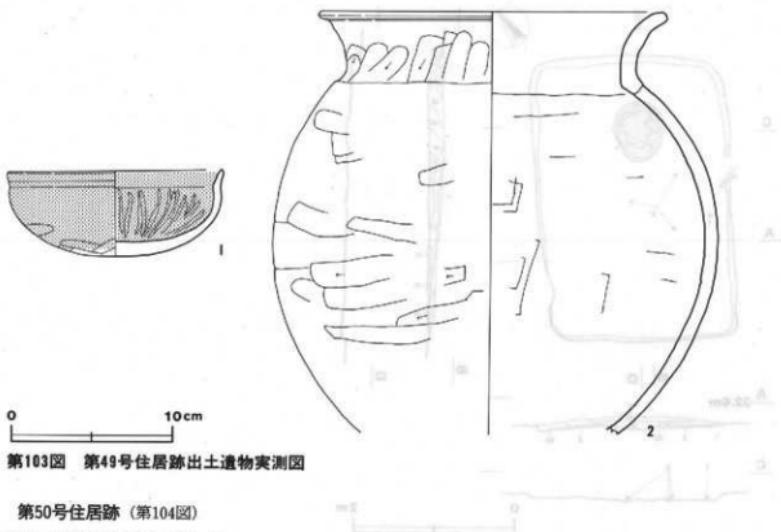
1	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子微量
2	褐色	ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム粒 子少量、焼土粒子微量
3	褐色	ローム中・小ブロック中量、炭化物少量
4	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子少量
5	褐色	焼土小ブロック・ローム小ブロック中量
6	褐色	ローム小ブロック中量
7	にじい褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量
8	褐色	ローム小ブロック中量
9	褐色	ローム粒子中量
10	褐色	ローム中ブロック中量。ローム中ブロック少量

遺物 本跡からの出土遺物は、土師器壺の口縁部片15点、体部片403点、底部片5点、土師器環の口縁部片28点、体部片21点で、土師器壺の割合が高い。第103図1の壺は南西側覆土下層から、2の壺は中央部の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、小規模な住居跡である。時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。

第49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 1	土師器	A 13.4 B 5.3	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は強く外傾する。口縁部内面はうちさぎ状で後をもつ。	口縁部内・外側横ナギ。体部・底 部外側へラ削り。内面へク磨き。 内・外側赤色。	石英・雲母 赤色 普通	P329 90% 覆土下層
		A 21.8 B (26.2)	体部から口縁部の破片。体部は球形状で、口縁部は「コ」の字状に外反する。	口縁部内・外側直下横ナギ。頭 部・体部外側へラ削り。内面へラ ナギ。頭部に粘土の擦ぎ目を残す。	砂粒 淡黄色 普通	P330 40% 覆土下層



第103図 第49号住居跡出土遺物実測図

第50号住居跡（第104図）

位置 調査区南部西側、F2_{2a}区。

規模と平面形 長軸6.87m、短軸5.08mの長方形である。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高15~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南壁下を巡っている。上幅10cm、深さ6~7cmで断面は「U」字形である。

間仕切溝 5条（a～e）。上幅13~25cm、深さ6~12cmで、断面は「U」字形である。北東壁から1条（a）

南東壁から1条（b）、南西壁から3条（c～e）、中央に向かって伸びている。c・dは重複しており、dの方が新しく、作り替えを行っている。

床 平坦である。南壁東寄りには幅30~60cm、10cmの高さで馬蹄形の高まりがあり、硬化が著しく、出入り口施設と思われる。また、貯蔵穴1を開むように幅4~7cm、高さ5cmの高まりがある。

ピット 4か所（P₁～P₄）。P₁は中央部北東寄りにあり、長径85cm、短径60cmの楕円形、深さ60cmである。P₂は中央部南西寄りにあり、径20cmの円形、深さ65cmである。いずれも主柱穴である。P₃は南壁際馬蹄形状の高まりの内側に位置し、長径40cm、短径25cmの楕円形、深さ18cmの出入り口施設に伴うピットである。P₄は間仕切溝eと重複しており、P₄の方が古く、本住居跡に伴うものとするには疑問が残る。

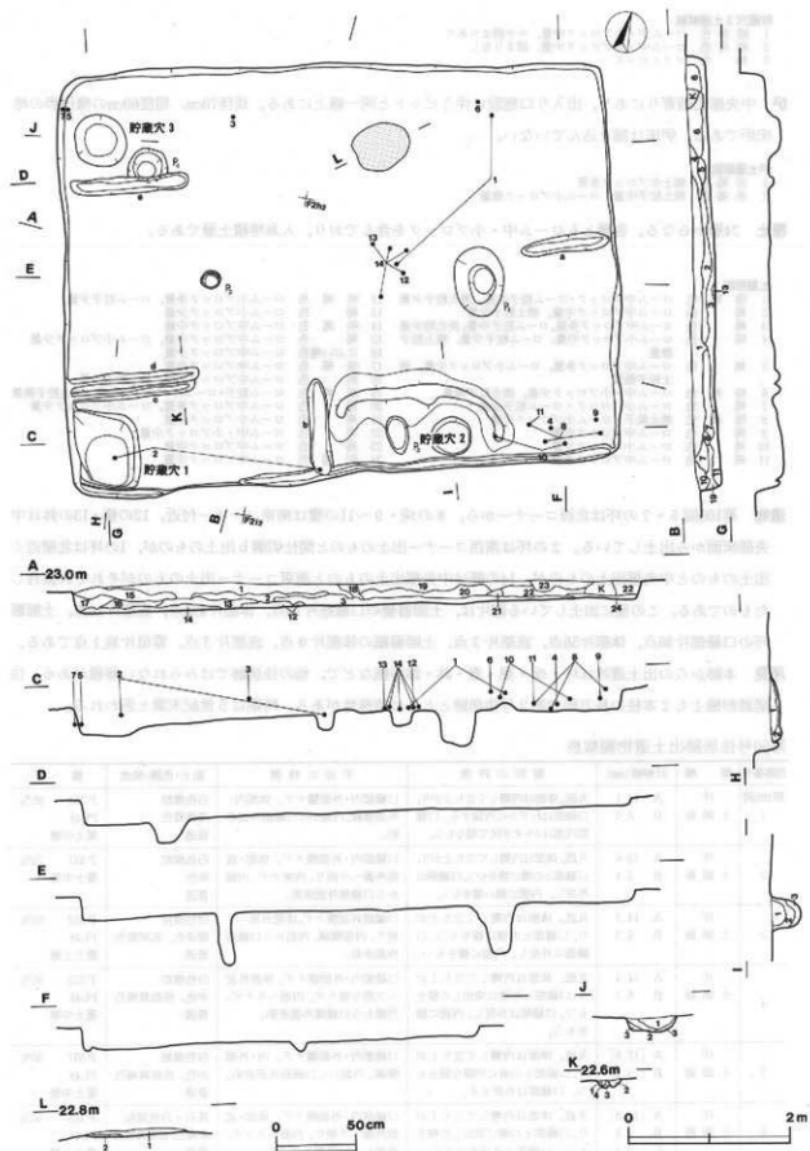
貯蔵穴 3か所。貯蔵穴1は南西コーナーに位置し、長軸85cm、短軸60cmの長方形で、深さは10cmと浅い。幅4~7cm、高さ5cmの高まりが巡る。貯蔵穴2はP₃（出入り口に伴うピット）の東側に隣接し、径50cmの円形で、深さは40cmで、平坦な底面から垂直に立ち上がり、断面は箱形である。貯蔵穴3は西壁の北西コーナー寄りに位置し、径65cmの円形で、深さは20cm、断面は擂鉢形である。

貯蔵穴1 土層解説

- | | | | |
|---|---|---|------------------------|
| 1 | 褐 | 色 | ローム中・小ブロック少量 |
| 2 | 褐 | 色 | ローム中・ブロック少量、ローム小ブロック微量 |

貯蔵穴2 土層解説

- | | | | |
|---|---|---|---------------|
| 1 | 褐 | 色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 褐 | 色 | ローム中・小ブロック中量 |
| 3 | 褐 | 色 | 細かい粒子の緻密な暗褐色土 |



第104図 第50号住居跡実測図

貯藏穴3土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック中量。やや緑まりあり
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック中量。緑まりなし
- 3 褐色 ソフトローム

炉 中央部北西寄りにあり、出入り口施設に伴うピットと同一線上にある。長径70cm、短径60cmの梢円形の地床炉である。炉床は掘り込んでいない。

炉土層解説

- 1 赤褐色 地下中ブロック多量
- 2 赤褐色 地下粒子中量、ローム小ブロック微量

覆土 24層からなる。各層ともローム中・小ブロックを含んでおり、人為堆積土層である。

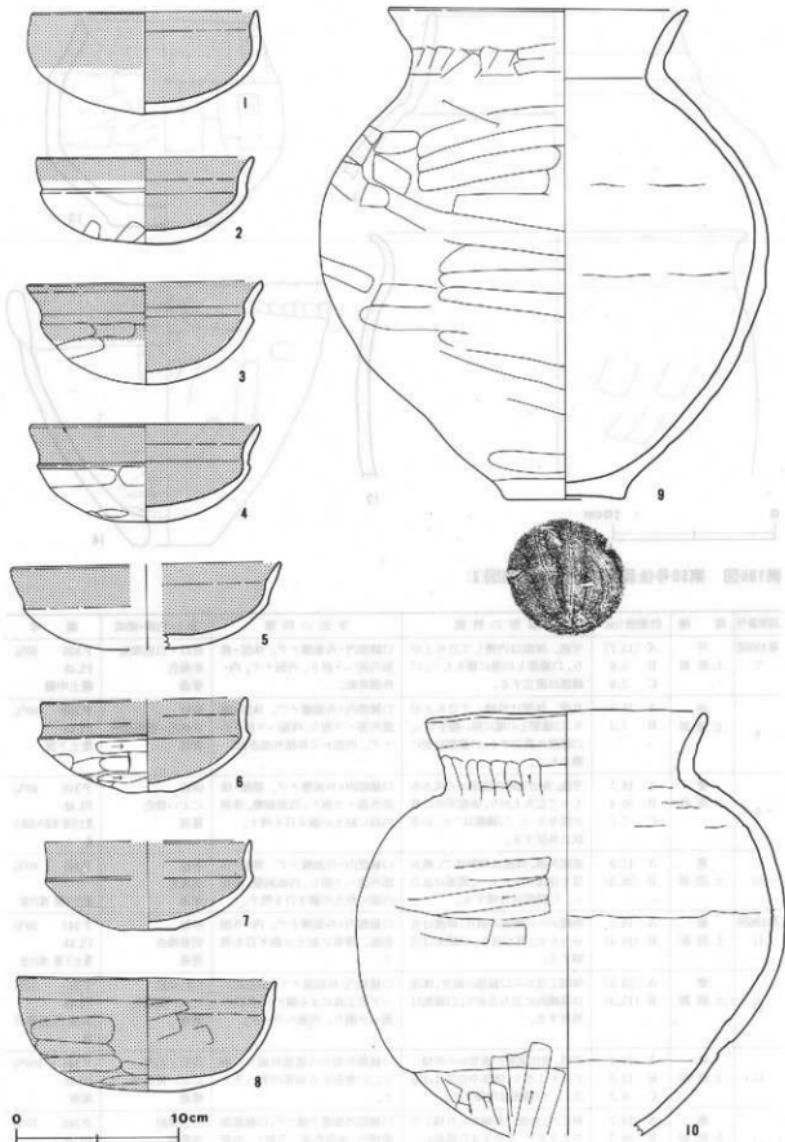
土層解説

1	暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量	12	明褐色	ローム小ブロック多量、ローム粒子少量
2	褐色	ローム中ブロック中量、焼土粒子少量	13	褐色	ローム中ブロック中量
3	褐色	ローム中ブロック多量、ローム粒子中量、炭化物少量	14	明褐色	ローム中ブロック中量
4	褐色	ローム小ブロック中量、焼土粒子	15	褐色	ローム中ブロック少量
	覆土		16	こぶし褐色	ローム中ブロック少量
5	褐色	ローム中ブロック多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子	17	褐色	ローム中ブロック中量、焼土粒子少量
	土粒子		18	褐色	ローム中ブロック中量、焼土粒子少量
6	暗褐色	ローム中・小ブロック少量、焼土粒子微量	19	暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック多量、焼土粒子微量
7	褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子少量	20	褐色	ローム中ブロック多量、ローム小ブロック少量
8	褐色	焼土粒子・ローム小ブロック少量	21	褐色	ローム小ブロック少量
9	褐色	ローム中・小ブロック中量	22	褐色	ローム中・小ブロック少量
10	褐色	ローム小ブロック少量	23	褐色	ローム中ブロック中量
11	褐色	ローム中ブロック多量	24	明褐色	ローム中ブロック少量

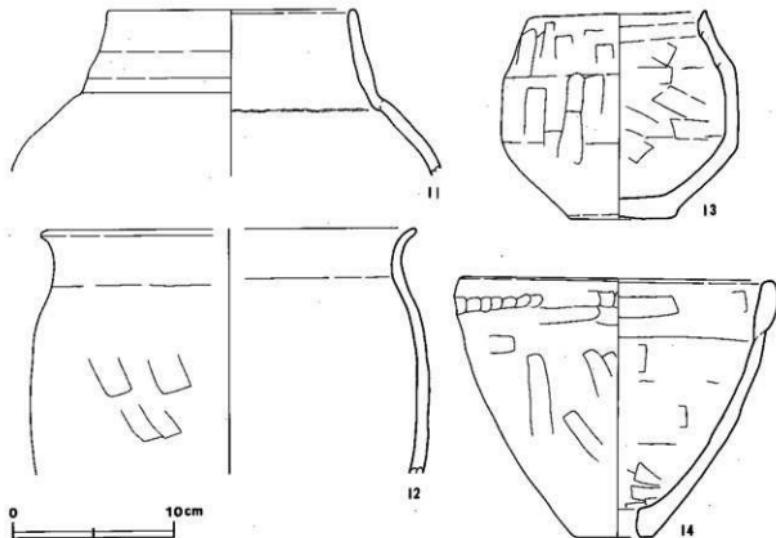
遺物 第105図5・7の坏は北西コーナーから、8の甕・9~11の甕は南東コーナー付近、12の甕・13の鉢は中央部床面から出土している。2の坏は南西コーナー出土のものと間仕切溝b出土のものが、1の坏は北壁近く出土のものと中央部出土のものが、14の瓶は中央部出土のものと南東コーナー出土のものがそれぞれ接合したものである。この他に出土している細片は、土師器甕の口縁部片16点、体部片496点、底部片16点、土師器坏の口縁部片36点、体部片56点、底部片3点、土師器瓶の体部片9点、底部片3点、雲母片岩1点である。所見 本跡からの出土遺物は坏・甕・甕・壺・鉢・鉢形瓶などで、他の住居跡ではみられない器種がある。住居跡形態上も2本柱の長方形で第2号住居跡とともに特殊性がある。時期は5世紀末葉と思われる。

第50号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 14.1 B 6.5	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。口縁部内面はうつぼぎ状で縫をもつ。	口縁部内・外表面ナデ。体部内・外表面摩滅。内面から口縁部外表面赤彩。	白色微粒 浅黄褐色 普通	P334 95% PL48 覆土中層
		A 13.6 B 5.4	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に縫をもつ。口縁部は外反し、内面に縫をもつ。	口縁部内・外表面ナデ。体部・底部外表面へラ削り、内面ナデ。内面から口縁部外表面赤彩。	白色微粒 赤色 普通	P331 70% PL48 覆土中層
3	坏 土師器	A 14.7 B 6.3	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に縫をもつ。口縁部は外反し、内面に縫をもつ。	口縁部外表面ナデ。体部外表面へラ削り。内面摩滅。内面から口縁部外表面赤彩。	白色微粒 暗赤色、底部黒褐色 普通	P332 80% PL48 覆土上層
		A 14.4 B 6.1	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に突出した縫をもつ。口縁部は外反し、内面に縫をもつ。	口縁部内・外表面ナデ。体部外表面へラ削り後ナデ。内面へラナデ。内面から口縁部外表面赤彩。	白色微粒 赤色、底部黒褐色 普通	P333 95% PL48 覆土中層
5	坏 土師器	A [17.8] B (5.3)	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な縫をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外表面ナデ。内・外表面摩滅。内面から口縁部外表面赤彩。	白色微粒 赤色、底部黒褐色 普通	P337 50% PL48 覆土中層
		A [12.8] B 5.8 C 3.1	平底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に突出した縫をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外表面ナデ。体部・底部外表面へラ削り。内面へラナデ。内面から口縁部外表面赤彩。	長石・白色微粒 赤褐色、底部黒褐色 普通	P335 50% PL48 覆土上層



第105図 第50号住居跡出土遺物実測図(1)



第106図 第50号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 7	坏 土師器	A [12.7]	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底外部へラ削り。内面ナデ。内・外面部赤。	長石・白色微粒 赤褐色 普通	P336 50% PL48 覆土中層
		B 5.6				
		C 3.6				
8	焼 土師器	A 16.0	丸底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底外部へラ削り。内面へラ削り削りナデ。内面から体部外面赤彩。	砂粒 赤褐色、底部褐色 普通	P339 60% PL48 覆土下層
		B 7.2				
9	焼 土師器	A 18.7	平底。突出気味の底面部から丸みをもって立ち上がり、体部中位に最大径をもつ。口縁部は「コ」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頭部・体部外面へラ削り。内面刺刷。体部内面に粘土の纏ぎ目を残す。	砂粒 よい褐色 普通	P340 80% PL48 覆土下層 体部系複雑付 着
		B 30.4				
		C 7.7				
10	更 土師器	A 17.0	底部欠損。体部は球形状で、最大径を体部中位にもつ。頭部は直立し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頭部・体部外面へラ削り。内面刺刷。体部内面に粘土の纏ぎ目を残す。	砂粒 淡黄色 普通	P341 80% 覆土中層 集付着
		B (26.5)				
第106図 11.	寒 土師器	A 15.5	体部から口縁部の破片。体部は丸みをもち、肩が張る。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面刺刷。頭部に粘土の纏ぎ目を残す。	砂粒 明黄褐色 普通	P342 20% PL48 覆土下層 集付着
		B (10.4)				
12	燒 土師器	A [23.5]	体部上位から口縁部の破片。体部は直線的に立ち上がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頭部短いハケ状工具による横ナデ。体部外側へラ削り。内面へラナデ。	白色微粒 よい黄褐色 普通	P343 30% PL48 東面 外面葉付 着
		B (15.3)				
13	鉢 土師器	A 11.1	平底。突出気味の底面部から外傾して立ち上がり。体部中位にほぼ直立し、口縁部は内傾する。	口縁部外側から底部外側へラ削り。口縁部から体部内面へラナデ。	長石・石英 よい黄褐色 普通	P344 100% PL48 床面
		B 13.0				
		C 6.2				
14	瓶 土師器	A 19.7	単孔式。体部は直線的に外傾して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部は肥厚。口唇部は平坦である。	口縁部外側直面横ナデ。口縁部指壓押。体部外側へラ削り。内面へラナデ。	白色微粒 淡褐色 普通	P345 70% PL48 床面
		B 16.3				
		C 4.8				

第51号住居跡（第107図）

位置 調査区南部東側, F3a2区。

規模と平面形 長軸2.80m, 短軸2.56mの長方形である。

長軸方向 N-18°-W

壁 壁高15~20cmで、垂直に立ち上がる。

床 踏み締めた面は見られない。

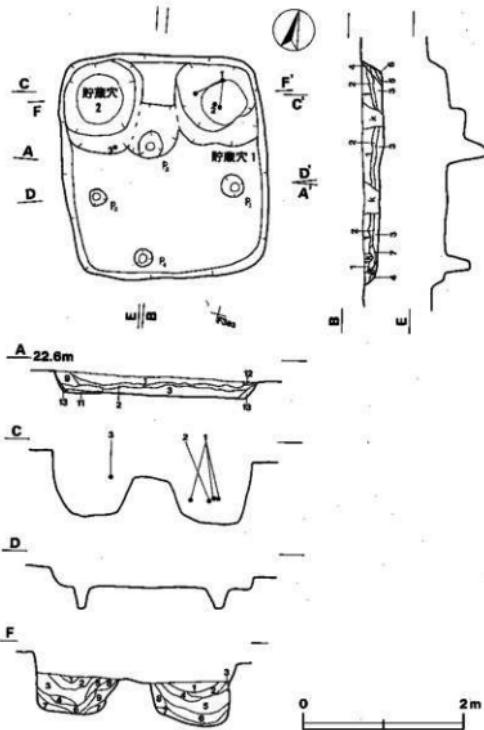
ピット 4か所 (P₁~P₄)。径25~32cmの円形で、深さは29~49cmである。性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は北東コーナーに位置し、径100cmの円形で、深さ78cmである。貯蔵穴2は北西コーナーに位置し、径105cmの円形で、深さ79cmである。いずれもかなり大型で、本跡の北半分を占めている。

貯蔵穴1・2 土質解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム中・小ブロック少量

- 6 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 7 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量
- 9 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量



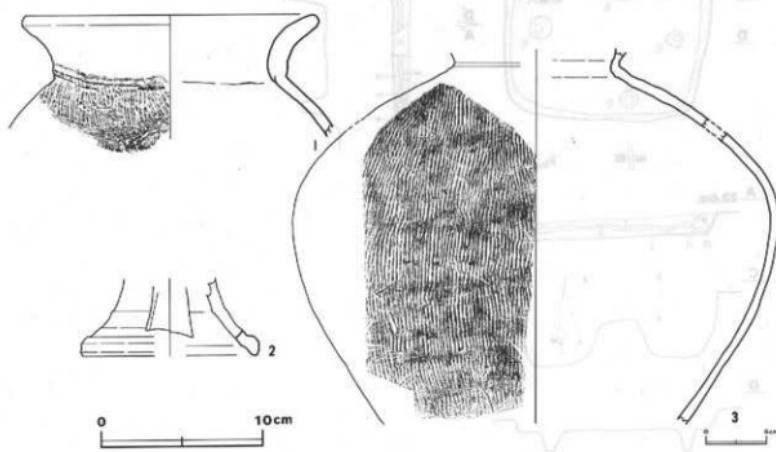
第107図 第51号住居跡実測図

覆土 13層からなる。ロームブロックを含む土層1~3を主体とする人為堆積土層である。
図101図 12層

土層解説		
1	褐	色
2	褐	色
3	明	色
4	褐	色
5	褐	色
6	褐	色
7	暗	色
8	暗	色
9	褐	色
10	褐	色
11	暗	色
12	暗	色
13	褐	色

遺物 本跡から出土した遺物量は少なく、土師器壺の体部片22点、底部片1点、土師器壺の口縁部片1点、体部片3点、須恵器壺の体部片10点である。第108図1の土師器壺と2の須恵器高壺は貯蔵穴2から出土している。3の須恵器壺は住居跡の南側から出土しているが、第48号住居跡・第56号住居跡から出土した壺の体部片と接合したものである。

所見 本跡は、小規模であり、床面積のほぼ半分を貯蔵穴が占めている。炉や柱穴もなく居住を目的としているとは考えにくく、倉庫的な用途の建物跡の可能性が考えられる。本跡から出土した遺物と第48号住居跡・第56号住居跡の遺物が接合することから3軒の住居跡は同時期に廃棄され、その際遺物を投棄したものと考えられる。時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第108図 第51号住居跡出土遺物実測図

図101図 12層

第51号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 1	甕 土器	A 18.4 B (7.7)	口縁部の破片。口縁部は「コ」の字状に外反する。	口縁部外面ハケ状工具によるナゲ後横ナデ。底面ハケ状工具によるナデ。内面削離。	砂粒 淡黄褐色 普通	P346 10% 貯藏穴2の中層
2	高環 須恵器	B (4.8) D [10.8]	脚部破片。脚部は外下方にのび、環部であるかに屈曲する。長方形の三方透かしを持つ。	脚部内・外面クロコナデ。	砂粒 灰オリーブ色 良好	P347 5% PL49 貯藏穴2の中層
3	甕 須恵器	B (30.8)	体部破片。体部は丸みを持って立ち上がり、体部中位に最大径をもつ。	体部外表面平行印きの後、薄い平行沈線を巡らす。内面は同心円当て具痕を残すが、下半は磨り消し。	砂粒 灰色 良好	P348 30% PL48 墳上付近 48-50号柱と接合

第53号住居跡（第109図）

位置 調査区南部, F3hi区。

規模と平面形 一辺が3.10mの方形である。

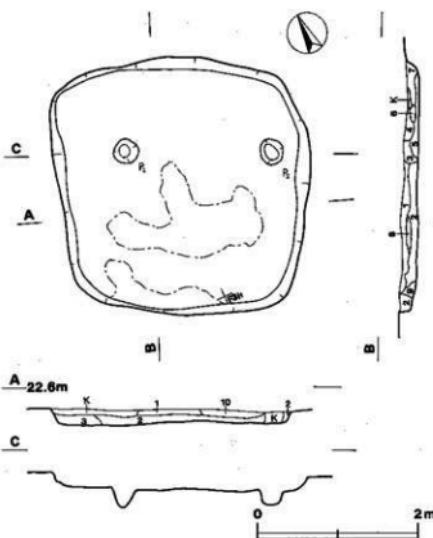
長軸方向 N-25°-E

壁 壁高10~15cmで、外傾して立ち上がる。

床 中央部から南西寄りが踏み締められている。

ピット 2か所 (P₁~P₂)。径28~30cmの円形、深さ20~25cmで柱穴と思われる。

覆土 10層からなる。人為堆積土層である。



第109図 第53号住居跡実測図

土層解説

1	褐	色	ローム小ブロック中量	6	明	褐	色	ローム小ブロック中量, ローム粒子少量	
2	黄	褐	色	ローム小ブロック中量	7	暗	褐	色	ローム小ブロック中量
3	褐	色	ローム小ブロック少量	8	明	褐	色	ローム小ブロック少量	
4	褐	色	ローム大ブロック多量, ローム小ブロック少量	9	明	褐	色	ローム大ブロック中量	
5	明	褐	色	ローム大ブロック多量, ローム小ブロック中量	10	褐	色	ローム小ブロック中量	

遺物 本跡からの出土遺物の量は少なく、土師器壺の体部片18点、底部片1点のみである。

所見 本跡は、北側寄りに2本の柱穴をもつが炉は付設されておらず、居住を目的とするには疑問が残る遺構である。時期は出土遺物が破片で、時期を決定することは難しいが、5世紀後葉と思われる。

第55号住居跡（第110図）

位置 調査区南部中央、F2e区。

規模と平面形 長軸3.55m、短軸3.35mの方形である。

長軸方向 N-5°-W

壁 壁高16~20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、中央部が踏み締められている。

貯蔵穴 3か所。貯蔵穴1は北東コーナーに位置し、径85cmの円形、深さは45cmで、平坦な底面から外傾して立ち上がり、断面は逆台形である。貯蔵穴2は東壁際南東コーナー寄りに位置し、径95cmの円形、深さは65cmで、平坦な底面から垂直に立ち上がり、断面は箱形である。貯蔵穴3は南西コーナーに位置し、長径123cm、短径95cmの不整精円形で、深さは40cm、断面は「U」字形である。いずれもかなり大型である。

貯蔵穴1 土層解説

1	青	褐	色	ローム中ブロック多量	1	青	褐	色	ローム中ブロック中量
2	褐	色	ローム中ブロック多量、炭化粒子微量	2	青	褐	色	ローム粒子中量、ローム大・小ブロック少量	
3	黄	褐	色	ローム中ブロック少量	3	暗	褐	色	ローム中・小ブロック多量
4	褐	色	ローム中ブロック中量	4	明	褐	色	ローム中ブロック多量、ローム小ブロック少量	
5	褐	色	ローム小ブロック多量	5	褐	色	ローム中ブロック多量、ローム小ブロック中量、ローム粒子少量		
6	褐	色	ローム中ブロック多量	6	明	褐	色	ローム粒子中量	
7	褐	色	ローム中ブロック多量	7	褐	色	ローム粒子中量、ローム大・中・小ブロック少量		

貯蔵穴3 土層解説

1	褐	色	ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量	
2	褐	色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量	
3	褐	色	ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量	
4	褐	色	ローム大・中・小ブロック少量	
5	褐	色	ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量	
6	黄	褐	色	ローム粒子少量
7	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量	
8	褐	色	ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量	

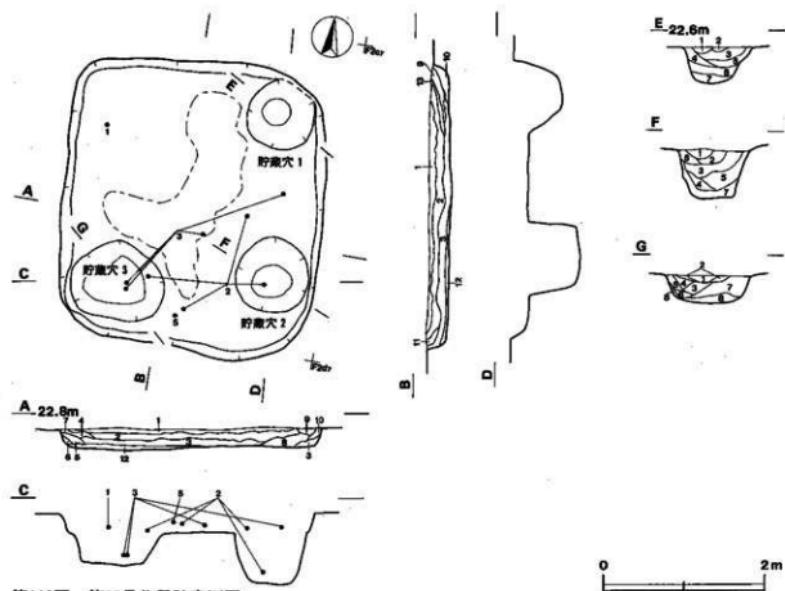
覆土 12層からなる。ローム中ブロックを多量に含む土層1~3を主体とする人為堆積土層である。

土層解説

1	褐	色	ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量	7	青	褐	色	ローム粒子多量
2	褐	色	ローム中・小ブロック中量	8	暗	褐	色	ローム中ブロック多量、ローム小ブロック中量
3	褐	色	ローム中ブロック多量、ローム小ブロック中量	9	暗	褐	色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
4	暗	褐	色	10	暗	褐	色	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量
5	褐	色	ローム中ブロック中量、炭化粒子微量	11	暗	褐	色	燒土粒子・ローム小ブロック少量
6	褐	色	ローム小ブロック中量	12	褐	色	ローム中ブロック多量	
7	褐	色	ローム中ブロック多量					

遺物 遺物の出土量をみると、土師器壺の口縁部片7点、体部片283点、底部片4点、土師器壺の口縁部片3点、体部片9点で、圧倒的に壺が多く、すべて覆土中からの出土である。第111図1の土師器は北東側から、2・5の壺は南側から、3の壺は貯蔵穴から出土している。

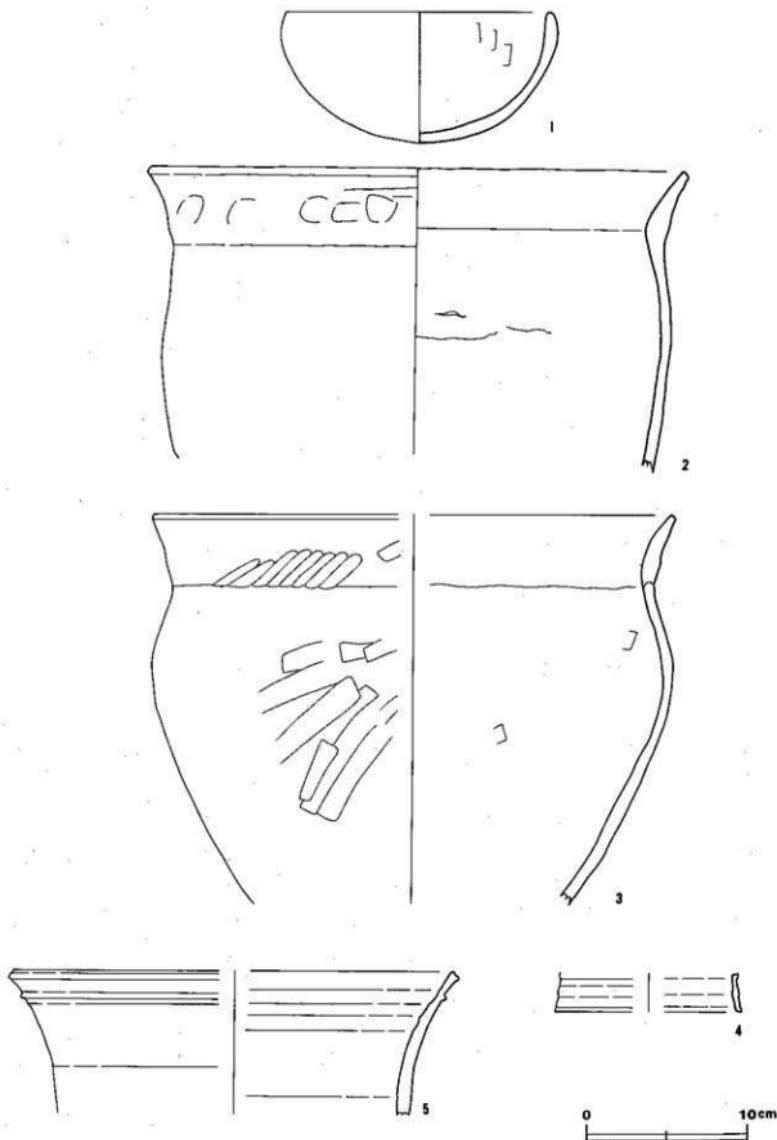
所見 本跡は、複数の面積の広い貯蔵穴を持つ遺構であり、狭い床面積の割合に対して半分を貯蔵穴が占めていることから、倉庫的な用途の建物と思われる。時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第110図 第55号住居跡実測図

第55号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第111図 1	甕 土師器	A 16.7 B 8.2	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は短く内傾する。口縁部は肥厚する。	口縁部内・外側横ナデ。内・外側制離。内面にヘラ当て痕が残る。	砂粒 によい黄褐色 普通	P367 80% PL49 覆土下層 外面煤付着
2	甕 土師器	A 33.2 B (18.6)	体部上位から口縁部の破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外側直下横ナデ。口縁部内に部分的に指頭押圧痕が残る。	砂粒・長石 によい褐色 普通	P368 20% PL49 覆土下層
3	甕 土師器	A [32.7] B (24.4)	体部から口縁部の破片。体部は丸みをもって立ち上がり、体部中位に最大径をもつ。口縁部はわずかに外反し、口径と体部最大径はほぼ同じ。	口縁部内・外側横ナデ。頭部にヘラ代工具の押圧痕が残る。体部外側にクラゲり。体部内面にヘラ当て痕、頭部に胎土の離ざ目が残る。	長石・砂粒 によい黄褐色 普通	P369 15% PL49 貯蔵穴覆土
4	環 須恵器	A [11.6] B (2.4)	口縁部破片。口縁部は下外方に下り、端部は内傾する型。段をもつが平底に近い。腹壁は薄い。	口縁部内・外側ロクロナデ。	白色微粒 灰色 普通	P370 5% 覆土
5	甕 須恵器	A [17.5] B (8.9)	口縁部の破片。口縁部は外反し、口縁部底面に1条の凸帯が残る。	体部内・外側ロクロナデ。	長石 灰色 良好	P371 5% 覆土中層 内面自然釉



第111図 第55号住居跡出土遺物実測図

第56号住居跡（第112図）

位置 調査区南部中央, F2_{et}区。

規模と平面形 一辺が6.24mの方形である。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高45~50cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 南壁中央部を除いて壁下を巡っている。上幅8~15cm、深さ3~5cmで、断面は「U」字形である。

間仕切溝 8条(a~h)。東壁から2条(a・b), 南壁から1条(c), 西壁から3条(d~f), 北壁から2条(g・h), それぞれ中央に向かって延びている。上幅12~25cm、深さ5~7cmで、断面は「U」字形である。間仕切溝bはP₂と連結している。間仕切溝cは間仕切溝gと対面している。

床 平坦で、全体的に踏み締められている。

ピット 7か所(P₁~P₇)。P₁~P₄は径45~55cmの円形、深さ60~70cmの主柱穴である。P₅は主柱穴P₁とP₂の中間に位置し、長径40cm、短径30cmで、深さは20cmと浅く、補助柱穴と思われる。P₆は南東壁中央部から80cm北側に位置し、長径42cm、短径30cmの楕円形で、深さ15cmの出入り口に伴うピットである。P₇は径30cm、深さ8cmで性格不明である。

貯蔵穴 南壁際南東コーナー寄りに位置し、径70cm程の円形、深さは60cmで平坦な底面から垂直に立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

1	褐	色	ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・ロー ム小ブロック微量	3	褐	色	炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2	褐	色	燒土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化 粒子微量	4	褐	色	炭化粒子・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

炉 2か所。炉1・炉2共に中央部北西寄りにあり、出入り口施設に伴うピットと同一線上にある。炉1は長径150cm、短径65cmの楕円形で、深さ3~8cmの地床炉で、炉床は赤変硬化している。炉2は径45cmの円形の地床炉で、炉床は掘り込んでいない。

炉1・2土層解説

1	暗	赤	褐色	燒土粒子中量、燒土中・小ブロック・ローム中ブ ロック少量	5	暗	赤	褐色	燒土粒子中量、燒土小ブロック少量、炭化物微量
2	暗	赤	褐色	燒土中ブロック・燒土粒子少量、ローム粒子微量	6	褐	色	燒土粒子・ローム粒子・ローム小ブロック少量	
3	赤	褐	色	燒土中ブロック・燒土粒子少量、ローム小ブロッ ク・ローム粒子微量	7	赤	褐	色	燒土粒子・ローム粒子少量、燒土小ブロック・ロー ム小ブロック微量
4	暗	赤	褐色	燒土粒子・ローム粒子少量	8	によい	赤褐色	焼土小ブロック・燒土粒子少量、ローム小ブロッ ク・ローム粒子微量	

覆土 13層からなる。土層1~4・7を主体とする人為堆積土層である。

土層解説

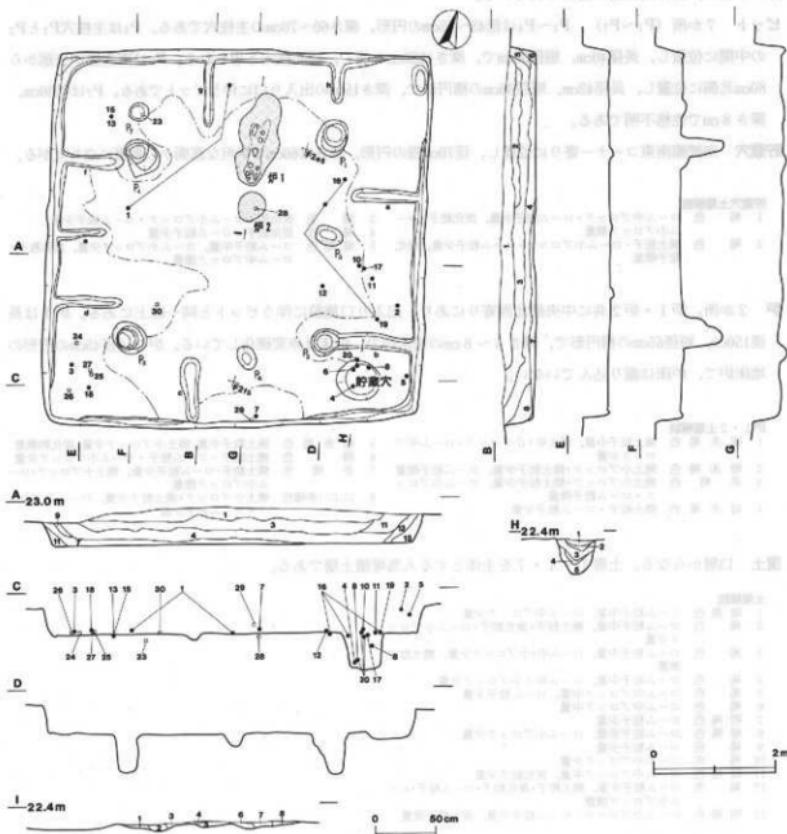
1	暗	褐	色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
2	褐	色	色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・ローム小ブロ ック少量
3	褐	色	色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、燒土粒子 微量
4	褐	色	色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
5	褐	色	色	ローム中ブロック中量、ローム粒子少量
6	褐	色	色	ローム中ブロック中量
7	明	褐	色	ローム粒子中量
8	暗	褐	色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
9	褐	色	色	ローム粒子中量
10	褐	色	色	ローム小ブロック少量
11	暗	褐	色	ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
12	褐	色	色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・ローム粒子・ロー ム小ブロック微量
13	明	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、燒土粒子微量

遺物 第113・114・115図13の高坏、15の壺、23のガラス小玉は北西コーナー床面から、3の坏、17の壺、24~27

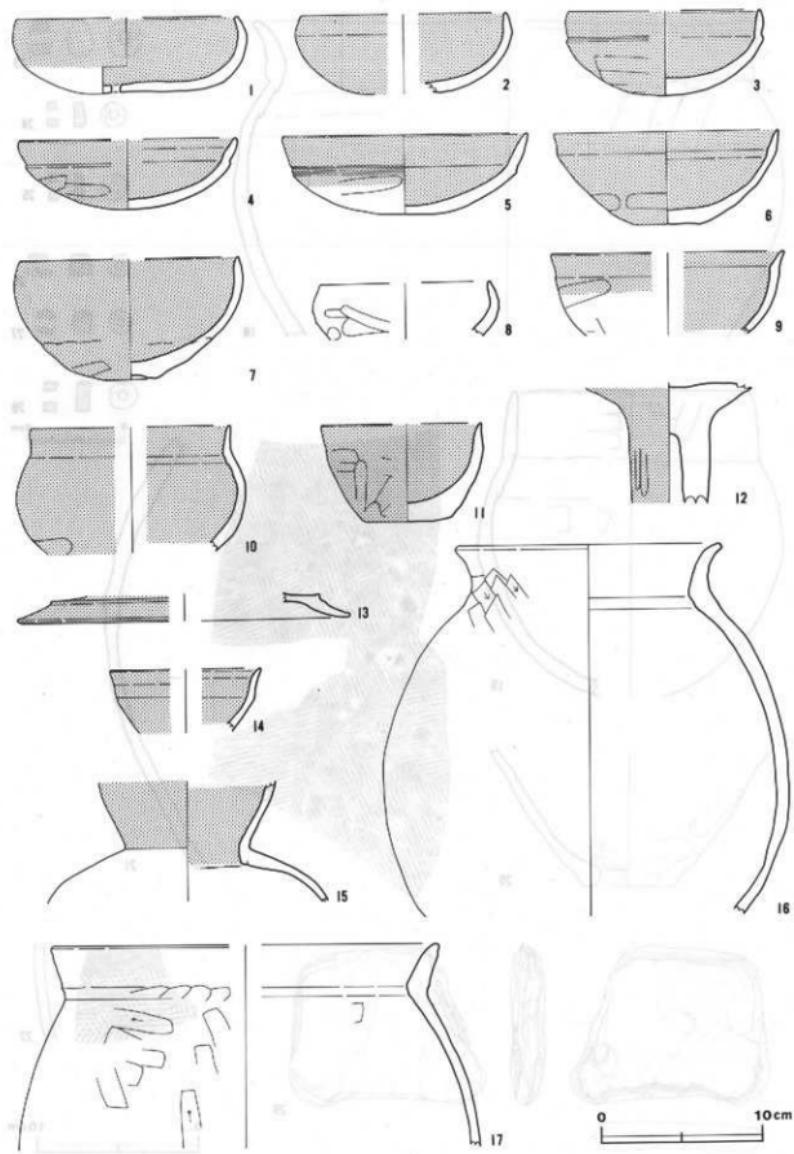
の白玉は南西コーナー覆土最下層から、7の壺、29の雲母片岩は南壁の中央部覆土最下層から出土している。

10・11の、12の高坏、16・18の甕、19の小型甕は住居跡東側の間仕切溝aとbとの間の床面から出土している。打突具痕跡が認められる30の滑石原石は南西部の床面から出土しており、工具幅は約1cmである。この原石と共に31～36の6点の荒削が出土している。21の須恵器甕片は第51号住居跡の第108図3と同一個体のものである。この他に出土した細片は、土師器甕の口縁部片22点、体部片665点、底部片7点、土師器坏の口縁部片152点、体部片733点、底部片16点、土師器高坏の脚部片1点、須恵器甕の体部片5点である。

所見 本跡から出土した滑石原石には打突具痕がみられること、わずかではあるが荒削が出土していることなどから、本跡あるいは本跡の周辺で工房的機能を果たしていたか、前出の第28号住居跡同様に、原石の加工施設的役割を果たしていた可能性が考えられる。当遺跡出土の白玉と本跡の滑石原石の石質は、同一のようである。本跡の時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。

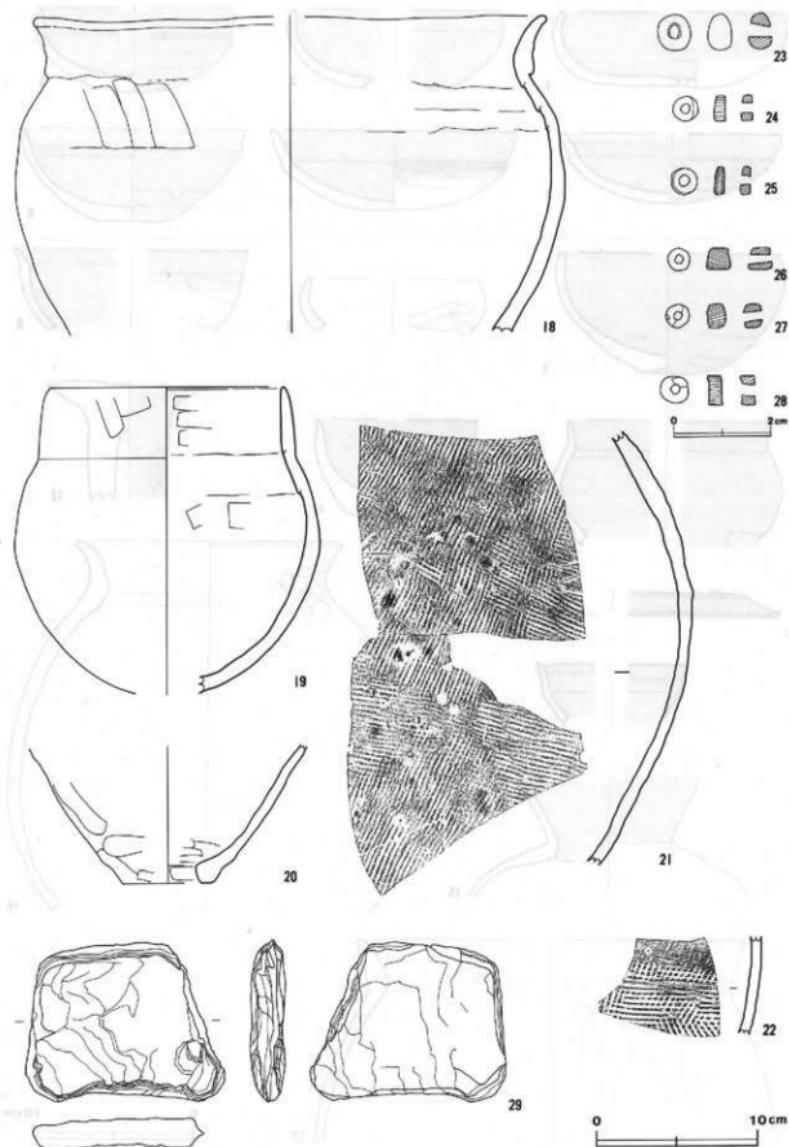


第112図 第56号住居跡実測図



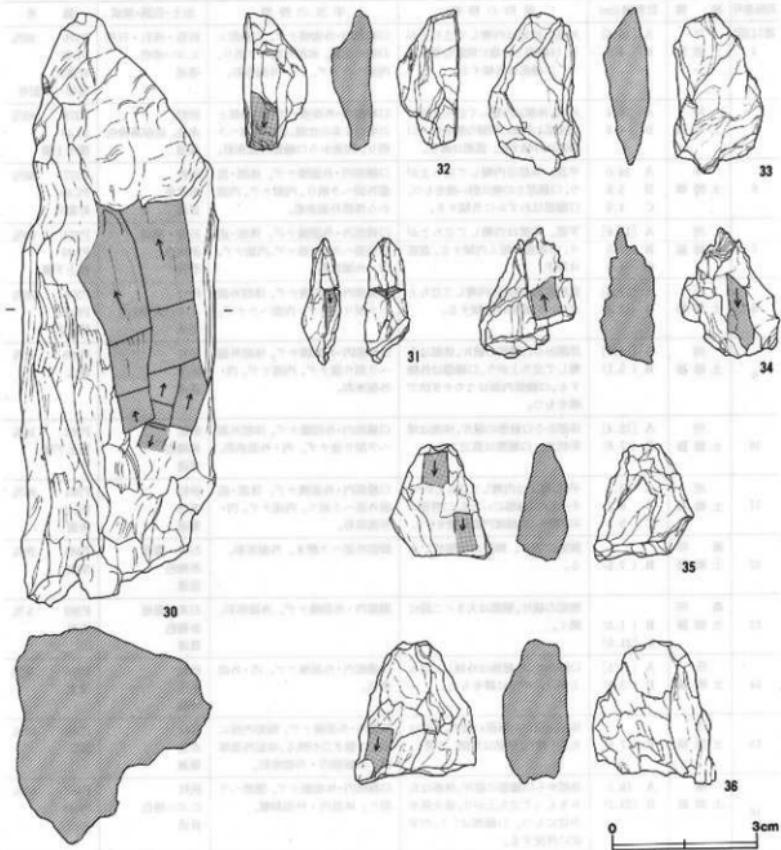
第113図 第56号住居跡出土遺物実測図(1)

(1) 陶質灰陶土燒成器
（2）陶質灰陶土燒成器
（3）陶質灰陶土燒成器
（4）陶質灰陶土燒成器
（5）陶質灰陶土燒成器
（6）陶質灰陶土燒成器
（7）陶質灰陶土燒成器
（8）陶質灰陶土燒成器
（9）陶質灰陶土燒成器
（10）陶質灰陶土燒成器
（11）陶質灰陶土燒成器
（12）陶質灰陶土燒成器
（13）陶質灰陶土燒成器
（14）陶質灰陶土燒成器
（15）陶質灰陶土燒成器
（16）陶質灰陶土燒成器
（17）陶質灰陶土燒成器



第114図 第56号住居跡出土遺物実測図(2)

1面底面断面土法標器刃骨器等 図114



第115図 第56号住居跡出土遺物実測図(3)

第56号住居跡出土遺物観察表

試験番号	器 標	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第113回 1	环 土 師 器	A [13.8] B 4.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。全体的に偏平である。	口縁部内・外圓横ナデ。底部外面ヘラ削り。内面ナデ。内面から全体外側赤彩。底部に穿孔。	砂粒 赤色、底部黄褐色 普通	P372 50% 覆土下層
2	环 土 師 器	A [12.9] B (5.0)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外圓横ナデ。底部外面ヘラ削り。内・外側赤彩。	長石・石英・豊母 赤色 普通	P373 40% PL49 覆土
3	环 土 師 器	A [12.0] B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外圓横ナデ。口縁部とその境に次線。体部外面ヘラ削り。内面削離。内・外側赤彩。	砂粒・白色散粒 赤褐色 普通	P375 45% PL49 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 4	坏 土 節 器	A [13.6] B 6.5	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な棱をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部との境に沈線。体部外側へラ削り。内面へラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 にぶい赤色 普通	P376 60% PL49 貯藏穴 底部へラ記号
5	坏 土 節 器	A 15.4 B 4.9	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部は外傾する。底部は薄手。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部との境に2本の沈線。底部外側へラ削り。内面から口縁部外側赤彩。	砂粒 赤色、底部黄褐色 普通	P378 85% PL49 覆土上層
6	坏 土 節 器	A 14.0 B 5.8 C 4.0	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外側へラ削り。内面ナデ。内面から体部外側赤彩。	砂粒 暗赤色 普通	P377 80% PL49 貯藏穴
7	坏 土 節 器	A [13.6] B 7.5 C 4.0	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は粗く内傾する。底部は厚手。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外側へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	石英・雲母 赤褐色 普通	P374 60% PL49 覆土下層
8	坏 土 節 器	A [10.6] B (3.4)	底部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。内面へラナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P379 20% PL49 貯藏穴
9	坏 土 節 器	A [14.6] B (5.1)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部内面はうしづが状で棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P380 5% 覆土
10	坏 土 節 器	A [12.4] B (7.8)	体部から口縁部の破片。体部は球形で、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P382 10% 覆土下層
11	坏 土 節 器	A 10.1 B 6.1 C 5.5	平底。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部は尖り気味。口縁部内面に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外側へラ削り。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P381 85% PL49 床面
12	高 坏 土 節 器	B (7.5)	脚部の破片。脚部は円筒状である。	脚部外側へラ磨き。外面赤彩。	石英・雲母 赤褐色 普通	P384 20% 床面
13	高 坏 土 節 器	B (1.3) C [21.0]	楕円の破片。底部は大きく二段に開く。	底部内・外面横ナデ。外面赤彩。	石英・雲母 赤褐色 普通	P383 5% 床面
14	逸 坏 土 節 器	A [9.5] B (3.8)	口縁部。口縁部は外傾して立ち上がり、中位に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P386 5% 覆土
15	培 坏 土 節 器	B (7.5)	体部上位から頸部の破片。体部は丸みを持ち、頸部は外傾して開く。	頸部内・外面横ナデ。頸部内面に粘土の巻ぎ目が残る。体部外側磨滅。口縁部内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P385 20% 床面
16	要 坏 土 節 器	A 16.1 B (23.2)	体部から口縁部の破片。体部は丸みをもって立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部は「コ」の字状で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部へラ削り。体部内・外面削離。	砂粒 にぶい橙色 普通	P387 60% PL49 床面
17	亮 坏 土 節 器	A [24.2] B (12.6)	体部から口縁部の破片。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部指圧压痕。体部外側へラ削り。内面へラナデ。	長石・白色微粒 にぶい黄褐色 普通	P389 10% 床面
第114図 18	要 坏 土 節 器	A [31.4] B (19.7)	体部から口縁部の破片。体部は丸みをもって立ち上がり、最大径を上位にもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側へラ削り。頸部・体部に粘土巻ぎ目巻が残る。	砂粒・石英 にぶい黄褐色 普通	P388 20% 覆土下層 煤付着
19	小豆 坏 土 節 器	A 14.7 B (19.8)	底部欠損。体部は球形で、最大径を中位にもつ。口縁部は直立する。	口縁部外側へラ削り後ナデ。体部内面へラナデ。体部外側磨滅。内面に粘土の巻ぎ目が残る。	砂粒・白色微粒 浅黄色 普通	P390 70% PL49 床面 外面煤付着
20	瓶 坏 土 節 器	B (8.5) C 5.6	無底式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外側へラ削り後ナデ。内面へラナデ。	白色微粒 にぶい黄褐色 普通	P391 30% 貯藏穴 煤付着

21・22は須恵器裏の体部片で、体部外側は平行叩きである。

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第114図23	ガラス小玉	0.7	0.8	0.5	0.3	0.3	ガラス	北西コーナー床面	Q72 PL55
24	白玉	0.6	0.5	0.5	0.2	0.1	滑石	南西コーナー下層	Q73 PL55
25	白玉	0.5	0.6	0.2	0.2	0.1	滑石	南西コーナー下層	Q74 PL55
26	白玉	0.4	0.5	0.5	0.2	0.1	滑石	南西コーナー下層	Q75 PL55
27	白玉	0.5	0.5	0.4	0.2	0.1	滑石	南西コーナー下層	Q76 PL55
28	白玉	0.6	0.6	0.4	0.3	0.1	滑石	中央部下層	Q77 PL55
29	原石	10.0	12.3	1.9	—	360.0	青母片岩	南壁際覆土下層	Q79 PL56
第115図30	原石	12.2	4.9	3.8	—	288.5	滑石	南西部床面	Q78 PL55
31	荒削	2.6	1.1	0.7	—	1.6	滑石	南西部床面	Q94 PL55
32	荒削	2.9	1.3	1.1	—	2.6	滑石	南西部床面	Q95 PL55
33	荒削	3.4	2.0	1.0	—	4.6	滑石	南西部床面	Q96 PL55
34	荒削	2.7	2.0	0.9	—	4.7	滑石	南西部床面	Q97 PL55
35	荒削	2.4	2.2	0.8	—	4.4	滑石	南西部床面	Q98 PL55
36	荒削	3.0	2.5	1.6	—	10.2	滑石	南西部床面	Q99 PL55

第58号住居跡(第117図)

位置 調査区南部中央, F2js区。

規模と平面形 一辺が3.53mの方形である。

長軸方向 N-5-W

壁 壁高46~60cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を全周し、上幅11~20cm、深さ5~8cm

で、断面は「U」字形である。

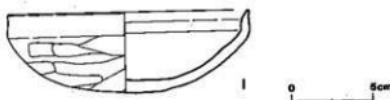
床 耕作による搅乱のため、遺存状態が悪い。

ピット 中央部北東寄りに位置し、径80cmの不整円形で、深さ18cm、断面は壠鉢状で、性格は不明である。

覆土 9層からなる。焼土、炭化物、ロームブロックを含む土層1~5を主体とする人為堆積土層である。

土層解説

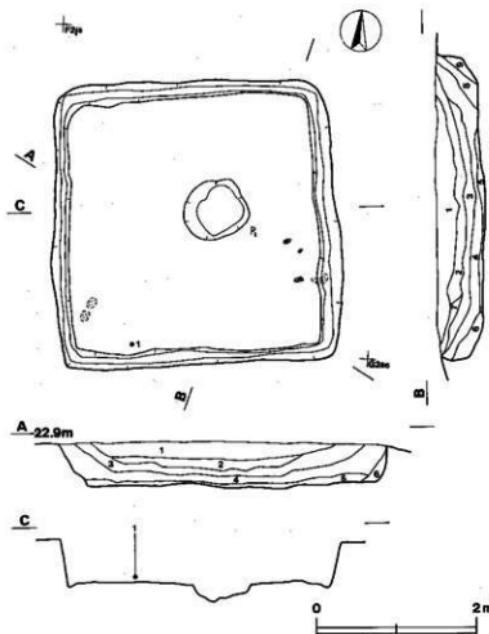
- 暗褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、
焼土粒子・炭化粒子微量
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化
粒子微量
- 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・
炭化粒子微量
- 暗褐色 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少
量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 黄褐色 ローム粒子多量、炭化物・ローム小・中ブロック少量、
炭化粒子微量



第116図 第58号住居跡出土遺物実測図

遺物 出土遺物はすべて覆土中からのもので、土師器窓の口縁部9点、体部287点、底部3点、土師器坏の口縁部17点、体部88点である。図示できたのは第116図1の壺1点で、南西コーナーから出土している。

所見 本跡は、床の遺存状態が悪かったこともあり、炉や柱穴が確認されなかったが、通常の住居跡と同様に一定の掘り込みがある方形の竪穴であり、住居跡と考えられる。床面には炭化物・焼土塊が少量残っており、焼失家屋である。時期は覆土中の出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第117図 第58号住居跡実測図

第58号住居跡出土遺物観察表

発掘番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	杯 土 器	A 15.1 B 5.1	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に梗をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外側横ナデ。体部・底 部外面ヘラ削り。	石英 浅黄褐色 普通	P197 85% PL50 覆土下層

第63号住居跡 (第118図)

位置 調査区南部, F2₄₃区。

規模と平面形 ほとんどが削平されているため規模は不明であるが、柱穴と考えられるピットの配列から長軸約3.55m, 短軸約2.80mの長方形と推定される。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁はほとんど残存していない。

床 柱穴の東側だけが残存しており、踏み締められている。

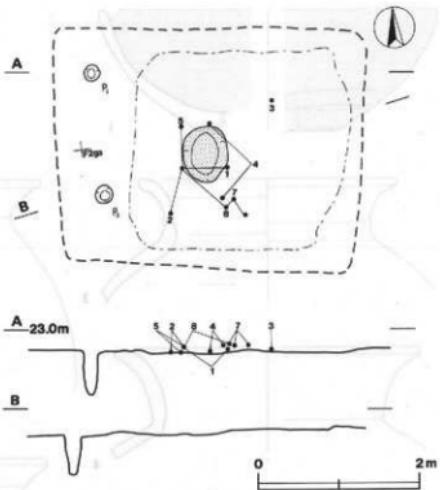
ピット 2か所 (P₁・P₂)。確認できた硬化面の西側に位置し、いずれも径20cmの円形で、深さ53cmの主柱穴である。

炉 中央部にあり、長径70cm, 短径55cmの楕円形で、深さ5cmの地床炉である。

覆土 残っていた覆土が薄く確認できなかった。

遺物 覆土は薄いが、出土した遺物は土師器で、ほとんど床面近くの覆土中から出土したものである。第119図1の碗、3～7の壺は住居跡中央部から、2の壺は南西コーナーから出土している。3の壺は逆位状態で出土しており、口縁部内・外面は二次焼成を受けている。土師器壺の口縁部には20点、体部片663点、底部片7点、土師器壺の口縁部片14点、体部片16点が一括投棄の状態で出土している。土師器壺の口縁部には第64号住居跡からのものと接合したものもある。

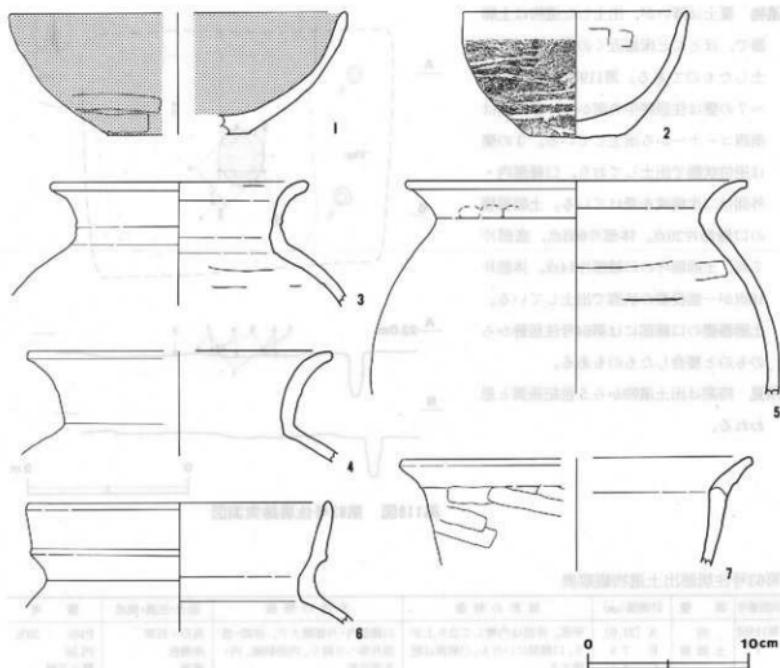
所見 時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。



第118図 第63号住居跡実測図

第63号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1 土師器	碗	A [21.0] B 7.5 C [8.8]	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部にいたる。口唇部は肥厚する。	口縁部内・外側横ナデ。体部・底面部外側へラ削り。内面剥離。内・外側赤色。	長石・石英 赤褐色 普通	P405 20% PL50 覆土下層 外側煤付着
2 土師器	壺	A 14.0 B 7.8 C 5.5	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外側横ナデ。体部外側摩耗。体部内面にヘラ当て痕が残る。	砂粒 にぼい橙色 普通	P406 85% PL50 床面 口縁部に煤付着
3 土師器	壺	A 16.7 B (7.7)	体部上位から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は「コ」の字状に外反する。	口縁部内・外側横ナデ。体部内面へラナダ。	砂粒 橙色 普通	P407 20% PL50 床面 口縁部二次焼成
4 土師器	壺	A [19.0] B (6.9)	口縁部片。口縁部は「コ」の字状に外反する。	口縁部内・外側横ナデ。	白色微粒 にぼい黄橙色 普通	P411 5% 床面 煤付着
5 土師器	壺	A 21.2 B (13.2)	体部上位から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外側横ナデ。頂部に指環押捺が残る。体部外側へラ削り。内面へラナダ。	白色微粒 橙色 普通	P408 10% PL50 床面 外側煤付着
6 土師器	壺	A [21.8] B (7.1)	体部上位から口縁部の破片。体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外側横ナデ。体部外側へラ削り。内面へラナダ。	砂粒 白色微粒 にぼい橙色 普通	P412 5% 覆土
7 土師器	壺	A 18.8 B (7.7)	体部上位から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がる。口縁部は段をもち外傾する。	口縁部内・外側横ナデ。体部内面へラナダ。	砂粒・石英・雲母 明赤褐色 普通	P409 10% PL50 覆土 口縁部二次焼成



第119図 第63号住居跡出土遺物実測図

第64号住居跡（第120図）

位置 調査区南部, F2_{ha}区。

規模と平面形 長軸2.70m, 短軸2.10mの長方形と推定される。

長軸方向 N-6°-E

壁 壁はほとんど残存していない。

床 平坦である。

貯蔵穴 北西部に位置し, 径110cmの円形で, 深さ66cmの平坦な底面から外傾して立ち上がり, 断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

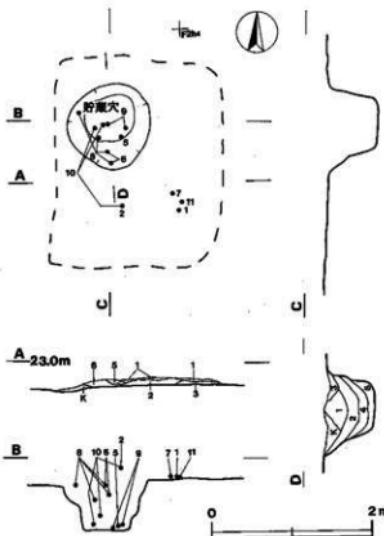
- 1 桜 色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 2 桜 色 炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 明 桜 色 ローム中ブロック多量、ローム小ブロック少量
- 4 桜 色 ローム中ブロック多量、ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土 残っていた覆土が薄かったが, 4層からなる。各層にロームブロックを含むことから人為堆積土層と思われる。

土層解説	
1	荷 色 ローム小ブロック少量
2	明 棕色 ローム中ブロック中量、焼土粒子少量
3	暗 棕色 ローム小ブロック少量
4	褐 色 ローム中・小ブロック少量

遺物 第121・122図3・4の土器器坏、5の土器器、碗、6・8の土器器變、9の土器器變、10の土器器底は貯藏穴の覆土から、1・2の土器器坏、11の須恵器器身は住居跡南部から出土している。この他に、土器器變の口縁部片13点、体部片166点、底部片2点、土器器坏の口縁部片9点、体部片14点、土器器底の口縁部片4点、体部片12点、底部片1点が出土している。

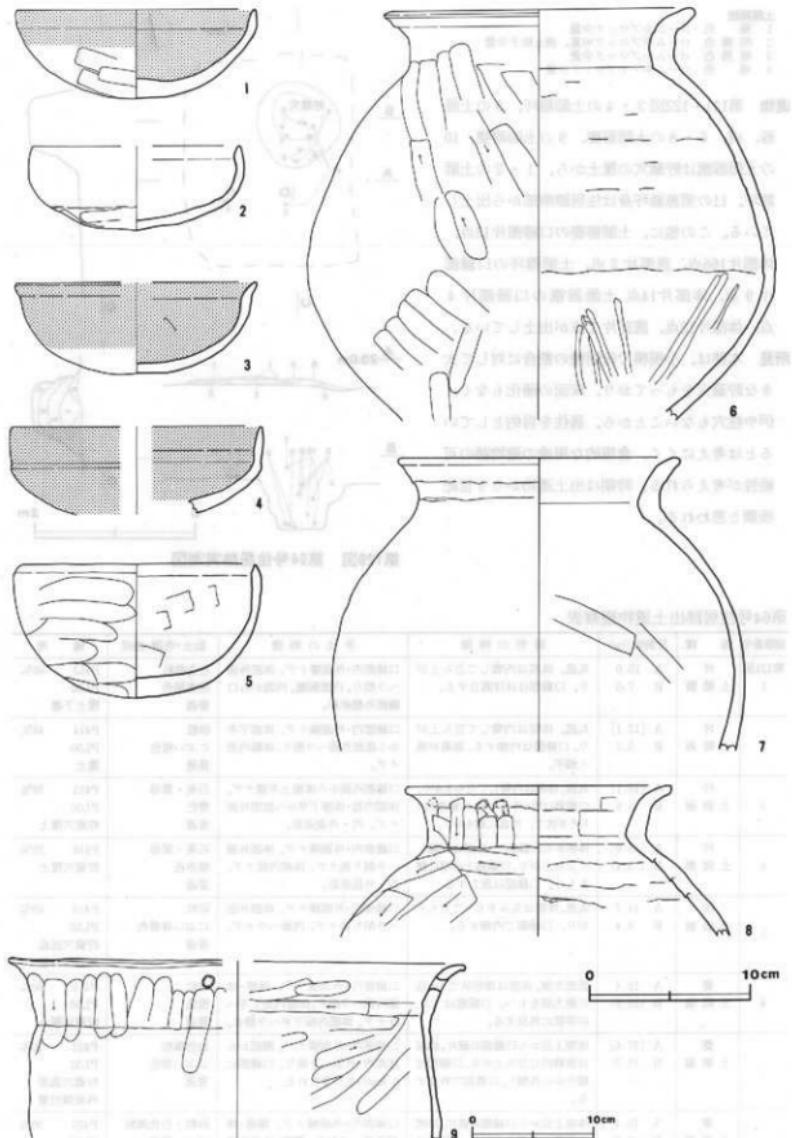
所見 本跡は、小規模で床面積の割合に対して大きな貯藏穴をもっており、床面の硬化もなく、炉や柱穴もないことから、居住を目的としているとは考えにくく、倉庫的な用途の建物跡の可能性が考えられる。時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。



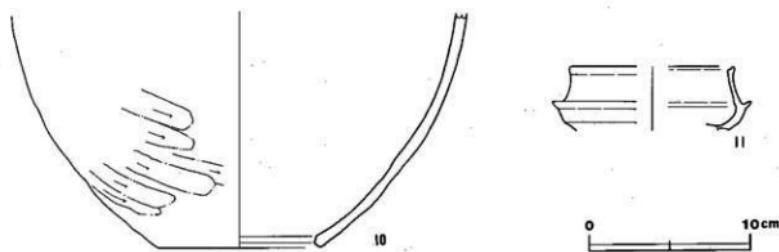
第120図 第64号住居跡実測図

第64号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 1	土器器	A 15.0	丸底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外側横ナデ、体部外面ヘラ削り。内側削離。内面から口縁部外面赤影。	白色微粒 明黄褐色 普通	PL413 80% PL50 覆土下層
		B 7.5				
2	土器器	A [13.1]	丸底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は内傾する。器高が低く偏平。	口縁部内・外側横ナデ。体部下半から底部外面ヘラ削り。体部内面ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	PL414 40% PL50 覆土
		B 5.2				
3	土器器	A [15.1]	丸底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部はうらぎ状で、内面に棱をもつ。	口縁部内面から体部上半横ナデ。体部内面・体部下半から底部外面ナデ。内・外側赤影。	石英・雲母 褐色 普通	PL415 30% PL50 貯藏穴覆土
		B 5.6				
4	土器器	A [15.6]	体部から口縁部片、体部は内傾して立ち上がり、口縁部とその境に棱をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外側横ナデ、体部外面ヘラ削り後ナデ。体部内面ナデ。内・外側赤影。	石英・雲母 暗赤色 普通	PL416 20% 貯藏穴覆土
		B (5.4)				
5	土器器	A 14.7	丸底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外側横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	PL418 80% PL52 貯藏穴底面 外面焼付着
		B 8.4				
6	土器器	A 19.4	底部欠損。体部は球形狀で、中位に最大径をもつ。口縁部は「コ」の字状に外反する。	口縁部内・外側横ナデ。頸部・体部外面ヘラ削り。体部内面上半ヘラナデ。体部内面下半ヘラ削り。	砂粒 褐色 普通	PL419 60% PL50 貯藏穴覆土
		B (25.6)				
7	土器器	A [37.6]	体部上位から口縁部の破片。体部は直線的に立ち上がる。口縁部は緩やかに外傾し、口部で外反する。	口縁部内・外側横ナデ。頸部から体部外面ヘラ削り。口縁部に0.8cmの孔が穿たれる。	白色微粒 にぶい褐色 普通	PL422 20% PL51 貯藏穴底面 外面焼付着
		B (15.2)				
8	土器器	A 16.4	体部上位から口縁部の破片。体部は内傾して立ち上がる。口縁部は「コ」の字状に外反する。	口縁部内・外側横ナデ。頸部・体部外面ヘラ削り。口縫部に粘土継ぎ目質。	砂粒・白色微粒 にぶい褐色 普通	PL420 30% PL52 覆土下層
		B (8.9)				



第121図 第64号住居跡出土遺物実測図(1)



第122図 第64号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 9	壺 土器	A [17.6] B (18.3)	体部から口縁部の破片。体部は球形で、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラナデ。	砂粒 褐色 普通	P421 50% 床面
第122図 10	壺 土器	B (14.5) C 11.1	底部から体部の破片。無底式。体部は丸みをもって立ち上がる。	体部外面へラ削り後ナデ。内面剥離。	砂粒 にぶい褐色 普通	P423 20% PL52 焼付着 貯藏穴覆土
11	环身 須恵器	A [10.2] B (4.0)	体部から口縁部の破片。体部は内側で立ち上がり受部になる。受部は上外方に伸び、端部はシャープである。口縁部は内側して立ち上がり、端部に1条の沈線が進る。	内面から口縁部外面ロクロナデ。 体部下端回転へラ削り。	長石 灰色 良好	P424 20% PL50 床面

(3) 奈良・平安時代の住居跡

第29号住居跡(第123図)

位置 調査区南部東側, E347区。

規模と平面形 一辺が3.00mの方形である。

主軸方向 N-78°-W

壁 壁高37~65cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 電の部分を除いて全壁下を巡り、上幅12~18cm、深さ5~11cmで、断面は「U」字形である。

床 出入り口から竈にかけての中心部が踏み固められている。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は径15~17cmの円形、深さは27~32cmで、主柱穴と思われる。P₅は長径25cm、短径13cmの橢円形、深さは13cmで、位置と形状から出入り口施設のピットと思われる。

竈 西壁中央部に砂粒まじりの白色粘土で構築している。規模は煙道部から焚き口部まで137cm、両袖最大幅80cm、壁外への掘り込みは40cmである。焚き口部は長径55cm、短径43cmの橢円形で、5cmほど掘り込んでいる。煙道部は、火床部から20度、上半部では40度の傾きで立ち上がる。天井部は崩落している。

畜土層解説

1 暗褐色	燒土粒子・粘土粒子微量	燒土粒子多量、砂粒を含む白色粘土中量、燒土小ブロック
2 暗褐色	燒土粒子・砂粒を含む白色粘土中量、燒土小ブロック少量、炭化粒子微量	燒土粒子多量、砂粒を含む白色粘土中量、燒化粒子微量
3 にじみ褐色	燒土粒子中量、燒土小ブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量	燒土粒子中量、燒土小ブロック微量
4 にじみ褐色	燒土粒子中量、燒土小ブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量	燒土粒子・砂粒を含む白色粘土中量、燒化粒子・燒土小ブロック微量
5 暗褐色	一ム粒子・粘土粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	燒土粒子中量、燒土小ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
6 暗褐色	燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量	燒土粒子・砂粒を含む白色粘土中量、燒土小ブロック少量、炭化粒子・燒土粒子微量
7 暗赤褐色	燒土粒子・粘土粒子中量、燒土小ブロック少量、炭化粒子微量	燒土粒子・ローム粒子・粘土粒子少量
8 暗赤褐色	燒土粒子多量、砂粒を含む白色粘土中量、燒化粒子微量	燒土粒子多量、砂粒を含む白色粘土中量、燒化粒子微量
9 暗赤褐色	燒土粒子中量、燒土小ブロック微量	燒土粒子中量、燒土小ブロック微量
10 明黄色	燒土粒子・砂粒を含む白色粘土中量、燒化粒子・燒土小ブロック微量	燒土粒子中量、燒土小ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
11 赤褐色	燒土粒子中量、燒土小ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	燒土粒子中量、燒土小ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
12 赤褐色	燒土粒子・砂粒を含む白色粘土中量、燒土小ブロック・ローム粒子微量	燒土粒子・砂粒を含む白色粘土中量、燒土小ブロック・ローム粒子微量
13 黄色	燒土粒子・ローム粒子・粘土粒子微量	燒土粒子・ローム粒子・粘土粒子微量

覆土 9層からなる。暗褐色土が主体となる自然堆積土層である。

土層解説

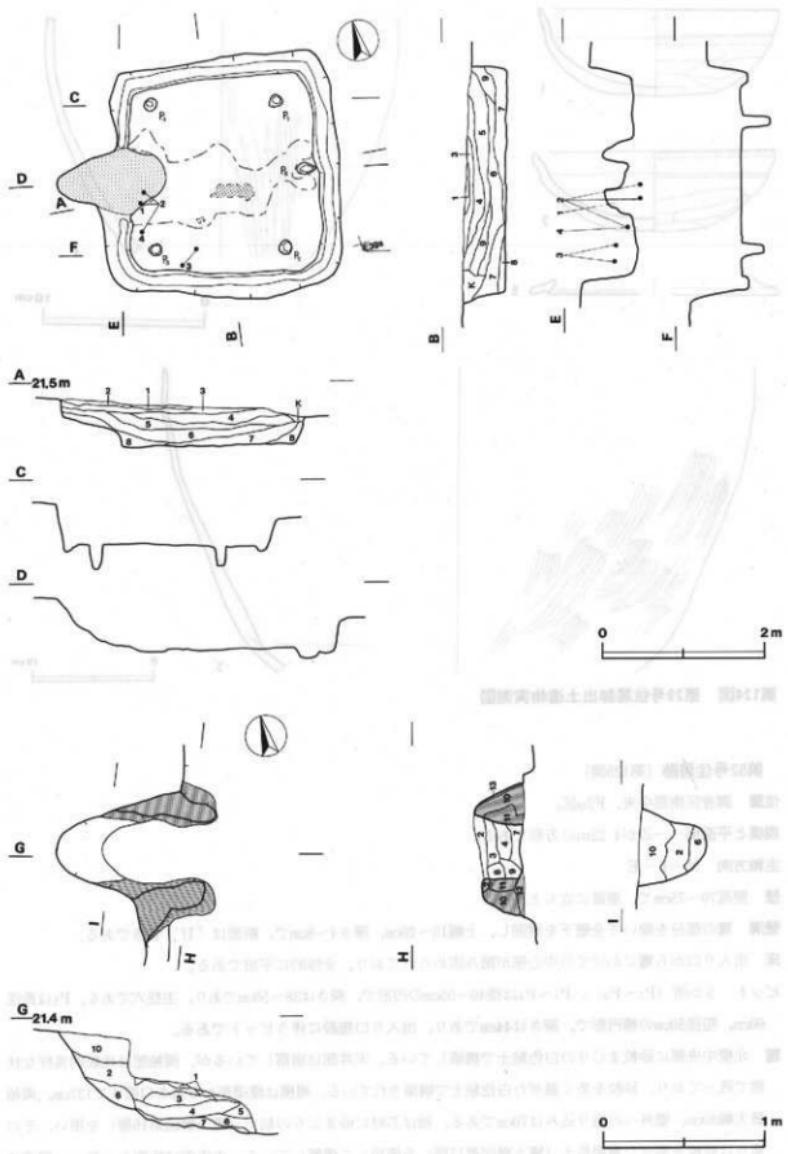
1 黒褐色	炭化物多量、炭化粒子中量、ローム粒子少量、燒土粒子微量
2 暗褐色	燒土粒子・ローム粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量、燒土粒子・炭化物微量
5 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子少量、燒土粒子微量
6 暗褐色	ローム粒子中量、炭化物少量、燒土粒子微量
7 暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量
8 暗褐色	炭化粒子・ローム粒子中量、燒土粒子微量
9 黄色	ローム粒子中量、炭化粒子微量

遺物 第124図1・2の土師器は竈左袖の裾部から置かれたような状態で出土しており、住居跡発見時の遺物と思われる。遺物量は少なく、図示した他には、土師器の口縁部1点、体部片8点、土師器壺の口縁部片1点、体部片41点が出土している。

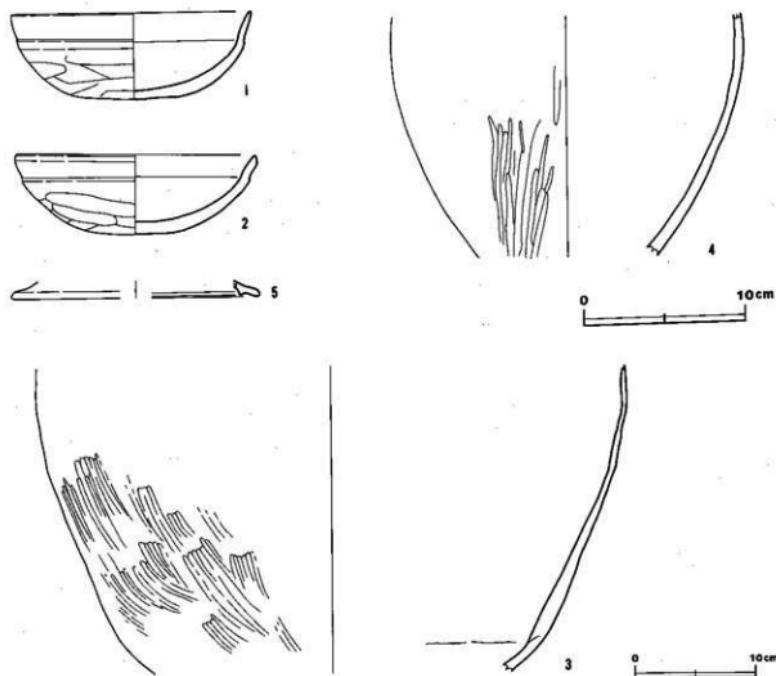
所見 本跡の時期は出土遺物から8世紀初頭と思われる。

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 124図	坪 土師器	A 15.1	平底。底部と体部との境は不明瞭で、口縁部との境に弱い接をもつ。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部・底部外表面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 にじみ褐色 普通	P231 90% PL51 床面 底部内面塗付着
		B 5.5				
		C 7.5				
2 124図	坪 土師器	A 15.0	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に後をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部・底部外表面ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 にじみ褐色 普通	P232 90% PL51 床面
		B 5.0				
3 124図	壺 土師器	B (25.4)	体部破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外表面ヘラ磨き。	長石・石英 にじみ黄褐色 普通	P234 15% 覆土下層
		B (15.0)				
4 124図	壺 土師器	B (15.0)	体部破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外表面ヘラ磨き。	長石・石英 にじみ褐色 普通	P235 10% PL51 覆土下層
		B (14.4)				
5 124図	蓋 須恵器	B (1.4)	口縁部の破片。内面にかえりが付く。	口縁部内・外面横ナギ。	砂粒・雲母 灰オリーブ色 普通	P236 5% PL51 覆土
		A [14.4]				



第123図 第20号住居跡実測図 (著：鶴見和也、大木義人、佐々木正子、吉澤公一郎、中村千尋)



第124図 第29号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡（第125図）

位置 調査区南部中央, F2e区。

規模と平面形 一辺が4.22mの方形である。

主軸方向 N-1'-E

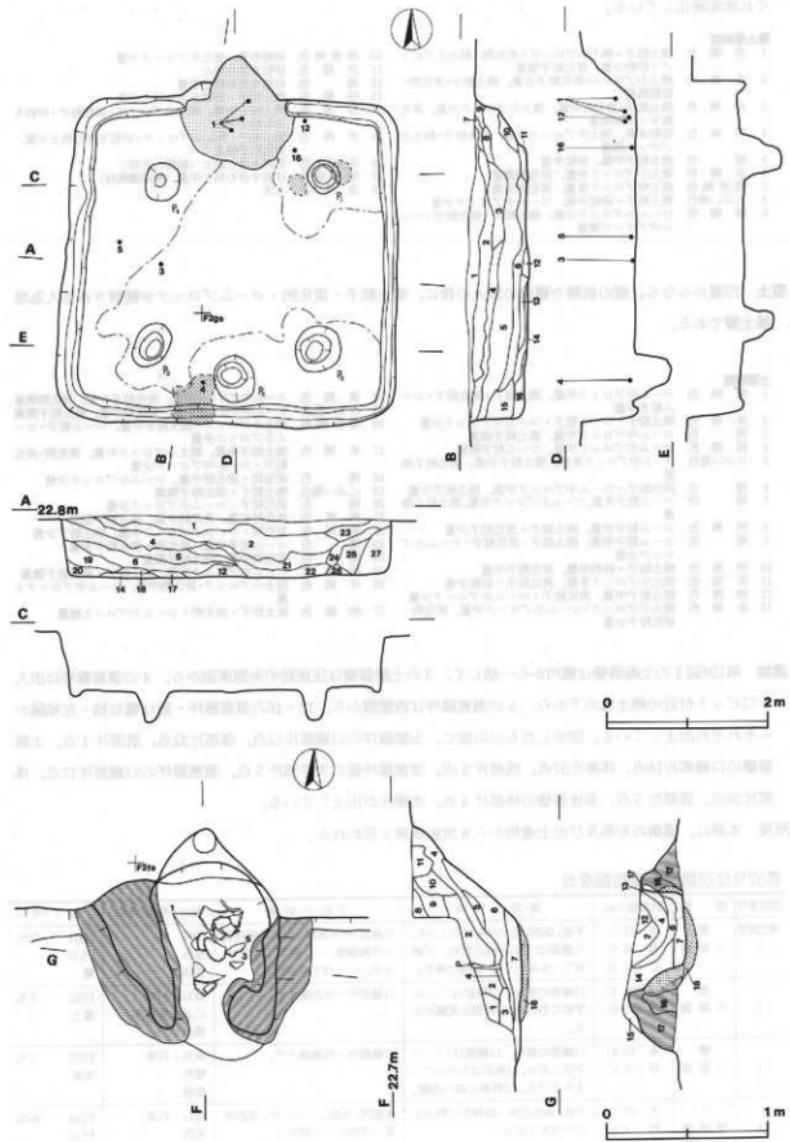
壁 壁高70~75cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 電の部分を除いて全壁下を周回し、上幅15~20cm、深さ4~8cmで、断面は「U」字形である。

床 出入り口から電にかけての中心部が踏み固められており、全体的に平坦である。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は径40~55cmの円形で、深さは38~50cmであり、主柱穴である。P₅は長径60cm、短径50cmの橢円形で、深さは44cmであり、出入口施設に伴うピットである。

竈 北壁中央部に砂粒まじりの白色粘土で構築している。天井部は崩落しているが、両袖部は比較的良好な状態で残っており、砂粒を多く混ぜた白色粘土で構築されている。規模は煙道部から焚き口部まで137cm、両袖最大幅80cm。壁外への掘り込みは70cmである。袖は芯材に砂まじりの粘土（竈土層図第16層）を用い、その周りは砂粒を混ぜた黄褐色土（竈土層図第17層）を使用して構築している。火床面は床面と一致し、煙道は45度の傾きで立ち上がる。袖の内壁は焼けて9cmの厚さで、火床面（竈土層図第18層）は6cmの厚さである。



第125図 第52号住居跡実測図

それ赤変硬化している。

電土層解説

1 赤 梅 色	燒土粒子・燒土小ブロック・炭化物・粘土小ブロック	10 明 黄 梅 色	砂粒多量、燒土小ブロック少量
2 赤 梅 色	砂粒少量、炭化粒子微量	11 赤 梅 色	砂粒を含む粘土中量
3 赤 梅 色	焼土小ブロック・炭化粒子少量、燒土粒子・炭化物・砂粒微量	13 明 梅 色	燒土粒子・砂粒を含む粘土中量
4 明 梅 色	砂粒微量	14 赤 梅 色	燒土粒子・燒土小ブロック・炭化粒子・砂粒を含む粘土少量
5 暗 梅 色	燒土中ブロック中量、燒土粒子・粘土小	15 赤 梅 色	燒土粒子・燒土小ブロック・砂粒を含む粘土少量、炭化粒子微量
6 暗 梅 色	砂粒多量	16 浅 黄 梅 色	砂粒を含む粘土(油部の芯材)
7 明赤 梅 色	燒土小ブロック中量、炭化物微量	17 明 黄 梅 色	砂粒を含む粘土中量(油部構築材)
8 にぶい 梅 色	燒土粒子・砂粒中量、炭化物少量	18 赤 梅 色	砂粒少量
9 暗 梅 色	ローム小ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子・ロー		
	ム中ブロック微量		

覆土 27層からなる。壁の崩壊や建材の流入の後に、燒土粒子・炭化物・ロームブロックが観察される人が堆積土層である。

土層解説

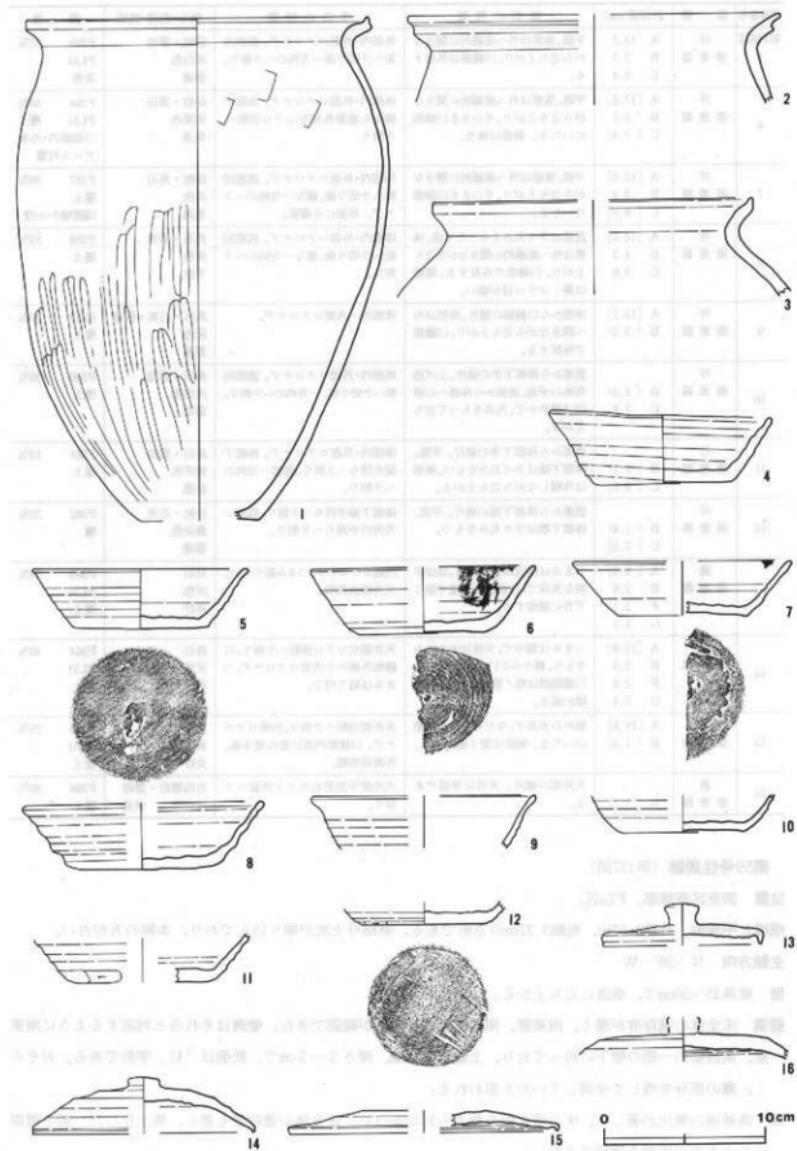
1 單 梅 色	ローム中ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子・ロー	14 貴 梅 色	ローム中ブロック中量、炭化粒子少量、炭化物微量
2 黒 梅 色	燒土粒子・ローム粒子・ローム中ブロック少量	15 にぶい 梅 色	ローム中ブロック中量、炭化物微量、燒土粒子微量
3 暗 梅 色	ローム中ブロック中量、燒土粒子微量	16 單 梅 色	燒土小ブロック・燒土粒子中量、ローム粒子・ロー
4 暗 梅 色	ローム中ブロック少量、ローム粒子微量	17 赤 梅 色	燒土粒子多量、燒土小ブロック中量、炭化物・炭化
5 にぶい 梅 色	ローム中ブロック多量、燒土粒子少量	18 梅 色	粒子・ローム中ブロック少量
6 梅 色	炭化物粒子・ローム中ブロック中量、燒土粒子少量	19 にぶい 梅 色	炭化物・炭化物中量、燒土粒子・炭化物微量
7 梅 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、燒土粒子微量	20 暗 梅 色	燒土粒子・炭化物少量
8 明 梅 色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子少量	21 暗 梅 色	炭化物・炭化物中量、燒土粒子微量
9 梅 色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・ローム小ブ	22 暗 梅 色	ローム中ブロック中量、燒土粒子少量
10 明 梅 色	ローム粒子微量	23 暗 梅 色	ローム粒子中量、炭化物・炭化粒子少量
11 暗 梅 色	燒土小ブロック多量、炭化物・砂粒少量	24 暗 梅 色	炭化物少量、燒土粒子微量
12 暗 梅 色	燒土小ブロック・ローム小ブロック中量、炭化物・	25 明 梅 色	ローム中ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
13 暗 梅 色	炭化粒子少量	26 赤 梅 色	燒土小ブロック・炭化物中量、ローム中ブロック少
		27 單 梅 色	量、燒土粒子・炭化物・ローム小ブロック微量

遺物 第126図1の土器窯は竈内から一括して、3の土器窯は住居跡中央部床面から、4の須恵器窯は出入り口ピット付近の焼土塊の下から、5の須恵器窯は西壁際から、12・16の須恵器窯・蓋は電右袖・左袖脇からそれぞれ出土している。図示したものの他に、土器窯の口縁部片12点、体部片32点、底部片1点、土器窯の口縁部片16点、体部片57点、底部片5点、須恵器窯の天井部片5点、須恵器窯の口縁部片17点、体部片20点、底部片5点、須恵器窯の体部片4点、支脚片が出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から8世紀後葉と思われる。

第52号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種 標	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・色調・焼成	備 考
第126図 1	土 窯 罩	A 21.5 B 30.3 C [7.3]	平底。体部はなだらかに立ち上がる。 口縁部は「く」の字状に折れ、口唇部でつまみ上げる。断面は薄手。	口縁部内・外縁横ナデ。体部外縁上半無調整、ヘラ磨き。内部ヘラナデ、へら当て痕が残る。	砂粒 橙色 普通	P351 70% PL51 電
2	土 窯 罩	A [23.2] B (5.6)	口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に折れ、口唇部はわざかにつまみ上げる。口唇部に斜線がある。	口縁部内・外縁横ナデ。	黄石・石英 にぶい黄橙色 普通	P352 5 % 覆土
3	土 窯 罩	A [19.9] B (5.8)	口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に折れ、口唇部はわざかにつまみ上げる。口唇部に斜線がある。	口縁部内・外縁横ナデ。	黄石・石英 橙色 普通	P353 5 % 床面
4	坏 痕 恵 器	A 13.8 B 4.8 C 8.0	平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がる。	体部内・外縁クロナダ。底面部一方両側のヘラ削り。	黄石・石英 灰色 普通	P354 90% PL51 床面



第126図 第52号住居跡出土遺物実測図

図版番号	西 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第126図 5	坏 須 恵 器	A 13.3 B 3.7 C 8.4	平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部外面ヘラ切り後一方向のヘラ削り。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P355 85% PLS1 床面
	坏 須 恵 器	A [13.8] B 4.1 C [7.9]	平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。器壁は薄手。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端から底部外側左ロクロ回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P356 40% PLS1 覆土 口縁部内・外面 タール付着
	坏 須 恵 器	A [13.4] B 3.4 C [8.0]	平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。火事痕。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、難な一方向のヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P357 30% 覆土 D面痕跡タール付着
8	坏 須 恵 器	A [14.5] B 4.3 C 9.0	底部は少々丸みをもった平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。器壁は薄くロクロ目が強い。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、難な一方向のヘラ削り。	長石・雲母 灰色 不良	P358 25% 覆土
	坏 須 恵 器	A [13.7] B (3.3)	体部から口縁部の破片。体部は外へ開きながら立ち上がり、口縁部で外反する。	体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P359 10% 覆土
	坏 須 恵 器	B (2.3) C 7.8	底部から体部下半の破片。上げ底気味の平底。底部から体部への移行は緩やかで、丸みをもって立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、一方向のヘラ削り。	長石・雲母 灰白色 普通	P360 25% 覆土
11	坏 須 恵 器	B (2.7) C [8.0]	底部から体部下半の破片。平底。体部下端は少々丸みをもつ。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	長石・雲母 黄灰色 普通	P361 15% 覆土
	坏 須 恵 器	B (1.4) C [7.5]	底部から体部下端の破片。平底。体部下端は少々丸みをもつ。	体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・石英 黄灰色 普通	P362 20% 電
	蓋 須 恵 器	A [9.8] B 2.6 F 2.1 G 1.2	つまみは蓋宝珠形である。ほぼ平坦な天井で、口縁部との境で強く下方に屈曲する。	内面ロクロナデ。つまみ貼り付け。天井部自然軸。	長石 灰色 良好	P363 70% PLS1 覆土
14	蓋 須 恵 器	A [13.8] B 3.5 F 2.0 G 0.5	つまみは偏平で、天井はやや丸みをもつ。緩やかに口縁部にいたる。口縁端部は短く屈曲し、1本の捻線が巡る。	天井部左ロクロ回転ヘラ削り。口縁部内面に内面ロクロナデ。つまみは貼り付け。	長石 灰色 普通	P364 40% PLS1 覆土
	蓋 須 恵 器	A [16.5] B (1.4)	低めの天井で、なだらかに口縁部にいたる。端部は短く屈曲する。	天井部回転ヘラ削り。内面ロクロナデ。口縁部内面に重ね焼き痕。外側自然軸。	石英 黄灰色 良好	P365 25% PLS1 覆土
	蓋 須 恵 器	B (1.7)	天井部の破片。天井は平坦である。	天井部平坦面右ロクロ回転ヘラ削り。	白色微粒・雲母 灰白色 普通	P366 80% 覆土

第59号住居跡（第127図）

位置 調査区南端部, F2北区。

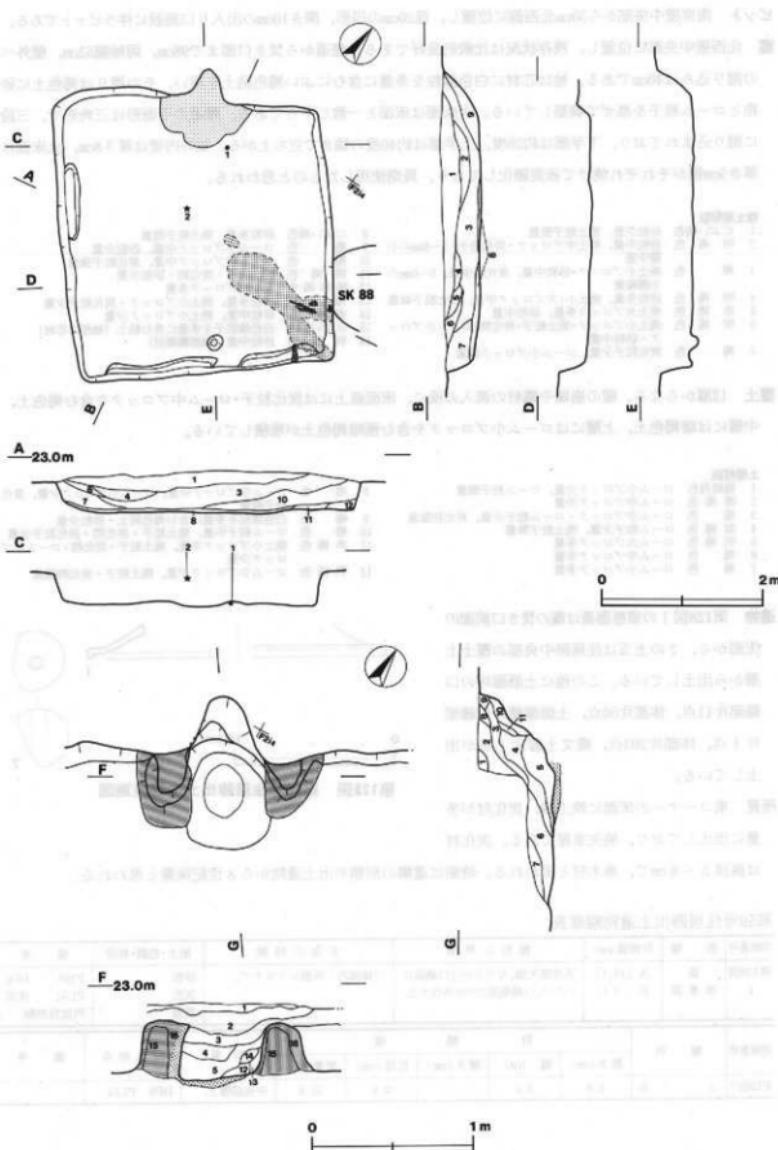
規模と平面形 長軸3.62m, 短軸3.37mの方形である。第88号土坑が掘り込んでおり、本跡の方が古い。

主軸方向 N—36°—W

壁 壁高35~50cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 床全体の遺存度が悪く、南東壁、南西壁際のみ床面が確認できた。壁溝はそれらと対応するように南東壁、南西壁の一部の壁下に巡っており、上幅10~18cm、深さ3~5cmで、断面は「U」字形である。おそらく、竈の部分を残して周囲していたと思われる。

床 廃絶後の風化が著しく、床の硬化面を捉えられなかった。床全体の遺存度も悪く、焼土化した一部と壁際にはのみ本来の床面を確認できた。



第127図 第59号住居跡実測図

ピット 南東壁中央部から30cm北西側に位置し、径20cmの円形、深さ10cmの出入り口施設に伴うピットである。

竈 北西壁中央部に位置し、残存状況は比較的良好である。煙道から焚き口部まで98cm、両袖幅52cm、壁外への掘り込みは40cmである。袖は芯材に白色微粒を多量に含むぶい褐色粘土を用い、その周りは褐色土に砂粒とローム粒子を混ぜて構成している。火床面は床面と一致し平らである。煙道の平面形は三角形で、三段に掘り込まれており、下半部は約20度、上半部は約40度の傾きで立ち上がる。袖の内壁は厚さ8cm、火床面は厚さ5cm程がそれぞれ焼けた赤変化しておらず、長期使用したものと思われる。

壁土層解説

1	にい褐色	砂粒少量、焼土粒子微量	8	にい褐色	砂粒多量、焼土粒子微量
2	明褐色	砂粒中量、焼土中ブロック・炭化粒子・5~6mmの小 粒少量	9	褐色	ローム小ブロック中量、砂粒少量
3	褐色	焼土小ブロック・砂粒中量、炭化物少量、5~6mmの 小颗粒微量	10	褐色	ローム中ブロック中量、炭化粒子微量
4	明褐色	砂粒多量、焼土小・大ブロック中量、炭化粒子微量	11	明褐色	焼土粒子・炭化物・砂粒少量
5	赤褐色	焼土大ブロック多量、砂粒中量	12	暗褐色	焼土大ブロック多量
6	明褐色	焼土小・大ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム小ブロ ック・砂粒中量	13	褐色	砂粒多量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
7	褐色	炭化粒子微量	14	赤褐色	砂粒中量、焼土小ブロック少量
			15	にい褐色	白色微粒を多量に含む粘土 (袖部の芯材)
			16	明褐色	砂粒中量 (袖部構築材)

覆土 12層からなる。壁の崩壊や竈材の流入の後に、床面直上には炭化粒子・ローム中ブロックを含む褐色土、

中層には暗褐色土、上層にはローム小ブロックを含む極暗褐色土が堆積している。

土層解説

1	極暗褐色	ローム小ブロック少量、ローム粒子微量	8	褐色	ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量、炭化 粒子微量
2	暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量	9	褐色	白色微粒を多量に含む褐色土・砂粒少量
3	褐色	ローム中ブロック・ローム粒子微量	10	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	11	褐色	焼土小ブロック中量、焼土粒子・炭化物・ローム小ブ ロック少量
5	明褐色	ローム大・中ブロック多量	12	明褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
6	褐色	ローム中ブロック中量			
7	褐色	ローム小ブロック多量			

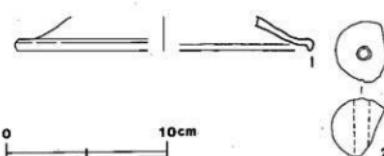
遺物 第128図1の須恵器蓋は竈の焚き口前面の

床面から、2の土玉は住居跡中央部の覆土上層から出土している。この他に土師器壺の口縁部片11点、体部片50点、土師器壺の口縁部片1点、体部片203点、繩文土器片1点が出士している。

所見 東コーナーの床面に焼土塊、炭化材が多

量に出土しており、焼失家屋である。炭化材

は直径5~6cmで、垂木材と思われる。時期は遺構の形態や出土遺物から8世紀後葉と思われる。



第128図 第59号住居跡出土遺物実測図

第59号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種 別	計測値(cm)	器 形 の 特 徴		手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)			
第128図1	蓋 須 恵 器	A [18.1] B (2.1)	天井部欠損。なだらかに口縁部にいたり、口縁端部でやや外反する。		口縁部内・外面ロクロナゲ。	砂粒 灰色 普通	P398 10% PL51 底面 内面自然物
計 測 値							
第128図2	土 玉	3.8	3.2	-	0.9	31.8	中央部覆土 DP8 PL54

第62号住居跡（第129図）

位置 調査区南端部, F2_{a6}区。

規模と平面形 一辺が2.98mの方形である。

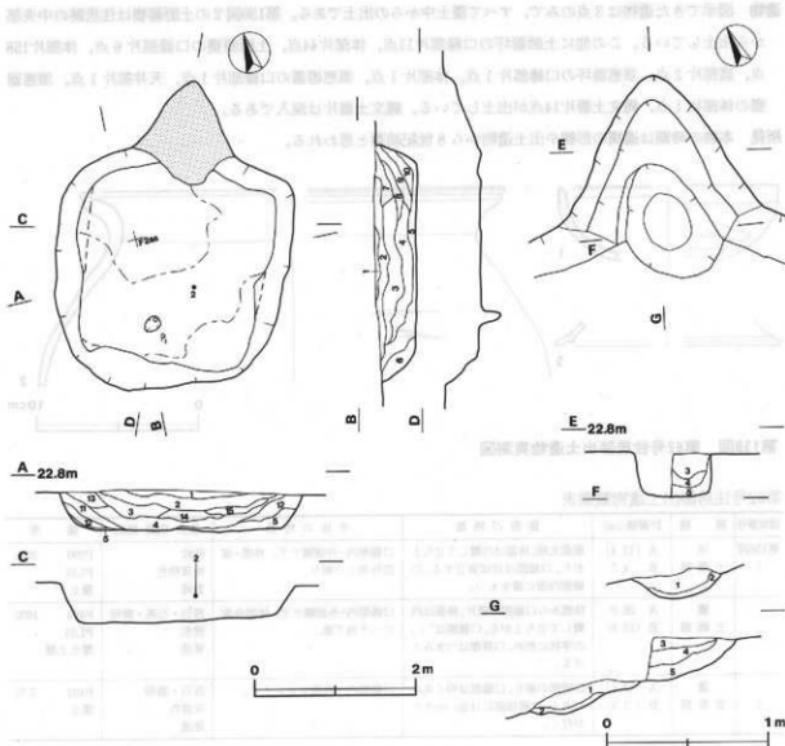
主軸方向 N-25°-E

壁 遺存状態が悪く、南東壁・北東壁の南コーナー寄りに、壁の下部が一部残存している。
壁溝 床全体の遺存度が悪く確認できなかったが、P₁の南西側の僅かな浅い凹みが、おそらく壁溝であったと思われる。

床 廉絶後の風化が著しく、床面が捉えられたのは東コーナー付近だけである。

ピット 南西壁中央部から40cm北東側に位置し、径20cmの円形で、深さは23cmの出入り口施設に伴うピットである。

竈 北東壁中央部に位置し、残存状況は悪く、袖部は残っていない。煙道から焚き口部まで127cm、壁外への掘り込みは90cmである。火床面には灰・炭化物等が堆積しており、底面はあまり焼けていない。煙道の平面形は三角形であり、約20度の傾きで緩やかに立ち上がる。



第129図 第62号住居跡察測図

遺土層解説

- 1 赤褐色 焙土大ブロック多量
 2 暗褐色 焙土粒子・炭化粒子・炭化物・灰少量
 3 深褐色 ローム大ブロック少量、焙土粒子微量
 4 浅褐色 焙土粒子少量
 5 黒褐色 焙土粒子少量

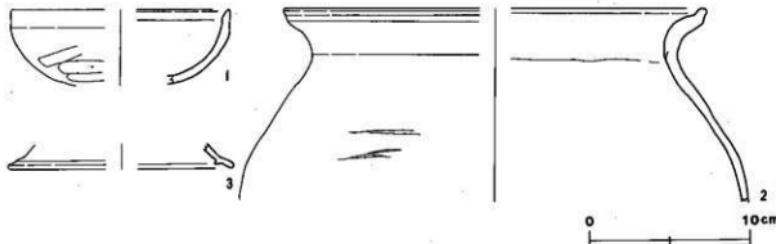
覆土 15層からなる。床面直上には焙土粒子、炭化物及びローム小ブロックを少量含む明褐色土が薄く堆積し、さらに炭化物を含んだ暗褐色土が堆積している。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|---------------------------------------|----|-----|---------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 9 | 褐色 | ローム中ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ローム小ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子少量 | 10 | 黄色 | 炭化粒子・ローム小ブロック少量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量 | 11 | 褐色 | 焙土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量 |
| 4 | 暗褐色 | 炭化粒子・ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量、焙土粒子微量 | 12 | 褐色 | 焙土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 明褐色 | 褐色土・炭化物・ローム小ブロック少量 | 13 | 赤褐色 | 焙土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 6 | 明褐色 | 焙土小ブロック・炭化物中量、ローム小ブロック少量 | 14 | 暗褐色 | 焙土小ブロック・焙土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量、炭化物少量 |
| 7 | 明褐色 | 炭化粒子・ローム中ブロック中量、焙土粒子・ローム小ブロック少量 | 15 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、焙土粒子微量 |
| 8 | 褐色 | 炭化粒子多量、焙土中ブロック・焙土粒子・ローム粒子中量、焙土小ブロック少量 | | | |

遺物 図示できた遺物は3点のみで、すべて覆土中からの出土である。第130図2の土師器甕は住居跡の中央部から出土している。この他に土師器坏の口縁部片11点、体部片44点、土師器甕の口縁部片6点、体部片158点、底部片2点、須恵器坏の口縁部片1点、体部片1点、須恵器蓋の口縁部片1点、天井部片1点、須恵器甕の体部片1点、繩文土器片14点が出土している。繩文土器片は混入である。

所見 本跡の時期は造構の形態や出土遺物から8世紀前葉と思われる。



第130図 第62号住居跡出土遺物実測図

第62号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種類	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 1	坏土師器	A [13.4] B 4.7	底部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に梗をもつ。	口縁部内・外面横ナギ。体部・底外部へクレ削り。	砂粒 浅黄褐色 普通	P399 30% PL51 覆土
		A 26.0 B (12.0)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり。口縁部は「く」の字形に折れ。口唇部はつまみ上げる。	口縁部内・外面横ナギ。体部外側にヘラ当て模。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P400 10% PL51 覆土上層
2	甕土師器	A [13.6] B (1.5)	口縁部の破片。口縁部はぼく丸みがある。口縁部には低いかえりが付く。	口縁部内・外側ロクロナギ。	長石・雲母 灰黄色 普通	P402 5% 覆土

2 竪穴遺構

当初第23・24・33・35・36・42A・45・54・57・60・61号住居跡として調査した各遺構については、床面に踏み締められた硬化面が見られないこと、炉、貯蔵穴及び柱穴等の内部施設がないこと、そして規模が一辺4m以下の小型である等のことから、居住を目的とした竪穴住居跡と区別できる。そのためそれを第1～11号竪穴遺構と改称した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 古墳時代の竪穴遺構

第1号竪穴遺構（第131図）

位置 調査区中央部、D36区。

規模と平面形 長軸3.42m、短軸2.51mの長方形である。

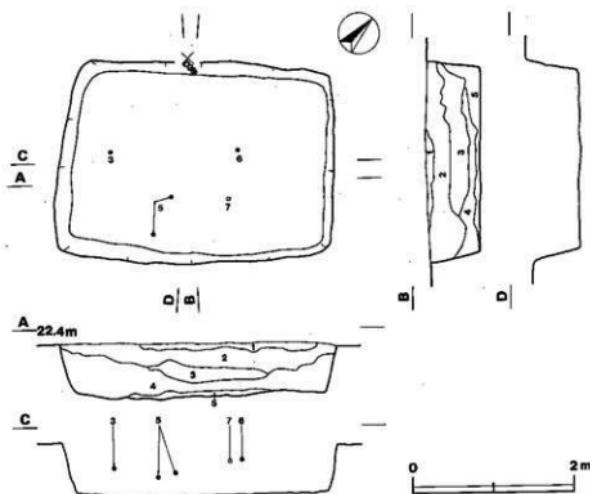
主軸方向 N-38°W

壁 壁高58～65cmで、垂直に立ち上がる。

床 平坦である。踏み締められた面は見られない。

覆土 5層からなる。人為堆積土層である。

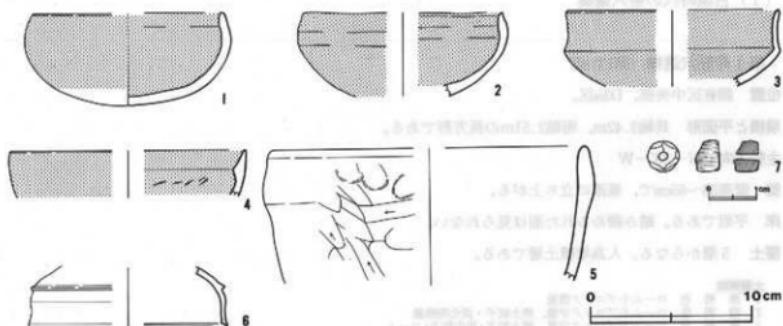
土層番号	色	主な構成物
1	暗褐色	ローム小ブロック微量
2	暗褐色	ローム小ブロック少量、燒土粒子・炭化物微量
3	褐色	ローム小ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
5	灰褐色	ローム粒子多量



第131図 第1号竪穴遺構実測図

遺物 遺物は細片が多く、ほとんどが住居跡西側覆土からの出土である。第132図3の土師器壺は住居跡東側から、5の土師器鉢、6の須恵器壺蓋、7の白玉は住居跡西側から出土している。6の須恵器壺蓋と同一個体と思われる蓋の天井部が第21号住居跡の覆土から出土している。図示できた以外の細片は、土師器壺の口縁部片18点、体部片323点、底部片1点、土師器瓶の口縁部片2点、体部片6点、底部片1点、土師器壺の口縁部片64点、体部片255点、底部片3点である。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第132図 第1号竪穴造構出土遺物実測図

第1号竪穴造構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 1	壺 土師器	A [11.6] B 6.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり。口縁部はわずかに内横する。	口縁部内・外縁横ナデ。体部外面 から底外面へ削り後ナデ。内面 ナデ。内面及び体部外面赤彩。	石英・雲母 赤褐色。底部褐色 普通	P184 50% 覆土上層
2	壺 土師器	A [12.4] B (5.2)	体部上位から口縁部の破片。体部 は内彎して立ち上がり。口縁部は わずかに内傾し、内面に弱い棱を もつ。	内・外縁横減。内・外縁赤彩。	砂粒 にぼい褐色 普通	P185 10% 覆土上層
3	壺 土師器	A [13.2] B (4.8)	体部から口縁部の破片。体部は内 彎して立ち上がり。口縁部との境 に棱をもつ。口縁部はやや外反す る。	口縁部内・外縁横ナデ。体部内・ 外縁ナデ。内・外縁赤彩。	砂粒 赤色 普通	P186 5% 覆土中層
4	壺 土師器	A [14.6] B (2.9)	口縁部破片。口縁部内面に棱をも ち。うちそぎ状である。	口縁部内・外縁横ナデ。内・外縁 赤彩。	砂粒 赤色 普通	P187 5% 覆土上層
5	鉢 土師器	A [19.4] B (8.4)	口縁部破片。口縁部はほぼ直立 し、器壁は肥厚する。	口縁部内・外縁横ナデ。部分的に 指頭痕を残す。体部外面へ削 り。内面ナデ。	砂粒・石英 にぼい黄褐色 普通	P188 5% 覆土中層
6	壺 蓋 須恵器	A [13.2] B (3.8)	天井部から口縁部の破片。天井部 は内彎し、口縁部との境に棱をも つ。口縁部は蓋下し、端部は沈線 が入り段をなす。	口縁部内・外縁横ナデ。天井部自 然軸付着。	砂粒・長石 暗灰黄色 良好	P189 10% PL41 覆土中層

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第132図7	白玉	0.7	0.65	0.5	0.15	0.3	滑石	西側覆土上層	Q26 PL55

第2号竪穴遺構(第134図)

位置 調査区中央部東寄り, D3g区。

規模と平面形 長軸3.32m, 短軸2.69mの長方形である。

長軸方向 N-60°-E

壁 壁高35~47cmで、垂直に立ち上がる。

床 平坦である。踏み締められた面は見られない。

覆土 13層からなる。土層3・5はローム小ブロックを含む褐色土で、これに土層4の極暗褐色土が挟まる。人為堆積土層である。特に南西壁側からのロームの堆積が目立つ。

土層解説

1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	8	黒褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量	9	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量	10	暗褐色	ローム粒子中量
4	極暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	11	褐色	ローム粒子中量
5	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量	12	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
6	褐色	ローム粒子中量	13	暗褐色	ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量
7	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量			

遺物 遺物量は少ない。土師

器壺の体部片52点、底部片

2点、土師器壺の底部片1

点、土師器壺の口縁部片9

点、体部片21点、須恵器壺

蓋天井部片1点が出土して

いるが、実測可能なものは、

は、第133図1の土師器壺

のみである。

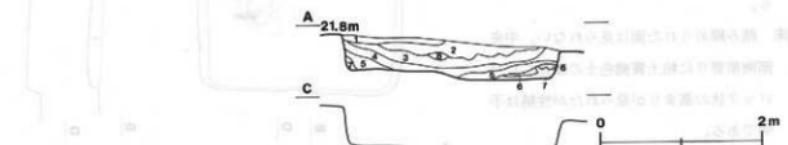
所見 本跡の時期は出土遺物

から5世紀末葉~6世紀初

頭と思われる。



第133図 第2号竪穴遺構出土遺物実測図



第134図 第2号竪穴遺構実測図

第2号竪穴遺構出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第133 1	壺 土師器	A [14.0] B (3.4)	口縁部の破片。体部は内側にして立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外側横ナギ。内・外側赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P190 5% 覆土

第3号竪穴遺構 (第135図)

位置 調査区中央部, D2as区。

規模と平面形 一辺が2.84mの方形である。

土層解説 1. 暗褐色 ローム粒子少量

2. 淡褐色 焼失中ブロック・炭化物中量
遺物 遺物は極少量で、すべて覆土中から出土である。土器壺の口縁部片1点、部材片19点、底部片1点、土器壺の口縁部片1点で、細片のため図示できることはなかった。

所見 床面には焼土塊が見られ、焼失家屋と思われる。本跡の時期は遺物が破片で、時期を決定することは難しいが、5世紀後葉と思われる。

第4号竪穴遺構 (第136図)

位置 調査区中央部東側, E3as区。

規模と平面形 長軸2.83m、短軸2.57mの長方形である。

長軸方向 N-11°-E

壁 壁高10~18cmで、外傾して立ち上がる。

床 踏み締められた面は見られない。中央部南東寄りに粘土質褐色土の硬化したブロック状の高まりが見られたが性格は不明である。

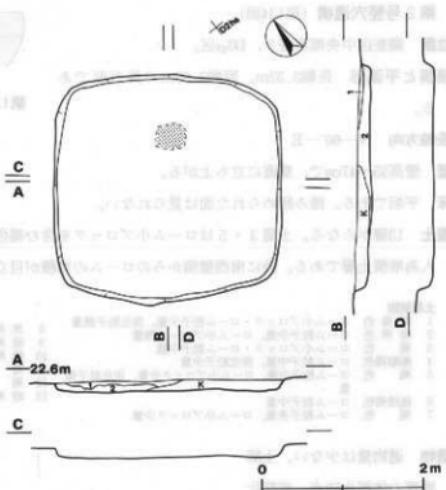
覆土 2層からなる。

土層解説 1. 暗褐色 ローム粒子少量、焼失粒子、皮化粒子微量

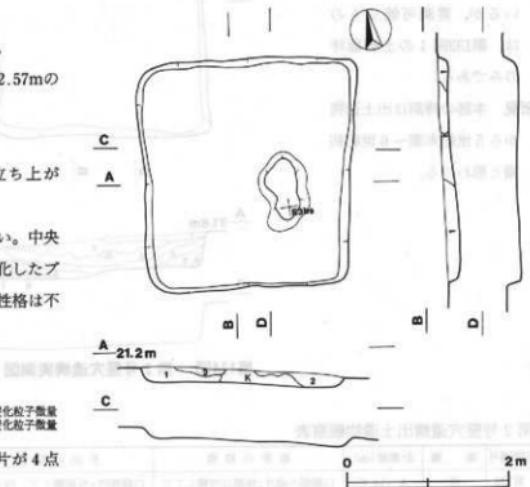
2. 暗褐色 ローム粒子中量、焼失粒子、皮化粒子微量

遺物 覆土中から土器壺の体部片が4点

出土したのみである。



第135図 第3号竪穴遺構実測図



第136図 第4号竪穴遺構実測図

所見 本跡から出土した遺物は極めて少量で時期を決定することは難しいが、他の住居跡や竪穴遺構が遺物と同様であることから、5世紀後葉と思われる。

第5号竪穴遺構(第137図)

位置 調査区中央部、E33区。

規模と平面形 長軸2.38m、短軸1.40mの長方形である。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高30~33cmで、外傾して立ち上がる。

床 踏み締められた面は見られない。

覆土 3層からなり、ロームブロックを多量に含む人為堆積土層である。

土層解説	
1	褐色
2	褐色
3	褐色

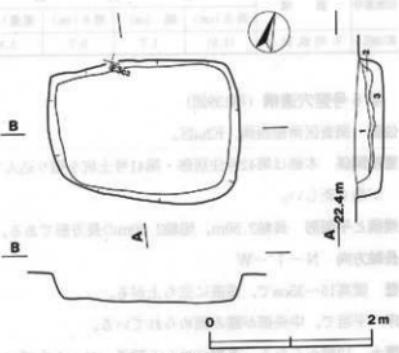
1 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
2 ローム中ブロック多量
3 ローム大ブロック多量

遺物 覆土中からの出土がほとんどで、第138図

1・2の土器器坏、焼、4の琥珀珠玉は住居跡

北西部から、3の須恵器坏身は覆土上層からの出土である。この他に縄文土器深鉢胴部片2点、土器器壺の口縁部片1点。体部片92点、底部片3点が出土しており、縄文土器片は混入である。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第137図 第5号竪穴遺構実測図



第138図 第5号竪穴遺構出土遺物実測図

第5号竪穴遺構出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	土器器 壺	A [14.1] B 5.5	体部から口縁部の破片。体部は内 側して立ち上がり、口縁部出羽ば直 立する。口縁部内面に棱をもつ。	口縁部内・外縫接ナデ。体部外縫 ヘラ削り。内・外縫赤茶。	砂粒 赤色 普通	P242 10% 覆土
2	焼 土器器 壺	A [13.2] B (4.3)	体部から口縁部の破片。体部は内 側して立ち上がり、口縁部はわず かに内傾する。	口縁部内・外縫接ナデ。体部外縫 摩滅。	砂粒 橙色 普通	P243 5% 覆土
3	环 須恵器	B (2.6)	底部から体部の破片。底部は平相 に近く、体部は内側して立ち上 り、受部にいたる。	底部外縫左クロ回転ヘラ削り。	良石 灰色 良好	P244 35% PLS2 確認面

図版番号	種別	計測値					石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第138図4	素玉	1.35	1.0	0.75	0.3	0.5	琥珀	北西部覆土	Q42
<hr/>									
図版番号	器種	計測値					出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第138図5	不明鉄製品	(4.5)	1.7	0.7	3.9		南西部覆土	M6	

第6号竪穴遺構(第139図)

位置 調査区南部西側、E2b4区。

重複関係 本跡は第42号住居跡・第41号土坑を掘り込んでいる。第41号土坑、第42号住居跡の順に古く、本跡が最も新しい。

規模と平面形 長軸2.50m、短軸2.00mの長方形である。

長軸方向 N-7°-W

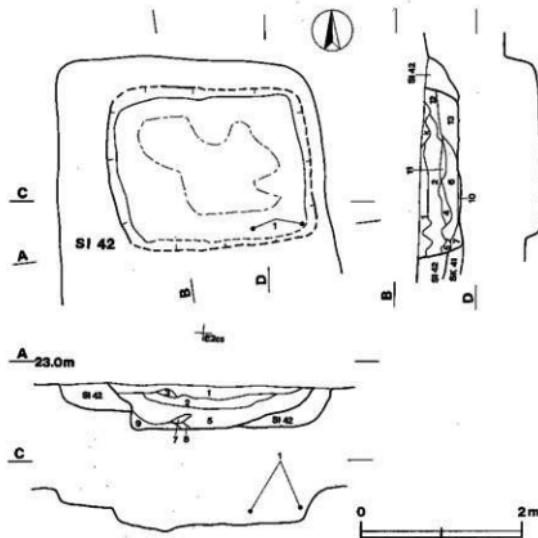
壁 壁高15~35cmで、垂直に立ち上がる。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

覆土 13層からなる。各層にローム粒子・ローム小ブロックを含む人為堆積土層である。

土層解説

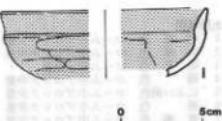
1	褐	色	ローム粒子中量、炭化物少量、ローム小ブロック微量	8	褐	色	ローム粒子少量
2	赤褐色	褐色	燒土粒子・炭化物・ローム粒子微量	9	褐色	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
3	暗褐色	褐色	燒土粒子・ローム粒子微量	10	明褐色	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
4	褐色	褐色	ローム粒子微量	11	暗褐色	褐色	ローム粒子少量、炭化物・ローム小ブロック微量
5	暗褐色	褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量	12	褐色	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
6	褐色	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量	13	褐色	褐色	ローム粒子少量、炭化物・ローム小ブロック微量
7	褐色	褐色	ローム粒子少量				



第139図 第6号竪穴遺構実測図

遺物 土師器の甕や壺の細片が覆土中から出土している。第140図1の土師
器壺は南壁際からの出土である。

所見 本跡は、第42号住居跡が人為的に埋め戻された後に構築したと考え
られる。時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。



第140図 第6号竪穴造構出土
遺物実測図

第6号竪穴造構出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第140図 1	壺 土師器	A [12.8] B (4.2)	体部から口縁部の破片、体部は内 側して立ち上がり、口縁部はわず かに外傾する。口縁部内面に棱を もつ。	口縁部内・外側横ナデ。内・外側 赤彩。	砂粒 赤色 普通	P270 5% 覆土上層

第7号竪穴造構(第141図)

位置 調査区中央部、E3as5区。

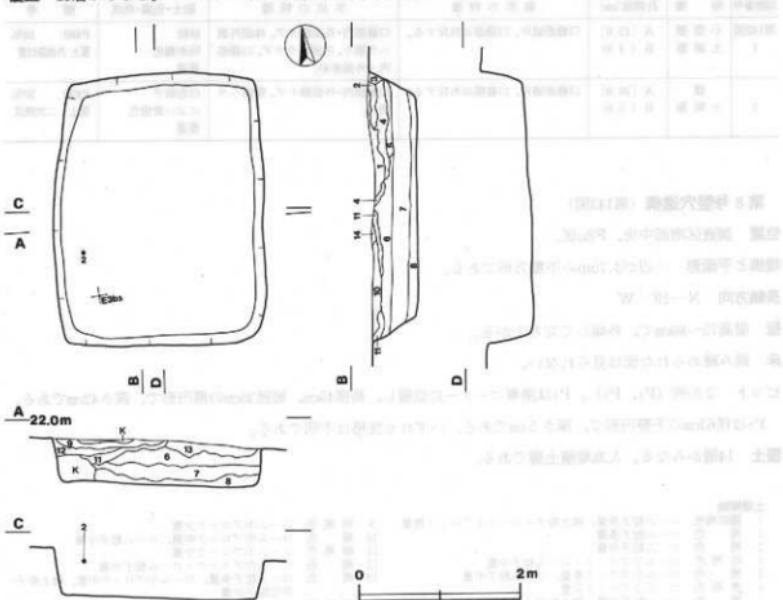
規模と平面形 長軸3.40m、短軸2.60mの長方形である。

長軸方向 N-10°-E

壁 壁高50~58cmで、垂直に立ち上がる。

床 平坦である。踏み締められた面は見られない。

覆土 13層からなる。ロームブロックを含む人為堆積土層である。



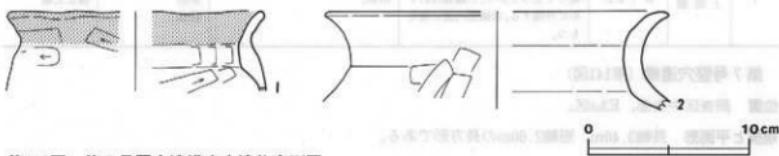
第141図 第7号竪穴造構実測図

土層解説		調査区第7号竪穴遺構出土の地質と土質						
1 明褐色	色	ローム大ブロック少量	8 海色	ローム粒子数量				
2 明褐色	色	ローム中ブロック中量	9 海色	ローム小ブロック多量	ローム粒子少量			
3 明褐色	色	ローム粒子微量	10 海色	ローム中ブロック中量	ローム粒子少量	焼土粒子微量		
4 黄褐色	色	ローム中ブロック中量	11 海色	ローム中ブロック・ローム粒子中量				
5 にい黄褐色	色	ローム小ブロック少量	12 海色	ローム小ブロック中量				
6 黄褐色	色	ローム小ブロック多量	13 海色	ローム中ブロック中量				
7 黄褐色	色	ローム中ブロック少量						

土山町新穴寺字3番 地図47番

遺物 出土遺物はすべて覆土中からのもので、土師器裏の口縁部片3点、体部片49点、底部片1点、土師器坏の口縁部片6点、体部片18点、繩文土器片2点と少ない。このうち図示した1の土師器小型甕は北西部の覆土上層から、2の甕は西壁際中央部の覆土中層から出土している。繩文土器片は混入である。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。



第142図 第7号竪穴遺構出土遺物実測図

第7号竪穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図 1	小型甕 土師器	A [15.6] B (4.9)	口縁部破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外縁構ナデ。体部外側 ヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部 内・外面赤彩。	砂粒 明赤褐色 普通	P489 10% 覆土 外面赤彩着
2	甕 土師器	A [20.8] B (5.6)	口縁部破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外縁構ナデ。頸部ヘラ 削り。	白色粒子 にい黄褐色 普通	P490 20% 覆土 二次焼成

第8号竪穴遺構（第143図）

位置 調査区南部中央、F2n区。

規模と平面形 一辺が3.75mの不整形である。

長軸方向 N-19°-W

壁 壁高75~80cmで、外傾して立ち上がる。

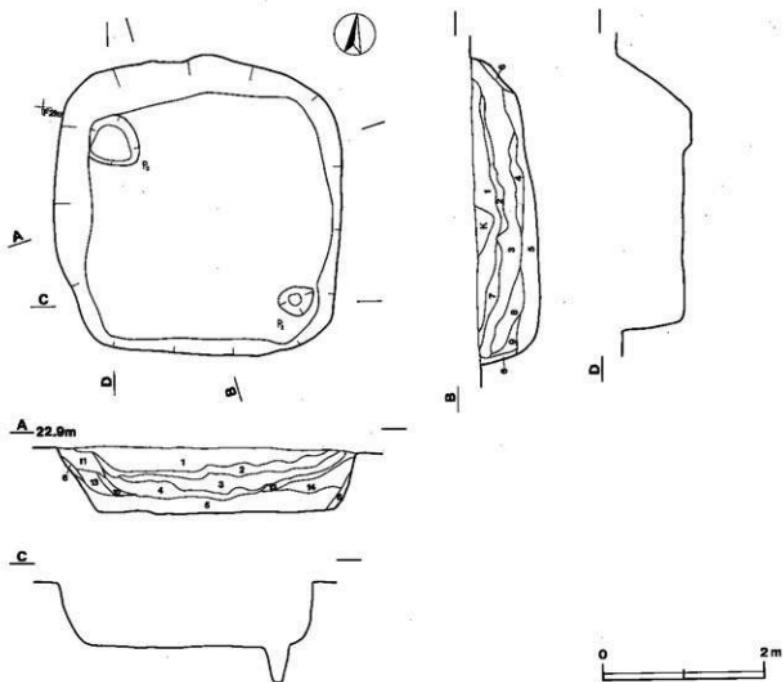
床 踏み締められた面は見られない。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁は南東コーナーに位置し、長径45cm、短径35cmの楕円形で、深さ42cmである。

P₂は径63cmの不整形で、深さ5cmである。いずれも性格は不明である。

覆土 14層からなる。人為堆積土層である。

土層解説		調査区第8号竪穴遺構出土の地質と土質						
1 塗壁暗褐色	色	ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロック微量	9 明褐色	ローム中ブロック少量				
2 塗壁褐色	色	ローム粒子多量	10 海色	ローム中ブロック中量	ローム粒子少量			
3 塗壁褐色	色	ローム粒子中量	11 明褐色	ローム小ブロック少量				
4 塗壁褐色	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量	12 海色	ローム中ブロック	ローム粒子中量			
5 塗壁褐色	色	ローム小ブロック多量、ローム粒子中量	13 海色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量	焼土粒子・ 炭化粒子少量			
6 塗壁褐色	色	ローム小ブロック少量						
7 塗壁褐色	色	ローム中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化 粒子微量	14 明褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量	ローム小ブ ロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量			



第143図 第8号竪穴造構実測図

遺物 土師器窓の体部片108点、底部片2点、土師器環の口縁部片3点、体部片32点、石鎌3点、石匙1点、繩文土器片2点、須恵器窓体部片1点が出土している。本跡から出土した須恵器窓片は、第51号住居跡第108図3と第56号住居跡から出土したものと接合する。

所見 本跡の時期は出土遺物から第51・56号住居跡と同時期の5世紀末葉と思われる。

第9号竪穴造構（第144図）

位置 調査区南部中央、F2n区。

規模と平面形 長軸3.65m、短軸3.00mの長方形である。

長軸方向 N—20°—W

壁 壁高20~25cmで、垂直に立ち上がる。

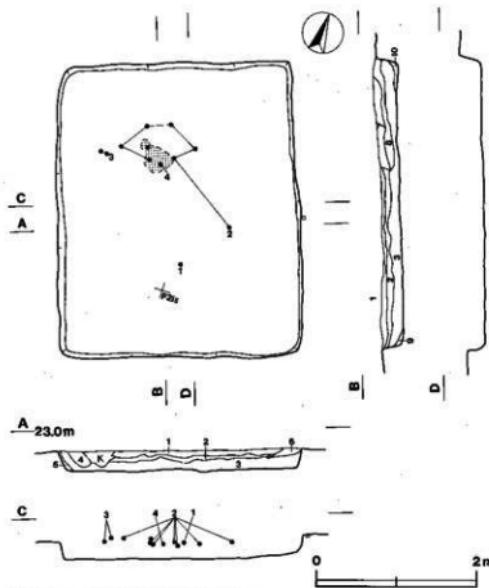
床 平坦である。踏み締められた面は見られない。

覆土 10層からなる。ロームブロックを含む人為堆積土層である。

土層解説		6 烟 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量	
1 塚 色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	7 烟 色 ローム小ブロック中量、燒土粒子少量	
2 黄 梅 色	ローム中ブロック多量	8 明 梅 色 燒土大・ローム中ブロック中量、燒土粒子微量	
3 梅 色	ローム中ブロック多量	9 黄 梅 色 ローム小ブロック多量	
4 梅 色	ローム中ブロック少量	10 梅 色 ローム粒子少量	
5 梅 色	ローム粒子少量		

遺物 第145図の塙は住居跡南部から、2・3の甕、4の小型甕は北西部の覆土上層から出土している。本跡の遺物の大半は北西部から出土している。図示した他に、土師器甕の口縁部片6点、体部片203点、土師器甕の口縁部片12点、体部片16点、土師器塙の体部片3点、繩文土器片9点が出土している。繩文土器片は混入である。

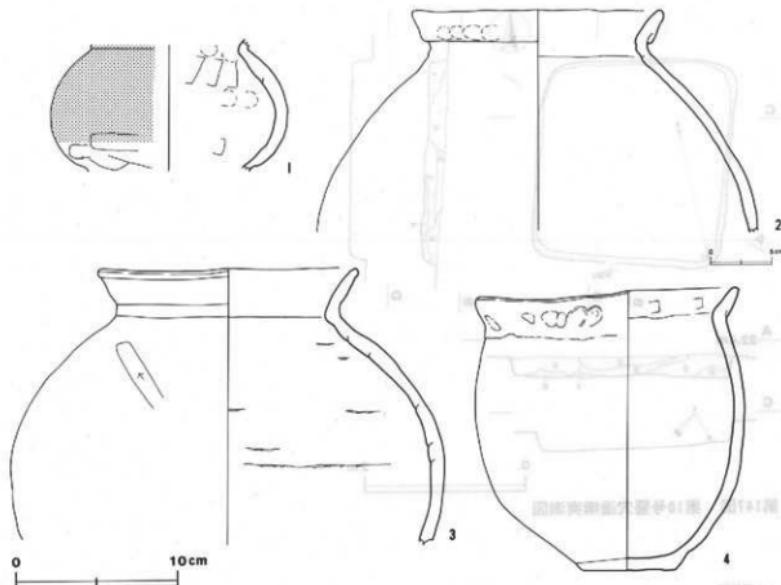
所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後葉と思われる。



第144図 第9号竪穴造構実測図

第9号竪穴造構出土遺物観察表

図版番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 1	塙 土師器	B (8.2)	体部破片。体部はつぶれた球形状で、体部中位に最大径をもつ。	体部外面上半ナデ、下半ヘラ削り。内面ヘナダ。外面赤影。	長石 外面明褐色 内面にいわ黄褐色 普通	P393 15% 覆土上層
2	甕 土師器	A 21.0 B (18.4)	体部上位から口縁部の破片。体部中位に最大径をもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、複合口縁である。	口縁部外表面擦押後横ナデ。体部内・外面摩耗。	白色微粒 にいわ褐色 普通	P394 15% PL52 覆土上層



第145図 第9号竪穴造構出土遺物実測図

第9号竪穴造構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	地土・色調・焼成	備考
第145図 3	甕 土師器	A [16.2] B (17.1)	体部口縁部の破片。体部は球形状で、体部中位に最大径をもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部・外腹横ナデ。体部外側ヘラ削り後ナグ。体部内面ヘナダ。体部に粘土巻き目が残る。	長石・石英 PL52 普通	P395 20% PL52 覆土上層
4	小型甕 土師器	A 16.5 B 17.6 C 6.0	平底。体部は内湾して立ち上がり。口縁部はわずかに外反し、複合口縁である。	口縁部外側指壓押正後、内・外腹横ナデ。口縁部内面にヘラ当て痕が残る。	白色微粒 PL52 普通	P396 80% PL52 覆土上層

第10号竪穴造構(第147図)

位置 調査区南部, F3e区。

規模と平面形 一辺が2.50mの方形である。

長軸方向 N-6°-W

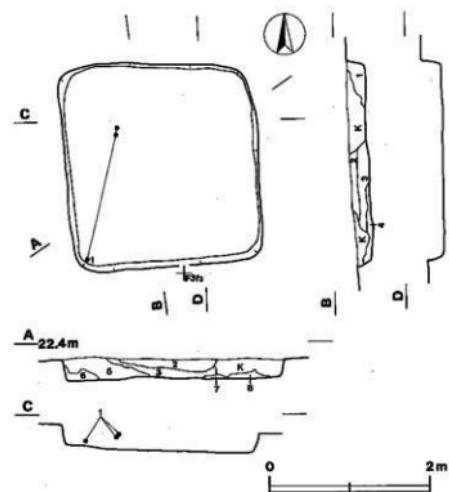
壁 壁高20~25cmで、垂直に立ち上がる。

床 平坦である。踏み締められた面は見られない。

覆土 8層からなる。人為堆積土層である。



第146図 第10号竪穴造構出土遺物実測図



第147図 第10号竪穴遺構実測図

土層解説

1	褐	色	ローム小ブロック中量
2	褐	色	ローム中ブロック中量。ローム粒子少量
3	暗	色	ローム小ブロック中量。ローム中ブロック少量
4	明	褐色	ローム小ブロック多量
5	褐	色	ローム中ブロック多量。ローム小ブロック中量
6	黄	褐色	ローム中ブロック多量。ローム小ブロック少量
7	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
8	暗	褐色	ローム大ブロック中量

遺物 出土遺物は極めて少量で、土師器甕の体部片25点、底部片1点、土師器甕の口縁部片4点である。第146

図1の甕は南西コーナーと北西部の床面からそれぞれ出土したものが接合したものである。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀末葉と思われる。

第10号竪穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・色 調・焼 成	備 考
第146図 1	土 師 甕	A 19.8 B (5.1)	口縁部の破片。口縁部は「コ」の字形に外反する。	口縁部・外表面ナデ。頸部外面指壓押圧痕が残る。頸部内面ヘタナデ。	砂粒 において黄褐色 普通	P491 10% 床面

第11号竪穴遺構(第148図)

位置 調査区南部、E24区。

規模と平面形 一辺が2.05mの隅丸方形である。

長軸方向 N-71'-E

壁 壁高13cmで、垂直に立ち上がる。

床 平坦で、踏み締められた面は見られない。

覆土 14層からなる。人為堆積土層である。

1	暗	褐色	炭化粒子・ローム粒子中量
2	褐	褐色	ローム粒子少量・炭化粒子・ローム小ブロック微量
3	褐	褐色	ローム小ブロック多量・ローム中ブロック・ローム粒子少量
4	暗	褐色	ローム粒子少量・ローム小ブロック微量
5	暗	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
6	によい	褐色	ローム粒子中量・ローム小ブロック微量
7	暗	褐色	ローム粒子微量
8	褐	褐色	ローム粒子少量
9	明	褐色	ローム粒子多量・ローム小ブロック少量
10	褐	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量・炭化物微量
12	暗	褐色	ローム粒子微量
13	褐	褐色	ローム粒子少量
14	褐	褐色	ローム粒子中量・ローム小ブロック微量

遺物 図示できる遺物はない。土師器甕の体部細片が5

点出土しているだけである。

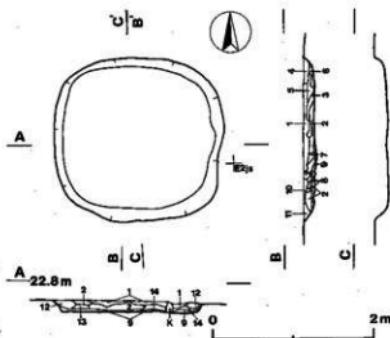
所見 極端な遺物であるが、他の住居跡等から出土し

ている遺物と同じ様相であることから、本跡の時期は 第148図 第11号竪穴造構実測図

5世紀末葉と思われる。

表2 馬場遺跡住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古-新)		
							壁溝	主軸穴	貯藏穴	ピット	入口	炉	簡便切削		
1	A4a1	N-31°-W	方	4.65×4.57	45-57	平坦	全周	4	1	-	1 炉2	-	人為	土師器(灰-灰-黒)	
2	A4a2	N-21°-W	長	3.47×2.77	22-49	平坦	3/4	2	1	1	1 炉2	-	自然	土師器(灰-青苔-灰-黒)	
3	B3a1	N-22°-W	方	8.00×8.00	16-49	平坦	壁溝	4	1	2	-	-	4	自然	土師器(青苔-灰-黒)
4	B3a2	N-10°-W	長	3.67×2.88	11-25	平坦	-	-	1	-	1 炉1	-	自然	土師器(灰-黒-鉛)	
5	B3a3	N-28°-W	方	7.38×7.24	4-15	平坦	壁溝	4	1	2	-	1 炉2	1	人為	土師器(灰-黒)
6	B3a4	N-8°-W	長	4.30×3.55	6-10	平坦	-	-	-	-	-	1 炉1	-	人為	土師器(灰-黒)
7	C3a1	N-52°-E	方	8.75×8.75	12-20	平坦	全周	4	2	2	-	1 炉1	3	人為	土師器(青苔-灰-黒)
8	C3a2	N-66°-E	方	2.09×1.85	13-25	平坦	-	-	1	-	-	-	-	人為	土師器(灰-黒)
9	C2a1	N-32°-E	方	5.25×5.25	20-25	平坦	壁溝	3	1	-	1 火1	1	自然	土師器(灰-黒)	
10	C2a2	N-17°-W	方	6.05×5.94	50-59	平坦	全周	4	-	-	1 炉1	2	自然	土師器(灰-黒) 瓦玉	
11	C2a3	N-54°-E	長	5.45×4.98	18-22	平坦	全周	-	-	-	-	-	-	人為	土師器(灰-黒-黒)
12	C3a2	N-7°-E	長	6.74×6.61	30-45	平坦	一部	4	1	-	1 炉1	3	自然	土師器(灰-黒-鉛)	
13	C3a3	N-12°-W	方	4.32×4.32	48-63	平坦	全周	4	-	-	1 火1	1	自然	土師器(灰-黒) 土師瓦	
14	C3a4	N-53°-E	長	2.64×2.24	7-13	平坦	-	-	-	-	1 炉1	-	自然	土師器(灰-黒)	
15	C3a5	N-33°-W	長	6.82×5.18	20-25	平坦	壁溝	-	1	1	1 火1	2	人為	土師器(青苔-灰-黒)	
16	C4a1	N-57°-W	方	6.05×5.63	25-46	平坦	全周	4	2	-	1 火1	-	人為	土師器(青苔-灰-黒)	
17	D4a1	N-27°-W	方	2.18×1.97	3-10	平坦	-	-	-	-	1 火1	-	自然	土師器(灰-黒)	
18	D3a1	N-53°-E	方	2.16×2.02	2-6	平坦	-	-	-	-	1 火1	-	自然	土師器(灰-黒)	
19	D3a2	N-44°-E	長	4.13×3.41	2-12	平坦	-	-	-	-	1 火1	-	自然	土師器(灰-黒) 山地種	
20	D2a1	N-26°-W	長	5.96×4.47	25-30	平坦	全周	4	1	1	-	1 火3	4	自然	土師器(青苔-灰-黒)
21	D3a3	N-72°-W	長	5.99×4.31	35-46	平坦	一部	4	1	-	1 火2	2	人為	土師器(青苔-灰-黒)	
22	B3a1	N-38°-E	長	5.00×3.52	46-50	平坦	全周	-	1	-	1 火1	1	人為	土師器(灰-黒) 壁面磨耗	
23	D3a4	N-28°-W	方	3.31×3.12	-	平坦	-	-	2	2	1 火1	-	自然	土師器(灰-黒)	
24	D3a5	N-20°-W	[方]	[3.98×3.64]	18	平坦	-	-	3	-	1 火1	-	人為	土師器(灰-黒-黒) 文士	
25	D3a6	N-67°-E	方	3.80×3.63	15-20	平坦	-	-	1	1	1 火1	-	人為	土師器(灰-黒-黒)	
26	D3a7	N-15°-W	方	9.25×9.25	46-50	平坦	全周	7	2	-	1 火2	13	人為	土師器(青苔-灰-黒)	



位置 番号	主軸方向	平 地 形	規模(m) (英単位×面積)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)		
						壁溝	柱穴	貯蔵穴	ビット	入口	炉・竈	閉仕切構				
29	E3n	N-38°W	方 形	3.00×3.00	31~65	平坦	全周	4	—	—	1 竈1	—	自然	土師器(环-要)	古墳時代(弥生後葉)	
30	D3n	N-36°W	[長 方 形]	[3.10×2.95]	12	平坦	—	—	—	—	炉1	—	人為	土師器(要)	古墳時代(中世末~後葉)本塚~26号塚	
31	B3as	N-6°W	長 方 形	2.38×1.71	—	平坦	—	—	—	—	炉1	—	人為	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)本塚~26号塚	
32	D2as	N-33°W	圓 丸 方 形	2.50×2.50	—	平坦	—	—	—	—	炉1	—	自然	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)	
33	E3as	N-15°W	不 整 方 形	2.32×2.08	約45	平坦	—	3	—	—	—	—	自然	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)	
37	E2as	N-37°W	長 方 形	3.42×2.61	15~28	平坦	—	1	1	—	炉1	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
38	E2as	N-57°W	長 方 形	3.65×3.23	26~30	平坦	底盤全周	4	1	1	1 炉1	1	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
39	E2n	N-21°W	長 方 形	6.90×5.90	55~45	平坦	全周	4	1	1	—	炉1	4	人為	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)
40	E2er	N-18°W	方 形	3.26×3.26	14~20	平坦	—	—	1	—	1 炉1	—	人為	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)	
41	E2es	N-8°E	方 形	3.25×3.25	19~25	平坦	底盤全周	4	—	1	炉1	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
42	E2as	N-7°W	長 方 形	4.30×3.40	19~25	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)	
43	E2es	N-25°W	方 形	6.12×5.12	46~50	平坦	底盤全周	4	1	—	1 炉2	8	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
44	E1er	N-29°W	方 形	7.82×7.82	27~38	平坦	底盤全周	4	1	—	1 炉1	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
46	E2es	N-21°W	方 形	7.40×7.40	29~40	平坦	底盤全周	4	1	6	1 炉3	12	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
47	F2es	N-22°W	[方 形]	[3.30×3.30]	—	平坦	—	—	—	—	炉1	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
48	F2es	N-26°W	方 形	7.84×7.36	30~38	平坦	底盤全周	4	1	—	1 炉2	3	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
49	F3es	N-34°W	長 方 形	3.40×2.40	6~12	平坦	—	—	—	—	炉1	—	人為	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)	
50	F2as	N-15°W	長 方 形	6.87×5.08	15~20	平坦	一部	2	3	1	1 炉1	5	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
51	F3es	N-18°W	長 方 形	2.80×2.56	15~20	平坦	—	—	2	4	—	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
52	F2es	N-1°E	方 形	4.22×4.22	29~75	平坦	全周	4	—	—	1 竈1	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
53	F3hi	N-25°E	方 形	3.10×3.10	19~15	平坦	全周	2	—	—	—	—	人為	土師器(要)	古墳時代(中世末~後葉)	
55	F2es	N-5°W	方 形	3.55×3.35	15~20	平坦	—	—	3	—	—	—	人為	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)	
56	F2es	N-20°W	方 形	6.24×5.24	25~50	平坦	底盤全周	4	1	2	1 炉2	8	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
58	F2es	N-5°W	方 形	3.53×3.53	46~60	平坦	全周	—	1	—	—	—	人為	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)	
59	F2es	N-36°W	方 形	3.62×3.37	35~50	平坦	一部	—	—	—	1 竈1	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
62	F2es	N-25°E	方 形	2.98×2.98	—	平坦	一部	—	—	—	1 竈1	—	人為	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)	
63	F2es	N-10°E	[長 方 形]	[3.55×2.80]	—	平坦	—	2	—	—	炉1	—	—	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)	
64	F2es	N-6°E	[長 方 形]	[2.70×2.10]	—	平坦	—	—	1	—	—	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)	
65	F2es	N-70°W	方 形	3.46×3.33	19~18	平坦	—	—	—	—	炉1	—	自然	陶文土器	古墳時代(中世末~後葉)	
66	G2es	N-46°W	方 形	3.60×3.60	25~25	平坦	—	—	—	2	—	炉1	—	自然	陶文土器	古墳時代(中世末~後葉)

表3 馬場遺跡窓穴構造一覧表

位置 番号	主軸方向	平 地 形	規模(m) (英単位×面積) (cm)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)	
						壁溝	柱穴	貯蔵穴	ビット	入口	炉・竈	閉仕切構			
1	D3te	N-38°W	長 方 形	3.42×2.51	56~65	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)
2	D3es	N-6°E	長 方 形	3.32×2.69	35~47	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)
3	D2as	N-50°W	方 形	2.84×2.84	16~15	平坦	—	—	—	—	—	—	自然	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)
4	E3as	N-11°E	長 方 形	2.83×2.57	19~18	平坦	—	—	—	—	—	—	自然	土師器(要)	古墳時代(中世末~後葉)
5	E3cs	N-32°W	長 方 形	2.38×1.40	39~33	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)
6	F2es	N-7°W	長 方 形	2.50×2.00	15~25	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)
7	E2es	N-10°E	長 方 形	3.40×1.60	50~48	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)
8	F2es	N-19°W	不 整 方 形	3.75×3.75	25~20	平坦	—	—	—	2	—	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)
9	F2es	N-20°W	長 方 形	3.65×3.00	25~25	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(环-要)漆器(漆器)	古墳時代(中世末~後葉)
10	F3es	N-6°W	方 形	2.50×2.50	25~25	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	土師器(环-要)	古墳時代(中世末~後葉)
11	E2es	N-71°E	圓 丸 方 形	2.05×2.05	13	平坦	—	—	—	—	2	—	人為	土師器(要)	古墳時代(中世末~後葉)

3 土坑

(調査) 古土器研究室

調査区全体から95基の土坑を確認した。ここでは、土坑の形状、規模、覆土の状態及び出土遺物等に特徴があるものについて文章で記載し、それ以外の土坑については一覧表に記載した。

第3号土坑(第149図)

位置 調査区中央部、D34区。

規模と平面形 径0.75mの円形。

壁 深さは27cmで、外傾して立ち上がる。

底面 平坦で、締まっている。

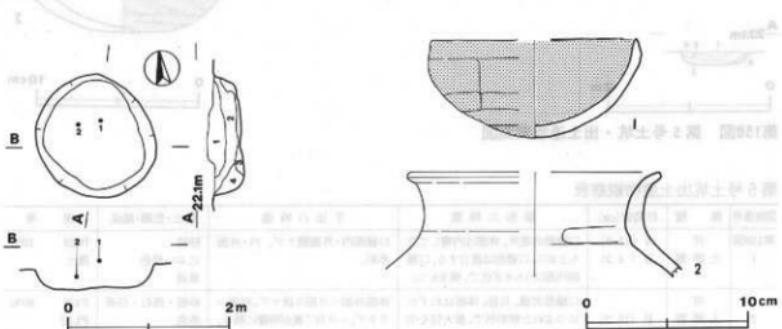
覆土 4層からなる自然堆積土層である。(1)外周部の不整土、(2)下層部の堅密粘土、(3)中層部の軟粘土、(4)表層部の砂質土。

土層解説	
1	暗褐色
2	暗褐色
3	褐色
4	褐色

ローム粒子少量、飛来粒子・炭化粒子微量
ローム粒子少量
ローム粒子少量
ローム粒子少量
ローム粒子中量、炭化粒子微量

遺物 本跡からは、攜土器片3点、土師器壺の口縁部片1点、体部片39点、底部片1点、土師器壺の口縁部片1点、体部片4点が出土している。第149図1の土師器壺は中央部土層1から、2の土師器壺は中央部土層2から出土している。繩文土器片は混入したものである。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後半と思われる。



第149図 第3号土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表

(調査) 古土器研究室

(調査) 古土器研究室

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第149区 1	環 土 師 器	A [12.8] B 6.1	丸底。体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱をもつ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部・外縁横ナダ。体部外側ヘラ削り後ナダ。内・外側赤彩。内・外側刻刷。	砂粒 褐色 普通	P426 70% PL52 覆土
	壺 土 師 器	A [15.8] B (6.5)	口縁部の破片。頸部はほぼ直立し、口縁部で外反する。	口縁部・外縁横ナダ。頸部内側ヘラナダ。	砂粒 におい黄橙色 普通	P427 30% 覆土

第5号土坑(第150図)

鉢土・E

位置 調査区南部西側、F2n区。
規模と平面形 径0.40mの円形。

壁 深さは15cmで、外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

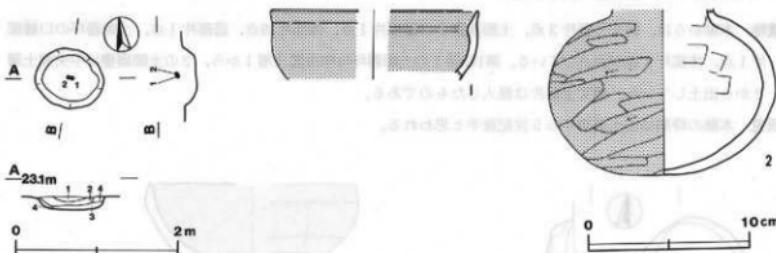
覆土 5層からなる。人為堆積土層である。

土層解説

- | | | | |
|---|---|---|--------------------|
| 1 | 褐 | 色 | ローム中ブロック・ローム粒子中量 |
| 2 | 褐 | 色 | ローム小ブロック中量、ローム粒子少量 |
| 3 | 明 | 褐 | ローム中ブロック中量 |
| 4 | 褐 | 色 | ローム中ブロック中量 |

遺物 本跡からは、土師器窓の体部片7点、土師器窓の口縁部片1点、体部片3点、口縁部を欠損した土師器
片1点が出土している。第150図の土師器片、2の塙は中央部土層2から出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後半と思われる。



第150図 第5号土坑・出土遺物実測図

第5号土坑出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150回 1	土師器	A [13.0]	口縁部の破片。体部は内嚢して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面はちぎり状で、破もつ。	口縁部内・外表面ナデ。内・外表面赤彩。	砂粒 にぶい褐色 普通	P428 覆土 10%
		B (4.3)				
第150回 2	土師器	B (10.3)	口縁部欠損。丸底。体部はわざかにつぶれた球形状で、最大径を中位にもつ。	体部外表面へラ削り後ナデ。内面へラナデ、へラ当て痕が明顯に残る。外表面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤色 普通	P429 PL52 80% 覆土

第6号土坑(第151図)

位置 調査区北部、D3g区。

規模と平面形 径0.85mの円形。

壁 深さは28cmで、外傾して立ち上がる。東側の壁には段がある。

底面 ほぼ平坦である。

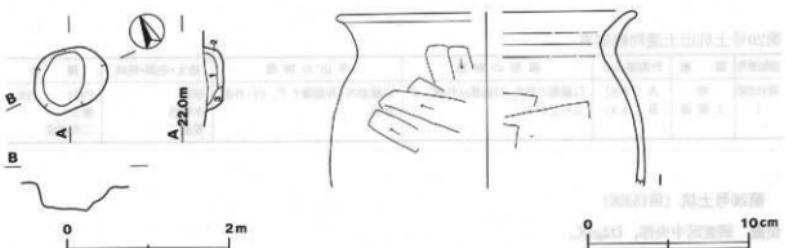
覆土 3層からなる。自然堆積土層である。

土層解説

- | | | | | |
|---|---|---|---|--------------------|
| 1 | 暗 | 褐 | 色 | ローム粒子微量 |
| 2 | 明 | 褐 | 色 | ローム粒子多量 |
| 3 | 明 | 褐 | 色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック微量 |

遺物 本跡からは、縄文土器片8点、土器器窓の口縁部片3点、体部片39点、土器器窓の口縁部片10点、体部片13点が出土している。第151図1の土器器窓は覆土上層からの出土である。縄文土器片は混入である。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後半と思われる。



第151図 第6号土坑・出土遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第151図 1	器 土器器窓	A [18.3] B [10.9]	口縁部の破片。体部は丸みをおびて立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外縁横ナメ。頸部・体部外縁ヘラ削り。体部内面ヘラナメ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P430 10% 覆土

第20号土坑(第152図)

位置 調査区北部中央、C3a区。

規模と平面形 一边が0.75mの方形。

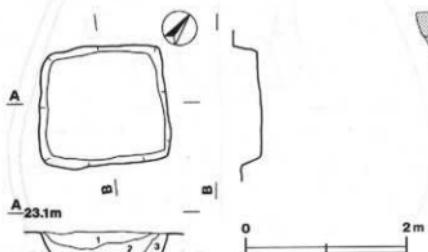
壁 深さは36cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で、締まっている。

覆土 3層からなる。自然堆積土層である。

土層解説

1 黒褐色	燒土粒子・炭化粒子少量	ローム粒子微量
2 暗褐色	燒土粒子少量	炭化粒子・ローム粒子微量
3 暗褐色	燒土粒子	炭化粒子少量



第152図 第20号土坑・出土遺物実測図

遺物 本跡からは、土師器甕の口縁部片1点、体部片40点、底部片1点、土師器壺の口縁部片5点、体部片30点、土師器壺の口縁部片1点が出土している。ほとんどの遺物は土層1からの出土である。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後半と思われる。

第20号土坑出土遺物観察表

図版番号	種類	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 1	埴 土 師 器	A [9.0] B [4.4]	口縁部の破片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外表面模ナメ。内・外面赤影。	砂粒 赤褐色 普通	P431 5% 覆土 二次焼成

第26号土坑 (第153図)

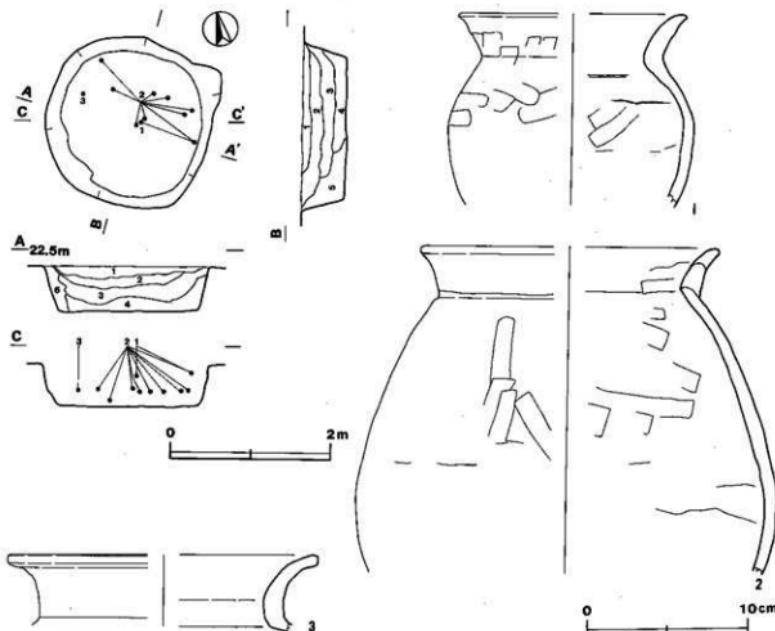
位置 調査区中央部、D2g区。

規模と平面形 径2.03mのほぼ円形。

壁 深さは52cmで、外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 6層からなる。自然堆積土層である。



第153図 第26号土坑・出土遺物実測図

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	褐色	ローム粒子多量、炭化物・ローム中・小ブロック微量	5	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量	6	褐色	ローム粒子多量

遺物 本跡からは、土師器壺の口縁部片1点、体部片173点、土師器壺の口縁部片3点、体部片3点、土師器壺1点が出土している。ほとんどの遺物は土層2・3からの出土である。第153図1の壺は、中央部出土のものと南西壁側出土のものが接合したものである。2の壺は離れた位置から出土したものが接合している。3の壺は北西側から出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後半と思われる。

第26号土坑出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 第153図	壺 土師器	A [14.3]	体部上位から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頭部・体部外面へラ削り。体部内面へラナデ。	砂粒 明黄褐色 普通	P433 35% PL52 覆土 二次焼成
		B (12.0)				
2	壺 土師器	A [17.9]	体部上半から口縁部の破片。体部はなだらかな丸をもって立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面へラナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P434 30% PL53 覆土
		B (20.9)				
3	壺 土師器	A [19.2]	口縁部片。頸部はほぼ直立し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P435 10% 覆土
		B (4.8)				

第34号土坑(第154図)

位置 調査区南部東側、F3be区。

規模と平面形 径0.84mの円形

壁 深さは30cmで、外傾して立ち上がる。

底面 凹凸がある。

覆土 4層からなる。

土層解説

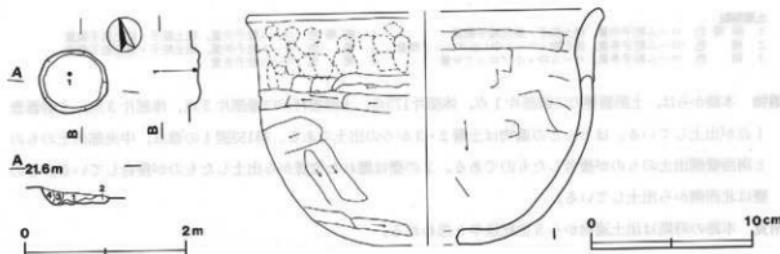
1	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2	明褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
3	褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
4	にぶい褐色	ローム粒子多量

遺物 本跡からは、第154図1の土師器壺が中央部の底面から出土している。出土遺物は1の壺一点のみで、他には全くない。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後半と思われる。

第34号土坑出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 第154図	壺 土師器	A [21.8]	単孔式。体部は球形状で、丸みをもっている。口縁部は短く外反する。	口縁部底内・外面横ナデ。口縫部外側指標押圧。体部・底部外面へラ削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	P442 35% PL53 覆土
		B 14.5				



第154図 第34号土坑・出土遺物実測図

調査区分	断面の状況	地質	測定
第39号土坑（第155図）	内壁は、土器底部の凹部跡	砂岩	高さ1.2m
位置 調査区中央部東側, D3c9区。	内壁は、土器底部の凹部跡	砂岩	高さ1.2m
規模と平面形 長軸0.94m, 短軸0.69mの隅丸長方形。	内壁は、土器底部の凹部跡	砂岩	高さ1.2m
長軸方向 N-37°-E	内壁は、土器底部の凹部跡	砂岩	高さ1.2m
壁 深さは46cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。	内壁は、土器底部の凹部跡	砂岩	高さ1.2m
底面 平坦である。	内壁は、土器底部の凹部跡	砂岩	高さ1.2m

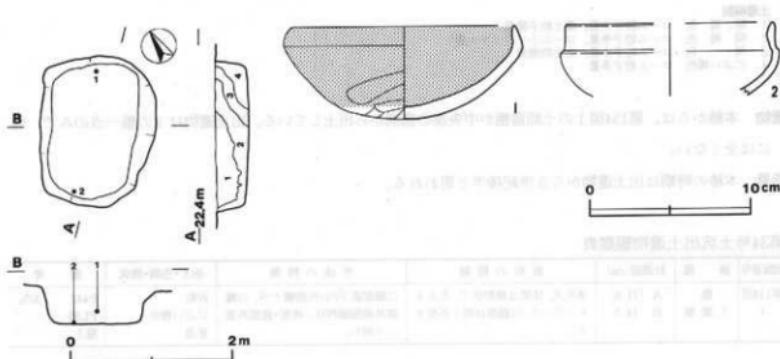
覆土 4層からなる。人為堆積土層である。

土層解説

- | 土層 | 色 | 主な構成物 | 特徴 |
|----|-----|-------------------------------------|------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 炭化粒子・ローム大・小ブロック・ローム粒子少量。
焼土粒子微量。 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量。焼土 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子中量。焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量 | ローム粒子中量。焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小
ブロック微量 |

遺物 本跡からは、土師器壺の口縁部片3点、体部片59点、土師器壺の口縁部片1点、体部片6点が出土している。第155図1の壺は北東壁際土層2から出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後半と思われる。



第155図 第39号土坑・出土遺物実測図

第39号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第155図 1	壺 土師器	A [13.8] B 5.8	丸底。体部は内側して立ち上がり。口縁部との境に縞をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底盤外面へラ耐り。内面ナデ。内面から体盤外面赤彩。	砂粒 赤色、底盤橙色 普通	P443 80% 覆土
		A [13.0] B (4.5)	体部上位から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり。口縁部との境に縞をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・青母 赤褐色 普通	P444 10% 覆土

第41号土坑(第156図)

位置 調査区南部西側、E2c5区。

重複関係 本跡は、第42号住居跡に掘り込まれており、本跡の方が古い。

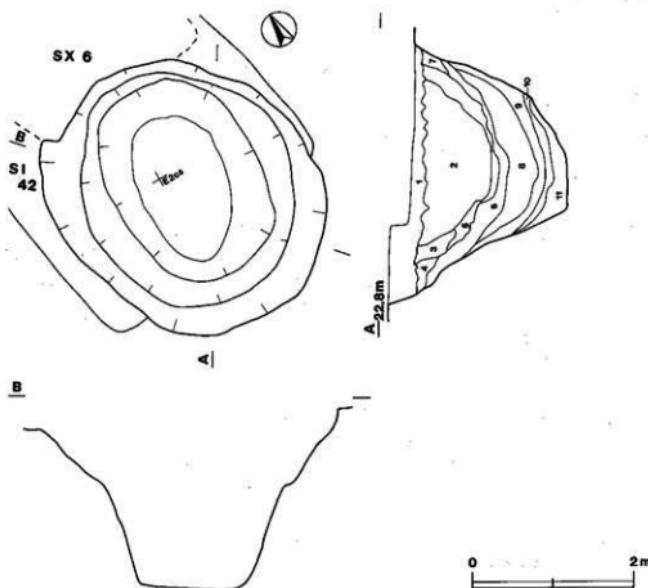
規模と平面形 長径3.70m、短径3.20mの橢円形。

長径方向 N-14°-W

壁 深さは225cmで、外傾して立ち上がり、二段掘り込みである。

底面 平坦である。

覆土 11層からなる。人為堆積土層である。



第156図 第41号土坑実測図

土層解説			地質図		
1 黒褐色	色	ローム小ブロック多量	6 黄褐色	色	ローム小ブロック中量
2 黒褐色	色	ローム粒子中量	7 黄褐色	色	炭化粒子中量。ローム小ブロック・ローム粒子少量
3 増褐色	色	焼土粒子・炭化粒子中量。ローム小ブロック・ローム粒子少量	8 黄褐色	色	ローム小ブロック少量
4 褐色	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	9 黄褐色	色	ローム小ブロック少量
5 にほい黄褐色	色	ローム中ブロック中量。ローム小ブロック少量	10 黄褐色	色	ローム小ブロック少量
			11 黄褐色	色	ローム中ブロック中量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺物が出土していないので時期は確定できないが、本跡を埋め戻した後に第42号住居跡を構築していることから5世紀後半以前の遺構である。形態からみると、井戸状遺構の可能性も考えられる。

第44号土坑（第157図）

位置 調査区中央部、D37区。

規模と平面形 長径1.71m、短径1.56mの橢円形。

長径方向 N-26°W

壁 深さは38cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

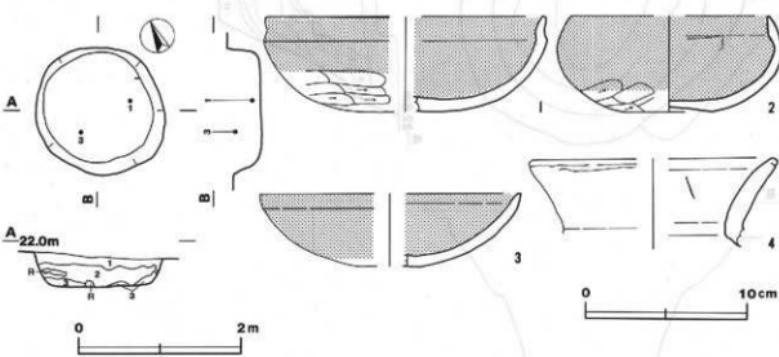
覆土 3層からなる。人為堆積土層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 2 增褐色 ローム粒子中量。焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量。ローム中・小ブロック微量

遺物 第157図1・3の土師器壺は覆土中からの出土である。この他に、土師器壺の口縁部片2点、体部片78点、土師器壺の口縁部片5点、体部片6点が出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後半と思われる。



第157図 第44号土坑・出土遺物実測図

第44号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第157図 1	壺 土師器	A [17.2] B (5.9)	丸底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は短く内傾した後直立する。	口縁部内・外側横ナギ。体部・底部外面へラ削り。内面ナギ。内面から体部外面赤影。	砂粒・赤色、底部黒色 普通	P446 40% P153 覆土	
		A [12.2] B 6.0 C 5.7		口縁部内面はうちそぎ状で、棱をもつ。口縁部は外傾する。	砂粒・白色微粒 赤褐色、底部褐色 普通	P447 40% 覆土	
第158図 3	壺 土師器	A [16.2] B (4.5)	平面気味の底部から、体部は大きく開いて立ち上がり、全体的に扁平。口唇部は尖る。	口縁部内・外側横ナギ。体部外側ナギ。内面削離。内・外側赤影。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P448 25% 覆土	
		A [15.3] B (5.5)		口縁部部。口縁部は外傾する。	口縁部内・外側横ナギ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P449 3% 覆土

第50号土坑（第158図）

位置 調査区中央部、D3hs区。

規模と平面形 径1.49mの円形。

壁 深さは42cmで、垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

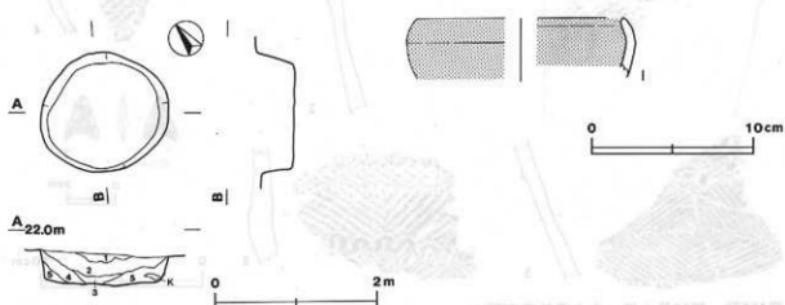
覆土 5層からなる。自然堆積土層である。

土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・ローム小ブロック微量
- 2 明褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 黑褐色 ローム粒子微量
- 5 明褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量

遺物 本跡からは、土師器壺の口縁部片1点、体部片53点、土師器壺の口縁部片7点、体部片23点、繩文土器片3点が出土している。ほとんどの遺物は覆土中層から下層にかけての出土である。繩文土器片は混入である。第158図1の壺は覆土中層からの出土である。

所見 本跡の時期は出土遺物から5世紀後半と思われる。



第158図 第50号土坑・出土遺物実測図

第50号土坑出土遺物観察表

回収番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第158回 1	坏 土 部 器	A [13.0] B (3.8)	口縁部片。体部は内側で立ち上がり、口縁部は短く内傾する。	口縁部内・外側横ナギ。内・外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P442 35% 覆土

第76号土坑(第159図)

位置 調査区南部中央, F2a区。

規模と平面形 径1.14mの円形。

壁 深さ25cmで、垂直に立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 6層からなる。

土層解説	色	ローム粒子・ローム中ブロック少量
1 褐	色	ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
2 褐	色	ローム中ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
3 褐	色	ローム中ブロック多量
4 褐	色	ローム粒子少量
5 褐	色	ローム中ブロック少量

(回収図) 覆土62層

62層(?) 覆土中瓦礫層 瓦礫

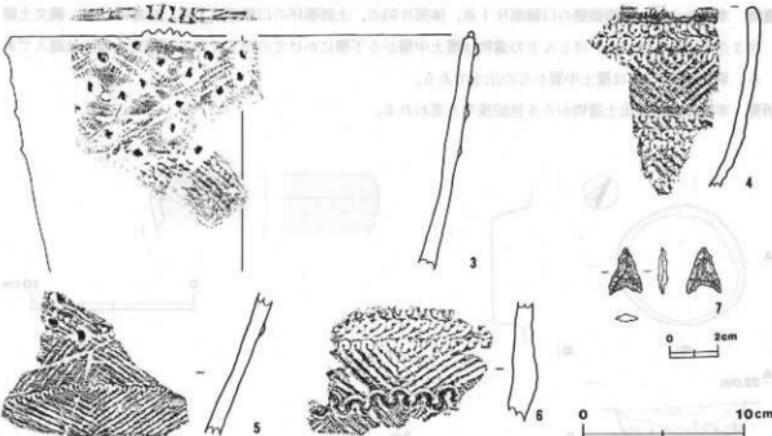
原田の山跡[図] 陥没字も瓦礫

瓦礫も立つ瓦礫層 瓦礫の瓦礫 層

遺物 第159+160図1の繩文土器の深鉢は、上から圧し潰されたような状態で本跡の中央部から出土している。

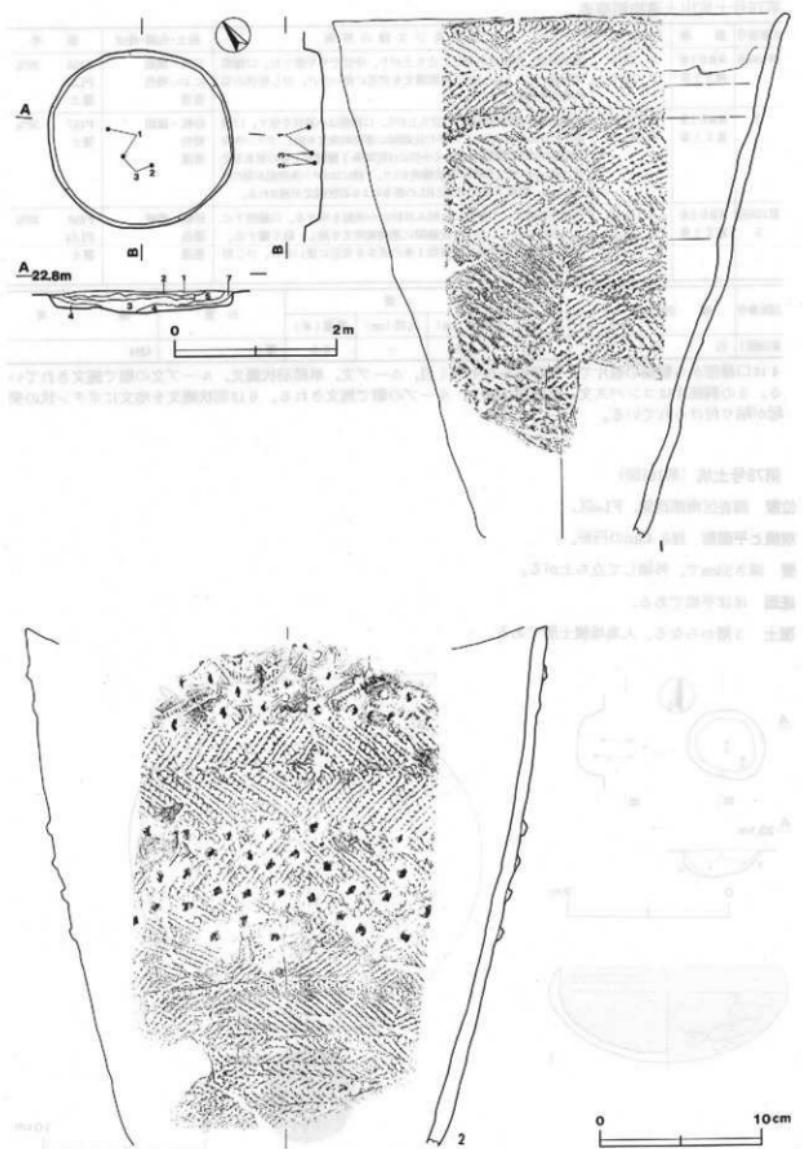
2, 3の深鉢も本跡中央部からの出土である。この他に、1~3と同一個体になると思われる体部片130点、底部片2点が覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から繩文時代前期と思われる。



第159図 第76号土坑・出土遺物実測図(1)

実測実測出土・覆土 62層 図159



第180図 第76号土坑・出土遺物実測図(2)

国宝御所出土・出土物計量 図181图

第76号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 第160図	深鉢形土器 縄文土器	A [28.4] B (32.5)	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、中位でやや膨らむ。口縁部には指頭ナギ。LRとRLの単節纏文を交互に使い分け、ひし形状の羽状纏文を構成する。	石英・鐵錫 において褐色 普通	P456 PL53 覆土
		A [32.2] B (31.5)			
2 第159図	深鉢形土器 縄文土器	A [28.6] B (14.5)	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり。口縁部は小波状を呈す。口縁部下には山形状に造られた平行沈線間に連続刺突文を施し、ボタン状突起を貼り付ける。胴部上位から中位には附加条1種附加1条の原本を交互に使い分けひし形状の羽状構成をとり、下位にはボタン状突起が貼り付けられる。胴部下位にはRLとRLの原本による羽状纏文が施される。	砂粒・鐵錫 褐色 普通	P457 PL54 覆土
		A [28.6] B (14.5)			

4は口縁部の破片で、口唇部には刻み目状の小突起を有する。口縁部下には山形状に造られた平行沈線間に連続刺突文を施し、貼り付ける。5の胴部はコンバス文、単節羽状纏文、ループ文の順で施文される。6は羽状纏文を地文にボタン状の突起が貼り付けられている。

第78号土坑（第161図）

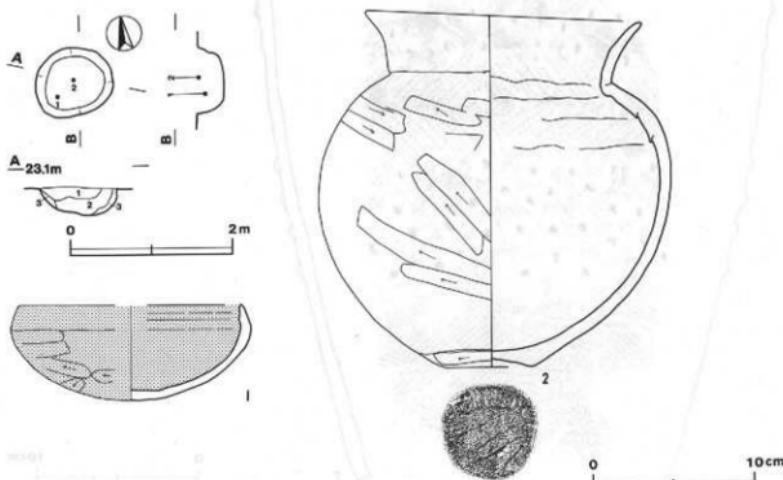
位置 調査区南部西側、F1e0区。

規模と平面形 径0.43mの円形。

壁面 深さ33cmで、外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 3層からなる。人為堆積土層である。



第161図 第78号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
2 喀斯特褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量

遺物 第161図の土師器は本跡南西部、2の土師器は本跡中央部の土層2から出土している。2はほぼ完形に近く、斜位の状態で出土している。

所見 遺物の出土状態からみて、本跡は人為的埋め戻しの過程で遺物投棄が行われたようである。時期は出土遺物から5世紀後半と思われる。

第78号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第161図 1 土師器	A	13.8	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部内面に弱い模様をもつ。	口縁部内・外側横ナデ。体部・底部外側へラ削り後ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P459 - 60% PL53
	B	5.9				
2 土師器	A	17.0	平底で中央部が凹む。体部は球形状で、口縁部は外傾する。	口縁部内・外側横ナデ。体部・底部外側へラ削り、内面へナダ。内面粘土の擦ぎ目を残す。	砂粒・スコリア に赤い褐色 普通	P460 - 90% PL54
	B	22.2				
	C	5.4				覆土・外周葉付

第84号土坑(第162図)

位置 調査区中央部、F17区。

規模と平面形 長径1.70m、短径1.37mの

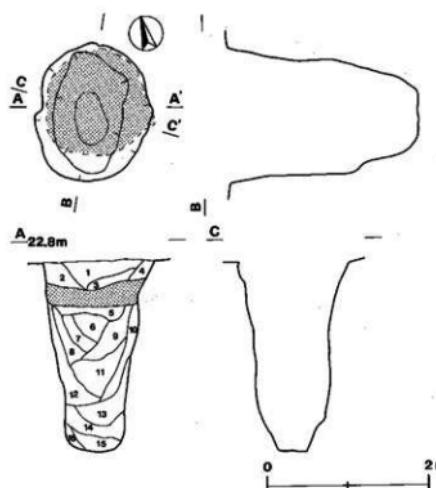
楕円形。

長径方向 N-30°-E

壁 深さ235cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 16層からなる人為堆積土層である。



第162図 第84号土坑実測図

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺物の出土もなく、時期も性格も不明である。深さや形態からみると、井戸状の遺構の可能性も考えられる。

第93号土坑 (第163図)

位置 調査区南端部, G2a3区。

規模と平面形 長径1.73m, 短径0.79mの不整長楕円形。

長径方向 N-17°-E

壁 深さ31cmで、外傾して立ち上がる。

底面 起伏があり、凹凸している。

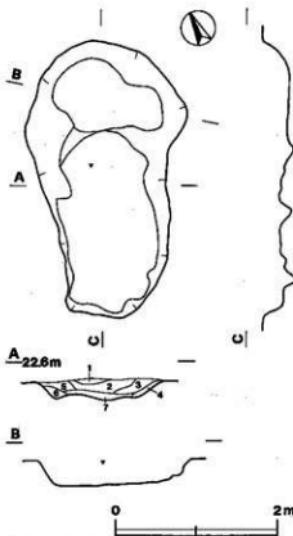
覆土 6層からなる。人為堆積土層である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量。ローム小ブロック少量。焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子中量。ローム小ブロック少量
- 3 明褐色 ローム中ブロック多量。炭化物・炭化粒子少量
- 4 明褐色 ローム大ブロック多量
- 5 暗褐色 ローム中・小ブロック・粒子中量。炭化物少量
- 6 暗褐色 ローム大・中ブロック中量。炭化物少量

遺物 本跡の中央部の土層2から馬歯が出土している。土器類は出土していない。

所見 遺構の性格、時期は不明である。



第163図 第93号土坑実測図

第95号土坑 (第164図)

位置 調査区南部西端、E1g9区。

重複関係 本跡は、第44号住居跡を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径1.82m, 短径1.03mの楕円形。

長径方向 N-34°-W

壁面 壁面は確認できなかった。

底面 凸状で、起伏がある。

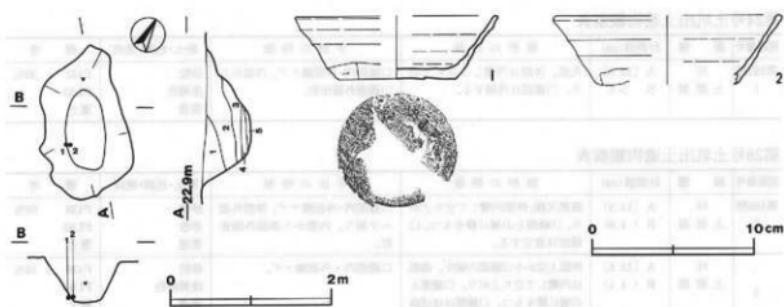
覆土 5層からなる。人為堆積土層である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量。ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量。ローム中・小ブロック少量
- 4 明褐色 ローム粒子多量。ローム中・小ブロック少量。ローム大ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量。ローム中ブロック少量

遺物 第165図1の須恵器環は本跡中央部の底面から出土している。この他に、須恵器環の口縁部片9点、体部片8点、底部片4点と、本跡北西部の底面上10cmのところから馬歯が出土している。

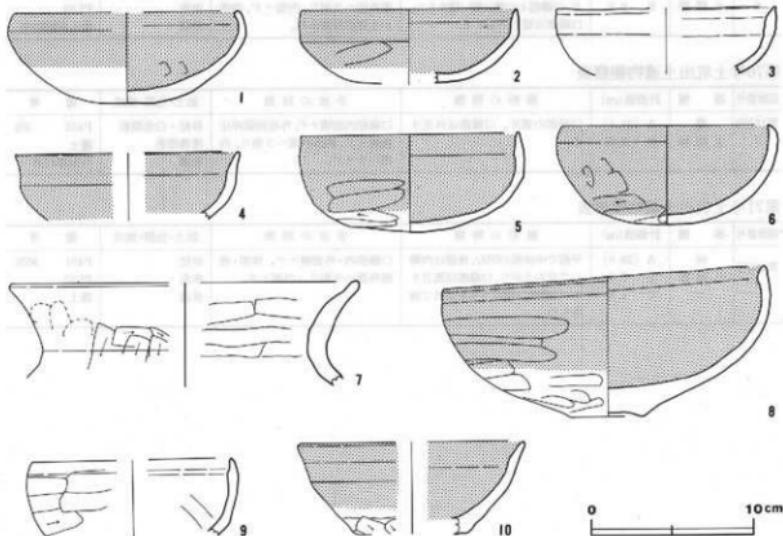
所見 本跡の時期は出土遺物から8世紀末と思われる。



第164図 第95号土坑・出土遺物実測図

第95号土坑出土遺物観察表

回収番号	器 横	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第164図 1	環 須 恵 器	A [13.8] B 3.9 C 7.2	平底。体部は外に直線的に開きながら立ち上がり、口縁部にいたる。	体部内・外面ロクロナデ。体部外 面下端手持ちヘラ削り。底部外 面転へラ切り後難なぎだ。	長石・費母 黄褐色 普通	P462 40% PL54 覆土
	2	A [13.8] B (4.3)	底部欠損。体部は外に直線的に開 きながら立ち上がり、口縁部にいたる。	体部内・外面ロクロナデ。体部外 面下端手持ちヘラ削り。	長石・白色微粒 灰色 普通	P463 10% PL54 覆土



第165図 土坑出土遺物実測図

第24号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 1	坏 土師器	A [13.8]	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内面から口縁部外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P432 30% PL52 覆土
		B 5.6				

第28号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 2	坏 土師器	A [13.5]	底部欠損。体部内側して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面から体部外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P438 60% PL52 覆土
		B (4.6)				
3	坏 土師器	A [13.6]	体部上位から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄褐色 普通	P439 10% PL53 覆土
		B (4.1)				
4	坏 土師器	A [13.8]	口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内・外赤彩。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P440 10% PL53 覆土
		B (4.1)				

第29号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 5	坏 土師器	A 13.6	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面はうちもざぎ状で、稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底面ヘラ削り。内面から体部外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P441 70% PL53 覆土
		B 6.1				

第46号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 6	坏 土師器	A 12.8	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は細く内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底面ヘラ削り。内面ナデ。内面から体部外面赤彩。	砂粒・白色微粒 赤色 普通	P450 95% PL53 覆土・外面磨付着
		B 6.2				

第70号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 7	坏 土師器	A [21.4]	口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内面横ナデ・外面指腹押圧後擦ナデ。頸部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・白色微粒 浅黄褐色 普通	P453 5% 覆土 外面磨付着
		B (6.5)				

第71号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 8	坏 土師器	A [20.0]	平底で中央部が凹む。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内面はうちもざぎ状で稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底面ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒 赤色 普通	P454 85% PL53 覆土
		B 9.3				
		C 4.6				

第81号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 9	壺 土師器	A [12.5] B (4.0)	口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は短く内傾する。	口縁部内・外裏横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。内・外裏赤彩。	砂粒 にぼい褐色 普通	P461 10% 覆土

第86号土坑出土遺物観察表

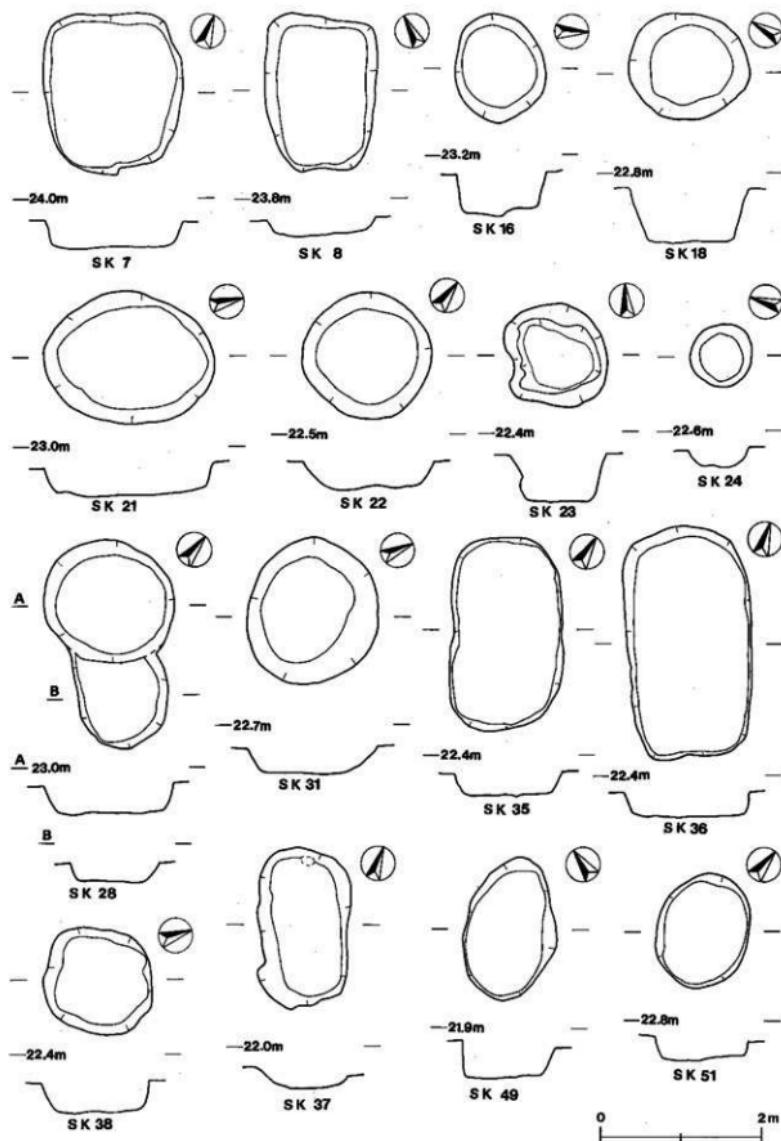
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 10	壺 土師器	A [13.8] B 5.9 C [6.0]	平底で分厚い。体部は内側して立ち上がり、中位に縫をもつ。	口縁部は外傾する。口縁部内・外裏横ナデ。体部・底部外側ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。内面から体部外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P455 25% PL53 覆土

表3 馬場遺跡土坑一覧表

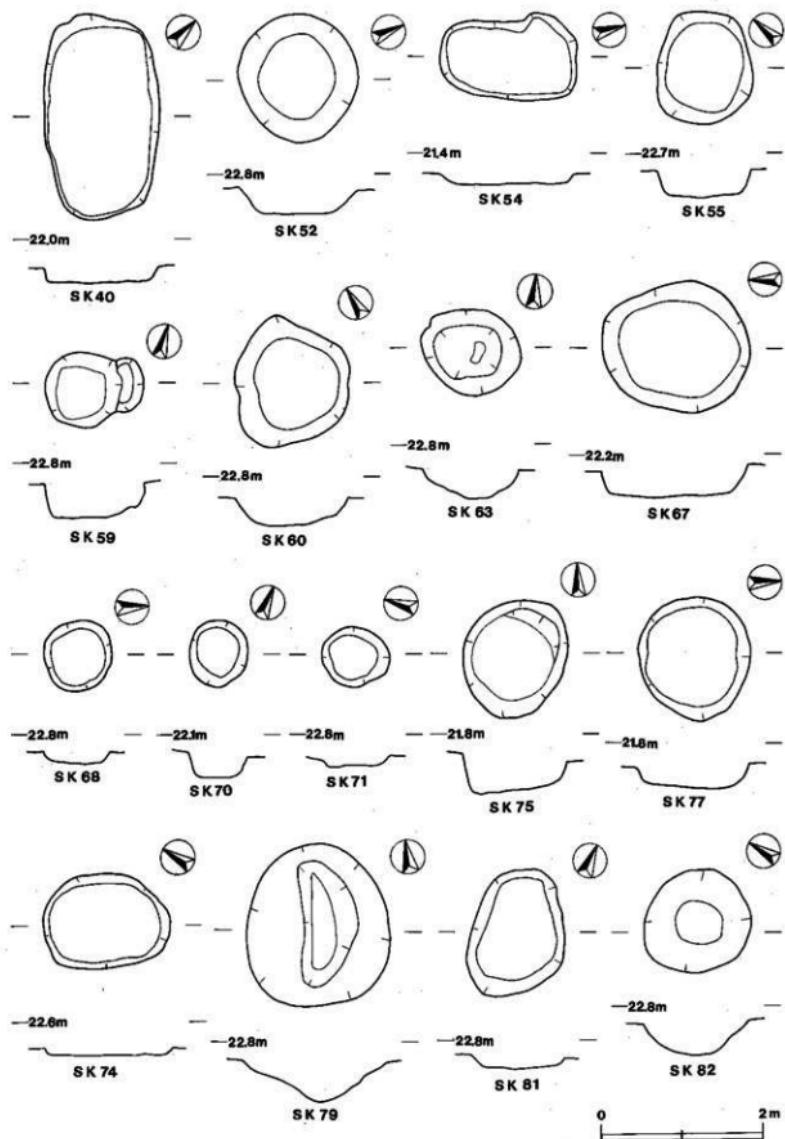
土坑番号	位置	長径方向 (短軸方向)	平面形	規模			出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)	壁面		
1	B4a	N-69'-W	楕円形	1.96×1.56	9	緩傾 平坦	自然 土師器環片20点・壺片5点	
2	B3a	N-15'-W	楕円形	1.70×1.52	62	外傾 平坦	人為 土師器環片7点・壺片4点	
3	D3a	N-40'-W	円形	0.78×0.71	27	外傾 凹状	自然 土師器環片5点・壺片40点・鐵文土器片4点	
4	D2a	N-42'-W	不整形	1.90×0.62	82	垂直 平坦	人為 土師器環片4点	
5	F2a	N-38'-W	円形	0.41×0.31	15	緩傾 平坦	人為 土師器環片1点・塔1点・土師器環片3点・壺片7点	
6	D3a	N-58'-W	円形	0.88×0.83	28	緩傾 平坦	自然 土師器環片1点・土師器片2点・壺片4点・鐵文土器片8点	
7	B3a	N-23'-W	偶丸長方形	1.90×1.72	60	外傾 平坦	自然 土師器環片8点・壺片5点	
8	B3a	N-2'-W	不整長方形	1.05×0.77	20	緩傾 凹凸	人為	
9	B2a	N-17'-E	楕円形	0.84×0.31	16	緩傾 凹状	自然	
10	B2a	N-10'-E	不整形	0.52×0.46	38	緩傾 四状	人為	
11	A2a	N-34'-E	楕円形	0.50×0.40	5	緩傾 凹凸	自然	
12	C4a	N-52'-W	不整圓形	1.23×1.17	36	外傾 凹状	人為	
13	B3a	N-55'-W	偶丸長方形	1.77×1.32	37	外傾 凹凸	自然	
14	C3a	N-56'-W	楕円形	0.87×0.82	11	緩傾 平坦	人為	
15	D2a	N-7'-E	楕円形	1.82×1.05	108	外傾 凹凸	人為 土師器環片21点・壺片2点	
16	C2a	N-78'-E	円形	0.68×0.55	53	外傾 凹凸	人為	
17	C2a	N-65'-E	円形	0.59×0.54	25	緩傾 凹状	自然	
18	C2a	N-30'-W	楕円形	0.75×0.67	68	外傾 凹状	人為	
19	E2a	N-8'-W	不整圓形	0.52×0.40	49	垂直 平坦	人為	
20	C3a	N-50'-E	方形	0.79×0.74	36	外傾 平坦	自然 土師器片1点・土師器環片35点・壺片42点	
21	C3a	N-12'-E	楕円形	1.06×0.61	40	外傾 平坦	人為 土師器環片29点・壺片29点	
22	C2a	N-47'-E	楕円形	0.81×0.79	37	外傾 平坦	人為 土師器環片19点・壺片88点	
23	C2a	N-49'-W	不整圓形	0.68×0.62	60	緩傾 平坦	人為 土師器環片7点	
24	C2a	N-47'-W	円形	0.40×0.38	22	外傾 凹状	自然 土師器片1点・土師器環片7点・壺片4点	
25	D2a	N-23'-W	円形	0.35×0.34	48	外傾 凹状	人為	
26	D2a	N-30'-E	偶丸長方形	2.06×2.03	52	外傾 平坦	人為 土師器片1点・壺片2点・土師器環片5点・壺片17点	
28	F2a	N-46'-W	楕円形	1.31×0.52	34	外傾 平坦	人為 土師器片3点・土師器環片13点・壺片2点・鐵文土器片1点	
29	D2a	N-7'-E	楕円形	0.79 [6.0]	14	緩傾 平坦	自然 土師器環片1点・土師器片7点	
30	D2a	N-65'-E	円形	0.41×0.39	30	外傾 凹凸	自然	
31	E3a	N-47'-W	楕円形	0.89×0.82	32	外傾 平坦	人為 土師器環片10点・壺片14点・鐵文土器片1点	
32	D3a	N-37'-W	円形	0.45×0.43	28	外傾 凹状	自然	
33	C2a	N-20'-W	楕円形	0.88×0.41	60	外傾 凹状	自然	
34	F3a	N-38'-W	円形	0.84×0.84	30	緩傾 平坦	人為 土師器片1点	

土坑 番号	位 置	長径方向 (吳輪方向)	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物		備 考
				長径×幅径(m)	高さ(cm)						
35	D3et	N-32°-W	不整橢円形	1.20×0.67	28	外傾	平坦	自然	土師器坏片 4点		
36	D3et	N-27°-W	楕丸長方形	2.58×1.52	32	外傾	平坦	人為	土師器坏片26点・甕片105点		
37	D4et	N-4°-E	楕丸長方形	1.93×1.12	20	緩傾	平坦	自然			
38	D4et	N-70°-E	円 形	0.74×0.69	39	外傾	平坦	人為	土師器坏片12点・甕片19点		
39	D2et	N-37°-E	楕丸長方形	0.94×0.72	45	外傾	平坦	人為	土師器坏片2点・土師器片7点・甕片62点		
40	D3et	N-43°-W	楕丸長方形	1.29×0.71	20	緩傾	平坦	人為	土師器坏片10点・甕片45点		
41	E2et	N-14°-W	椭 圓 形	3.70×3.20	225	外傾	亞状	人為			
42	D3et	N-7°-E	不整橢円形	0.72×0.57	12	緩傾	亞状	自然			
43	E2et	N-0°-	椭 圓 形	0.72×0.69	15	外傾	亞状	自然			
44	D3et	N-26°-W	椭 圓 形	1.71×1.56	38	外傾	平坦	人為	土師器坏片3点・甕1点・土師器片11点・甕片80点		
45	E2et	N-10°-W	椭 圓 形	0.54×0.50	52	外傾	凸凹	人為	土師器片1点		
46	D4et	N-42°-E	椭 圓 形	1.16×0.79	14	緩傾	凸凹	自然	土師器坏片1点・土師器片1点		
47	D3et	N-55°-E	椭 圓 形	0.88×0.72	28	緩傾	平坦	人為	土師器片2点		
48	D3et	N-56°-E	椭 圓 形	0.40×0.30	33	外傾	亞状	自然	土師器坏片3点・甕1点		
49	D3et	N-43°-E	椭 圓 形	0.90×0.55	45	垂直	平坦	人為	土師器坏片40点・甕片39点		
50	D3et	N-33°-W	椭 圓 形	1.52×1.47	42	外傾	平坦	自然	土師器坏片1点・土師器片2点・甕片54点・甕文土器片3点		
51	E2et	N-42°-W	椭 圓 形	0.72×0.57	30	外傾	平坦	自然	土師器坏片2点・甕片1点		
52	E2et	N-60°-W	円 形	0.80×0.70	35	緩傾	平坦	人為	土師器坏片2点・甕片2点・甕文土器片7点		
53	D3et	N-41°-E	椭 圓 形	0.83×0.75	35	緩傾	平坦	自然			
54	D3et	N-21°-E	不 整 形	0.86×0.47	13	緩傾	平坦	人為	土師器片4点		
55	G2et	N-52°-E	楕丸長方形	1.40×1.18	33	外傾	平坦	人為	土師器坏片6点・甕片13点		
57	F2et	N-23°-E	椭 圓 形	1.12×0.98	16	外傾	平坦	人為	土師器片16点		
58	F2et	N-25°-E	椭 圓 形	0.47×0.40	21	緩傾	平坦	人為			
59	E2et	N-79°-E	不 整 形	0.60×0.46	43	外傾	平坦	人為	土師器片7点		
60	E2et	N-13°-E	不整橢円形	1.60×1.44	37	緩傾	亞状	自然	土師器片13点		
61	E3et	N-43°-W	円 形	0.51×0.50	18	緩傾	亞状	人為	土師器坏片2点		
62	E3et	N-76°-E	椭 圓 形	1.12×0.83	33	外傾	平坦	自然			
63	D3et	N-80°-W	不整橢円形	0.64×0.54	35	緩傾	亞状	人為	土師器坏片6点・甕片48点		
64	F2et	N-40°-W	円 形	0.38×0.34	14	緩傾	平坦	自然	土師器坏片1点・甕片6点・甕文土器片1点		
65	E3et	N-20°-W	円 形	0.40×0.37	15	緩傾	平坦	自然	土師器坏片4点・甕片16点・甕文土器片1点		
66	E2et	N-5°-W	円 形	0.42×0.36	32	外傾	平坦	自然			
67	F3et	N-21°-E	不整円形	0.93×0.82	40	緩傾	平坦	自然	土師器片2点		
68	F2et	N-51°-W	円 形	0.46×0.42	16	緩傾	平坦	自然	土師器片1点		
69	E3et	N-0°-	不整円形	1.90×1.87	40	緩傾	亞状	人為	土師器片1点		
70	E3et	N-17°-W	椭 圓 形	0.84×0.72	25	緩傾	亞状	人為	土師器片1点		
71	F2et	N-13°-W	不整円形	0.42×0.37	14	緩傾	平坦	自然	土師器片1点・土師器坏片9点・甕片14点		
72	D3et	N-9°-W	椭 圓 形	0.56×0.45	9	緩傾	亞状	人為	土師器片2点		
73	E3et	N-30°-W	円 形	0.39×0.35	25	外傾	平坦	人為			
74	F2et	N-31°-W	椭 圓 形	0.77×0.59	10	緩傾	平坦	人為			
75	E3et	N-32°-E	不整円形	0.77×0.63	52	外傾	平坦	人為	土師器片25点		
76	F2et	N-42°-W	円 形	1.18×1.11	25	垂直	平坦	自然	甕文土器片3点・土師器片136点		
77	E3et	N-77°-E	円 形	0.77×0.68	32	緩傾	平坦	人為	土師器坏片7点・甕片30点		
78	F1et	N-59°-E	円 形	0.78×0.43	33	外傾	亞状	人為	土師器坏片1点・甕1点		
79	E1et	N-3°-E	椭 圓 形	2.00×1.76	50	緩傾	亞状	自然			
80	F2et	N-10°-E	椭 圓 形	0.78×0.72	34	緩傾	亞状	自然			
81	F2et	N-23°-W	椭 圓 形	1.52×1.10	15	緩傾	平坦	人為	土師器坏1点		

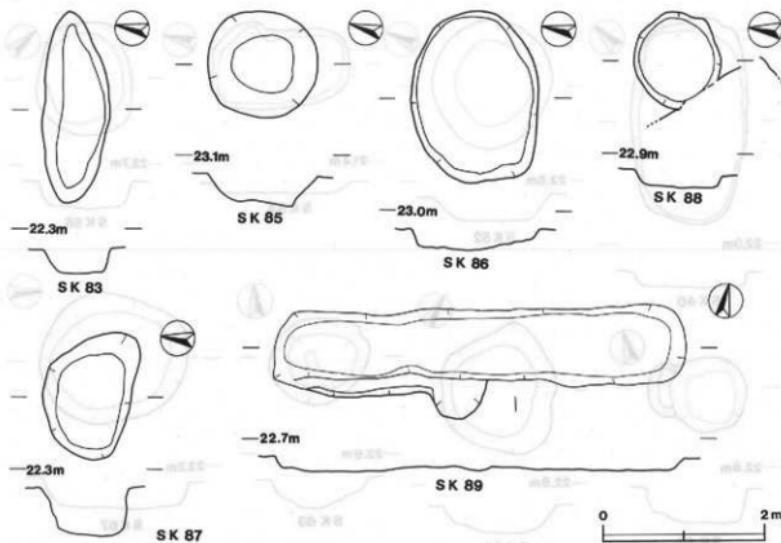
土坑 番号	位 置	長 径 方 向 (長 軸 方 向)	平 面 形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長 径 (m)	深 さ (m)					
82	E2 _{st}	N-68°-W	円 形	0.68×0.62	44	緩傾	凹状	人為		
83	E2 _{st}	N-74°-E	不 整 形	1.20×0.40	32	緩傾	平坦	自然	土師器壊片34点	
84	F1 _{tr}	N-30°-E	椭 圓 形	1.70×1.37	235	外傾	平坦	人為		井戸か?
85	F1 _{tr}	N-37°-E	円 形	0.70×0.68	37	緩傾	凹状	人為		
86	F2 _{tr}	N-55°-E	椭 圓 形	1.06×0.81	25	緩傾	凹状	人為		
87	F3 _{tr}	N-66°-W	椭 圓 形	0.81×0.56	60	外傾	平坦	人為		
88	F2 _{tr}	N-62°-E	円 形	1.17×1.10	23	外傾	平坦	自然	土師器壊片7点・裏片22点	
89	G2 _{st}	N-81°-E	椭 圓 形	2.56×0.43	20	外傾	平坦	自然		
90	F2 _{st}	N-3°-E	円 形	0.45×0.31	32	外傾	凹状	人為		
91	F2 _{st}	N-27°-E	円 形	0.46×0.45	11	緩傾	平坦	人為		
92	F3 _{st}	N-10°-W	円 形	0.44×0.40	27	緩傾	平坦	人為		
93	G2 _{st}	N-17°-E	不 整 形	1.73×0.79	31	緩傾	凹凸	人為	馬齒	
94	F2 _{st}	N-39°-W	不 整 形	0.55×0.44	11	外傾	平坦	人為		
95	E1 _{st}	N-34°-W	不整椭円形	1.82×1.03	46	緩傾	凹凸	人為	須恵器壊2点・須恵器片21点・馬齒	44号住→本跡



第166図 土坑実測図(1)



第167図 土坑実測図(2)



第168図 土坑実測図(3)

4 炭焼窯跡

当遺跡から、炭焼窯跡1基を確認した。

第1号炭焼窯跡（第169図）

位置 調査区中央部西端、D10区。

規模と平面形 全長2.82m、最大幅2.14m

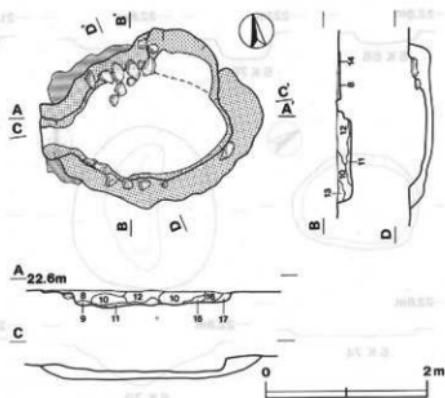
の梢円形である。断面は「U」字形である。

主軸方向 N-90°-E

壁 深さは15~20cmで、外傾して立ち上がる。約20cmの厚さで粘土を張り、壁面の一部は礫によって補強されている。壁面は熱を受け硬化している。

炭化室 底面はほぼ平坦で、焚口部付近はわずかに高くなる。窯底は、熱を受けて約10cmの厚さまで赤変硬化している。

焚口部 幅20cm、長さ30cmの細い溝状である。



第169図 第1号炭焼窯跡実測図

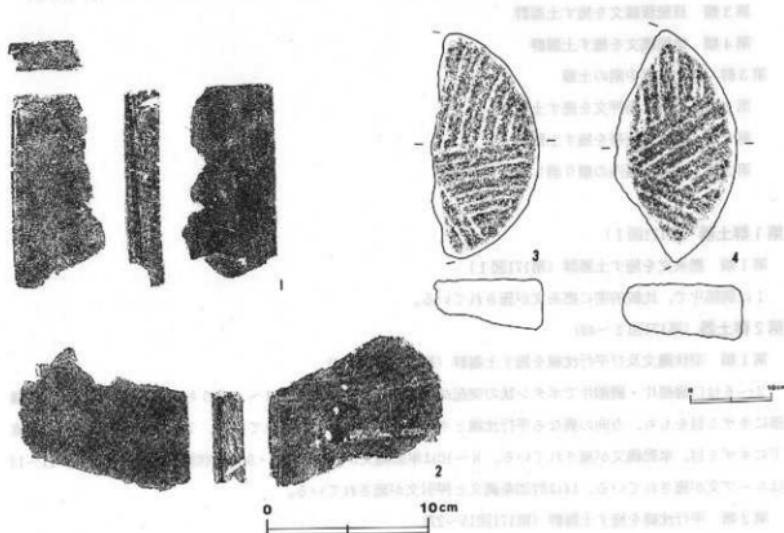
煙道部 奥壁中央部に位置し、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 10層からなる。全体的に焼土ブロック、炭化物を含む赤褐色土が堆積しており、天井部の崩落による堆積と思われる。

土層解説	1 明赤褐色	燒土粒子多量、燒土小ブロック少量、炭化物・炭化粒 子微量	6 明赤褐色	燒土粒子中量、燒土小ブロック少量、炭化物・炭化粒 子微量
2 赤 色	燒土粒子多量、炭化粒子微量	7 明赤褐色	ローム粒子多量、燒土粒子少量	
3 暗赤褐色	燒土小ブロック・燒土粒子・炭化粒子少量、焼けた繩 子を含む。	8 暗赤褐色	炭化物中量、燒土粒子・炭化粒子少量	
4 暗赤褐色	燒土粒子・炭化物少量、炭化粒子微量	9 赤 色	燒土粒子中量、燒土小ブロック少量、焼けた繩子を含む。	
5 暗赤褐色	燒土小ブロック中量、燒土粒子・炭化物少量、炭化粒 子微量	10 赤 色	燒土粒子多量、燒土小ブロック・炭化物・炭化粒子微量	

遺物 本跡からは、瓦片が出土している。天井部の崩落土と共に出土していることから、この瓦片は天井部の補強材として使われていたものと思われる。

所見 本跡の焚口部の前庭部は長径1.50m、短径1.20mの範囲で硬化面が見られることや壁の硬化状況から、使用頻度は高かったと思われる。時期は遺構の形態から、近世以降と考えられる。



第170図 第1号炭焼窯跡出土遺物実測図

（左）瓦（右）石白の転用

第1号炭焼窯跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第170図1	瓦	(12.5)	(6.8)	2.0	185.3	天井崩落土内	T1 PL54 凸面にはなれ砂痕
2	瓦	(11.7)	(9.4)	2.2	180.9	天井崩落土内	T2 PL54 凸面にはなれ砂痕
3	石	28.2	(13.2)	6.2	3539.7		Q87 石白の転用
4	石	28.6	(15.4)	7.3	4372.5		Q88 石白の転用

（左）瓦（右）石白の転用

5 遺構外出土遺物

当遺跡の古墳時代、奈良・平安時代の遺構に混入して出土した縄文土器や石器、試掘時のグリット調査、遺構確認中に出土した遺物を本項では拓影図、実測図及び一覧表で掲載する。

(1) 縄文土器

当遺跡から出土した遺物は縄文時代前期が主体であるが、早期・中期の土器片も少量出土している。これらの中には以下のように分類した。

第1群 縄文時代早期の土器

第1類 燃糸文を施す土器群

第2群 縄文時代前期の土器

第1類 羽状縄文及び平行沈線を施す土器群

第2類 平行沈線を施す土器群

第3類 貝殻腹縁文を施す土器群

第4類 単節縄文を施す土器群

第3群 縄文時代中期の土器

第1類 隆線と角押文を施す土器群

第2類 縄文と隆帶を施す土器群

第3類 沈線区画内の磨り消しを施す土器群

第1群土器 (第171図1)

第1類 燃糸文を施す土器群 (第171図1)

1は胴部片で、比較的密に燃糸文が施されている。

第2群土器 (第171図2~49)

第1類 羽状縄文及び平行沈線を施す土器群 (第171図2~14)

2~6は口縁部・胴部片でボタン状の突起が貼り付けられている。2~4はうちそぎ状の口唇部で、口縁部にキザミ目をもち、方向の異なる平行沈線とキザミ目で文様が構成されている。7は口縁部片で、口縁部直下にキザミ目、単節縄文が施されている。8~10は単節縄文が施され、8・9は羽状構成をとっている。11~13はループ文が施されている。14は附加条縄文と押引文が施されている。

第2類 平行沈線を施す土器群 (第171図15~27)

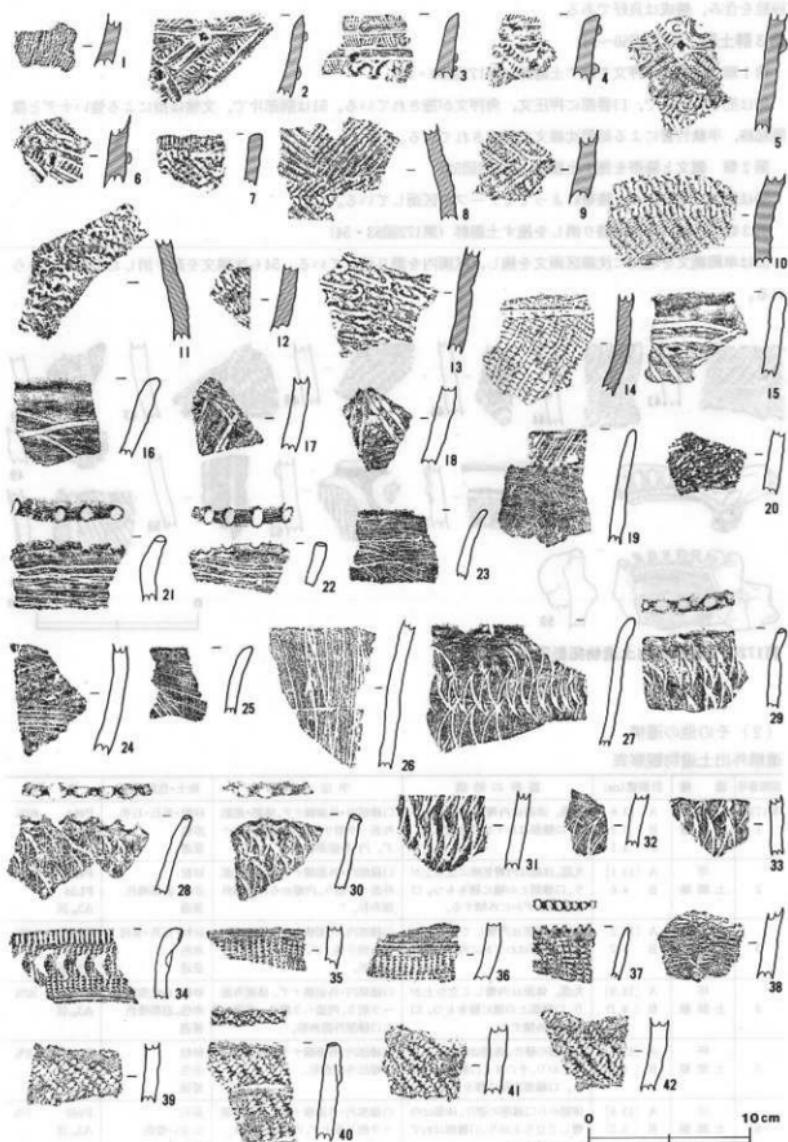
15~18の口縁部片・胴部片には半截竹管による沈線文、19の口縁部片には口縁部直下に斜位のキザミ目、20の胴部片には刺突文、21・22の口縁部片は平行沈線が施され、口唇部には棒状工具で押圧されている。23~25の口縁部片・胴部片は多方向の沈線が施されている。26の胴部片は縦方向に沈線が施されている。

第3類 貝殻腹縁文を施す土器群 (第171図27~38)

27~33は貝殻波状文が施され、28~30の口唇部は棒状工具により押圧されている。34は口縁部直下に縦位のキザミ目、腹縁圧痕文が施されている。35・36は胴部片で、34と同一固体と思われる。37の口縁部片は口唇部に棒状工具による押圧。口縁部に押引文が施されている。38は腹縁圧痕文が施された胴部片である。

第4類 単節縄文を施す土器群 (第171・172図39~49)

39~49は単節縄文が施されており、40は折り返し口縁で、口唇部に単節縄文が施されている。胎土に長石・



第171図 造機外出土遺物拓影図(1)

砂粒を含み、焼成は良好である。

第3群土器 (第172図50~54)

第1類 隆線と角押文を施す土器群 (第172図50・51)

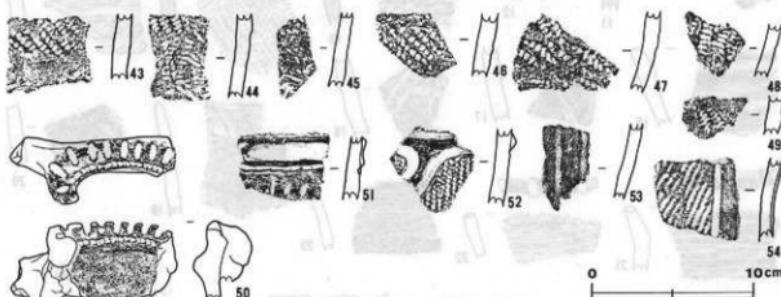
50は把手の部分で、口唇部に押圧文、角押文が施されている。51は肩部片で、文様は指による強いナデと微隆起線、半截竹管による結節沈線文で構成されている。

第2類 縄文と隆帯を施す土器群 (第172図52)

50は繩文を地文とし、隆帯によってモチーフを区画している。

第3類 沈線区画内の磨り消しを施す土器群 (第172図53・54)

53は単節縄文を地文に沈線区画文を施し、区画内を磨り消している。54も沈線文を磨り消した懸垂文がみられる。

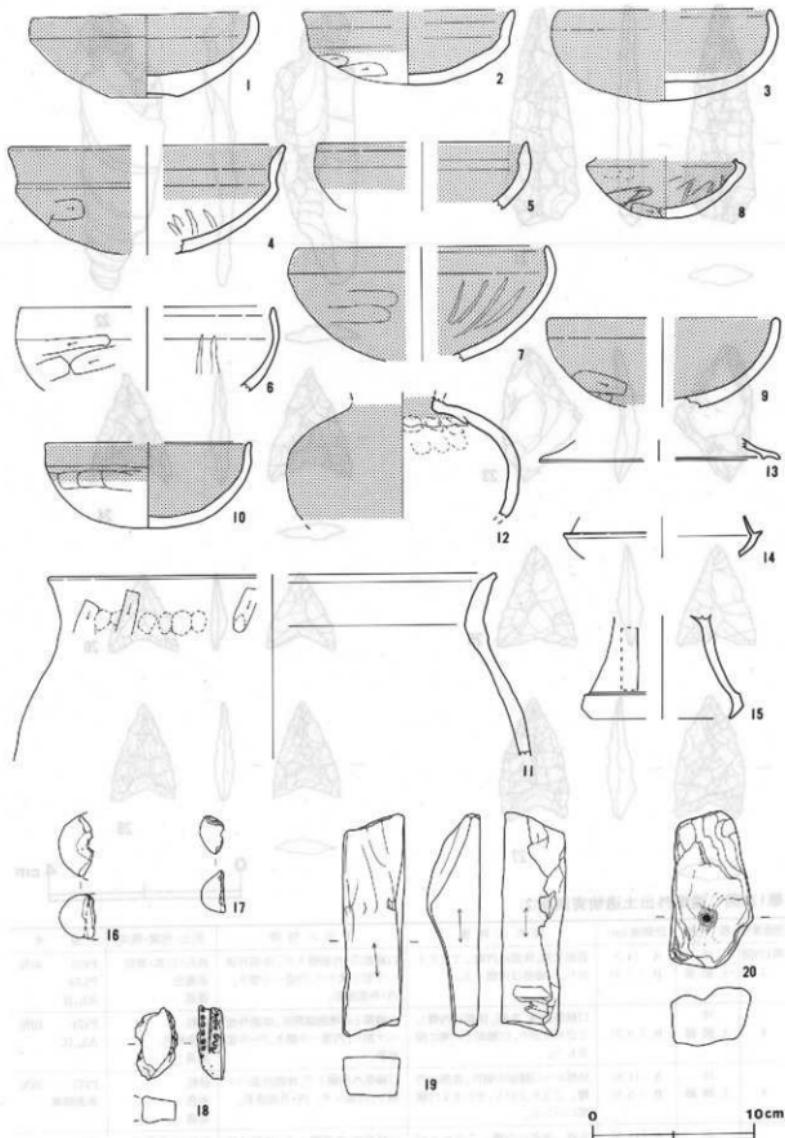


第172図 造構外出土遺物拓影図(2)

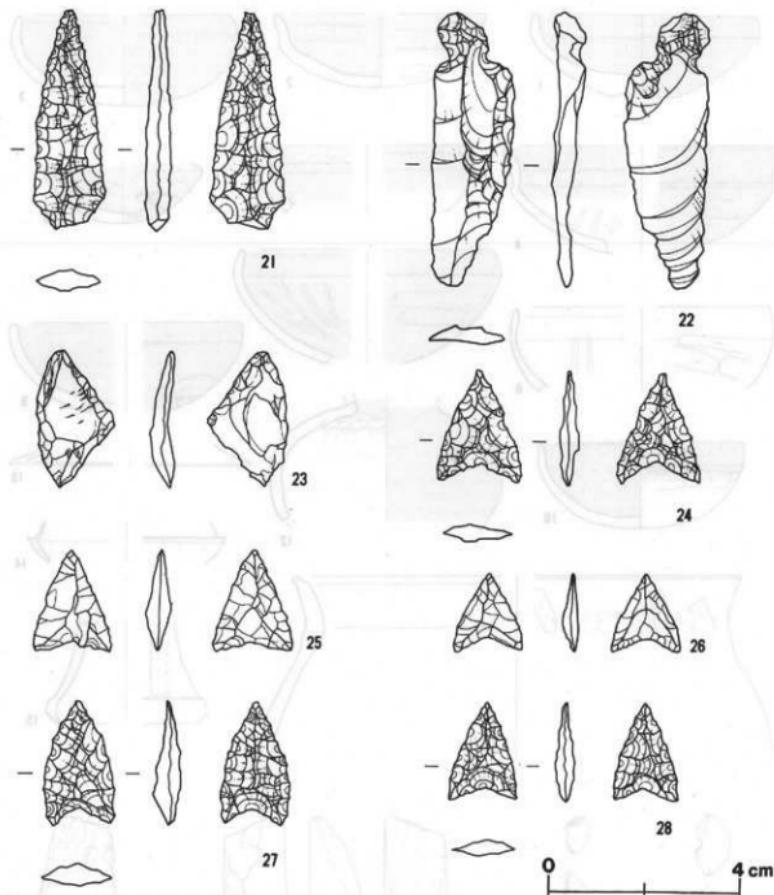
(2) その他の遺構

造構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏土器	A 13.8	平底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面ヘラ削り後ナデ。体部外面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤色 普通	P464 80% PL54 A3 _u 区
		B 5.2				
		C 4.1				
2	坏土器	A [13.1]	丸底。体部は内彫意味で立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面ヘラ削り。内面から口縁部外面赤彩。	砂粒 赤色 底部褐色 普通	P465 50% PL54 A3 _u 区
		B 4.6				
3	坏土器	A [13.2]	丸底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母 赤色 普通	P466 50% PL54 A3 _u 区
		B 5.7				
4	坏土器	A [16.9]	丸底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き。内面から口縁部外面赤彩。	砂粒・白色微粒 赤色、底部橙色 普通	P467 30% A3 _u 区
		B (6.7)				
5	坏土器	A [13.0]	口縁部の破片。体部は内彫して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁部内面に棱をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。内面から口縁部外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P468 5% A3 _u 区
		B (4.2)				
6	坏土器	A [15.6]	体部から口縁部の破片。体部は内彫して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ヘラ磨き。	長石 にぶい褐色 普通	P469 5% A3 _u 区
		B (5.2)				



第173図 遺構外出土遺物実測図(1)



第174図 遺構外出土遺物実測図(2)

同様番号	器種	計測値(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第173回 7	坏 土 師 器	A 14.2 B (7.1)	底部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ヘラ磨き。 内・外面部赤彩。	長石・石英・霞母 赤褐色 普通	P473 40% PL54 A3 _a 区
8	坏 土 師 器	B (3.7)	口縁部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に段をもつ。	口縁部との境指頭押圧。体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き。 内・外面部赤彩。	砂粒 明赤褐色 普通	P474 20% A3 _a 区
9	坏 土 師 器	A [14.6] B (5.6)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。 内・外面部赤彩。	砂粒 赤色 普通	P475 20% 表面採集
10	坏 土 劍 器	A [13.0] B (5.3)	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に段をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面削壓。内面から口縁部外面赤彩。	砂粒・白色微粒 橙色 普通	P476 30% Z3 _a 区

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第173回 11	甕 土器	A [27.9] B (11.4)	体部上位から口縁部の破片。体部はわずかに内側して立ち上がる。口縁部は外側する。	口縁部内・外面横ナデ。頭部外面指頭押圧後へク削り。体部内面ナデ。	砂粒・白色微粒 にぼい黄褐色 普通	P472 10% A3 ₄₁ 区
12	培 土器	B (7.6)	底部・口縁部欠損。体部は内側して立ち上がる。体部上位に最大径をもち、肩が盛る。	体部外面ナデ。頭部に粘土接合痕、内面指頭押圧。頭部内面から体部外面赤影。	砂粒・黄石 赤褐色 普通	PL471 60% PL54 Z3 ₄₁ 区
13	甕 須恵器	A [15.0] B (3.0)	口縁部の破片。内面にかえりが付く。	口縁部内・外面ロクロナデ。	管母・白色微粒 灰黄色 普通	P327 10% 表面採集
14	环 須恵器	B (2.6)	体部から受部の破片。体部は内側して立ち上がり、受部にいたる。受部は上方方に伸び、端部はシャープである。口縁部は内側する。	内面ロクロナデ。体部外周回転へク削り。	長石 灰色 良好	P480 5% PL54 表面採集
15	高 环 須恵器	B (6.4) D [8.6]	脚部の破片。脚部は「八」の字状に緩やかに外反する。脚部受部は「く」の字状に内側に屈曲する。長方形の三方透かしをもつ。	外面ロクロナデ。内面自然釉。	長石 灰色 良好	P479 5% 表面採集

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第173回 16	土玉	3.8	—	2.9	0.8	18.7	表面採集	DP 9 PL54 破片
17	土玉	2.7	—	1.6	—	5.9	表面採集	DP10 PL54 破片
18	土製乳狀耳飾り	[3.0]	[1.7]	1.1	—	4.9	第48号住居跡覆土	DP 6 PL54 破片
19	磁石	13.9	3.9	2.5	—	210.3	表面採集	Q92 PL56 褐灰岩
20	凹み石	9.8	5.2	3.5	—	252.9	表面採集	Q93 霽母片岩
第174回 21	有舌尖頭器	4.6	1.5	0.7	—	3.4	表面採集	Q90 PL57 貝岩
22	石匙	1.7	5.7	0.8	—	4.1	表面採集	Q71 PL57 貝岩
23	剣	2.8	1.7	0.6	—	1.7	表面採集	Q 2 PL57 貝岩
24	石鏡	2.4	1.8	0.5	—	0.9	第48号住居跡覆土	Q56 PL57 チャート
25	石鏡	2.1	1.7	0.5	—	0.8	第17号住居跡覆土	Q21 PL57 貝岩
26	石鏡	1.6	1.4	0.4	—	0.4	第21号住居跡覆土	Q24 PL57 チャート
27	石鏡	2.1	1.4	0.4	—	0.7	第38号住居跡覆土	Q82 PL57 チャート
28	石鏡	2.6	1.6	0.6	—	1.4	表面採集	Q89 PL57 チャート

第4節 まとめ

今回の調査で確認した遺構は、竪穴住居跡55軒、竪穴遺構11軒、土坑94基である。馬場遺跡の主体となる時期は古墳時代中期末から後期であり、竪穴住居跡50軒、竪穴遺構11軒がこれにあたる。その他は縄文時代前期前半に属する住居跡2軒、土坑1基、奈良・平安時代（8世紀前半）の住居跡4軒である。

馬場遺跡の主体となる古墳時代中期末から古墳時代後期の住居跡形態は多様性があり、特に、小型住居跡には通常の居住を目的とした住居とは考えにくいものがあった。そこで、ここではこれらの小型住居跡と竪穴遺構について、古墳時代中期末から後期の集落変遷と土器様相にふれてまとめてとする。

1 小型住居跡と竪穴遺構について

当遺跡の竪穴住居跡及び竪穴遺構は、主柱穴・出入り口ピット・貯蔵穴・炉・間仕切溝等の内部施設を有する通常の大・中型住居跡（Aタイプ）、床面積が10m²前後の小型住居跡のうち、わずかに火を受けた程度の痕跡を残す炉を付設するだけで居住を目的とするには躊躇するもの（Bタイプ）、床面積に対して大型で複数の貯蔵穴をもつもの（Cタイプ）、そして内部施設を全くもたない竪穴遺構（Dタイプ）がみられる。

B～Dタイプの住居跡や竪穴遺構から出土する遺物の大部分は破片ではあるが、土師器甕や瓶である。これらには煤が付着しているものも多い。Bタイプのように炉があり使用されていない状態を示しているにもかかわらず煤が付着しているということは、Aタイプの住居で煮炊きをして、Bタイプの住居を倉庫の役割としていたことを連想させる。あるいは、Bタイプの住居でも炉の使用頻度が高くブロック状に硬化している場合は、竈屋の建物として使用していた可能性も考えられる。⁽¹⁾ Cタイプについては床面積の半分以上を貯蔵穴が占めていることと炉をもたないということ、Dタイプはすべての遺構で床面の硬化が全くみられないうえに内部施設がないということから、居住目的ではなく倉庫的機能の建物と考えたい。

以上のことから、Aタイプの住居跡とB・C・Dタイプの住居跡及び竪穴遺構は一単位の構成として存在していたものとして、集落の変遷を検討した。

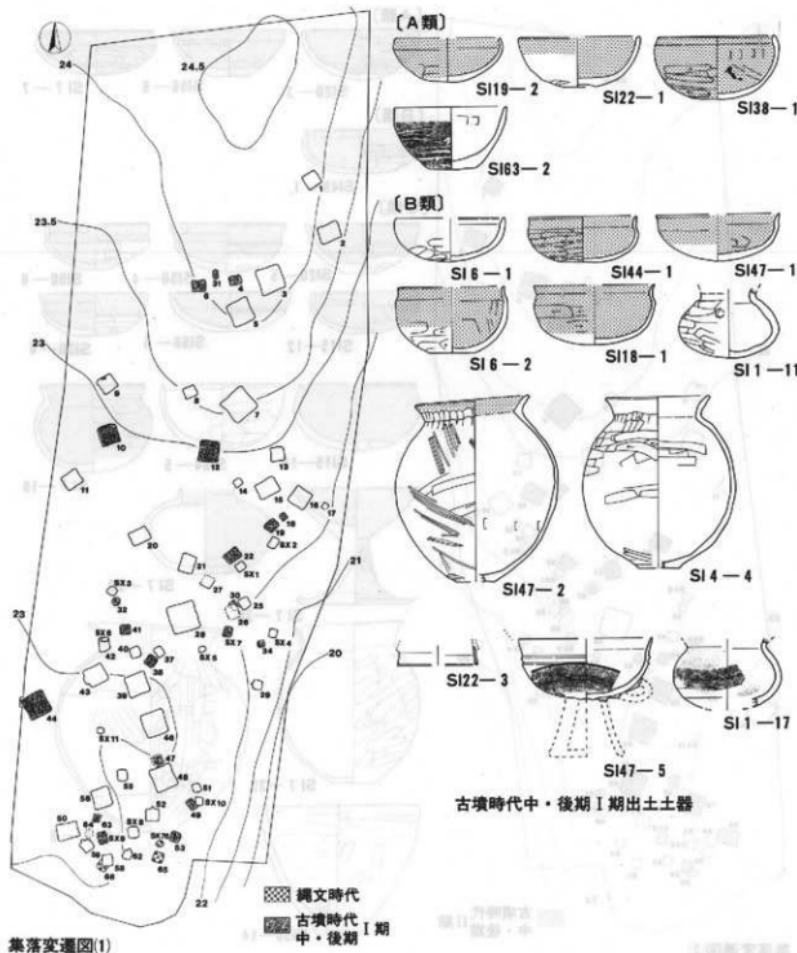
2 「古墳時代中期末から後期」の集落と出土遺物

当該期に属する竪穴住居跡50軒、竪穴遺構11軒のうち、竪穴住居跡49軒、竪穴遺構11軒からはいわゆる「和泉式期」から「鬼高式期」の過渡期の様相を呈する土師器やTK216型式、TK208型式、TK23型式、TK47型式を中心とする須恵器が出土しており、5世紀後葉から6世紀初頭の時期にあてはめることができる。これに続く遺構は、1、2型式の時間経過が考えられる第13号住居跡1軒である。これらを住居跡の形態や土師器の形態変化等から5期（I～V期）に細分することができる。なお、第3・5・7・11号竪穴遺構は出土遺物が極少量のため時期区分が困難なため細分から除いた。

1期

本期の遺構は第4、6、10、12、18、19、22、30、31、32、34、38、41、44、47、49、53及び63号住居跡と第7、9号竪穴遺構の20軒が挙げられる。

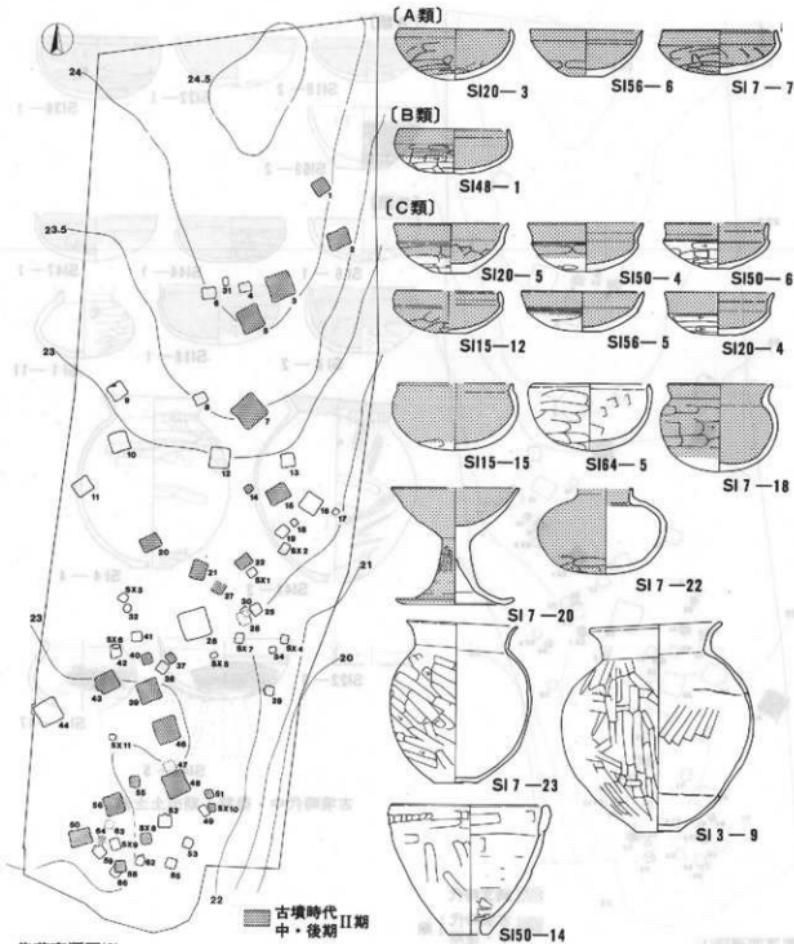
床面積が50m²を超える第44号住居跡や、35～45m²の第10・12号住居跡は、いわゆる大型住居跡であり、標高23mの台地上にN—7～29°—Wの主軸方向を示し、1軒一単位の構成で存在する。これらの住居には、主柱穴・出入り口ピット・貯蔵穴・炉・間仕切溝などの内部施設が存在するAタイプである。



古墳時代中・後期 I 期出土土器

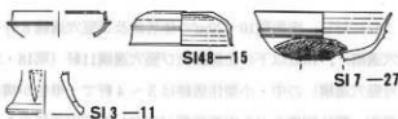
これに対し、床面積10～20m²の住居跡及び竪穴遺構8軒（第4・6・19・17・38・41・47号住居跡、第9号竪穴遺構）、10m²以下の住居跡及び竪穴遺構11軒（第18・30・31・32・34・49・53・63号住居跡、第3・4・9号竪穴遺構）の中・小型住居跡は3～4軒で一単位が構成される。3～4軒のうち1軒は通常の炉・柱穴・貯蔵穴・間仕切溝などの内部施設が存在した竪穴住居のAタイプに属するが、他の2～3軒はわずかに火を受けた程度の痕跡を残す炉を付設するだけのBタイプ、もしくはDタイプである。

これらの遺構から出土する土器は、土師器の壺・碗・高壺・甕・瓶、須恵器の壺蓋及び無蓋高壺である。土師器の壺・類は口縁部が直立またはわずかに内傾するもの（A類）、口縁部が短く外反し断面が三角形で内面



集落変遷図(2)

古墳時代中・後期II期出土土器



に稜を有するもの（B類）で構成され、A類には丸底と平底がある。本期のほとんどの坏・類は赤彩されている。土師器の壺は平底で突出気味であり、体部は球形状で口縁部は外反する。頸部から体部はヘラ削りがされ、なかには体部下位にヘラ磨きを残すものもみられる。これらは和泉式土器の伝統をひく土器群である。須恵器は陶邑編年TK216・208型式併行のものが出土しており、本期は5世紀後葉の時期をあてはめることができる。

II期

本期の遺構は第1, 2, 3, 5, 7, 14, 15, 20, 21, 27, 37, 39, 40, 43, 46, 48, 50, 51, 55, 56, 58及び64号住居跡と第1, 8, 11号竪穴遺構の25軒である。

床面積が50m²を超える大型住居跡5軒（第3・5・7・14・48号住居跡）、35～50m²の住居跡5軒（第15・39・43・50・56号住居跡）、20～35m²の住居跡4軒（第1・2・20・21号住居跡）、10～20m²の住居跡及び竪穴遺構5軒（第27・40・55・58号住居跡、第8号竪穴遺構）、10m²以下の小型住居跡及び竪穴遺構6軒（第14・37・51・64号住居跡、第1・10号竪穴遺構）である。本期はI期に比べると大型の住居が増え、規模・形態ともにさまざまな様相を呈する住居跡、竪穴遺構が出現する。中・大型住居は複数の炉、貯蔵穴、間仕切溝、出入り口施設を有しておりAタイプである。規模が10m²以下の小型住居及び竪穴遺構には中・大型住居にみられる内部施設は全く見られず、住居としたものなかにはI期と同様に火を受けた程度の痕跡を残す炉を付設するだけで住居を目的と判断するには躊躇するBタイプのものが多い。また、床面積10m²前後で小型住居跡として扱つたもののなかには炉・ピットなどの内部施設を有さず、床面積の割合に対して大型で複数の貯蔵穴をもつ第51, 55号住居跡のようなCタイプが出現する。これらさまざまの住居跡形態がみられる本期は、「中・大型住居跡+小型住居跡（炉の痕跡を残すもの）」、あるいは「中・大型住居跡+竪穴遺構または、複数の貯蔵穴をもつもの」の単位で構成される。

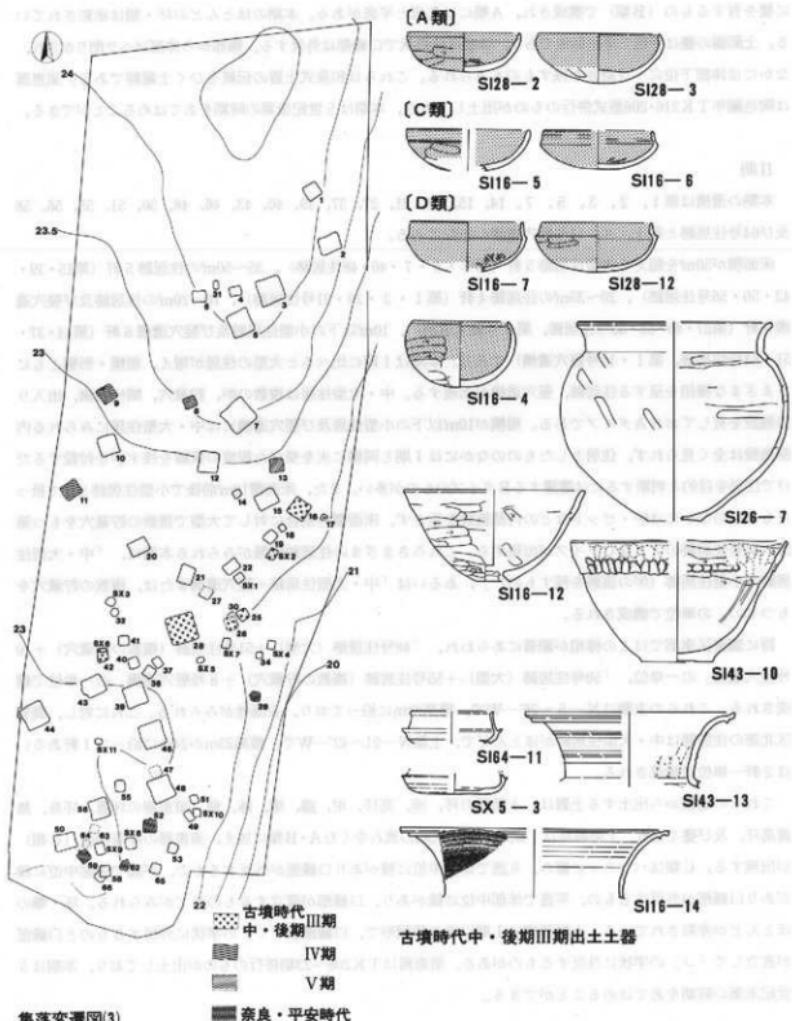
特に調査区南部ではこの様相が顕著にあらわれ、「48号住居跡（大型）+51号住居跡（複数の貯蔵穴）+10号竪穴遺構」の一単位、「50号住居跡（大型）+55号住居跡（複数の貯蔵穴）+8号竪穴遺構」の一単位で構成される。これらの主軸はN-5~26-Wで、標高23mに沿っており、企画性がみられる。これに対し、調査区北部の住居跡は中・大型住居跡がほとんどで、主軸N-21~42-Wで、標高23mか24mに沿って1軒あるいは2軒一単位で構成される。

これらの遺構から出土する土器は、土師器の壺、碗、高壺、壇、罐、甌、鉢、甑、須恵器の壺蓋、壺身、無蓋高壺、及び甌である。土師器壺はI期以来和泉式期の流れをくむA+B類に加え、須恵器の壺蓋模倣（C類）が出現する。C類はパラティに富み、丸底で体部中位に稜があり口縁部が外反するもの、平底で体部中位に稜があり口縁部が外反するもの、平底で体部中位に稜があり、口縁部が直立するものなどがみられる。坏・類のほとんどが赤彩されている。土師器甌はI期以来の球胴形で、口縁部が「く」の字状に外反するものと口縁部が直立して「コ」の字状に外反するものがある。須恵器はTK208～23期併行のものが出土しており、本期は5世紀末葉の時期をあてはめることができる。

III期

本期の遺構は第16, 17, 25, 26, 28, 42号住居跡と第2号竪穴遺構の7軒で、集落は調査区中央部の標高23mの台地上に3～4軒一単位で形成される。

集落形態はII期の流れを組んでおり、「16号住居跡（中型）+17号住居跡（炉の痕跡を残すもの）+2号竪穴遺構」、「28号住居跡（大型）+25・26号住居跡（複数の貯蔵跡）」の単位構成である。



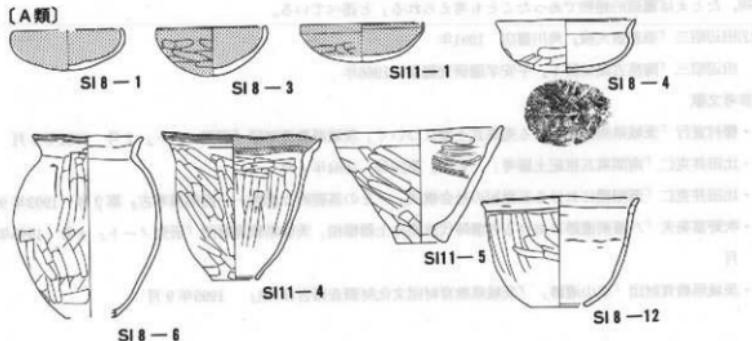
集落変遷図(3)
■ 古墳時代 III期
■ 中・後期
■ IV期
■ V期
■ 奈良・平安時代

これらの遺構から出土する土器は土師器壺、碗、甕、瓶及び須恵器壺身、甕である。土師器壺はA・B・C類は器高が低くなる。新たに須恵器壺身模倣壺(D類)が加わる。壺・碗類のほとんどが赤彩されている。土師器甕は口縁部が直立して「コ」の字状に外反し、体部径と口縁部径の差が小さいものである。瓶は鉢形である。須恵器はT K23~47期併行のものが出土しており、本期は5世紀末葉から6世紀初頭の時期をあてはめることができる。

IV期

本期の遺構は第8、9、及び11号住居跡の3軒で、調査区中央部東寄りに形成される。本期に初めて竈をもつ住居跡が出現するが、第9号住居跡の1軒のみで定着していない。竈は壁外への掘り込みではなく袖部も大きい。

これらの遺構から出土する土器は土師器の壺、碗、甕及び瓶である。壺は、A類はさらに器高が減じ偏平となるものと大型のものがある。甕は体部が長胴化し、瓶は砲弾型が出現する。時期は砲弾型の瓶が出土することや竈をもつということから本期は6世紀初頭から前葉の時期をあてはめることができる。



古墳時代中・後期II期出土土器

V期

本期の遺構は、竈をもつ第13号住居跡1軒である。前段階から本期の間に凡そ20~40年の空白期間がある。V期の土師器はC類の須恵器壺蓋模倣壺とD類の須恵器壺身模倣壺、偏平で口縁部が内傾するE類である。C、D類は器高を減じ偏平となり黒色処理がされる。

以上のように、集落はI期の5世紀後葉に出現し、I・II期を通じて盛衰し、VI・V期に衰退し再び舌状台地縁辺部に奈良・平安時代（8世紀前半）の第29号住居跡等が出現するまで断続する。I期には大型住居跡が3軒、II期には10軒、III期には1軒であり、第28、43、46、48、56号住居跡からは須恵器をはじめ石製模造品が出土しており、特に、第28、56号住居跡では石製模造品の原石加工施設を窺わせるような原石も出土している。これらの大型住居跡は集落の中心的役割を果たしていたものと考えられる。

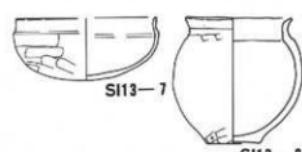
[C類]



[D類]



[E類]



古墳時代中・後期V期出土土器

なお、当遺跡の生産基盤は南東側の谷津と台地北部の空白地帯が考えられる。また、近接する東山遺跡は谷津を挟んだ台地上に立地し、同時期に同様な推移をしており、相互に何等かの関連が予測できる。

注

- (1)茨城県教育財団「東山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告101集』

報告者の松浦氏は、「Bタイプの住居跡からは甕等が多く出土していることから、火の使用を目的とする建物、たとえば竈屋的建物であったことも考えられる」と述べている。

- (2)田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園研究編集 1966年

参考文献

- ・樋村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」茨城県教育財団「研究ノート」2号 1992年7月
- ・比田井克仁「南関東五世紀土器考」『史館』第20号 1984年4月
- ・比田井克仁「西相模における五世紀の社会構成」—その基礎的な把握—『西相模考古』第2号 1993年9月
- ・吹野富美夫「八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相」茨城県教育財団「研究ノート」4号 1995年6月
- ・茨城県教育財団「東山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告101集』 1995年9月

第4章 行人田遺跡

第1節 遺跡の概要

行人田遺跡は、牛久市北西部の小野川左岸から北東方向に入り込む支谷によって挟まれた標高16~21mの舌状台地上に位置し、平安時代を中心とする縄文時代、古墳時代及び近世の複合遺跡である。現状は山林で、面積は6,270m²である。当遺跡の北東部200mには馬場遺跡がある。

今回の調査によって、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡5軒を確認した。そのうち、平安時代の住居跡1軒は、粘土採掘のための土坑24基に掘り込まれている。他の遺構としては、土坑31基、溝10条、近世の水田遺構1か所を確認した。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に20箱出土している。縄文時代の出土遺物は、早期から前期の縄文土器片、石器、ナイフ型石器、有舌尖頭器、搔器及び削器等である。古墳時代の出土遺物は、土師器の壺、甕、器台及び土製勾玉である。平安時代の遺物は、須恵器の壺、蓋、甕、瓶、土師器の甕及び灰釉陶器等である。

第2節 基本層序

調査区内の北西部台地上(B1b区)にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った。(第175図)

第1層 厚さ30cmの耕作土で、焼土粒子及び

ローム粒子を少量含む綿まりの弱い褐色土である。

第2層 厚さ10~20cmのハードロームへの漸移

層で、炭化物・焼土粒子及びローム小ブロックを含む明褐色土である。

第3層 厚さ20cmの明褐色のハードローム層で、

炭化粒子を少量含んでいる。

第4層 厚さ30cmの褐色のハードローム層で、

粘性と綿まりが強く、粘土粒子を少量含んでいる。

第5層 厚さ20cmの黄褐色の鉄分まじりの粘土

層で、極少量のローム粒子を含んでいる。

第6層 厚さ10cmの黄褐色粘土層で、砂粒を中

量含んでいる。

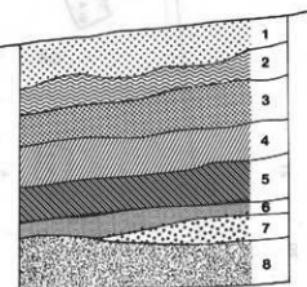
第7層 厚さ15cmの浅黄色の砂質層で、粘土粒子を多量に含んでいる。

第8層 厚さ30cmの鉄分を含んだ砂質層で、白色粘土小ブロックを中量含んでいる。

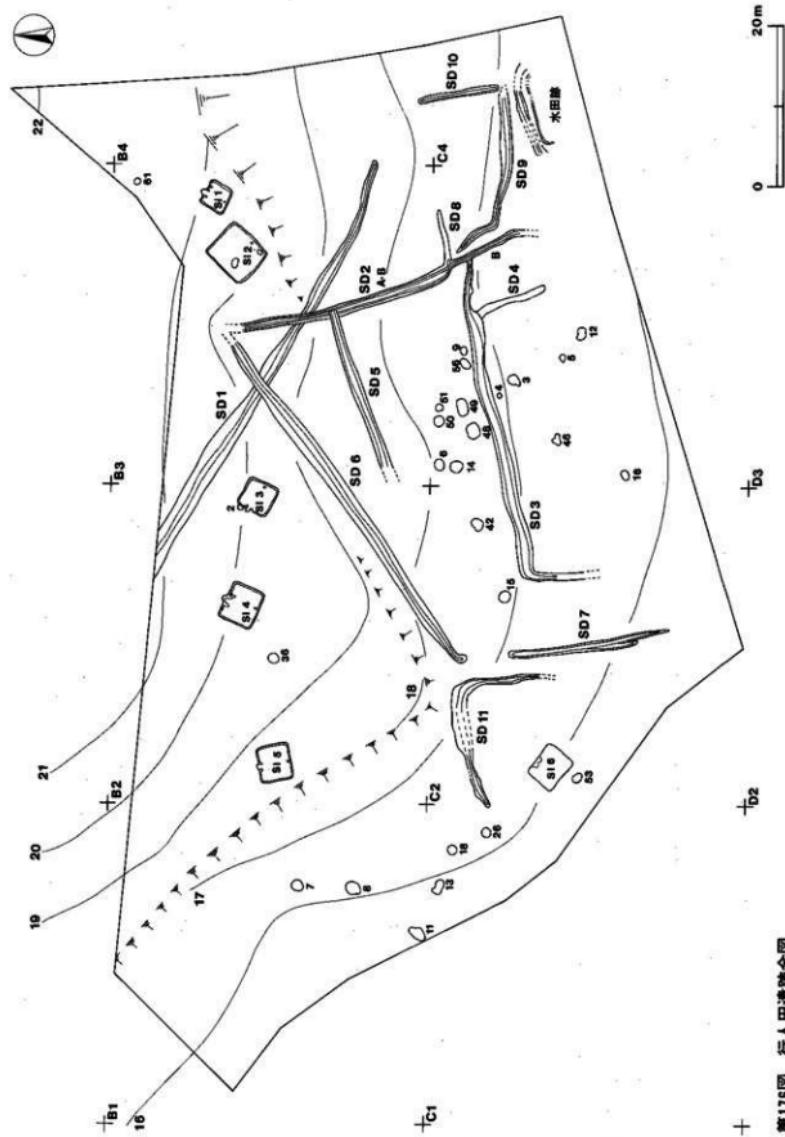
調査区域は、南西に向かい緩やかに下る傾斜地であるため、ソフトローム層が流失している部分が見られた。

竪穴住居跡は、第1層下面で確認でき、第4層まで掘り込んで構築している。

当遺跡の立地する台地は、表土から80cm程で粘土層になり、これは、常緑粘土層と思われる。



第175図 行人田遺跡基本土層図



第176圖 行人田造跡全圖

第3節 遺構と遺物

1 壁穴住居跡

今回の調査では、古墳時代の壁穴住居跡1軒、平安時代の壁穴住居跡5軒を確認した。以下、確認した6軒の壁穴住居跡とそこから出土した遺物について記載する。

(1) 古墳時代の住居跡

第2号住居跡(第177図)

位置 調査区北西部、B3a区。

規模と平面形 長軸6.03m、短軸5.37mの長方形である。

主軸方向 N-45°-W

壁 高は10~45cmで、垂直に立ち上がる。南コーナーから南西壁の一部は、耕作による搅乱を受けている。

壁溝 北東壁、南東壁の一部の壁下を巡っている。上幅7~20cm、深さ5cmで、断面は「U」字形である。

床 ほぼ平坦である。北東部はよく踏み固められているが、南西部は木の根の搅乱により残存状態が悪い。

ピット 南東壁際中央部に位置し、径22cmの円形で、深さ12cmの出入り口施設に伴うピットである。

貯藏穴 南コーナーに位置し、長軸0.65m、短軸0.58mの長方形で、深さ20cm、断面は箱形である。

貯藏穴土層解説

- | | | | | |
|---|---|---|----------------|------------|
| 1 | 褐 | 色 | ローム中ブロック・炭化物少量 | |
| 2 | 暗 | 青 | 色 | ローム小ブロック少量 |

炉 南西部に位置し、長径110cm、短径30cmの不整長楕円形の地床炉である。炉床は火熱を受け、厚さ7cm程度赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | | |
|---|---|---|---|-----------|
| 1 | 赤 | 褐 | 色 | 焼土小ブロック少量 |
|---|---|---|---|-----------|

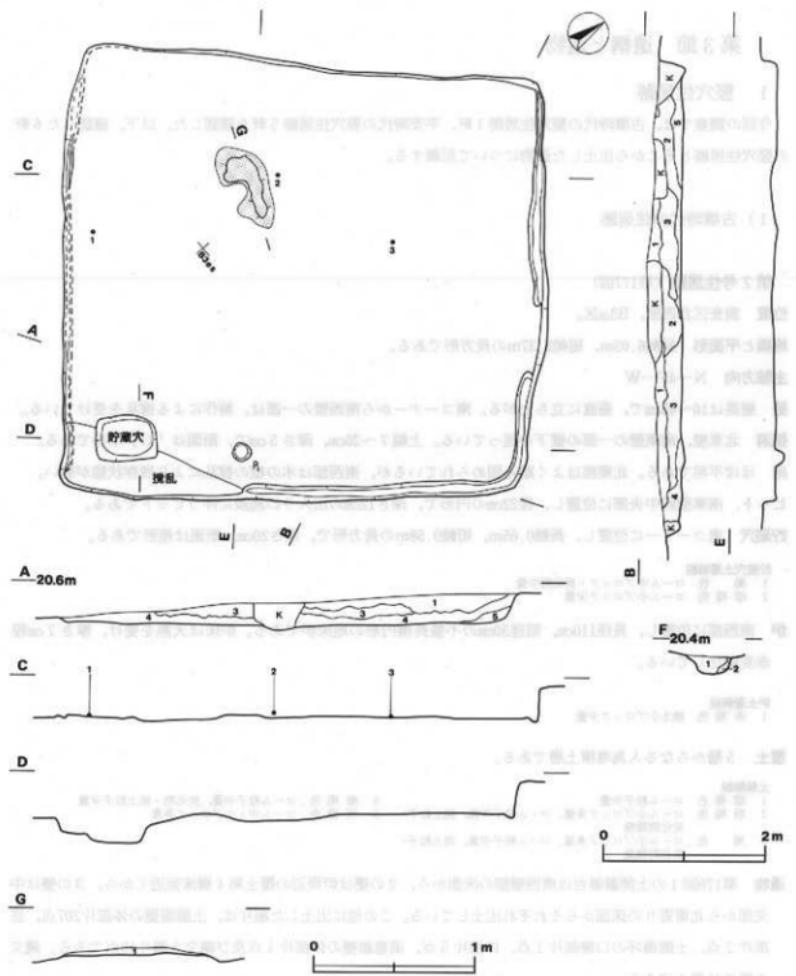
覆土 5層からなる人為堆積土層である。

土層解説

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|-------------------------------|-------------------------------|---|---|---|---|--------------------|
| 1 | 暗 | 褐 | 色 | ローム粒子少量 | 4 | 暗 | 褐 | 色 | ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子少量 |
| 2 | 暗 | 褐 | 色 | ローム小ブロック多量、ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量 | 5 | 明 | 褐 | 色 | ローム中・小ブロック多量 |
| 3 | 褐 | 色 | ローム小ブロック多量、ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量 | | | | | | |

遺物 第178図1の土師器器台は南西壁際の床面から、2の壺は炉周辺の覆土第4層床面近くから、3の甕は中央部から北東寄りの床面からそれぞれ出土している。この他に出土した細片は、土師器甕の体部片207点、底部片2点、土師器壺の口縁部片1点、体部片5点、須恵器甕の体部片1点及び繩文土器片19点である。繩文土器片は混入である。

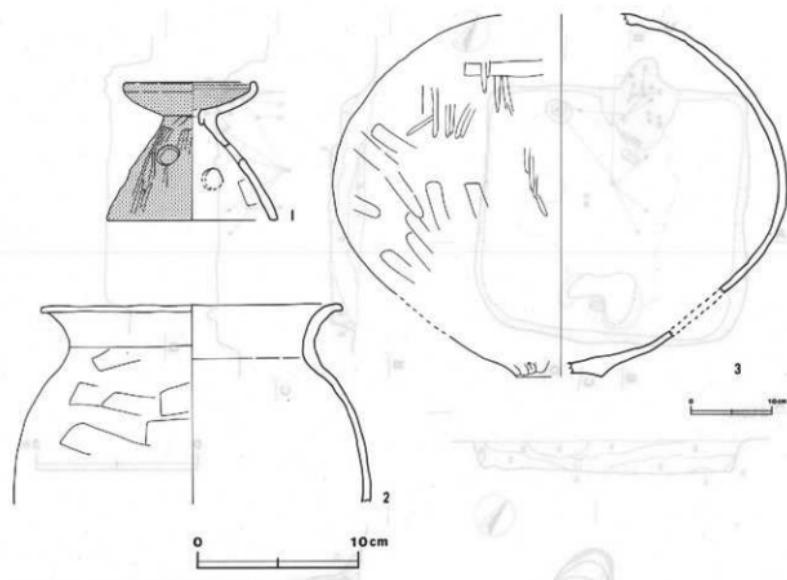
所見 本跡の時期は出土遺物から古墳時代前期と思われる。



第177図 第2号住居跡実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器 標	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・色調・焼成	備 考
1 土 器	器 台	A 8.2	脚部は「ハ」の字状に開き、易受部は内側して立ち上がる。器受部端部上方に突出する。脚部に6か所穿孔。	脚部外面ヘラ削り、脚部内部ヘラ削り。器受部内面から脚部外面彫形。	砂粒 明赤褐色 普通	P9 80% PL65 床面
	土 器	B 8.6				
	土 器	D 10.6				
2	土 器	A 18.8	体部上位から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がる。口縁部は「く」の字状に外反する。器壁は薄手。	口縁部内・外面・体部内面ハケ目調整。体部外面ヘラ削り。	長石 にぶい橙色 普通	P10 20% 覆土下層
	土 器	B (12.3)				



第178図 第2号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器 権	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徵	胎土・色調・焼成	備 考
第178図 3	甕 土 烧 罐	B [30.0] C [3.1]	口縁部欠損。平底。体部は球形状で、中位に最大径をもつ。	体部外側へラ削り後へラ磨き。内面ハケ目調整。	長石 にぶい褐色 普通	P11 30% PL65 床面

(2) 平安時代の住居跡

第1号住居跡(第179図)

位置 調査区北西部、B3d区。

規模と平面形 長軸3.28m、短軸3.16mのほぼ方形である。

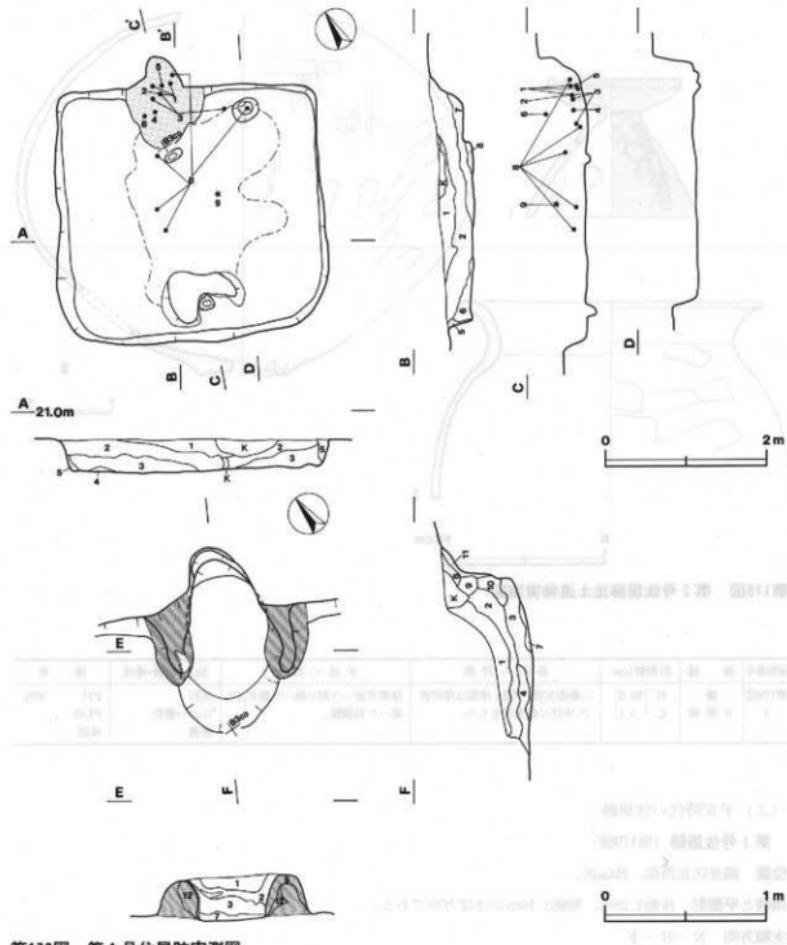
主軸方向 N-31°-E

壁 壁高26~50cmで、垂直に立ち上がる。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 南東壁際中央部から25cm内側に位置し、径20cmの円形で、深さ13cmの出入り口施設に伴うピットである。

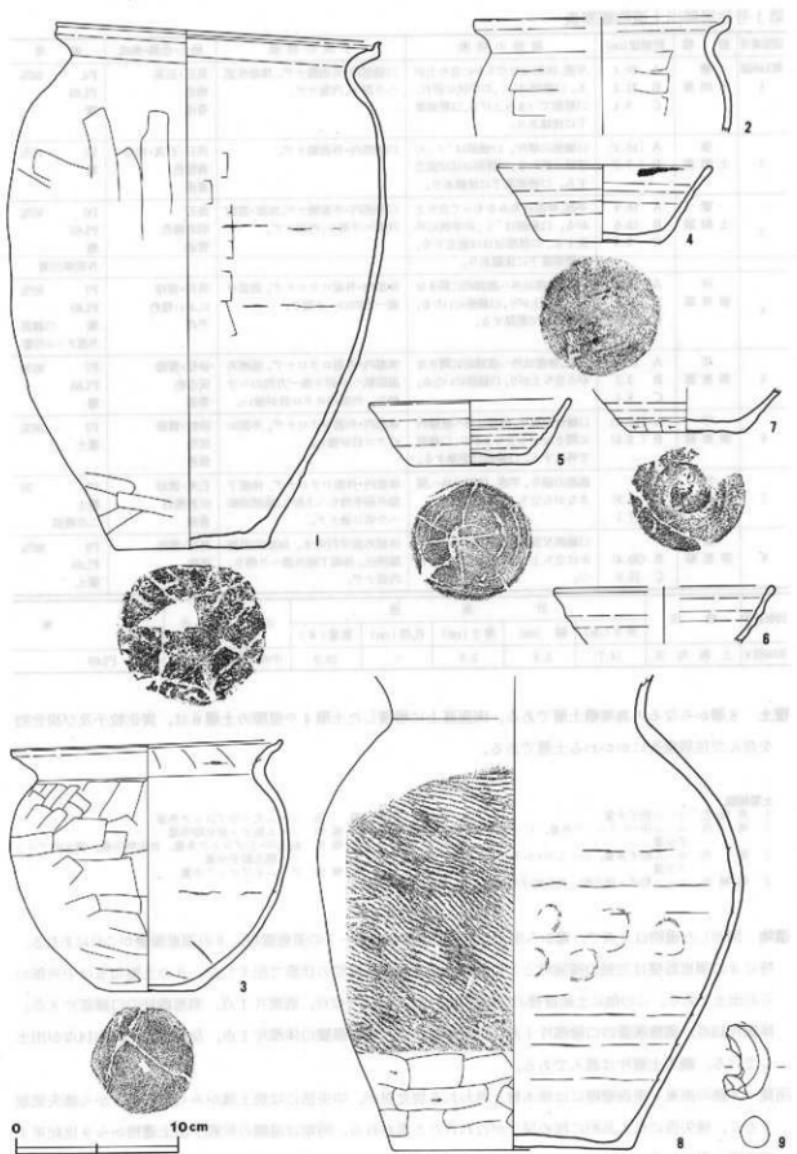
竈 北東壁中央部より西寄りに付設され、煙道から焚口部まで94cm、両袖幅40cm、壁外への掘り込みは40cmである。袖は芯材に白色粘土を用い、その周りは褐色土に砂粒を混ぜて構築している。左袖には補強材として、須恵器甕体部が使用されている。火床面は床面と一致し平坦である。煙道の平面形は「U」字形で、ほぼ垂直に立ち上がる。



第179図 第1号住居跡実測図

遺土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|--------|-----------------|
| 1 黄褐色 | 炭化物多量。焼土粒子少量 | 7 暗褐色 | 燒土粒子微量 |
| 2 黄褐色 | 燒土粒子・炭化粒子中量。燒土小ブロック少量 | 8 暗褐色 | 炭化物中量。燒土中ブロック少量 |
| 3 明褐色 | ローム小ブロック中量。燒土小ブロック・炭化粒子少量 | 9 暗褐色 | 炭化物中量。燒土粒子少量 |
| 4 黄褐色 | 燒土小ブロック・炭化粒子少量 | 10 明褐色 | 炭化物少量 |
| 5 灰褐色 | 燒土粒子微量 | 11 暗褐色 | 燒土小ブロック中量 |
| 6 黄褐色 | 燒土粒子微量 | | |



第180図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種 別	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第180回 1	棗 土 節 器	A [26.4] B 31.2 C 9.4	平底。体部はなだらかに立ち上がる。口縁部は「く」の字状に折れ、口唇部でこまみ上げる。口唇部直下に沈線あり。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側ヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英 橙色 普通	P4 50% PL65 電
	棗 土 節 器	A [16.2] B (7.2)	口縁部の破片。口縁部は「く」の字状に折れる。口唇部はほぼ直立する。口唇部直下に沈線あり。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・霞母 黄褐色 普通	P5 10% 電
	棗 土 節 器	A 16.9 B 15.6 C 6.3	平底。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部はほぼ直立する。口唇部直下に沈線あり。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外側ヘラ削り、内面ナデ。	長石 明赤褐色 普通	P6 95% PL65 電 外面保付着
4	坏 須 恵 器	A 13.1 B 4.8 C 7.6	平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部で肥厚する。	体部内・外面クロナデ。底部外側一方向のヘラ削り。	長石・霞母 ぶい・橙色 不良	P1 80% PL65 電 口縁部 外面タル付着
5	坏 須 恵 器	A 12.3 B 3.7 C 8.4	平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がり、口縁部にいたる。	体部内・外面クロナデ。底部外側回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り。内面のクロ口目が強い。	砂粒・霞母 灰白色 普通	P7 95% PL65 電
6	坏 須 恵 器	A [13.4] B (3.5)	口縁部の破片。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がり、口縁部で外反する。口縁部は肥厚する。	体部内・外面クロナデ。外側のロクロ口目が強い。	砂粒・霞母 灰色 普通	P2 20% 覆土
7	坏 須 恵 器	B (2.8) C 7.1	底部の破片。平底。体部は外へ開きながら立ち上がる。	体部内・外面クロナデ。体部下端外側手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後ナデ。	石英・霞母 灰黃褐色 普通	P3 30 覆土 二次焼成
8	棗 須 恵 器	B (30.4) C 15.0	口縁部欠損。平底。体部はなだらかに立ち上がり、中位で丸みをもつ。	体部外面平行叩き。体部内面指壓押圧。体部下端外側ヘラ削り、内面ナデ。	長石・霞母 灰色 不良	P8 60% PL65 覆土
第180回9	土 棗 勾 玉	(4.7)	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 孔径(cm) 重量(g)	計 測 値	出 土 地 点	備 考
				19.9		
				中央部覆土上層	DP1 PL65	

覆土 8層からなる人為堆積土層である。床面直上に堆積した土層4や壁際の土層6は、炭化粒子及び炭化物を含んだ住居焼失にかかる土層である。

土層解説

- | | |
|-----------------------------------|--|
| 1 黒 褐 色 ローム粒子少量 | 5 梅 色 ローム大・中ブロック多量 |
| 2 褐 色 ローム中・小ブロック多量、ローム粒子中量、焼土粒子少量 | 6 暗 褐 色 ローム粒子・炭化物中量 |
| 3 褐 色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、焼土粒子少量 | 7 広 褐 色 焼土中・小ブロック多量、炭化物中量。焼土中ブロック・焼土粒子少量 |
| 4 暗 褐 色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子中量 | 8 暗 褐 色 ローム小ブロック中量 |

遺物 図示した遺物は9点で、竈から出土したものが多く、4~7の須恵器坏、8の須恵器蓋がこれにあたる。特に8の須恵器蓋は左袖の補強材として使用されており、立位の状態で出土した。9の土製勾玉は中央部からの出土である。この他に土節器壺の口縁部片5点、体部片142点、底部片1点、須恵器坏の口縁部片8点、体部片15点、須恵器蓋の口縁部片1点、天井部片1点、須恵器蓋の体部片1点、及び縄文土器片14点が出土している。縄文土器片は混入である。

所見 本跡の南東・南西壁際には垂木材と思われる炭化材が、中央部には焼土塊がみられることから焼失家屋であり、焼失後には人為的に埋め戻しが行われたと思われる。時期は遺構の形態や出土遺物から9世紀第1四半期と思われる。

第3号住居跡（第181図）

位置 調査区北部中央、B2e区。

重複関係 本跡の竈煙道部北半分を第2号土坑に掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 一辺が4.20mの方形である。

主軸方向 N-66°-W

壁 壁高35~65cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁を除く全ての壁下を巡る。上幅10~20cm、深さ5cmで、断面は「U」字形である。

床 出入り口施設に伴うピットの周囲から竈焚口部にかけての部分が踏み固められている。

ピット 東壁中央部から約40cm東寄りに1か所。長径30cm、短径15cmの楕円形、深さ32cmの出入り口施設に伴うピットである。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------|
| 1 | 明褐色 | 燒土粒子・ローム粒子微量 |
| 2 | 明褐色 | 燒土粒子・ローム粒子微量 |
| 3 | 明褐色 | ローム小ブロック少量、燒土粒子微量 |
| 4 | 褐色 | ローム中ブロック多量、燒土粒子微量 |

竈 西壁中央部に付設されている。煙際の袖が一部遺残しているだけで残存状況はあまり良くない。煙道から焚口部まで75cm、両袖最大幅40cm、壁外への掘り込みは35cmである。火床及び燃焼部は5~10cmの厚さに焼けており、長期間使用されたものと思われる。煙道の平面形は「U」字形で、下半部は約30度、上半部は60cm程の傾きで立ち上がる。

竈土層解説

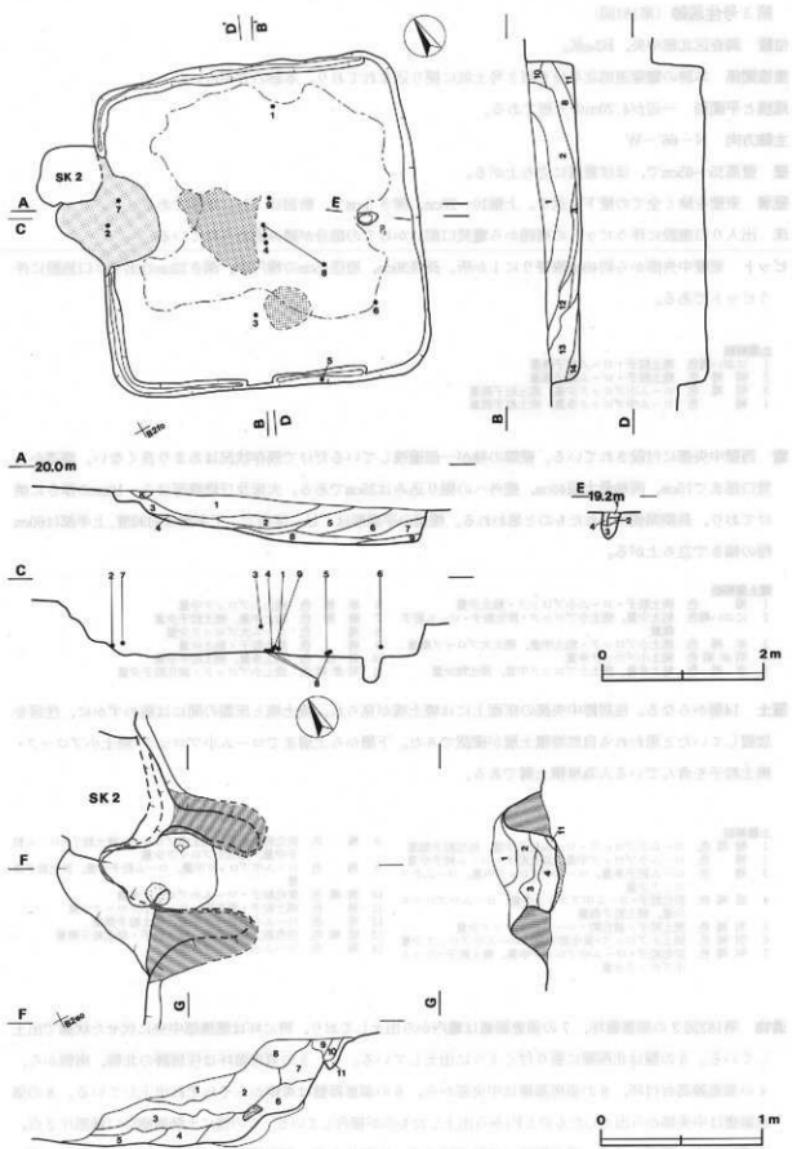
- | | | | | | |
|---|-------|-------------------------|----|------|----------------|
| 1 | 褐色 | 燒土粒子・ローム小ブロック・粘土少量 | 6 | 赤褐色 | 燒土小ブロック中量 |
| 2 | にぼい褐色 | 粘土少量、燒土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子 | 7 | 暗褐色 | 粘土中量、燒土粒子微量 |
| 3 | 赤褐色 | 燒土小ブロック・燒土中量、燒土大ブロック微量 | 8 | 褐色 | ローム大ブロック少量 |
| 4 | 明赤褐色 | 燒土小ブロック多量 | 9 | 褐色 | 燒土粒子・粘土少量 |
| 5 | 赤褐色 | 粘土多量、燒土小ブロック中量、炭化物少量 | 10 | 黄褐色 | 粘土多量、燒土粒子少量 |
| | | | 11 | 明赤褐色 | 燒土小ブロック・炭化粒子少量 |

覆土 14層からなる。住居跡中央部の床面上には焼土塊が見られ、焼土塊と床面の間には極わずかに、住居を放置していたと思われる自然堆積土層が確認できた。下層から上層までローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を含んでいる人為堆積土層である。

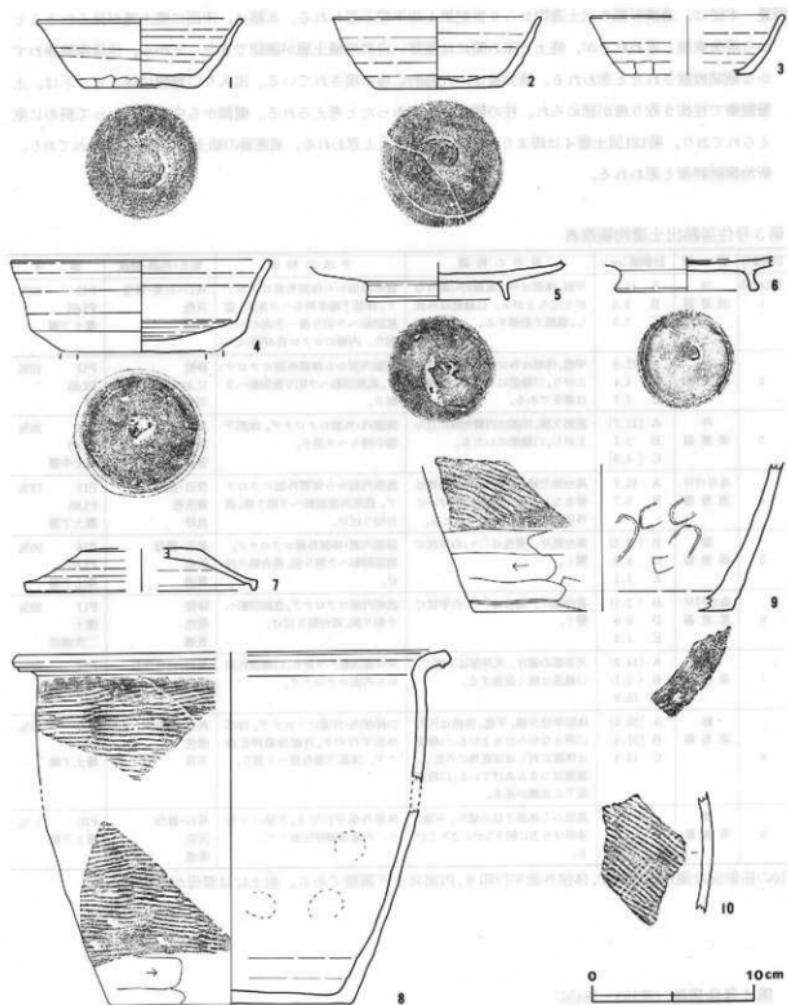
土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-----------------------------------|----|-----|---------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 8 | 褐色 | 炭化粒子多量、燒土中ブロック・燒土粒子・ローム粒子中量、燒土小ブロック少量 |
| 2 | 褐色 | ローム小ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子少量 | 9 | 褐色 | ローム中ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量 | 10 | 青褐色 | ローム小ブロック少量
燒土粒子・ローム小ブロック微量 |
| 4 | 暗褐色 | 炭化粒子・ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量、燒土粒子微量 | 11 | 褐色 | 燒土粒子・炭化物・ローム小ブロック微量 |
| 5 | 明褐色 | 燒土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量 | 12 | 褐色 | ローム小ブロック中量、燒土粒子微量 |
| 6 | 明褐色 | 燒土小ブロック・炭化物中量、ローム小ブロック微量 | 13 | 暗褐色 | 白色粘土粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 | 明褐色 | 炭化粒子・ローム中ブロック中量、燒土粒子・ローム小ブロック少量 | 14 | 褐色 | ローム小ブロック微量 |

遺物 第182図2の須恵器壺、7の須恵器蓋は竈内から出土しており、特に壺は燃焼部中央に伏せた状態で出土している。5の盤は北西壁に張り付くように出土している。1、3の須恵器壺は住居跡の北側、南側から、4の須恵器高台付壺、9の須恵器壺は中央部から、6の須恵器盤は東側からそれぞれ出土している。8の須恵器壺は中央部から出土したものとP1から出土したものが接合している。この他に土師器壺の口縁部片2点、体部片58点、底部片2点、須恵器壺の口縁部片2点、体部片3点、須恵器壺の口縁部片1点、体部片4点、繩文土器片11点が出土している。繩文土器片は混入である。



第181図 第3号住居跡実測図



第182図 第3号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、遺構形態や出土遺物から9世紀第1四半期と思われる。本跡は、床面に焼土塊が見られることから焼失家屋と思われるが、焼土と床の間に極薄い自然堆積土層が確認できたことから、住居廃絶後わずかな期間放置されたと思われる。焼失後は、人為的に埋め戻されている。出入り口施設に伴うピットは、土層観察で柱抜き取り痕が認められ、柱の幅は15cmであったと考えられる。壁側から中央に向かって斜めに据えられており、第181図土層4は縮まりがあり、埋めた土と思われる。須恵器の胎土には雲母が含まれており、新治窯跡群產と思われる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第182図 1	壊 須恵器	A 12.6	平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がる。口縁部は外反し、端部で肥厚する。	底部内面から体部外側ロクロナダ。底部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り。内面のロクロ目が認められる。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P12 80% PL65 覆土下層
		B 4.3				
		C 7.0				
2	壊 須恵器	A 12.8	平底。体部は外に開きながら立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部は薄手である。	底部内面から体部外側ロクロナダ。底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。	砂粒 により黄褐色 不良	P13 10% PL65 電
3	壊 須恵器	A [11.7]	底部欠損。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部にいたる。	体部内・外側ロクロナダ。体部下端手持ちヘラ削り。	長石・雲母 灰色 普通	P14 20% PL65 覆土中層
4	高台付壊 須恵器	A 15.9	高台部欠損。底部から体部の境は棗をなして折れ。体部はわずかに外反しながら口縁部にいたる。	底部内面から体部外側ロクロナダ。底部外側回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・雲母 黄色 良好	P15 70% PL65 覆土下層
5	壊 須恵器	B (2.2)	高台部片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部内面・体部外側ロクロナダ。底部回転ヘラ削り後。高台貼り付け。	長石・雲母 灰色 普通	P16 95% PL65 覆土下層
6	高台付壊 須恵器	D 8.8	高台部片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部内面ロクロナダ。底部回転ヘラ削り後。高台貼り付け。	砂粒 燒色 普通	P17 20% 覆土 二次焼成
7	壊 須恵器	E 1.1				
7	壊 須恵器	A [14.2]	天井部の破片。天井部は平頂で、口縁部は僅く屈曲する。	天井部回転ヘラ削り。口縁部外側から内面ロクロナダ。	長石・白色微粒 灰色 普通	P18 20% PL65 電
7	壊 須恵器	B (2.7)				
7	壊 須恵器	C 15.0				
8	鉢 須恵器	A [28.4]	体部中位欠損。平底。体部は外方に開きながら立ち上がる。口縁部は体部に対しほぼ直角に外反し、端部はつまみあげている。口唇部直下に沈織が返る。	口縁部内・外側ロクロナダ。体部外側平行叩き、内面指輪押圧後ナダ。体部下端外側ヘラ削り。	長石・雲母 橙色 不良	P19 15% PL66 覆土下層
9	壊 須恵器	B (9.1)	底部から体部下位の破片。平底。体部は外方に開きながら立ち上がる。	体部外側平行叩き、下端ヘラ削り。内面指輪押圧後ナダ。	長石・雲母 灰色 普通	P20 5% 覆土下層
		C [16.0]				

10の拓影図は須恵器裏片で、体部外側平行叩き、内面はナダ調整である。胎土には雲母が含まれる。

第4号住居跡（第183・184図）

位置 調査区北部中央、B2e7区。

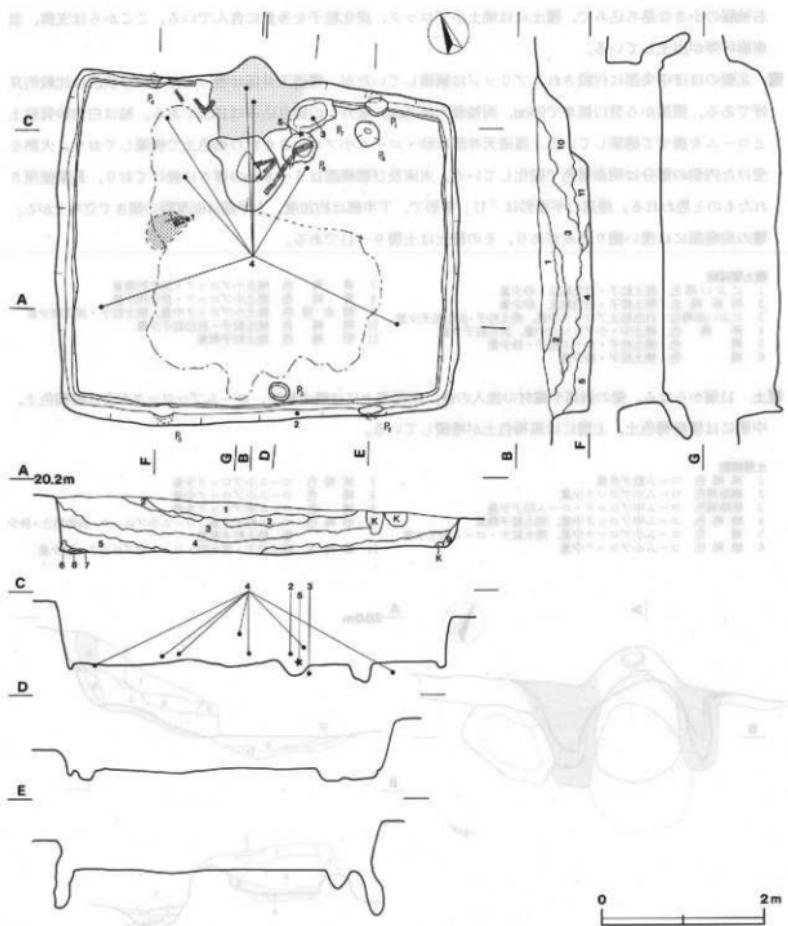
規模と平面形 長軸5.0m、短軸4.38mの長方形である。

主軸方向 N-21°-E

壁 壁高50~85cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を全周する。上幅10~15cm、深さ5~10cmで、断面は「U」字形である。

床 中央部が踏み固められている。



第183図 第4号住居跡実測図

ピット 8か所 (P₁～P₈)。P₁は径20cmの円形、深さ55cmである。P₂は長径30cm、短径10cmの楕円形で、深さは47cmである。P₃は長径25cm、短径15cmの楕円形で、深さは45cmである。P₄は長径18cm、短径10cmの楕円形で、深さは40cmである。P₁・P₄は北壁にそれぞれ105度・120度の角度で、P₂・P₃は南壁に110度・150度の角度で斜めに掘り込まれている壁柱穴である。P₅は南壁から15cm北側に位置する長径25cm、短径20cmの楕円形、深さ13cmの出入り口施設に伴うピットである。P₆は長径40cm・短径35cmの不整円形で、深さは17cm、P₈は径30cmの円形で、深さ20cm、いずれも性格は不明である。P₇は長径60cm、短径40cmの楕円形で、深さ25cmの竈

右袖脇の小さな落ち込みで、覆土には焼土小ブロック、炭化粒子を多量に含んでいる。ここからは支脚、須恵器壺等が出土している。

竈 北壁のほぼ中央部に付設され、ブリッジは崩落していたが、煙道天井部は残っており残存状況は比較的良好である。煙道から焚口部まで90cm、両袖最大幅55cm、壁外への掘り込みは15cmである。袖は白色砂質粘土とロームを混ぜて構築している。煙道天井部は砂・ローム小ブロックを含む褐色土で構築しており、火熱を受けた内側の部分は明赤褐色で硬化している。火床及び燃焼部は5~8cmの厚さに焼けており、長期使用されたものと思われる。煙道の平面形は「U」字形で、下半部は約20度、上半部は60度程度の傾きで立ち上がる。

竈の前庭部には浅い掘り込みがあり、その覆土は土層9~11である。

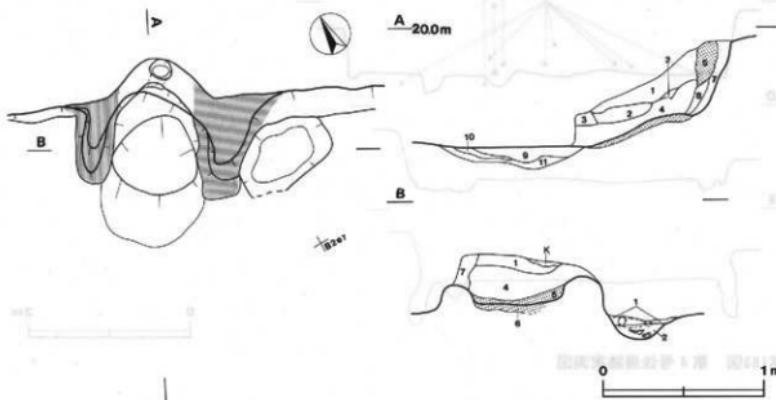
竈土層解説

	7	8	9	10	11
1 にぶい褐色	焼土粒子・白色粘土・砂少量				
2 明赤褐色	焼土粒子・白色粘土・砂少量	黄褐色	燒土小ブロック・炭化物少量		
3 にぶい赤褐色	白色粘土ブロック中量	暗赤褐色	燒土小ブロック中量	燒土粒子・炭化物少量	
4 赤褐色	焼土中・小ブロック中量	燒土粒子・炭化粒子少量	燒土粒子・炭化粒子少量	燒土粒子・炭化物少量	
5 紅褐色	焼土粒子・ローム粒子・砂少量				
6 褐色	焼土粒子・砂少量	明褐色	燒土粒子微量		

覆土 11層からなる。壁の崩落や竈材の流入の後、床面直上には焼土粒子、ローム小ブロックを含む暗褐色土、中層には極暗褐色土、上層には黒褐色土が堆積している。

土層解説

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
黒褐色	ローム粒子多量					黒褐色	ローム小ブロック少量			
赤褐色	ローム小ブロック少量					暗褐色	ローム小ブロック中量			
極暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子少量					褐色	ローム中ブロック多量			
褐色	ローム中ブロック中量	燒土粒子微量				褐色	ローム粒子中量	ローム小ブロック・白色粘土・砂少		
褐色	ローム小ブロック中量	燒土粒子・ローム粒子少量				暗褐色	燒土粒子微量	燒土粒子・炭化物・ローム中ブロック・砂少量		
暗褐色	ローム小ブロック中量					暗褐色	燒土粒子・炭化物			

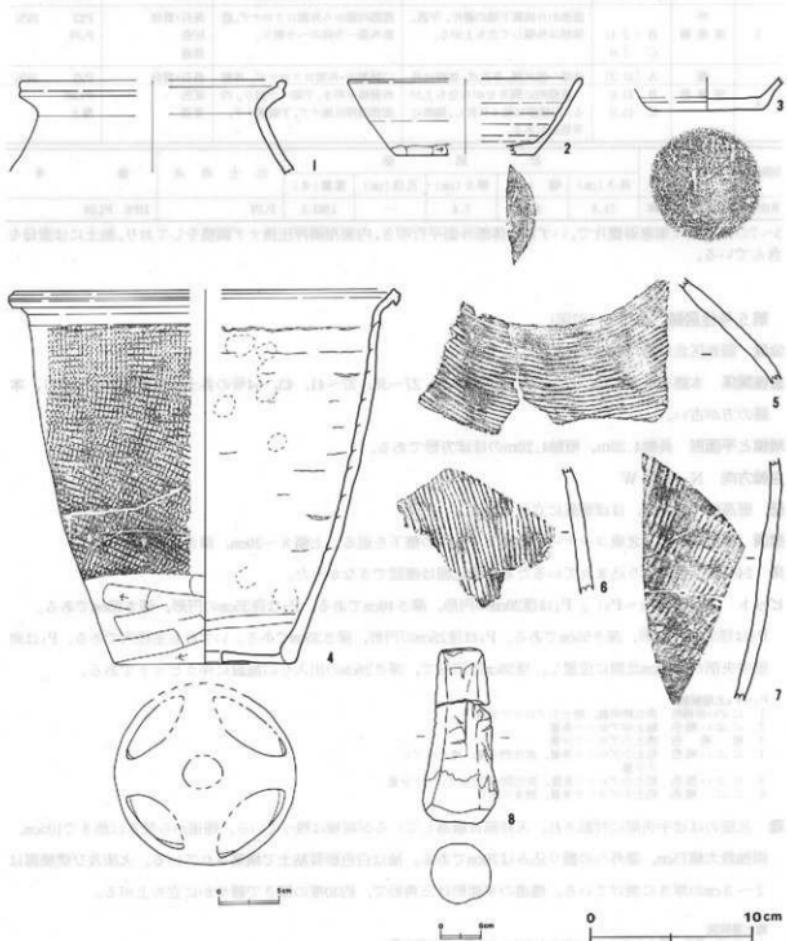


第184図 第4号住居跡竈実測図

左側のアーチ門脇のP1付近では、須恵器壺が複数回発見され、また土器片も複数回発見された。右側のアーチ門脇では、P2付近で須恵器壺が複数回発見され、また土器片も複数回発見された。須恵器壺は南壁際Ps周辺の覆土下層から、3の須恵器壺は竈右袖脇のP1内から出土している。4の須恵器壺は竈内・竈周辺・住居跡南側等、離れた場所から出土したもののが接合している。5の支脚はP2から出土している。北側には垂木材と思われる炭化材が床面直上にみられる。この他に土器壺の口縁部片4点、体部片143点、底部片2点、須恵器壺の口縁部片5点、体部片3点、須恵器壺の口縁部片1点

及び体部片24点が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から9世紀第1四半期と思われる。本跡は、床面に焼土塊や炭化材が見られ、焼失家屋である。焼土の上面から遺物が出土していることや離れた位置のものが接合していることから、家屋焼失後遺物投棄が行われたものと思われる。竈の構築材は白色砂質粘土を使用しているが、この粘土と第5号住居跡内の粘土採掘土坑群から採掘した粘土は類似している。



第185図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 185回	甕 土師器	A [16.6] B (5.3)	口縁部の破片。口縁部は「く」の字形に折れ、口唇部でつまみあげる。口唇部直下に沈線が窓る。	口縁部内・外側横ナデ。	長石・石英 に赤褐色 普通	P21 5% 覆土
		A [14.3] B 4.7 C [8.6]	平底。体部は外へまっすぐに開きながら立ち上がり、口縁部にいたる。口唇部直下に沈線が窓る。	体部内・外側ロクロナデ。体部下端手持ちラフ削り。底部外面一方に向かってヘラ削り。外火棒。	長石・雲母 灰色 普通	P22 25% PL66 覆土上層
2 須恵器	甕 須恵器	B (2.1) C 7.0	底部から体部下端の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部内面から外側ロクロナデ。底部外面一方に向かってヘラ削り。	長石・雲母 灰色 普通	P23 25% P ₁ 内
		A [31.3] B 31.0 C 15.0	体部一部欠損。多孔式。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がる。口縁部は強く外反し、端部に平面感がある。	口縁部内・外側ロクロナデ。体部外側格子叩き。下端ヘラ削り。内面指頭押圧後ナデ。下端横ナデ。	長石・雲母 灰色 普通	P25 35% PL66 覆土
図版番号	種別	計測値	出土地点	備考		
185回	土製支脚	長さ(cm) 21.8 幅(cm) 9.3 厚さ(cm) 7.4 孔径(cm) - 重量(g) 1383.5	P ₁ 内	DP6 PL69		

5~7の拓影図は須恵器甕片で、いずれも体部外面平行叩き、内面指頭押圧後ナデ調整をしており、胎土には雲母を含んでいる。

第5号住居跡 (第186・187回)

位置 調査区北東部、B2m区。

重複関係 本跡を第1, 10, 17, 20, 21, 23~25, 27~35, 37~41, 43, 54号の各土坑が掘り込んでおり、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸4.35m、短軸4.20mのほぼ方形である。

主軸方向 N-12°-W

壁 壁高50~65cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

盛溝 東壁の一部、北東コーナー、北西コーナーの壁下を巡る。上幅8~20cm、深さ4cmである。

床 24基の土坑に掘り込まれているため、硬化面は確認できなかった。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁は径20cmの円形、深さ40cmである。P₂は径35cmの円形、深さ35cmである。

P₃は径33cmの円形、深さ55cmである。P₄は径25cmの円形、深さ35cmである。いずれも主柱穴である。P₅は南北中央部から10cm北側に位置し、径28cmの円形で、深さ28cmの出入り口施設に伴うピットである。

P₁~P₅土層解説

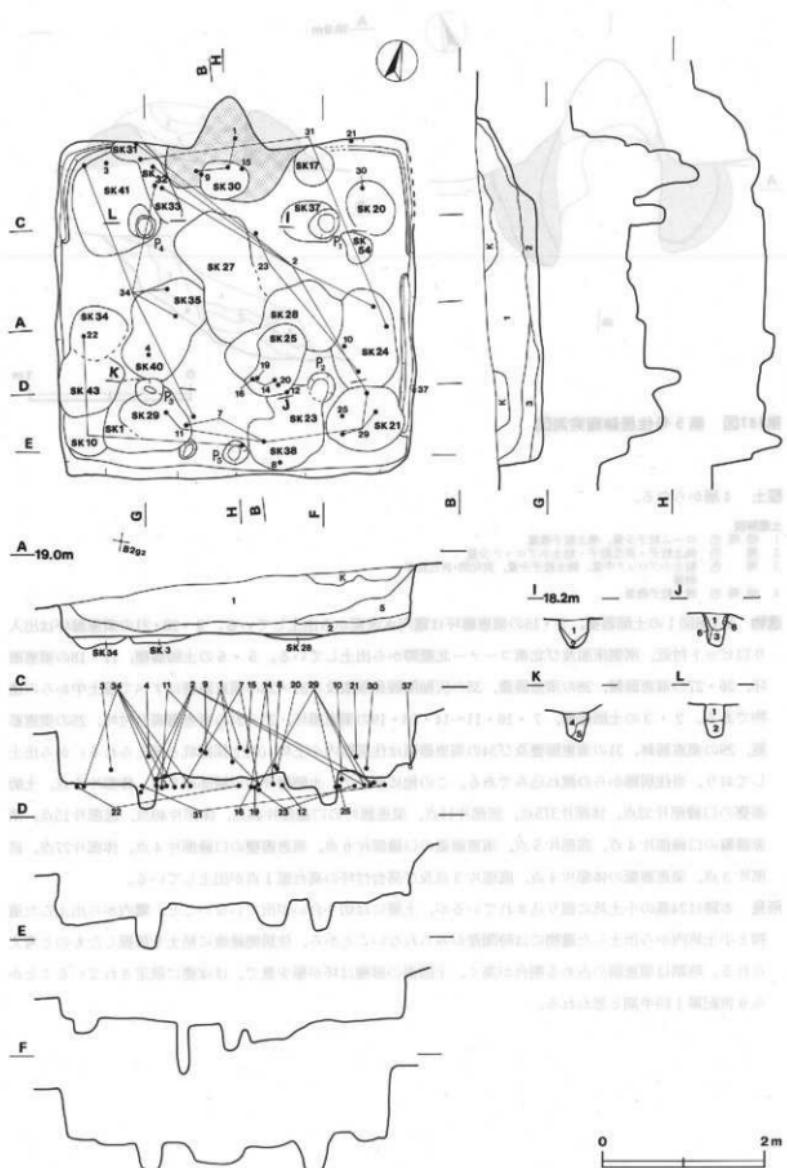
- 1 に赤褐色 炭化物中量、焼土小ブロック少量
- 2 に赤褐色 烧土中大ブロック多量
- 3 暗褐色 烧土小ブロック少量
- 4 に赤褐色 烧土小ブロック多量、炭化物中量、焼土小ブロック少量
- 5 に赤褐色 烧土小ブロック多量、炭化物・焼土小ブロック少量
- 6 に赤褐色 烧土小ブロック多量、網目あり

竈 北壁のほぼ中央部に付設され、天井部は崩落しているが両袖は残っている。煙道から焚き口部まで105cm、

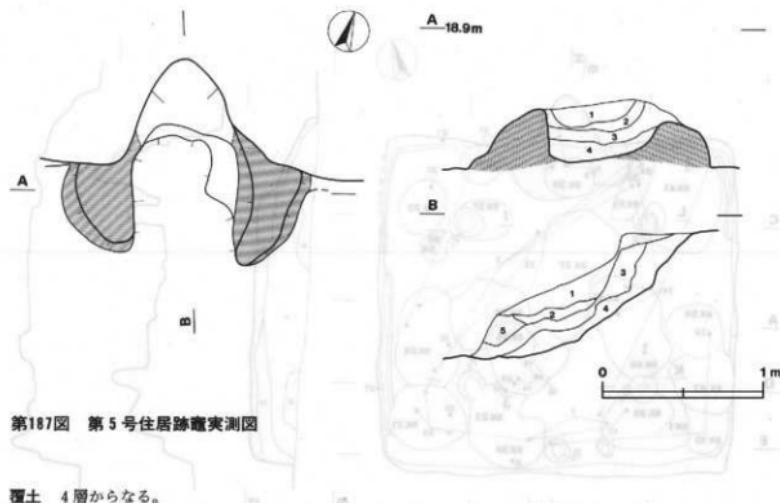
両袖最大幅75cm、壁外への掘り込みは70cmである。袖は白色砂質粘土で構築されている。火床及び燃焼部は2~3cmの厚さに焼けている。煙道の平面形は三角形で、約30度の傾きで緩やかに立ち上がる。

遺土層解説

- 1 に赤褐色 烧土小ブロック・焼土小ブロック多量、炭化物少量
- 2 赤褐色 烧土小ブロック多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 赤褐色 烧土大・中・小ブロック中量
- 4 赤褐色 烧土小ブロック・焼土粒子中量
- 5 に赤褐色 烧土大・小ブロック多量、焼土小ブロック少量



第186図 第5号住居跡実測図



第187図 第5号住居跡実測図

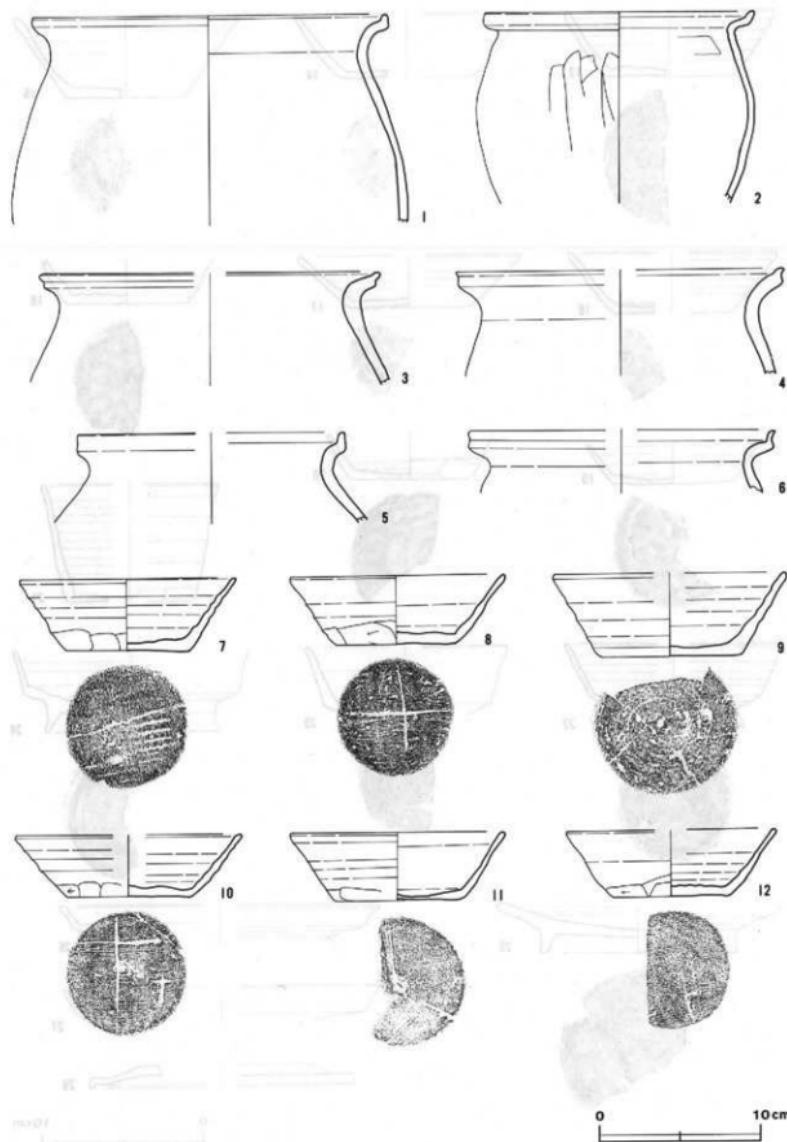
覆土 4層からなる。

土層解説

- 1 細 梅 色 ローム粒子少量、燒土粒子微量
- 2 細 梅 色 燃土粒子、炭化粒子、粘土小ブロック少量
- 3 細 梅 色 粘土小ブロック中量、燒土粒子少量、炭化物・焼化粒子微量
- 4 細 梅 色 焼土粒子微量

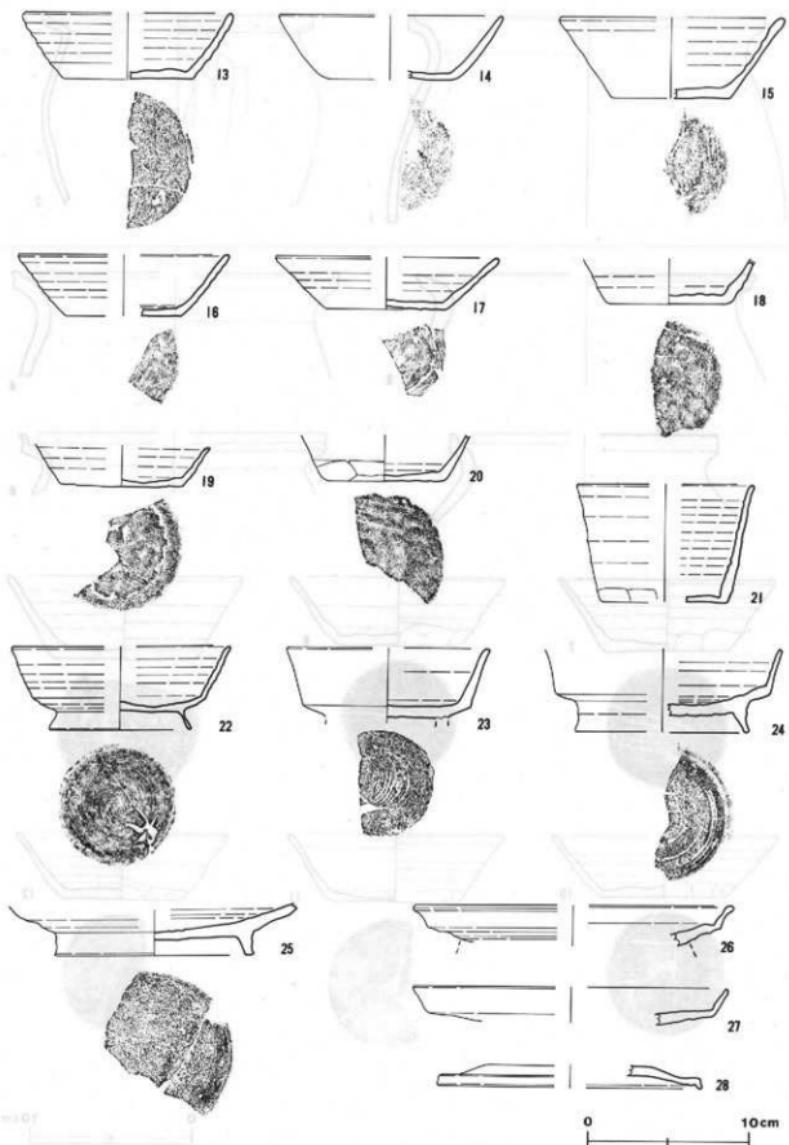
遺物 第188図の土師器壺、9・15の須恵器壺は竈内火床面から出土している。8・20・21の須恵器壺は出入り口ロビット付近、南側床面及び北東コーナー-北壁際から出土している。5・6の土師器壺、17・18の須恵器壺、26・27の須恵器盤、28の須恵器壺、35の灰釉陶器長頸瓶及び32・33の須恵器壺はすべて覆土中からの遺物である。2・3の土師器壺、7・10・11～14・16・19の須恵器壺、23・24の須恵器高台付壺、25の須恵器盤、29の須恵器鉢、31の須恵器壺及び34の須恵器壺は住居跡内小土坑（粘土探掘坑と考えられる）から出土しており、当住居跡からの流れ込みである。この他に細片で、土師器壺の口縁部片5点、体部片6点、土師器壺の口縁部片32点、体部片375点、底部片11点、須恵器壺の口縁部片48点、体部片40点、底部片15点、須恵器壺の口縁部片4点、底部片5点、須恵器壺の口縁部片6点、須恵器壺の口縁部片4点、体部片27点、底部片3点、須恵器壺の体部片4点、底部片3点及び高台付壺の高台部1点が出土している。

所見 本跡は24基の小土坑に掘り込まれているが、土層には切り合ひが出でていないこと。竈内から出土した遺物と小土坑内から出土した遺物には時間差がみられないことから、住居廃絶後に粘土を探掘したものと考えられる。時期は須恵器の占める割合が高く、土師器の器種は壺が極少量で、ほぼ壺に限定されていることから9世紀第1四半期と思われる。



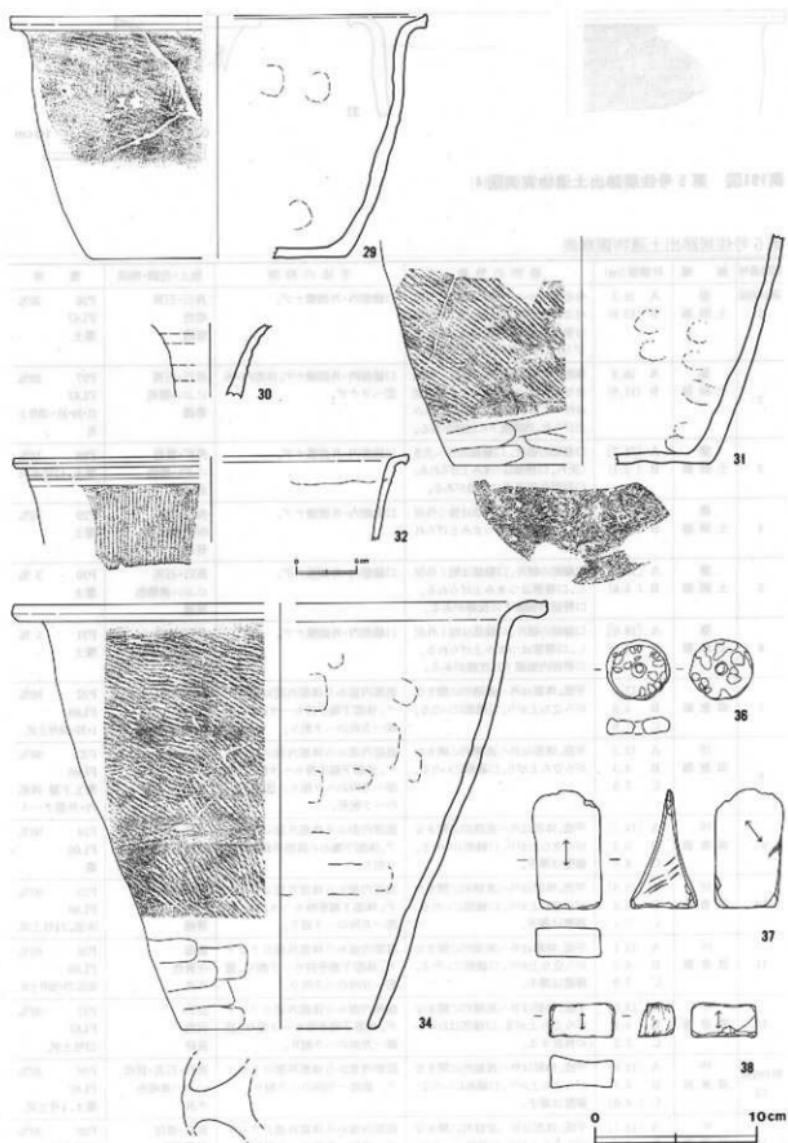
第188図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)

（昭和25年秋土出査調査報告書）

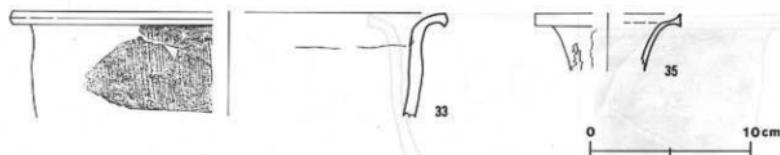


第189図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)

(1回転実測図出発點を基準 図189(2))



第190図 第5号住居跡出土遺物実測図(3)



第191図 第5号住居跡出土遺物実測図(4)

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第188図 1	甕 土師器	A 22.2 B (13.0)	体部上位から口縁部の破片。体部はなだらかに立ち上がる。口縁部は強く外反し、口唇部はつまみ上げられ、内面直下に沈線がある。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英 橙色 普通	P26 30% PL67 覆土
		A 16.8 B (11.9)	体部上位から口縁部の破片。体部はなだらかに立ち上がる。口縁部は外へ大きく折れ、口唇部はつまみ上げられる。内面直下に沈線がある。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外 面へナデ。	長石・石英 によい橙色 普通	P27 20% PL67 21・24・31～33号土 坑
2	甕 土師器	A [21.2] B (2.1)	口縁部の破片。口縁部はへ大き く折れ、口唇部はつまみ上げられる。 口唇部内面直下に沈線がある。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 によい橙色 普通	P28 10% 覆土。41号土坑
		A [20.4] B (6.4)	口縁部の破片。口唇部は強く外反 し、口唇部は短くつまみ上げられ る。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 明赤褐色 普通	P29 35% 覆土
3	甕 土師器	A [16.7] B (5.6)	口縁部の破片。口縁部は短く外反 し、口唇部はつまみ上げられる。 口唇部内面直下に沈線がある。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英 によい黄橙色 普通	P30 5 % 覆土
		A [19.0] B (4.0)	口縁部の破片。口縁部は短く外反 し、口唇部はつまみ上げられる。 口唇部内面直下に沈線がある。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英 によい黄褐色 普通	P31 5 % 覆土
4	甕 土師器	A 13.3 B 4.6 C 7.8	平底。体部は外へ直線的に開きな がら立ち上がり。口縁部にいたる。	底部内面から体部外側ロクロナ デ。体部下端手持ちヘラ削り。底 部一方향의へラ削り。	白色微粒 灰白色 普通	P32 80% PL66 1・29・38号土坑
		A 13.3 B 4.3 C 7.5	平底。体部は外へ直線的に開きな がら立ち上がり。口縁部にいたる。	底部内面から体部外側ロクロナ デ。体部下端手持ちヘラ削り。底 部一方향의へラ削り。底部「十」 のへラ記号。	長石・雲母 灰オリーブ色 普通	P33 80% PL66 覆土下層 体部 内・外面タール
		A [14.2] B 5.2 C 8.6	平底。体部は外へ直線的に開きな がら立ち上がり。口縁部にいたる。 器壁は厚手。	底部内面から体部外側ロクロナ デ。体部下端手持ちヘラ削り。底 部一方향의へラ削り。	長石・石英・雲母 灰黄色 普通	P34 60% PL66 電
5	甕 須恵器	A [13.8] B 3.8 C 7.7	平底。体部は外へ直線的に開きな がら立ち上がり。口縁部にいたる。 器壁は薄手。	底部内面から体部外側ロクロナ デ。体部下端手持ちヘラ削り。底 部一方향의へラ削り。	白色粒子・雲母 灰色 普通	P35 60% PL66 床面。24号土坑
		A 13.1 B 4.2 C 7.9	平底。体部は外へ直線的に開きな がら立ち上がり。口縁部にいたる。 器壁は薄手。	底部内面から体部外側ロクロナ デ。体部下端手持ちヘラ削り。底 部一方향의へラ削り。	雲母 灰黄色 不良	P36 60% PL66 床面。29・38号土坑
		A [13.0] B 4.1 C 7.2	平底。体部は外へ直線的に開きな がら立ち上がり。口縁部はわずか に外反する。	底部内面から体部外側ロクロナ デ。体部下端手持ちヘラ削り。底 部一方향의へラ削り。	長石 灰色 良好	P37 50% PL67 23号土坑
第189図 13	甕 須恵器	A [12.6] B 4.1 C [8.0]	平底。体部は外へ直線的に開きな がら立ち上がり。口縁部にいたる。 器壁は薄手。	底部内面から体部外側ロクロナ デ。底部一方향의へラ削り。	長石・石英・雲母 によい黄褐色 不良	P38 40% PL67 覆土。1号土坑
		A [13.7] B 4.0 C [8.2]	平底。体部は外へ直線的に開きな がら立ち上がり。口縁部にいたる。	底部内面から体部外側ロクロナ デ。底部一方향의へラ削り。	長石・雲母 灰褐色 不良	P39 30% 25号土坑

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第189回 15	环 須恵器	A [13.7] B 5.0 C [7.4]	平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がり、口縁部にいたる。口縁端部はわずかに肥厚する。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面摩擦。	長石・雲母 褐色 不良	P40 10% PL67 電
	环 須恵器	A [13.0] B 3.7 C [7.2]	平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がり、口縁部にいたる。器壁は薄手。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面摩擦。	長石・雲母 灰白色 不良	P41 10% 25号土坑
	环 須恵器	A [13.6] B 3.3 C 7.4	平底。体部は外へ大きく開きながら立ち上がり、口縁部にいたる。	底部内面から体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後端手持ちヘラ削り。	白色微粒 黄灰色 良好	P42 10% 覆土
18	环 須恵器	B (2.8) C 7.5	底部から体部下端の破片。平底。体部は外へ開きながら立ち上がる。	底部内面、体部内・外面ロクロナデ。底部外回転方向へのヘラ削り。	長石 灰色 普通	P43 10% 覆土下層
	环 須恵器	B (2.6) C 7.6	底部から体部下端の破片。平底で内面は凹む。体部は外へ開きながら立ち上がる。	底部内面、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後一方方向のヘラ削り。	長石・雲母 灰色 普通	P44 30% PL67 覆土中層、25号土坑
	环 須恵器	B (2.9) C 7.2	底部から体部下端の破片。平底で内面は凹む。中心部で薄くなる。体部は外へ開きながら立ち上がる。	底部内面、体部内・外面ロクロナデ。底部外回転一方向のヘラ削り。	長石・雲母 灰白色 普通	P45 20% PL67 覆土下層
21	环 須恵器	A [10.8] B 7.4 C [7.8]	平底。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部にいたる。	底部内面から体部外面ロクロナデ。体部下端、底部外面手持ちラ削り。底部内面のロクロ目が残る。	長石・白色微粒 暗灰色 良好	P46 40% PL67 覆土中層
	高台付环 須恵器	A [13.5] B 5.2 D 8.8 E 1.2	底部から体部の境は後をなして折れ、体部は外に開きながら立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開く。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	石英・雲母 灰白色 良好	P47 60% PL67 床面、34号土坑
	高台付环 須恵器	A [12.6] B (4.3)	高台部欠損。底部から体部の境は穂をなして折れ、体部はわずかに外に開いて立ち上がり、口縁部にいたる。高台は「ハ」の字状に開く。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外回転ヘラ削り後、高台貼り付け。底部中央に同心円状の圧痕。	石英・石英 灰色 良好	P48 40% PL67 床面、24号土坑
24	高台付环 須恵器	B (5.2) D [10.8] E 1.9	口縁部欠損。底部から体部の境は穂をなして折れ、体部はわずかに外に開いて立ち上がり、口縁部にいたる。高台は「ハ」の字状に開く。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・白色微粒 黄灰色 普通	P49 30% PL67 覆土中層
	盤 須恵器	B (3.2) D 12.3 E 1.4	口縁部欠損。平な底部から体部ははだらかに立ち上がる。高台は直線的に開く。	底部内面・体部外面ロクロナデ。底部外回転ヘラ削り後。高台貼り付け。	長石・雲母 黄灰色 普通	P50 40% PL67 21号土坑
	盤 須恵器	A [19.4] B (2.5)	口縁部の破片。はだらかな体部から口縁部は外反する。	体部内面から体部外面ロクロナデ。	白・白色微粒 灰白色 普通	P52 5% P内
27	盤 須恵器	A [19.4] B (2.3)	口縁部の破片。はだらかな体部から口縁部は屈曲して立ち上がる。	体部内面から体部外面ロクロナデ。	砂粒 灰色 普通	P53 5% 覆土中層
	蓋 須恵器	A [16.2] B (1.4)	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で、口縁部は粗く屈曲する。	天井部回転ヘラ削り、口縁部外面から内面ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰・リーブ色 普通	P54 10% PL67 覆土上層
	鉢 須恵器	A [25.8] B 15.0 C [16.0]	平底。体部は外方に開きながら立ち上がる。口縁部は体部に対しほぼ直角に外反し、端部はまみわせている。口縁部直下に沈緑が残る。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き、内面指頭押圧。	雲母 によい橙色 不良	P55 30% PL67 覆土中層 21-38号土坑
30	長葉瓶 須恵器	B (4.6)	口縁部の破片。頭部は外反しながら立ち上がる。	頭部内・外面ロクロナデ。	雲母 によい黄褐色	P57 5% PL68 覆土下層
	壺 須恵器	B (14.2) C [16.0]	底部から体部下端の破片。平底。体部は外へまっすぐに開きながら立ち上がる。	体部外面平行叩き、内面指頭押圧後ナデ。体部外面下端ヘラ削り。	長石・雲母 灰色 普通	P58 30% PL67 覆土下層 24-28-31号土坑
	壺 須恵器	A [33.0] B (7.1)	口縁部の破片。体部はわずかに外方に開いて立ち上がる。口縁部は体部対しほぼ直角に外反し、口唇部は上下に突出する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き、内面指頭押圧後ナデ。	長石・石英・雲母 灰・黃褐色 普通	P59 5% 覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 33	甕 漢 器	A [27.2] B (6.5)	口縁部の破片。体部は直立に立ち上る。口縁部は体部に対しほば直角に外反し、口唇部は上下に突出する。	口縁部内・外面クロナデ。体部外面平行叩き、内面ナデ。	白色微粒 灰色 普通	P60 5 % PL67 覆土中層
第190図 34	甕 漢 器	A [33.3] B 26.5 C [12.3]	多孔式。体部は外へ直線的に開きながら立ち上る。口縁部は体部に対しほば直角に外反する。	口縁部内・外面クロナデ。体部外面平行叩き、内面指窓押圧ナデ。体部外面下端へク削り。	長石・石英 灰色 普通	P61 40 % PL68 覆土下層, 20-30-25- 32-35-40号坑
第191図 35	瓦 瓦 壺 瓦軸陶器	A [9.0] B (3.6)	口縁部の破片。口縁部は外反して立ち上がり、壺部は平坦面をつくる。	口縁部内・外面クロナデ。	緻密 オリーブ褐色 良好	P56 5 % 覆土下層 二次焼成 井ヶ谷2号坑式

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)			
第190図36	土 製 織 織 車	3.8	3.9	1.0	0.5	14.6	28号土坑内	DP2 PL69
計測値								
図版番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
第190図37	砾 石	7.3	4.2	4.1	110.6	礫灰岩	北東コーナー床面	Q2 PL69
38	砾 石	4.1	2.1	2.0	23.2	礫灰岩	南西部下層	Q3 PL69

第6号住居跡（第192図）

位置 調査区南西部、C2d2区。

規模と平面形 長軸 [4.50] m、短軸 [3.80] mの長方形と推定される。

主軸方向 N-45°-E

壁 耕作による擾乱のため残存していない。

床 撓乱により遺存状態が悪い。竈焚き口部と思われる手前の一部分についてのみは踏み固められているのが確認できた。

竈 天井部、燃焼部及び袖部のすべてが壊され残存していない。床面の硬化状況や範囲、竈崩落焼土塊の状況等から、北東壁の北側寄りに付設されていたものと思われる。燃焼部と考える部分の竈崩落焼土を取り除くと、炭化物・焼土ブロック混じりの暗褐色土が堆積しており、これが燃焼部内の覆土であると思われる。

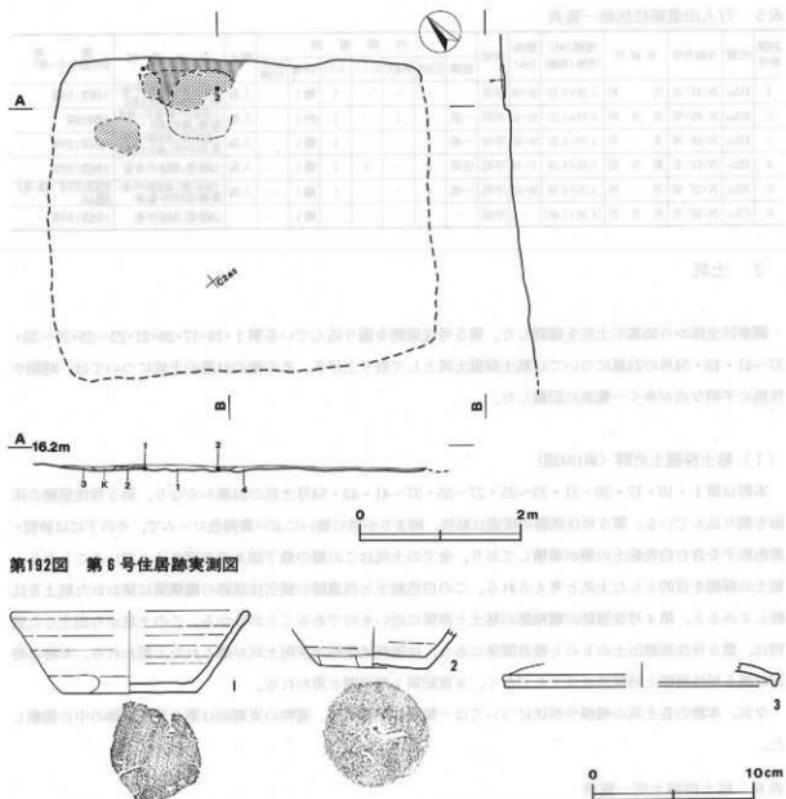
覆土 4層からなる。南西側は削平されている。

土壤解説

- 暗赤褐色 燃土中ブロック多量、炭化物中量、炭化粒子・粘土中ブロック少量、ローム粒子微量
- 褐色 燃土小ブロック・燃土粒子・炭化物少量
- 黄褐色 ローム粒子中量
- 暗褐色 ローム中ブロック中量

遺物 図示した遺物は3点で、すべて竈周辺の床面からの出土である。この他に土師器壺の口縁部2点、体部片27点、須恵器壺の体部片4点及び須恵器壺の口縁部片1点が出土している。

所見 本跡は、耕作による擾乱のため壁や床面の範囲を明確に確認できなかったので、竈の残存部と床面の硬化状況から規模と平面形を推定した。時期は出土遺物から9世紀第1四半期と思われる。



第192図 第6号住居跡実測図

第193図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表						
図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	地土・色調・焼成	備 考
第193図 1	環 須恵器	A [14.5] B 5.1 C 8.5	平底。体部は内壁突出して立ち上がる。 口縁部はわずかに外反し、肥厚する。	底部内面から体部外周ロクロナザ。 体部下端手持ちヘラ削り。底部外周一向方向のヘラ削り。	長石・石英 灰色 普通	P62 床面 20%
第193図 2	環 須恵器	B (2.5) C 6.8	底部から体部下端の破片。平底。 体部は外方に立ち上がる。	底部・体部内面ロクロナザ。体部下端手持ちヘラ削り。底部外周不定方向の手持ちヘラ削り。	長石・砂粒 灰色 普通	P63 床面 20%
第193図 3	蓋 須恵器	A [16.9] B (1.5)	口縁部の破片。ゆるやかに口縁部にいたり、端部は下方に屈曲する。	口縁部内・外周ロクロナザ。	長石 灰白色 普通	P64 PL68 床面 3 %

表5 行人田遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内部施設						覆土	出土遺物	備考		
							壁溝	柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	炉・竈	簡仕切構				
1	B3 _{ee}	N-31°-E	方形	3.28×3.16	36~59	平坦	—	—	—	—	1	竈1	—	人為	土器類(壺), 瓦器類(平底壺, 土器類(瓦), 鋼文土器類)	9世紀第1四半期	
2	B3 _{ee}	N-45°-W	方形	6.03×5.37	36~46	平坦	一部	—	1	—	1	炉1	—	人為	土器類(壺, 鋼文土器類)	古墳時代中期	
3	B2 _{ee}	N-66°-W	方形	4.20×4.20	35~45	平坦	一部	—	—	—	—	1	竈1	—	人為	土器類(壺), 瓦器類(平底壺, 瓦器類(瓦), 鋼文土器類)	9世紀第1四半期
4	B2 _{er}	N-21°-E	長方形	5.00×4.38	5~10	平坦	全周	4	—	3	1	竈1	—	人為	土器類(壺), 瓦器類(平底壺, 瓦器類(瓦), 鋼文土器類)	9世紀第1四半期	
5	B2 _{er}	N-12°-W	方形	4.35×4.20	36~46	平坦	一部	4	—	—	1	竈1	—	人為	土器類(壺, 瓦器類(平底壺, 瓦器類(瓦), 鋼文土器類)	9世紀第1四半期	
6	C2 _{er}	N-45°-E	長方形	[4.50×3.80]	—	平坦	—	—	—	—	—	竈1	—	—	土器類(壺, 瓦器類(平底壺, 瓦器類(瓦), 鋼文土器類)	9世紀第1四半期	

2 土坑

調査区全体から55基の土坑を確認した。第5号住居跡を掘り込んでいる第1・10・17・20・21・23～25・27～35・37～41・43・54号の24基については粘土探掘土坑として取り上げる。その他の31基の土坑については、時期や性格に不明な点が多く一覧表に記載した。

(1) 粘土探掘土坑群 (第194図)

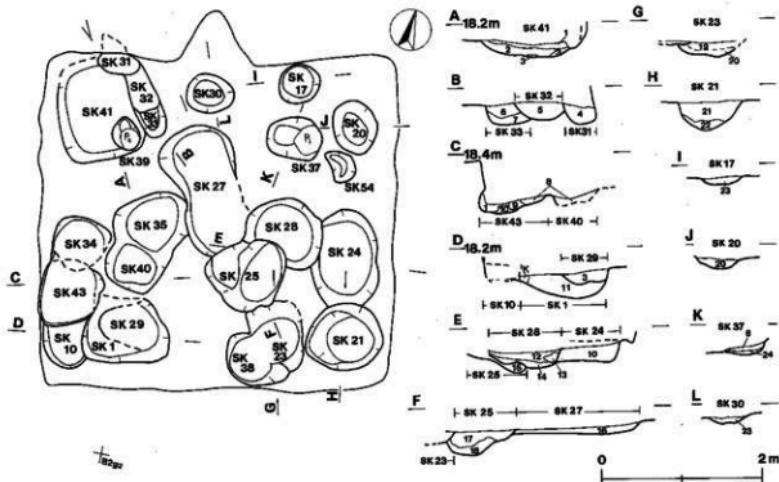
本群は第1・10・17・20・21・23～25・27～35・37～41・43・54号土坑の24基からなり、第5号住居跡の床面を掘り込んでいる。第5号住居跡の床面は粘性、締まりが共に強いにぶい黄褐色ロームで、その下には砂粒・黒色粒子を含む白色粘土の層が堆積しており、全ての土坑はこの層の最下部までを掘り込んでいることから、粘土の探掘を目的とした土坑と考えられる。この白色粘土と当遺跡の堅穴住居跡の電構築に使われた粘土を比較してみると、第4号住居跡の電構築の粘土と非常に近いものであることが分かる。この土坑から出土した遺物は、第5号住居跡出土のものと接合関係にあり、住居廃絶後粘土探掘土坑が掘られたと思われる。本跡の時期は第5号住居跡と時期差はほとんどなく、9世紀第1四半期と思われる。

なお、本群の各土坑の規模や形状については一覧表に記載する。遺物の実測図は第5号住居跡の中に掲載した。

表6 粘土探掘土坑一覧表

土坑番号	長径方向 (真鍮方向)	平面形	規 模		壁面	底面	出 土 遺 物			備考
			長径×短径(m)	深さ(cm)			壁傾	底状	須恵器片1点。土師器壺片3点	
1	N-10°-W	梢円形	[1.25×0.80]	33	緩傾	凹状	須恵器片1点。土師器壺片3点			
10	N-51°-W	(梢円形)	[0.80×0.55]	20	緩傾	凹凸				
17	N-25°-E	ほぼ円形	0.50×0.40	9	緩傾	凹状	土師器壺片12点			
20	N-23°-W	梢円形	0.80×0.56	10	緩傾	凹状	第190図34須恵器板。土師器壺片3点			
21	N-80°-E	梢円形	0.98×0.84	35	緩傾	凹状	第188図2土師器壺。25須恵器板。30須恵器鉢。土師器壺1点			
23	N-49°-W	梢円形	[0.90×0.50]	15	緩傾	凹状	第188図12須恵器板。土師器壺片1点			
24	N-13°-W	梢円形	1.28×0.84	25	垂直	平坦	第188図10須恵器板。23須恵器高台付壺。33須恵器壺。36須恵器板			
25	N-75°-E	梢円形	0.95×0.85	30	緩傾	凹状	第189図14・16・19須恵器片			
27	N-24°-W	梢円形	[1.60×0.93]	10	緩傾	平坦	土師器壺片14点			
28	N-53°-W	梢円形	0.95×0.70	20	外傾	凹凸	第190図31須恵器壺。土師器壺片3点。須恵器片・盤片・壺片各1点			
29	N-77°-W	不整円形	[0.80×0.80]	15	外傾	凹凸	第190図34須恵器板。土師器壺片1点			
30	N-85°-E	円形	0.59×0.56	5	外傾	凹凸				

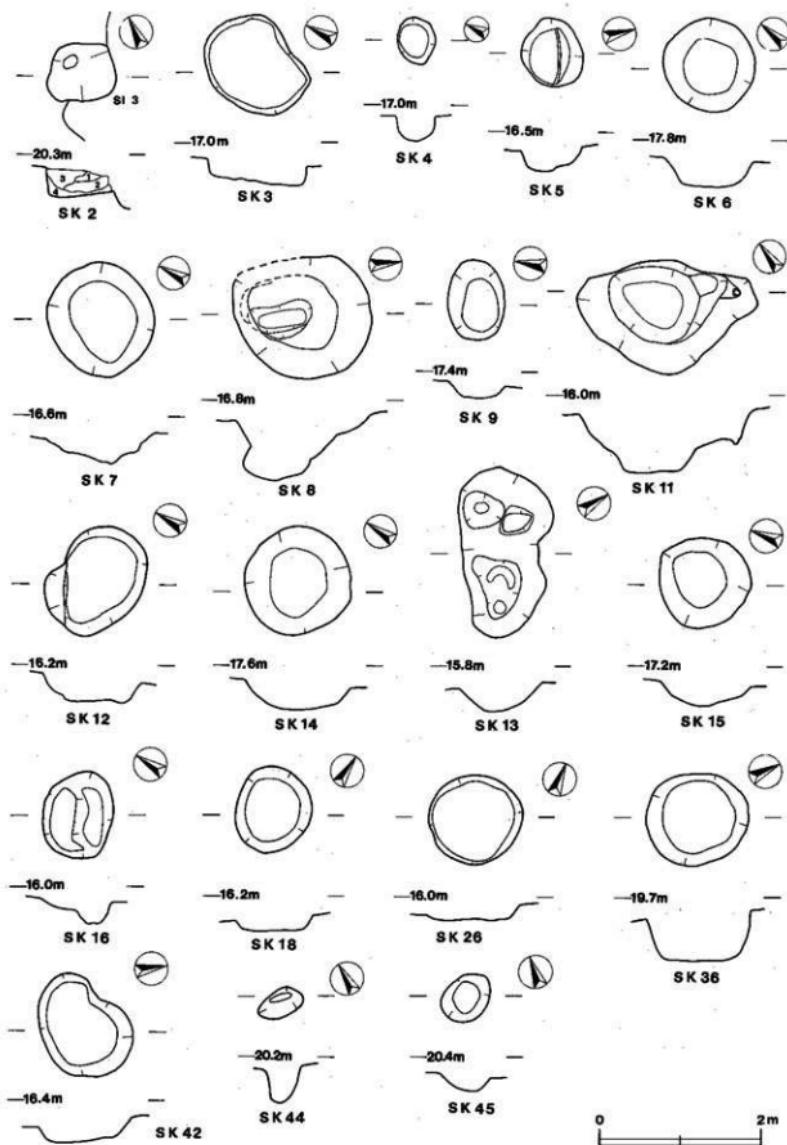
土坑 番号	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	出 土 遺 物	
			長径×短径(m)	深さ(m)				
31	N-26'-W	横円形	0.54×0.40	25	緩傾	平坦	第190図31須恵器甌	
32	N-26'-W	横円形	0.59×0.30	22	緩傾	皿状	第190図34須恵器甌	
33	N-26'-W	横円形	0.60×0.32	25	外傾	平底		
34	N-74'-E	円形	[0.72×0.68]	60	外傾	凹凸	第189図22須恵器高台付环	
35	N-52'-E	不整円形	[0.92×0.84]	70	外傾	皿状	第190図34須恵器甌	
37	N-11'-W	横円形	0.68×0.51	10	緩傾	皿状	土器器甌片5点	
38	N-48'-W	横円形	0.65×0.50	15	緩傾	皿状	第190図29須恵器甌。土器器甌片2点	
39	N-29'-W	横円形	0.40×0.30	12	緩傾	皿状		
40	N-67'-E	不整方形	[0.64×0.60]	10	外傾	凹凸		
41	N-26'-W	長方形	[1.25×1.00]	17	外傾	皿状	第190図34須恵器甌。土器器甌片7点。須恵器甌片2点	
43	N-42'-E	ほぼ円形	0.82×0.75	12	緩傾	凹凸		
54	N-26'-W	不整椭円形	0.42×0.30	10	緩傾	皿状		



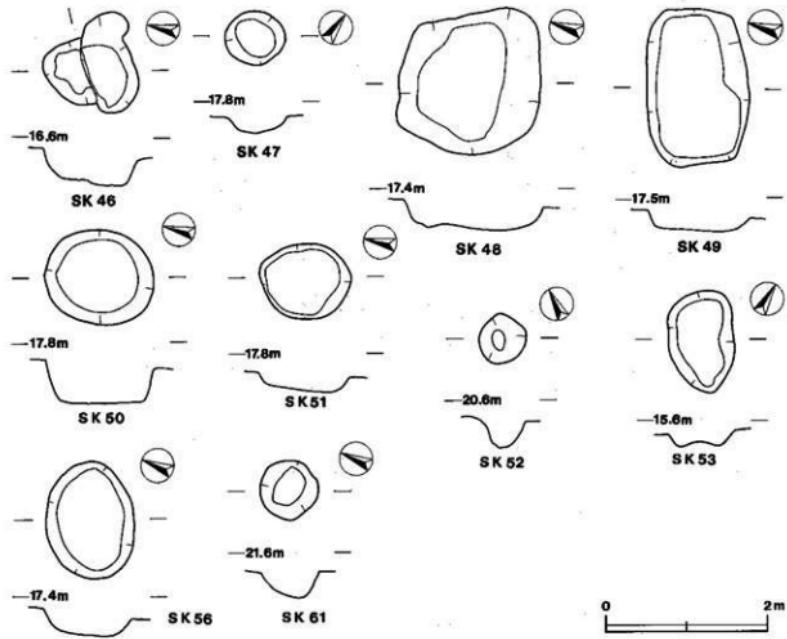
第194図 粘土探査坑群実測図

粘土探査坑層解説

- 1 にぶい褐色 黏土中ブロック多量、焼土小ブロック少量
- 2 にぶい褐色 焼土中ブロック中量、暗褐色土ブロック少量
- 3 塗褐色 黏土粒子多量
- 4 にぶい黄褐色 黏土小・中ブロック少量、砂粒多量
- 5 にぶい黄褐色 砂粒多量、焼土小・中ブロック少量
- 6 塗褐色 砂粒多量、焼土小・中ブロック少量
- 7 塗褐色 砂粒多量、焼土小・大ブロック多量
- 8 にぶい黄褐色 焼土小・大ブロック少量
- 9 にぶい黄褐色 焼土大ブロック多量
- 10 にぶい黄褐色 烧土小・大ブロック多量
- 11 にぶい黄褐色 烧土中ブロック少量
- 12 塗褐色 烧土小ブロック・炭化物少量
- 13 にぶい黄褐色 砂粒・粘土粒多量
- 14 塗褐色 黄褐色 土塊物多量
- 15 塗褐色 黄褐色 烧土小中ブロック・砂粒多量
- 16 塗褐色 黄褐色 砂粒多量、焼土粒子少量
- 17 塗褐色 黄褐色 砂粒多量、焼土粒子多量
- 18 塗褐色 黄褐色 粘土粒子多量、粘土小ブロック少量
- 19 塗褐色 黄褐色 粘土粒子多量、粘土粒子・焼土少量
- 20 塗褐色 黄褐色 粘土粒子・粘土ブロック多量、炭化物粒子少量
- 21 塗褐色 黄褐色 粘土粒子・粘土ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 22 塗褐色 黄褐色 烧土小・中ブロック中量、炭化物・砂粒少量
- 23 塗赤褐色 黄褐色 烧土小・中ブロック少量、粘土中量
- 24 塗褐色 黄褐色 砂粒・炭化物中量、粘土小ブロック少量



第185図 土坑実測図(1)



第196図 土坑実測図(2)

(2) その他の土坑 (第195・196図)

表7 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)	断面					
2	B2 _{et}	N-55°-W	ほぼ円形	0.44×0.38	34	垂直	平坦	人為			3号住より新
3	C3 _{et}	N-51°-E	不整楕円形	1.25×1.05	23	外傾	平坦	自然	縄文土器片3点、土師器裏片4点		
4	C3 _{et}	N-64°-W	円 形	0.52×0.50	32	垂直	凹状	人為	土師器裏片4点		
5	C3 _{et}	N-53°-E	椭 圆 形	0.83×0.72	38	緩傾	平坦	自然	縄文土器片5点、土師器裏片1点、須恵器片1点		
6	C3 _{et}	N-0°	円 形	1.14×1.14	34	外傾	平坦	人為	石鏡1点		
7	B1 _{et}	N-64°-E	椭 圆 形	1.70×1.30	45	緩傾	凹凸	自然			
8	B1 _{et}	N-62°-E	椭 圆 形	1.80×1.60	80	緩傾	凹凸	自然	縄文土器片2点		
9	C3 _{et}	N-72°-E	椭 圆 形	1.00×0.72	18	緩傾	平坦	自然	縄文土器片5点		
11	B1 _{et}	N-41°-E	不整楕円形	2.23×1.43	75	緩傾	凹凸	人為			
12	C3 _{et}	N-50°-E	不整楕円形	1.45×1.00	35	緩傾	凹状	自然	縄文土器片2点		
13	C1 _{et}	N-56°-W	不整楕円形	1.07×0.48	38	緩傾	凹状	人為			
14	C3 _{et}	N-82°-E	円 形	1.40×1.35	35	垂直	凹状	自然	縄文土器片7点		

土坑番号	位置	長径方向	平面形	横				出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)	壁面	底面		
15	C2e ₂	N-9°	不整円形	1.20×1.10	30	垂直	凹状	自然	磨石1点
16	C3e ₁	N-76°-E	楕円形	1.10×0.85	32	緩傾	凹凸	自然	
18	C1e ₂	N-28°-W	楕円形	1.10×0.85	15	緩傾	平坦	自然	
26	C1e ₂	N-74°-E	円形	1.10×1.10	15	緩傾	平坦	人為	
36	B2e ₂	N-30°-E	円形	0.64×0.58	64	垂直	平坦	人為	縄文土器片5点、土師器壺片1点
42	C2e ₂	N-61°-E	不整橢円形	1.38×0.80	25	外傾	平坦	自然	縄文土器片5点、土師器壺片1点
44	B3e ₁	N-80°-W	楕円形	0.50×0.30	41	垂直	凹凸	人為	縄文土器片12点、土師器壺片3点
45	B2e ₂	N-67°-E	楕円形	0.70×0.50	20	外傾	凹状	人為	土師器壺片1点
46	C3e ₂	N-73°-E	不定形	1.17×1.07	35	緩傾	平坦	人為	縄文土器片4点
47	C2e ₁	N-75°-W	円形	0.69×0.66	22	緩傾	凹状	人為	
48	C3e ₂	N-17°-W	不整円形	1.75×1.68	33	外傾	平坦	人為	縄文土器片8点、土師器壺片1点
49	C3e ₂	N-57°-E	不整橢円形	2.00×1.28	22	外傾	平坦	自然	尖頭器1点、縄文土器片6点、土師器壺片1点、復原器所存1点
50	C3e ₂	N-5°-W	楕円形	1.38×1.19	50	外傾	平坦	人為	縄文土器片12点
51	C3e ₂	N-11°-W	楕円形	1.15×0.95	20	緩傾	凹状	人為	縄文土器片6点
52	B3e ₁	N-22°-E	ほぼ円形	0.62×0.57	30	外傾	凹状	人為	土師器壺片2点、土師器壺片3点、縄文土器片3点
53	C2e ₂	N-40°-W	不整橢円形	0.62×0.40	18	緩傾	凹凸	自然	縄文土器片1点
56	C3e ₂	N-74°-E	楕円形	1.45×1.10	25	外傾	平坦	人為	縄文土器片3点
61	B3e ₂	N-47°-W	円形	0.75×0.70	30	外傾	凹状	人為	土師器壺片3点

3 溝

当遺跡からは12条の溝を確認した。第1号溝を除く溝は、時期を決定できるような出土遺物もなく、構築時期や性格については不明な点が多い。溝の形状や覆土から比較的新しい時期の溝と思われる。特に、第6・7・10・11号溝は地境になっており、根きり溝と考えられるので記載は省略する。以下、確認した溝と出土遺物について記載する。

第1号溝（第197図）

位置 調査区東部B4e₂区～北部中央D2e₂区。

重複関係 本跡は第2・6号溝に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と形状 長さ61.68mで、上幅50～280cm、下幅30～60cm、深さ20～80cmである。断面は深いところでは「V」字形、浅いところでは皿状である。

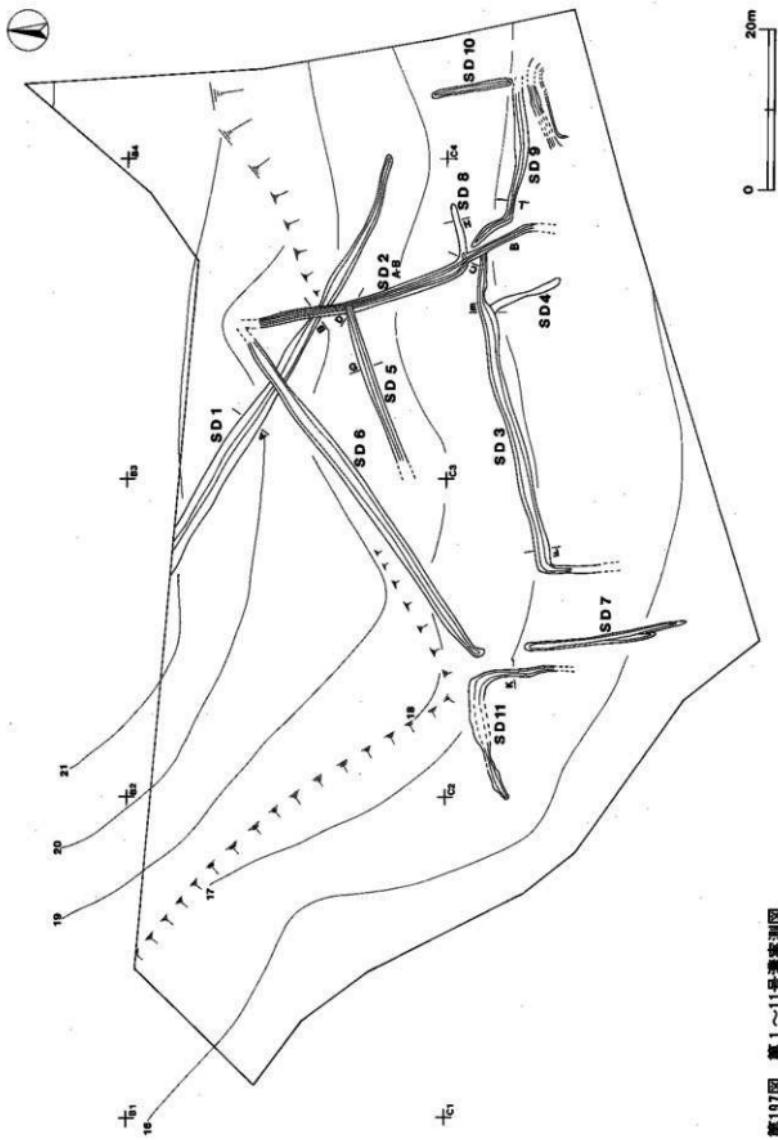
方向 B4e₂区から北西方向（N-68°-W）に直線的に延び、さらに調査区域外に続く。

覆土 4層からなる。自然堆積土層である。（第198図A、Bの土層1～4）

土層解説	
1	系褐色
2	暗褐色
3	褐色
4	褐色
1	ローム粒子中量
2	ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、燒土粒子微量
3	ローム粒子少量、ロームハブロック少量、炭化粒子微量
4	ローム小ブロック多量、炭化粒子少量

遺物 遺物はすべて覆土中からの出土である。図示したものの他に、縄文土器片62点、土師器壺の口縁部片12点、体部片409点、底部片4点、須恵器壺の口縁部片6点、体部片10点、底部片7点、須恵器壺の口縁部片1点、体部片24点、底部片2点、須恵器盤の底部片2点、須恵器高台付壺の底部片1点、磁器片3点が出士

第197図 第1~11号 sondage map



している。

所見 本跡の時期は出土遺物から9世紀第1四半期頃の溝と思われる。

第2A・B号溝（第197図）

位置 調査区南東部C3es区～北部中央B3es区。

重複関係 第2A号溝は第2B・5・8号溝より古い。

規模と形状 第2A号溝は長さ25.4mで、上幅40～50cm、下幅20～30cm、深さは50～60cmである。断面は逆台形である。第2B号溝は長さ36.4mで、上幅40～70cm、下幅20～40cm、深さは25～50cmである。断面は「U」字形である。

方向 C3es区から北西方向（N-23°-W）に直線的に延びる。第2A号溝はB3es区からC3es区まで、第2B号溝はB3es区からC3es区まで延び、北西部はさらに調査区域外へ続く。

覆土 12層からなる。第2A・B号溝の両方ともにロームブロックを含んでいる。（第198図B、C、Dの土層5～9・14～16は第2A号溝、10～12・17は第2B号溝）

土層解説

5	褐	色	ローム大ブロック中量	11	褐	色	ローム小ブロック中量、焼土粒子微量
6	褐	色	炭化物、炭化粒子。ローム大・小ブロック少量、燒土粒子微量	12	褐	色	ローム小ブロック中量
7	にじみ褐色	色	ローム大ブロック多量、ローム粒子少量、炭化物微量	14	褐	色	ローム中ブロック・大ブロック中量、ローム粒子中量
8	褐	色	ローム大ブロック多量	15	褐	色	ローム中・大ブロック中量
9	黄	褐	ローム大・中ブロック多量	16	にじみ褐色	色	ローム中・大ブロック中量、炭化粒子微量
10	にじみ褐色	色	ローム粒子中量、燒土粒子微量	17	褐	色	ローム粒子多量、炭化粒子少量、燒土粒子・炭化物微量

遺物 第2A号溝からは第199図14の鉢、15の擂鉢が出土している。この他には混入したと思われる土器片、須恵器片が出土している。第2B号溝からは土器片、須恵器片に混じってガラス片が出土している。

所見 本跡は遺構確認時には1条の溝と考えたが、掘り込みを開始すると西側のAと東側のBに分けることが確認できた。A号溝の覆土はロームブロックを多く含むことから人為堆積と思われる。2つの溝は時期をずらして構築されたものと思われ、時期は出土遺物からA号溝は18世紀後半以降、B号溝はA号溝よりさらに新しい時期の溝である。

第3号溝（第197図）

位置 調査区南東部C3es区～南部中央C2es区。

重複関係 本跡は第2B号溝より古く、第4号溝より新しい。

規模と平面形 長さ48mで、上幅60～200cm、下幅30～80cm、深さ20～40cmである。断面は皿状である。

方向 C3es区から西方向に直線的に延び、C2es区では直角に曲がり南に延びる。

覆土 5層からなる。自然堆積土層である。（第198図E、Fの土層1～5）

土層解説

1	暗	褐	色	ローム小ブロック中量
2	暗	褐	色	ローム中・小ブロック多量
3	暗	褐	色	炭化物・骨量
4	暗	褐	色	ローム粒子少量
5	暗	褐	色	ローム大ブロック少量

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期及び性格については不明である。

第4号溝（第197・198図）

位置 調査区南東部C3dr区～C3re区。

重複関係 本跡は第3号溝より古い。

規模と平面形 長さ8.8mで、上幅58～84cm、下幅30～60cm、深さ約20cmである。断面は皿状である。

方向 C3dr区から北方向（N-15°-E）に直線的に延びる。

覆土 暗褐色土1層だけでローム小ブロックを中量、ローム粒子を少量含む。（第198図E 土層6）

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期及び性格については不明である。

第5号溝（第197・198図）

位置 調査区東部中央B3re区～中央部C2re区。

重複関係 本跡は第2B号溝より古く、第2A号溝より新しい。

規模と形状 長さ22.8mで、上幅25～80cm、下幅7～40cm、深さ28～50cmである。断面は逆台形である。

方向 B3re区から西方向（N-70°-E）に直線的に延びる。

覆土 4層からなる。人為堆積土層である。（第198図D、G 土層18～21）

土層解説

15	暗	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
19	褐	色	ローム粒子多量、炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
20	褐	色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック微量
21	暗	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 本跡からは、中世陶器片が5点、土師器片、須恵器片が出土している。

所見 本跡の時期は、重複関係や出土遺物から近世以降と思われる。

第8号溝（第197・198図）

位置 調査区北部中央C3as区。

重複関係 本跡は第2A号溝より新しい。

規模と平面形 長さ6.6mで、上幅50～80cm、下幅20cm、深さ25cmである。断面は皿状である。

方向 C3as区から東方向（N-79°-E）に直線的に延びる。

覆土 2層からなる。（第198図C 土層13、J 土層1）

土層解説

13	褐	色	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量
1	褐	色	ローム小ブロック中量

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期及び性格については不明である。

第9号溝（第197・198図）

位置 調査区北部中央C3as区～南西部C4cs区。

規模と平面形 長さ22.1mで、上幅80～180cm、下幅30～70cm、深さ35～56cmである。断面は深いところは皿状、

深いところは逆台形である。

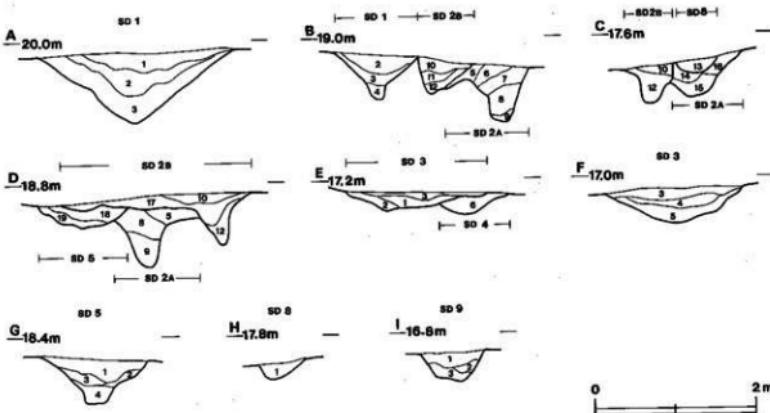
方向 C3as区から南東方向（N-50°-W）に延び、C3as区で屈曲し、東方向（N-37°-W）に延び、水田とは平行する。

覆土 3層からなる。(第198図土層Hの1~3)

土層解説	
1	褐色
2	ローム小ブロック微量
3	褐色
	ローム中ブロック少量

遺物 磁器が出土している。

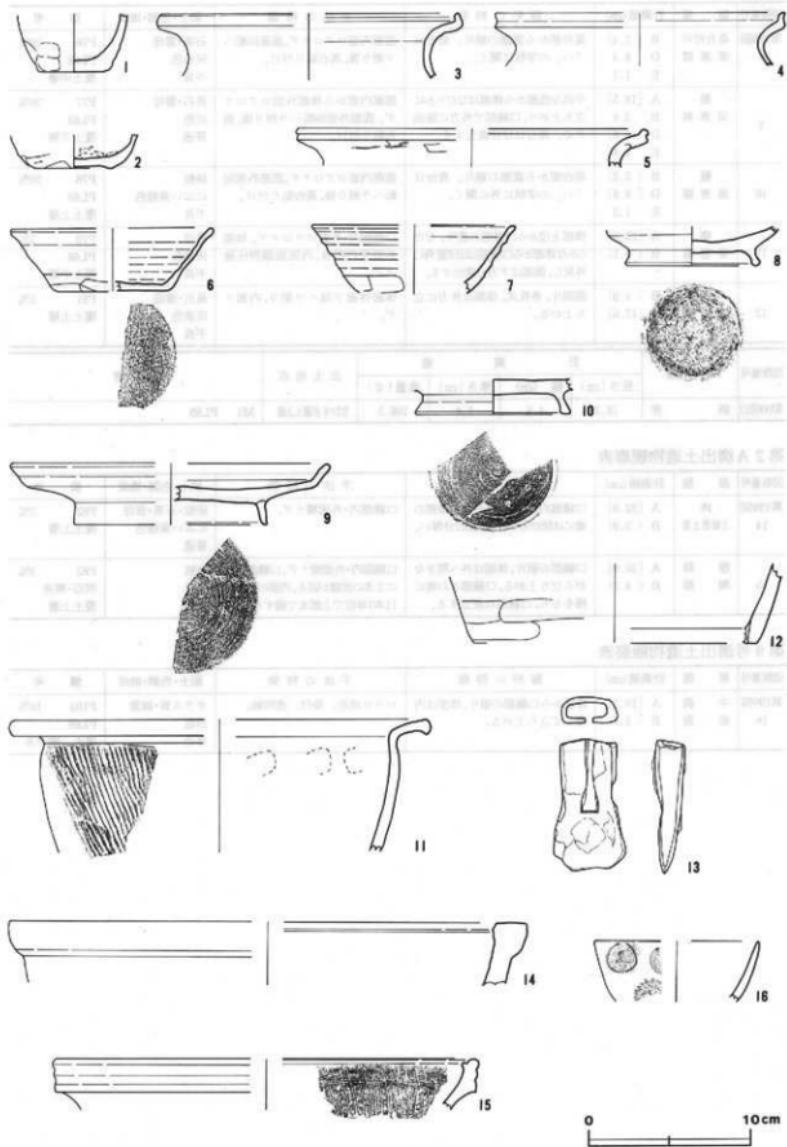
所見 本跡の時期は水田跡と同時期で、近世と思われる。



第198図 溝土層実測図

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	施土・色調・焼成	備考
第199図 1	手捏土器	B (3.6)	平底。体部は内凹して立ち上がる。	体部内面ナデ。外面指痕押印。	砂粒極少量 黄橙色 普通	P72 40% PL68 覆土
	土節器	C 4.3				
		C 4.8				
2	手捏土器	B (2.1)	平底。体部は内凹して立ち上がる。	底部・体部内面指痕押印。底部・体部外面指痕押印後ヘラ削り。	砂粒極少量 黄橙色 普通	P73 30% 覆土
	土節器	C 4.8				
3	甕	A [18.4]	口縁部の破片。口縁部は強く外反し口唇部は上方につまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 橙色 普通	P68 3% 覆土
	土節器	B (3.9)				
4	甕	A [17.8]	口縁部の破片。口縁部は強く外反し口唇部は上方につまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石 赤褐色 良好	P69 3% 覆土上層
	土節器	B (2.8)				
5	甕	A [21.5]	口縁部の破片。口縁部は強く外反し口唇部は上方につまみ上げられる。	口縁部ヘラナデ後横ナデ。	長石・雲母 褐色 普通	P70 3% 覆土上層
	土節器	B (2.3)				
6	环	A [12.4]	平底。体部は外へ開きながら立ち上がり。口縁部は外反する。	底部内面から体部外面クロナダ。体部外面下端手持ちヘラ削り。底部外面一方向のヘラ削り。	長石・石英 灰色 普通	P74 25% 覆土 中層
	質恵器	B 3.9				
	C [7.0]					
7	环	A [12.4]	底部欠損。体部は外へ開いて立ち上がる。	体部内・外面クロナダ。外面のクロロ目が強い。	長石 灰色 普通	P75 20% PL68 覆土上層
	質恵器	B (4.2)				



第199図 第1・2・9号溝出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199回 8	高台付环 須恵器	B (2.4) D 8.4 E 1.1	高台部から底部の破片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部内面クロナダ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	石英・雲母 灰白色 不良	P76 20% PL68 覆土中層
9	盤 須恵器	A [19.5] B 3.8 D [11.8] E 1.4	平坦な底部から体部はなだらかに立ち上がり、口縁部で外方に屈曲する。高台はほぼ直立する。	底部内面から体部外面クロナダ。底部外回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・雲母 灰色 普通	P77 20% PL68 覆土下層
10	盤 須恵器	B (2.2) D [9.8] E 1.3	高台部から底部の破片。高台は「ハ」の字状に外に開く。	底部内面クロナダ。底部外回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒 にぶい黄橙色 不良	P78 20% PL68 覆土上層
11	盤 須恵器	A [25.6] B (8.1)	体部上位から口縁部の破片。なだらかな体部から口縁部はほぼ直角に外反し、縁部は下方に突出する。	口縁部内・外回転クロナダ。体部外回平行叩き、内面指頭押圧後ナダ。	雲母 灰黄色 不良	P79 5% PL68 覆土中層
12	瓶 須恵器	B (4.9) C [17.6]	底部片・多孔式。体部は外方に立ち上がる。	体部外回下端ヘラ削り、内面ナダ。	長石・雲母 灰黄色 不良	P81 5% PL68 覆土上層

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第199回13	鉢 斧	(8.3)	4.5	1.8	81c5 区覆土上層	M1 PL69

第2A溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199回 14	鉢 土唇質土器	A [32.0] B (3.9)	口縁部の破片。体部から口縁部の境には段があり、口縁部は分厚い。	口縁部内・外回横ナダ。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P82 3% 覆土上層
15	攢 鉢 器	A [35.0] B (4.2)	口縁部の破片。体部は外へ開きながら立ち上がる。口縁部との境に後をもち、口縁部は直立する。	口縁部内・外回横ナダ。口縁部外間に2本の状跡が残る。内面の縦目は11本1単位で上部まで達する。	砂粒 橙色 普通	P83 5% 明石・朝系 覆土上層

第9号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199回 16	中 碗 器	A [10.2] B (3.7)	体部から口縁部の破片。体部は内側して立ち上がる。	クロコ成形。染付。透明釉。	ガラス質・緻密 白色 普通	P103 10% PL68 覆土 漏戸系

4 水田跡（第200図）

当遺跡から水田跡を台地の縁辺部で確認した。確認した水田跡は畦畔によって区画された水田と水路から構成されている。遺構は調査区域外の南側に向かって広がっているため、部分的な確認であった。

（1）遺構状況

調査区南東端部のC4a区の土層3層上面で畦畔を2条確認した。確認した水田の広がりは東西8.6m、南北1.28mで、面積は約11m²である。

（2）耕作土

土層3が耕作土にあたり、黒褐色の泥炭質粘土層である。厚さは15~20cmで、層下部は鉄分を帶状に含み、橙色がかっている。

（3）畦畔

確認した畦畔は2条で、耕作土を盛り上げて作られている。畦畔1は、N-70°-Eの方向でほぼ直線的に延びる。規模は上幅60~110cm、下幅100~146cm、高さ8~15cm、確認した長さは9mで、ほぼ等高線に沿って延びている。東端の土層図Dでは第9層が畦畔に相当すると思われ、水路も確認されているので、畦畔は、さらに5.6m西に延びると考えられる。畦畔2は、畦畔1と直交し、南西方向に延びると思われる。（土層図E）。耕作土上面からの比高差は10cmである。この畦畔は水路に沿いほぼ直線的に走行している。

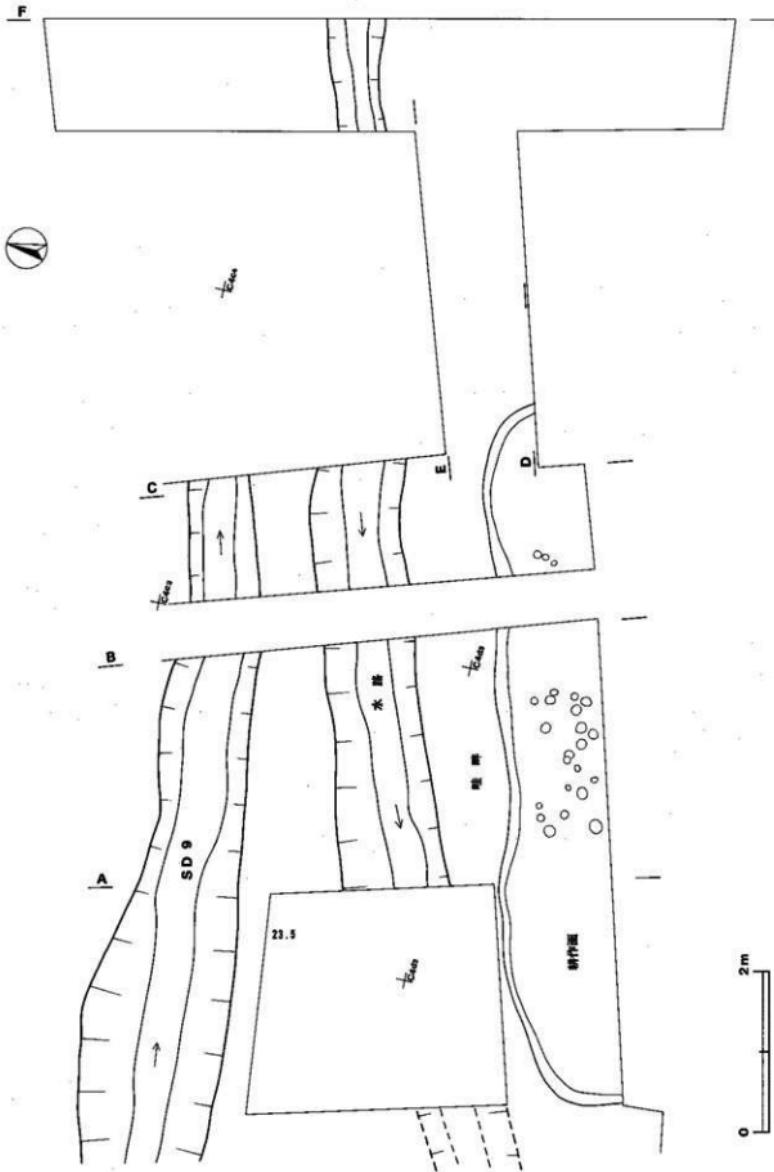
（4）水路

畦畔1と平行して1本を確認した。規模は上幅100~130cm、下幅40~50cm、耕作面からの深さは最大で30cmである。

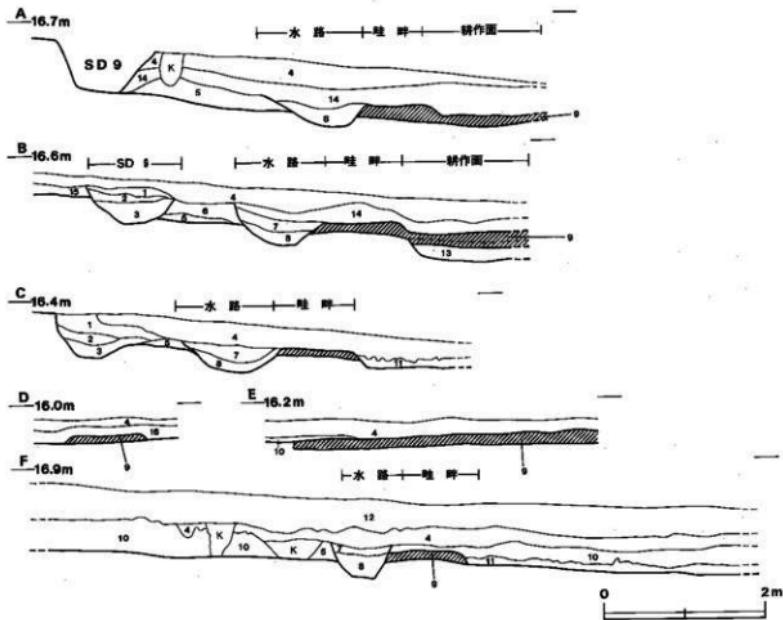
（5）所見

畦畔によって区画された水田を確認したのは1区画のみであり、それも1部分にすぎず、平面形を復元することはできなかった。この水田の東西方向の1辺が8.6mであることは確認できたことから、1辺が8.6mの方形あるいは長方形か台形の水田を想定することができる。畦畔2が畦畔1と直交し南東に向かって走ることから、この東側も水田区画が広がっていたものと思われる。水田からは鉄分沈着が多い10cm程の円形の苗株痕と思われるものを変則的に多数確認した。

遺物は少なく、瀬戸系の陶器片が3点出土している。時期は近世と思われる。



第200図 水田跡実測図



第201図 水田跡土層実測図

土層解説

- 1 稲荷 極色 ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 稲荷 極色 ローム小ブロック微量
- 3 埋葬 極色 ローム中ブロック少量
- 4 埋葬 極色 烟土粒子・炭化物少量
- 5 黒 稲荷 極色 烟土粒子微量
- 6 稲荷 極色 炭化物少量
- 7 稲荷 極色 ローム小ブロック中量
- 8 埋葬 極色 鉄分少量

- 9 黒 深色 鉄分微量(埋葬)、鉄分多量、鉄分沈着で橙色かかる、網まりが強くカチカチ(耕作面)
- 10 稲荷 極色 ローム粒子微量
- 11 埋葬 極色 鉄分微量
- 12 稲荷 極色 炭化物・ローム小ブロック微量
- 13 埋葬 極色 鉄分微量
- 14 埋葬 極色 炭化物微量
- 15 にじみ 深色 ローム中ブロック微量
- 16 埋葬 極色 鉄分微量

5 遺構外出土遺物

当遺跡の古墳時代、平安時代及び近世の遺構に混入して出土した縄文土器や石器、試掘時のグリット調査、遺構確認中に出土した遺物は、拓影図、実測図及び一覧表で掲載する。

(1) 縄文土器

当遺跡から出土した縄文時代の遺物は縄文時代前期が主体であるが、縄文時代早・中期の土器片も少量出土している。土器については、以下の基準を用いて分類する。

第1群 繩文時代早期の土器

- 第1類 沈線文を施す土器群
- 第2類 貝殻条痕文を施す土器群
- 第2群 繩文時代前期の土器
 - 第1類 羽状繩文及び平行沈線を施す土器群
 - 第2類 貝殻腹縁沈線文を施す土器群
 - 第3類 繩文原体圧痕文が施されている土器群
- 第3群 繩文中期の土器
 - 第1類 隆線と角押文が施される土器
 - 第2類 沈線区画内の磨り消しが施される土器

第1群土器（第202図1～12）

- 第1類 沈線文を施す土器群（第202図1～4）

1～3は太沈線が、4は比較的細めの沈線がそれぞれ横位に施されている。

- 第2類 貝殻条痕文を施す土器群（第202図5～12）

5・6は尖底土器である。7～12は胴部片で、7・9は外面横位、8・11は内・外面斜位、10は外面横位、内面斜位、12は内・外面横位の条痕文がそれぞれ施されている。

第2群土器（第202・203図13～72）

- 第1類 羽状繩文及び平行沈線を施す土器群（第202・203図13～61）

13～20の口縁部片と26・27の胴部片は沈線区画とキザミ目により文様が構成され、ボタン状の突起が貼り付けられている。13は繩文が地文となっている。14～18は口縁直下にキザミ目がある。21～25は口縁部直下から単節繩文が施されている。21は羽状繩文とループ文、24は口縁部にキザミ目が施されている。25は補修孔が穿かれている。28～34はコンパス文が施されている。35～47は単節繩文で、羽状構成をとる。48～56はループ文が施され、56はループ文の下に平行沈線とキザミ目を施している。57の口縁部片と58・59のは胴部片には、附加条の繩文が施されている。60の胴部片、61の底部片には単節繩文が施されている。

- 第2類 貝殻沈線文系土器（第203図62～71）

62は平行沈線と連続刺突文、63は口唇部にキザミ目、貝殻波状文が施されている。64は撫糸文が地文である。

65・66・71は貝殻腹縁圧痕、67は多方向の沈線、68・69・71は細沈線が施されている。

- 第3類 繩文原体圧痕文が施されている土器（第203図72）

72は口唇部に沿って繩文原体圧痕文、口縁部・胴部には単節繩文が施されている。

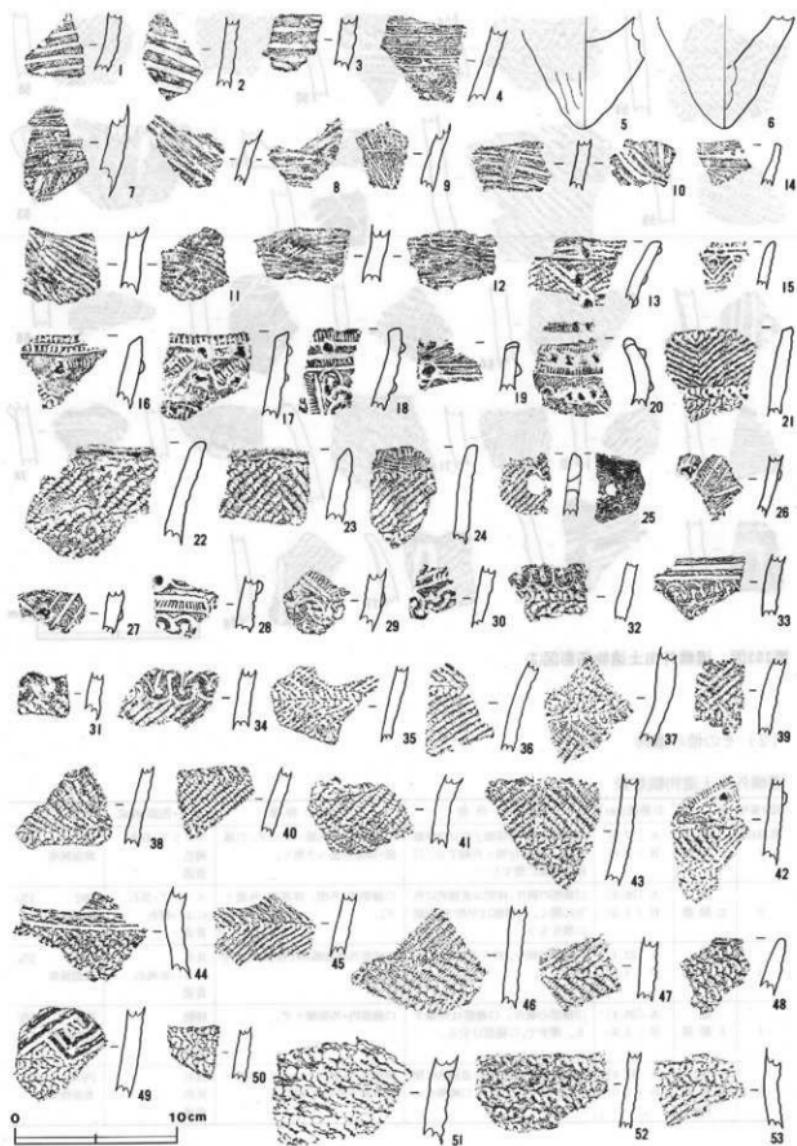
第3群土器（第203図73～78）

- 第1類 隆線と角押文が施されている土器（第203図73～76）

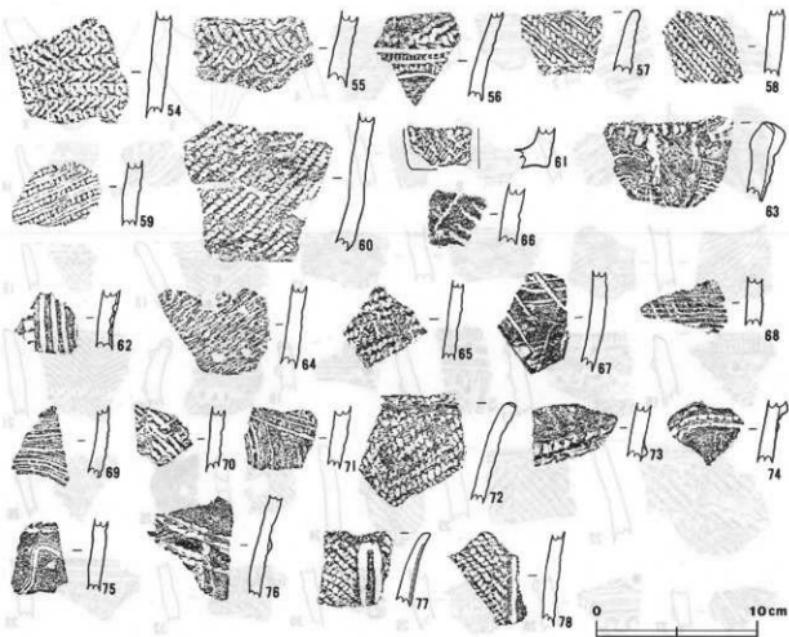
73・74・76は微隆起線と半截竹管による角押文で、75は沈線文と角押文で文様が構成されている。

- 第2類 沈線区画内の磨り消しが施されている土器（77・78）

77・78は単節繩文を地文とし、沈線によってモチーフを区画し、区画内を磨り消している。



第202図 造構外出土遺物拓影(1)

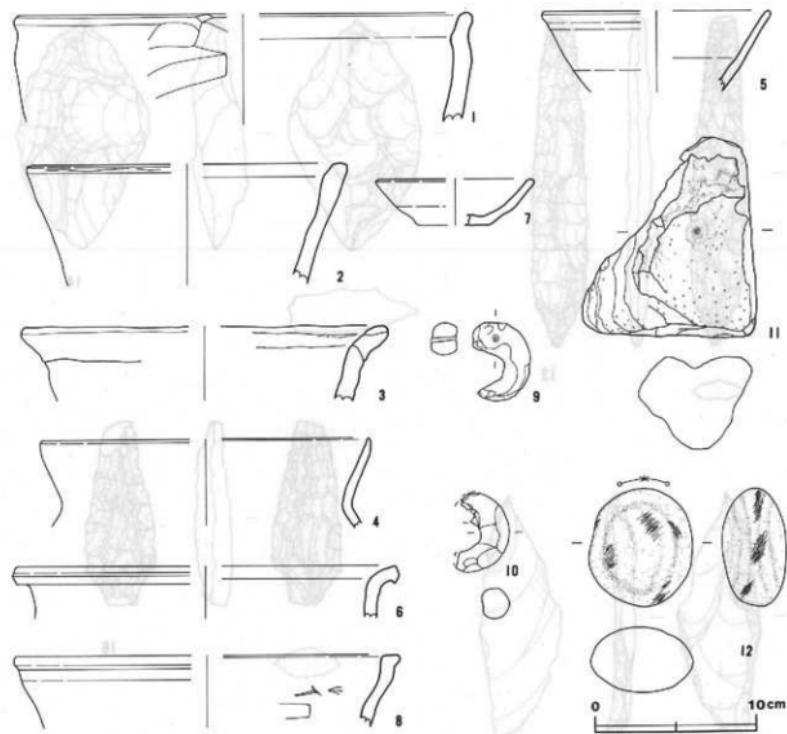


第203図 遺構外出土遺物拓影図(2)

(2) その他の遺物

遺構外出土遺物観察表

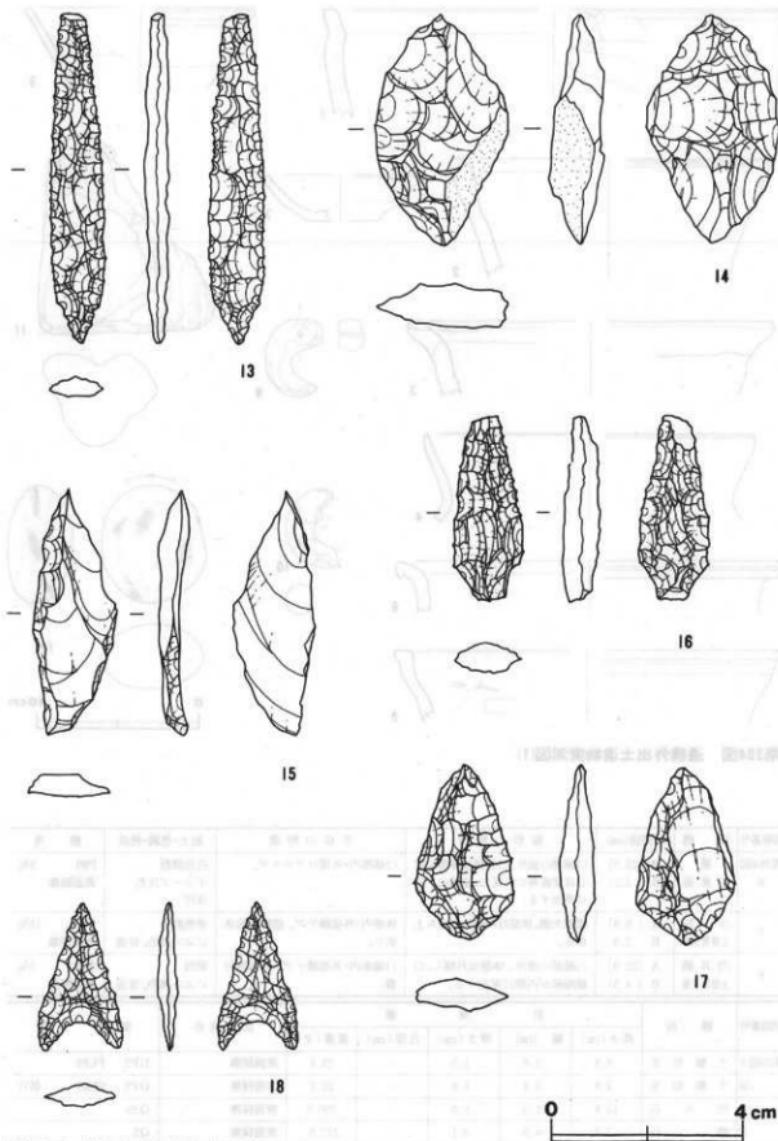
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第204図 1	裏土師器	A [27.8] B (6.8)	口縁部の破片。体部上位はほぼ直立し、口縁部は短く外傾する。口縁部内面に櫛をもつ。	口縁部・体部内面ヘラナデ。口縁部・体部外ヘラ削り。	スコリア・石英 褐色 普通	P91 5% 表面採集
2	鉢土師器	A [20.0] B (7.5)	口縁部の破片。体部は直線的に外方に開く。口唇部は平坦で、内面に櫛をもつ。	口縁部内・外面。体部内・外面ナデ。	スコリア・長石 による橙色 普通	P92 5% 表面採集
3	裏土師器	A [22.4] B (4.6)	口縁部の破片。折り返し口縁で、外傾する。	口縁部外面指須押後横ナデ。内面剥離。	長石 による赤褐色 普通	P93 5% 表面採集
4	壺土師器	A [20.4] B (5.6)	口縁部の破片。口縁部は外傾する。薄手で、口縁部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P94 5% 表面採集
5	环颈甕器	A [13.8] B (5.0)	底部欠損。体部は外に直線的に開きながら立ち上がり、口縁部にいたる。	体部内・外面クロナデ。体部下端外側手持ちヘラ削り。	長石 灰色 普通	P97 10% 表面採集



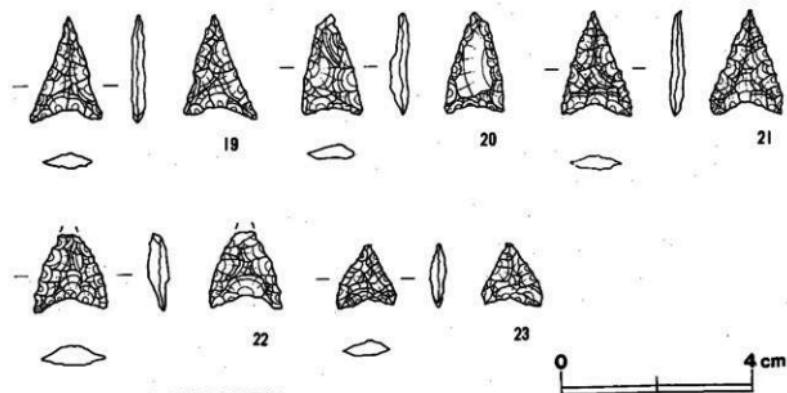
第204図 遺構外出土遺物実測図(1)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴		手法の特徴		胎土・色調・焼成	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第204図 6	甕 鉢 漢 器	A [23.9] B (3.2)	口縁部の破片。口縁部は体部に対しほぼ直角に外反し、端部は下方に突出する。		口縁部内・外面ロクロナナ。		白色微粒 オリーブ灰色 良好	P99 5% 表面採集
7	小 盆	A [9.8] B 2.9	底部欠損。体部は内凹して立ち上がる。		体部内・外面横ナナ。底部回転余切り。		赤色粒子 にぶい橙色、普通	PI01 15% 表面採集
8	内 耳 瓶	A [23.9] B (4.5)	口縁部の破片。体部は外傾し、口端部が内側に突出する。		口縁部内・外面横ナナ。外面端付着。		黒母 にぶい褐色、普通	PI02 5% 表面採集

図版番号	種別	計 測 値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第204図9	土 製 勾 玉	4.9	3.6	1.5	—	23.8	表面採集	DP3 PL69
10	土 製 勾 玉	4.8	3.4	1.6	—	22.7	表面採集	DP5 PL69 破片
11	凹 み 石	12.6	11.0	6.0	—	790.9	表面採集	Q29
12	磨 石	7.3	6.5	4.1	—	272.9	表面採集	Q5
第205図13	有 否 尖 圈 器	6.8	1.2	0.4	—	4.1	表面採集	Q11 PL69 安山岩



第205図 遺構外出土遺物実測図(2)



第206図 遺構外出土遺物実物図(3)

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)		
第205図14	尖頭器	4.8	2.7	1.0	—	13.1	表面採集 安山岩
15	ナイフ形石器	5.1	1.8	0.6	—	4.8	表面採集 頁岩
16	有舌尖頭器	3.8	1.4	0.6	—	4.1	表面採集 安山岩
17	尖頭器	3.7	2.1	0.6	—	4.7	表面採集 安山岩
18	石鉈	3.1	1.8	0.6	—	1.2	第3号住居跡覆土 頁岩
第206図19	石鉈	2.3	1.5	0.3	—	0.6	第3号調査土 黒曜石
20	石鉈	2.1	1.3	0.4	—	0.7	第1号調査土 黒曜石
21	石鉈	2.2	1.5	0.3	—	0.6	表面採集 頁岩
22	石鉈	1.6	1.6	0.4	—	0.9	第6号土坑覆土 チャート
23	石鉈	1.3	1.3	0.4	—	0.4	表面採集 チート

第4節 まとめ

今回の調査で確認した遺構は、竪穴住居跡6軒、土坑31基、粘土探掘土坑24基、溝12条、近世の水田跡1か所である。竪穴住居跡6軒のうち1軒が古墳時代前期の住居跡である。この後住居は一時途絶えるが、平安時代に入り台地の斜面部に集落が営まれる。特に、5号住居跡は廃絶後に粘土探掘のための土坑が床面のいたるところに掘られている。これは竪構築のための袖芯材に用いるためのものと思われる。当遺跡のほかの4軒の住居跡は5号住居跡と同時期であることから、この後にはおそらく北部台地平坦面に集落が継続し、ここで竪構築のために粘土が使用されたものと考えられる。以下、平安時代の遺物についてふれてまとめとする。

平安時代の住居跡は5軒（第1、3、4、5、6号住居跡）で、器種構成は土師器の甕、須恵器の壺、高台付壺、盤、蓋、甕、鉢、長頸瓶及び灰釉陶器の長頸瓶である。供膳土器は須恵器の壺、高台付壺及び盤に限られており、土師器は出土していない。

土師器甕は体部はなだらかに立ち上がり、口縁部は「く」の字状に折れ、口唇部は外上方につまみ上げられている。体部外面はヘラ削り調整がされている。須恵器甕は体部中位で丸みをもち、体部外面は平行叩き、体部下端はヘラ削り調整がされている。須恵器鉢は外に直線的に開いた体部で、口縁部は体部に対しほば直角に外反し、端部を上方につまみ上げるものと下方につまみだすものとがある。器高の高いものと浅いものの2タイプがあり、体部外面は平行叩き、下端部はヘラ削り調整である。須恵器甕は多孔式で、体部から口縁部は鉢とほぼ同様な形態である。体部外面は平行叩きのものと格子叩きのものがある。盤・高台付壺は大・小の2種類があり、高台はいずれも「ハ」の字状に開く。蓋は天井部が平坦でほぼ直線的に口縁部に至り、端部は短く屈曲する。壺は計測値からIII類に分類できる。I類は口径12cm前後、高さ3.7cm、底径8.5cm前後である。底径指數68前後、器高指數31前後で、口径に対し底径の比率が大きく器高が低いものである。体部は直線的に開き、底部調整は回転ヘラ削りと一方向のヘラ削りの二種類に分けられる。II類は口径13~13.8cm、器高3.3~4.0cm、底径7.2~8.2cm、口径指數55~60、器高指數24~29で、I類よりも口径に対し底径の比率は小さくなり、器高もさらに低くなる。体部はわずかに外反しながら立ち上がり、体部下端を手持ちヘラ削り、底部外面一方向のヘラ削りを施し、底部に回転ヘラ切り痕を残すものもある。III類は口径12.6~14.2cm、器高4.1~5.2cm、底径7.0~8.6cm、口径指數54~58.6、器高指數31.5~36.6で、口径に対し底径の比率が小さく、器高が高いものである。体部下端には手持ちヘラ削り、底部は一方向のヘラ削り調整がされている。特異なものとしてコップ型壺、井ヶ谷78号窯跡の灰釉陶器長頸瓶がみられる。

当遺跡の平安時代の住居跡の時期は、須恵器の出土量が土師器の出土量を凌駕していること、供膳土器は須恵器に限られること、計測値の単一化が認められること等から9世紀第1四半期頃に位置付けられる。なお、須恵器は、胎土に雲母を含むことや格子目叩きが見られることから大部分が新治窯跡群から生産されたものと思われる。

付 章

馬場遺跡・行人田遺跡出土の炭化材・炭化種子同定報告について 牛久北部地区から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

1.はじめに

牛久北部地区では、東山遺跡の古墳時代の焼失住居から出土した、構築材と考えられる炭化材の樹種同定が行われ、コナラ属コナラ亜属クヌギ節が確認されている。同様の結果は、周辺の高崎貝塚ヤツノ上遺跡等でも確認されており、古墳時代にクヌギ節が広く利用されていたことが指摘されている。しかし、牛久北部地区周辺において、これまでに同定された資料数では住居構築材の木材利用を把握するには十分とはいえない、同時期の住居跡の構築材の比較や時代が異なる住居跡の構築材樹種構成の比較検討等は課題として残されている。

本報告では、牛久北部地区的東山遺跡・馬場遺跡・行人田遺跡の各遺跡から出土した古墳時代と平安時代の住居構築材の樹種を明らかにし、その用材選択に関する検討を行う。また、東山遺跡および馬場遺跡から出土した種実の種類を明らかにし、植物食などに関する資料を得る。

1. 炭化材の樹種

(1)試料

試料は、東山遺跡の65号住居跡（古墳時代中期）、馬場遺跡の13号住居跡（古墳時代後期）・16号・26号・43号住居跡（古墳時代中期）・59号住居跡（平安時代）、行人田遺跡の1号住居跡および4号住居跡（平安時代）から出土した炭化材15点（試料番号1～15）である。各試料の詳細については、樹種同定結果とともに表1に記した。

(2)方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3)結果

炭化材は、コナラ属コナラ亜属クヌギ節またはコナラ属コナラ亜属コナラ節のいずれかに同定された（表1）。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

●コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.)

ブナ科

環孔材で孔隙部は1～3列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

●コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

ブナ科

環孔材で孔隙部は1～2列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

(4)考察

古墳時代の住居構築材は、東山遺跡・馬場遺跡ともにクヌギ節であった。この結果は、東山遺跡の12号住居跡および47号住居跡（古墳時代後期初頭）で前回行った樹種同定結果と調和的である。同様の結果は、岩井市

表1 牛久北部地区から出土した炭化材の樹種

番号	遺跡名	遺構・試料名	時代・時期	用途	樹種
1	東山遺跡	65号住居跡No.12	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	東山遺跡	65号住居跡No.13	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	馬場遺跡	13号住居跡No.1 (北西隅出土)	古墳時代後期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	馬場遺跡	13号住居跡No.2	古墳時代後期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
5	馬場遺跡	16号住居跡No.15 (南隅出土)	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
6	馬場遺跡	26号住居跡No.1	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
7	馬場遺跡	43号住居跡 (南西隅出土)	古墳時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
8	馬場遺跡	59号住居跡No.2 (東南隅出土)	平安時代	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
9	馬場遺跡	59号住居跡No.3	平安時代	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
10	馬場遺跡	59号住居跡No.4	平安時代	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
11	馬場遺跡	59号住居跡No.5	平安時代	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
12	行人田遺跡	1号住居跡No.1 (東壁寄り出土)	平安時代	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
13	行人田遺跡	2号住居跡No.2 (北西隅出土)	平安時代	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
14	行人田遺跡	4号住居跡 (カマド前面)	平安時代		コナラ属コナラ亜属クヌギ節
15	行人田遺跡	4号住居跡 (カマド袖上部)	平安時代		コナラ属コナラ亜属クヌギ節

高峰貝塚および北前遺跡においても確認することができる。また、近接する中久喜遺跡やヤツノ上遺跡では、クヌギ節の他にコナラ節も確認されている。これらの結果から、本地域周辺では、古墳時代にクヌギ節が構築材に多用され、時にはコナラ節も使用されていたことが推定される。この傾向は、関東地方中央部の台地上に位置する遺跡では、古墳時代にクヌギ節・コナラ節が多いという指摘（高橋・植木、1994）とも調和的である。

平安時代の住居跡では、馬場遺跡の59号住居跡から出土した炭化材が全点コナラ節であるのに対し、行人田遺跡の1号住居跡および4号住居跡から出土した炭化材は全点クヌギ節であった。これらの結果から、平安時代も基本的に古墳時代と同様の用材選択が行われていたと推定される。遺跡間で樹種が異なる背景には、台地の東側と西側やそれぞれの木材採集地で植生が異なっていた可能性があるが、周辺地域での古植生に関する調査が不十分なために現時点では不明である。

今後は、1軒の住居跡や時代時期の異なる住居跡から出土した炭化材について可能な限り同定し、資料が蓄積された上で用材選択についてさらに詳しく検討していくことができると考えられる。

2. 種実の種類

(1) 試料

東山遺跡・馬場遺跡とも、古墳時代中期の住居跡内から検出された炭化種実遺体である。東山遺跡は試料番号1, 2, 馬場遺跡は試料番号3, 4, 5ならびにSI-46である。

(2) 方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。

(3) 結果

試料番号1, 4はモモ、試料番号2, 3はコナラ属、試料番号5はイネに同定された。以下に形態的特徴について記す。

●コナラ属コナラ亜属 (*Quercus sp.*) ブナ科

子葉の破片が検出された。半球状で大きさは1~1.5 cm程度。表面に浅いしわが見られる。

●モモ (*Prunus persica* Batsch) パラ科サクラ属

核が検出された。褐色、核の形は橢円形でやや偏平である。大きさは1.5 cm程度。基部には丸く大きな勝点

がありへこむ。先端部はやや尖る。片方の側面に縫合線が発達する。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

●イネ (*Qryza sativa L.*) イネ科イネ属

炭化した胚乳が検出された。大きさは4mm程度。胚が位置する部分は欠如しだしく窪んでいる。表面には縦に平行な隆起構造が数本認められる。

(4)考察

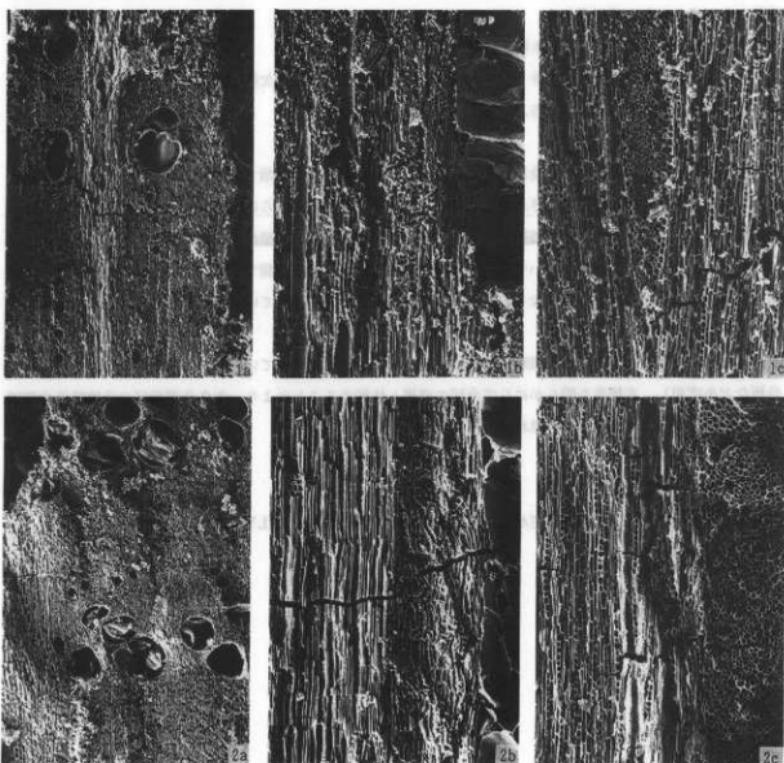
今回検出された種類はいずれも食用として古くから利用されてきた種類である。このうち、モモとイネは食用のために渡来した種類であるとされる。これらは、古墳時代の遺跡からの出土例も多く、広く利用されていたと考えられる。モモやイネは栽培植物であることから当時周辺での栽培が示唆される。とくにイネが検出されたことは、周辺地域の低地において当時稻作が行われていたことが予測できる。コナラ属については、土浦市上高津貝塚近隣の花粉分析結果などにより、周囲の山野に多く生育していたと考えられることから、当時容易に入手可能であったと思われる。

いずれにしても、今回得られた種類は周辺に生育、あるいは栽培されていたものと考えられる。今後、花粉分析などを応用し、古植生を明らかにして今回の成果と比較することにより、牛久北部地区の古墳時代中期頃の植生の景観がうかがえるものと思われる。

<引用文献>

高橋敦・植木真吾 (1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p.5-18.

図版1 牛久北部地区・炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（行人田遺跡：試料番号15）

2. コナラ属コナラ亜属（馬場遺跡：試料番号3）

a : 木口, b : 砧目, c : 板目

200μm : a
200μm : b, c

図版2 牛久北部地区・種実



1. モモ（東山遺跡, 試料番号1）

2. コナラ属（東山遺跡, 試料番号2）

3. コナラ属（馬場遺跡, 試料番号3）

4. モモ（馬場遺跡, 試料番号2）

5. イネ（馬場遺跡, SI-46）

1cm
(1-4)

2mm
(5)